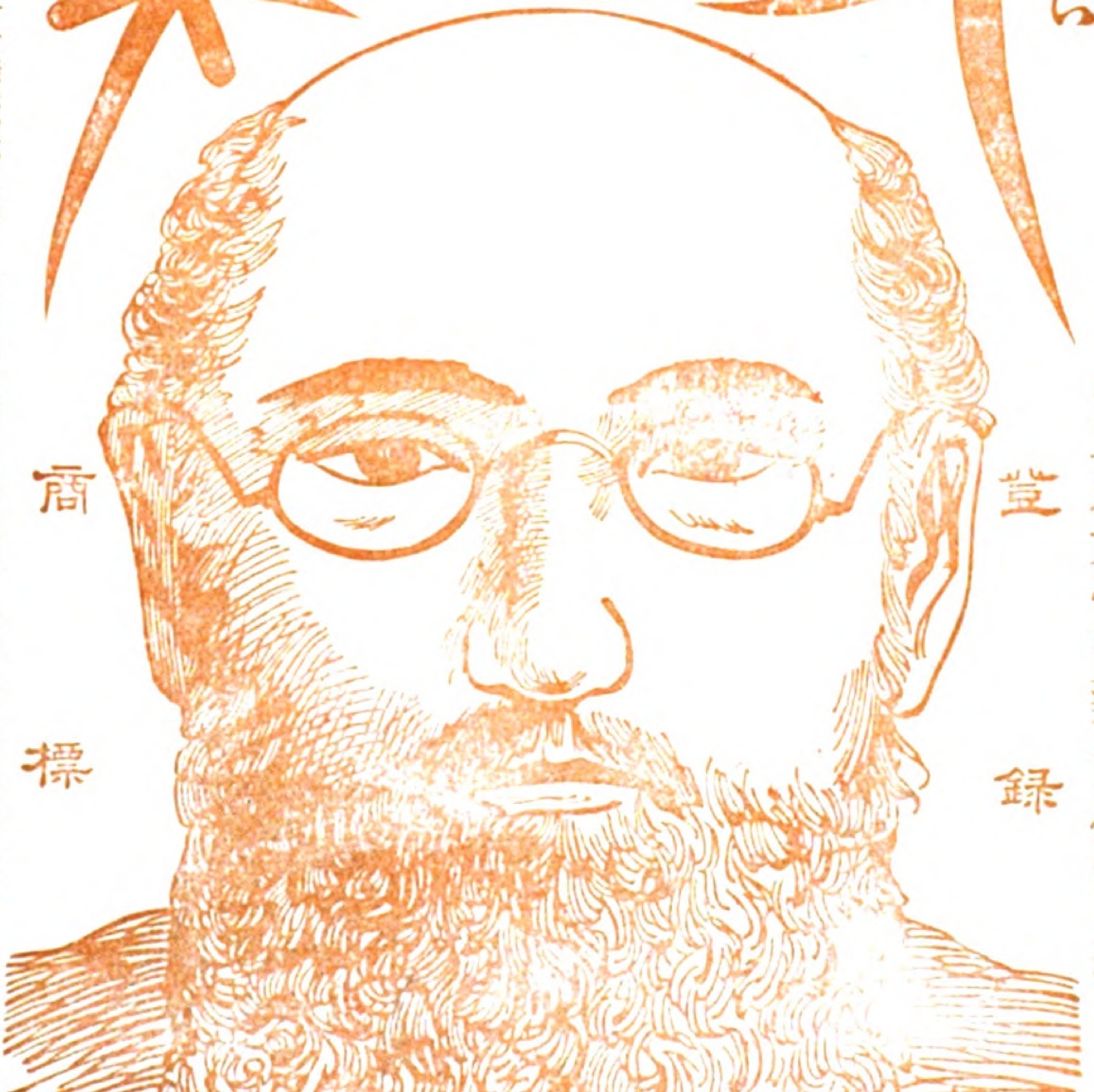

九月十五日増刊
女學世界
第十二巻第十二號

大學目藥

「小兒の眼病には
小兒用大學目藥を用ひられよ

登録商標



大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑也世に有觸し賣藥の類に非ず

●定價金十錢（郵税二錢）　中瓶三十錢（郵税四錢）　大瓶五十錢（郵税八錢）

▲各地藥店に在

日本大阪北濱（ヘブリン丸元祖本家）

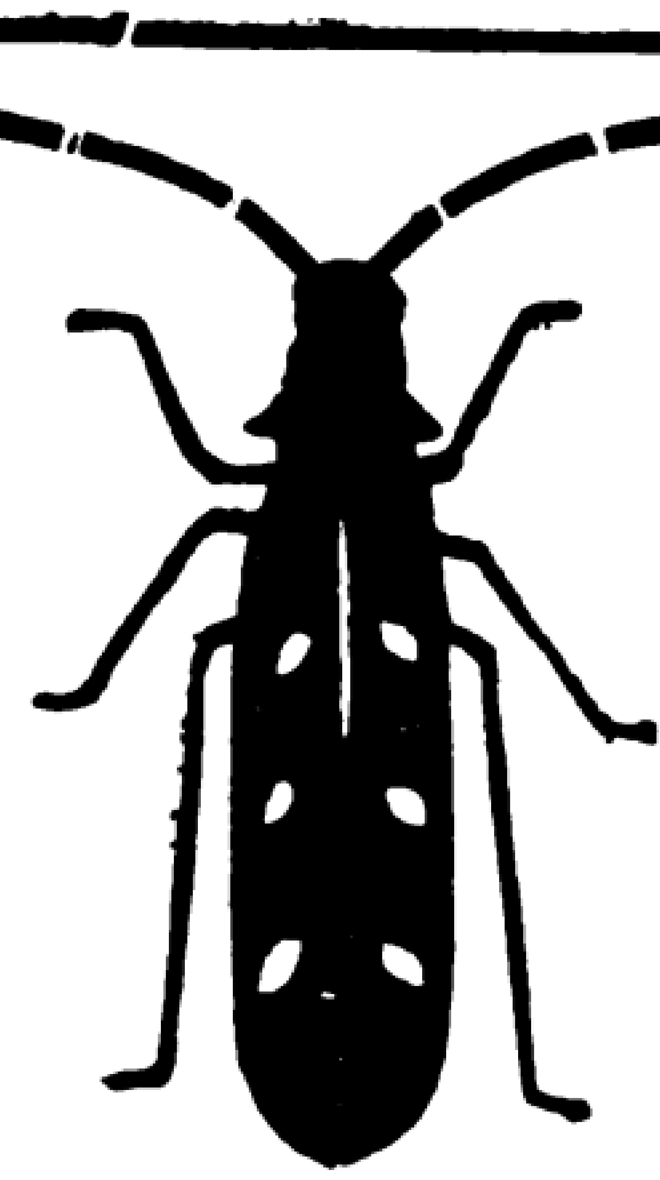
參天堂藥房

効能の概略

▲はやり目
▲トラホーム
▲星目
▲のぼせ目
▲かすみ目
▲たゞれ目
▲血目
▲打撲目
▲疲勞目

其外眼病一切に驚くべき奇効あり

◎又この藥は目力を強くするの確効あり故に無病の人にても毎日少し宛此藥を用れば眼病一切を豫防するを得べし



九月十五日より
友禪モスリン新柄陳列會
の開會を期しモスリン類の大賣出し仕候。

十月一日より
第廿二回新柄陳列會

第二回美術及美術工藝品展覽會
雜貨新製品陳列會。　諸大家新作美人畫展覽會
懸賞裾模様圖案陳列。　懸賞寫眞「少女」陳列

寄切れ見切反物大賣出し
右何れも特別盛大に開會仕候間、賑々しく
御來觀被下度奉願上候。

東京　三越呉服店　駿河町

女學世界定期増刊 姿見かゞみ 第拾壹卷第拾貳號 目次


美顔水
月の美は仲秋の月に極り
人の美は美顔水愛用
の人にきはまる
桃谷順天館製



田中賴璋所二畫

專賣特許

エンゼル香油

田原藥學博士の實驗御證明 清浦子爵 高山三兩博士の實驗有效御證明 東京美術學校千頭敎授の實驗有效御賞贊狀其他大家より多大の高評を以て迎られたる特許エンゼル香油は毛髮を黑化漆の如き光艶を出し且毛根を養ふ偉大の特効ある最新發見の高等香油にて殊に本品には目下歐米にて最も流行せる『ヘリオトロープ』『バイオレット』『ホワイトリリー』等の高雅な



紳士貴婦人御專用高等香油

見よ!!

※芳香を有し御使用後は馥郁として長時間保ちます故別に他の香水等御用の必要は有ません又くせ毛の方はB號エンゼル香油御使用有れば如何なる天性の縮れ毛にても自然に矯正する不思議の特許品で有升

◎實價は小壜六十錢中壜壹圓大壜壹圓八十錢と天性縮毛用特製三圓五十錢の四種で送費は市内は何れも七錢内地は小中壜迄は十一錢大壜及び特製十五錢です▲代金引替は一切謝絶す▼

東京市本鄕區東片町十五番地

エンゼル商會

電話下谷二五六九番
振替東京二〇七四三番

どうしたら日にヤケが療りませうか?

夏の名殘に涼風の立つ時避暑地より鄕里より御歸京の夫人令孃方の御困りになつてお尋ねになるのは此問題です 其つど一回でも多く美顏術をなさりませ。と申します然らざれば次の化粧料を御推め致します。これが最も深切で且皆樣から多大の効果を認められて居る最良の方法であります

期節の化粧料

フエシヤル、ブラン……甲 金壹圓五拾錢 / 乙 金壹圓貳拾錢
ボンピアン、ソープ……金六拾五錢
マツサージ、クリーム……金壹圓五拾錢也 / 金五拾錢也
ライラツク水……金五拾錢也
(送料各八錢)

美顏術及化粧品

理容館

東京新橋竹川町十二番地

電話新橋二三〇二番
振替東京一四一〇〇番

女(甲の一)

初學英和新字典

時勢の進運は更に嶄新なる英和活字典を要求さて

出でたり活きたる小中學英和字典の覇王

弊堂の曩に中學英和新字典及中學英和大辭典を發刊して辭書界のレコードを破るや爾來類書の續出するもの十餘種の多きに及びたるも孰れも徒に他を模倣するに止まり特色の認むべきもの無し本辭典は繁簡取捨宜きを得所謂現今小中學校教科用書の二十餘種の英語讀本を逐一實地に參照して必要なる語は勿論新語は悉く採錄したれば決して羊頭を掲げて狗肉を賣るの類に非ず請ふ實驗して其眞價を知られよ(類書多し著者と發行所に御注意)

文學博士 アーサー、ロイド 監修
會話學校長 マリー、イーストレーキ
文學士 融道玄中學教諭越山平三郎 共著

▼語數一萬二千餘
▼紙數千二百頁
▼總クロース金字入

實價金六拾錢 郵税八錢

特色

1 小中學校英語讀本中の單語は悉く網羅す
2 英語には一々正確なる發音を附し且譯語も稍解し難きものは悉く假名を附したり
3 校正嚴密一字の誤植無きを期したり
4 有益にして趣味ある石版畫十六遍刷數葉を挿入し原名及譯語を附したり

見本は往復葉書にて御申込を乞ふ

速成 英和少年會話
(綴入) 價卅五錢 郵税四錢

小學英語獨習
紙數四百頁 好評十三版 正價三十錢 郵税四錢

英作文のしをへ
全一冊 金貳拾錢(郵税共)
ロイド博士監修 六大家共著

中學 英和大辭典
好評十五版 實價九十錢 郵税十二錢
前書は其程度中學四年級までに止まり同五年級及補習科用として遺憾の點あるを免がれず依て更に前諸先生に請ひて其程度を高めたり
鈴木博士監修 星野久成著

中學 英文法講義
(十版) 正價四十五錢 郵税四錢

新案 英和 會話獨習
全一冊 金六十錢 郵税六錢

英語のしをへ
合本總布 金五十錢 郵税八錢
同假蔞 金卅八錢 郵税六錢
ロイド博士監修 六大家共著

中學 英和新字典
好評四十六版 定價六十錢 郵税六錢
和田垣博士 生田文學士 星野校長 共著

實用 いろは引 和英新字典
好評七版 特價金九十錢 郵税十二錢
初學者に便ならしめん爲めいろは順に排列し次に羅馬字を示し漢字に解釋を施し英語には假名を以て發音を附した節用集的便利な好書
杉山孚富先生著

一覽 速成 漢文辭林
洋裝美本 正價六十錢 郵税八錢

發行所
東京銀座三丁目三番地
電話長京橋一〇四一
振替東京一八參三貳

東華堂書店

女(甲の四)

新刊の書



第十三回

新學期開講

通信教授
産婆看護
講習生募集

會長陸軍二等軍醫正 正六位勳四等ドクトル 渡邊鼎

規則要郵券三錢

東京四谷區内藤町一ノ七

東京産婆看護婦講習會

産婆科六ヶ月卒業
看護科四ヶ月卒業

隆鼻術（はなたかくするほう）

東京市九段下 神田今川小路二丁目十一番地

午後夜間

和田耳鼻咽喉醫院

電話本局二七三〇番

男ちゞれ
女くせ毛
赤毛は何程の雜毛も直に根本的矯正黒化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に教授し誓て美髮に治して差上升

東京麻布區材木町 岩阪澄子

衞生改良酢發賣

貳合入壜詰一本 金二十錢



在來の食酢は腐敗し易く貯藏法に至難なるも本品は防腐性を有する醋酸を資料とせし者なるを以て有害なる黴菌を生ずる憂なく永久不變なり而かも之れを菜肉に使用して風味云ふべからず是れ本品の特點にして殊に衞生酢と命名せる所以なり家庭に於て御試用の上御高評を希上候

本品二合は普通品の二升六合に當る

東京日本橋區本町三丁目
藥種貿易商 合資會社 博愛堂
電話本局長二八六番 振替口座東京八八一三番

女（乙の三）

奥様の心懸•••家庭の平和

花嫁

主人は宅の料理は不味い〳〵と申ます。妾も此内へ参りますまでは料理なんか致した事は有りませんがドーシタラ主人が喜ぶでせうか心配で成りません

料理通

素人の家庭では御料理を成さるに大抵主に砂糖をお用ゐでせう牛鍋や鳥鍋を成さるにしても砂糖は鍋に（こげつき）ますが其代用に味淋を使へば其心配がなくて第一、味は牛屋や鳥屋でお喰べになると同様においしく戴けます魚肉や其他総てのお菜を煮るにしても味淋を使へば味は料理屋の様に甘味たべられます上等味淋は流山の**万上味淋**に限ります瓶詰、樽詰も有りますから是非御試めしなさい御主人も必ず御喜びになる事請合です。

宮内省御用達

ヒゲタ醤油

千葉縣銚子港
田中玄蕃醸造

伊國皇室御用

女（乙の四）

雁來紅



故一條成美筆



甲斐富士

●顧問

●東京女子高等師範學校教授兼附屬小學校主事　藤井利譽先生
●學習院教授　馬上孝太郎先生
●東京府立第四中學校長　深井鑑一郎先生
●東京府立第四高等女學校長　尾松三郎先生
●神田一ッ橋高等小學校長　湯澤直藏先生
●芝御田小學校長　小田島省三先生

●講師　中學校教諭　高等女學校教諭　小學校長　其他諸先生

●中學校高等女學校　入學志願者之福音

入學準備講義錄

●作文習字の添削は無料質問は講義錄以外のことにても隨意
●各府縣諸學校の入學試驗問題は最近の分まで講義中に在り
●講義親切平易方法斬新周到自習上些かも遺憾なし

▲十一月十日 第二號發行（先づ内容見本附規則書を請求せよ申込次第進呈す）

東京市芝區二本榎二丁目十三番地
入學準備學會
振替口座（東京三〇八二番）

女女（丙の一）

幼年畫報（第六卷第十二號）増刊

（既成發行）

よつちやんよい子

彩色美麗繪本
●石版極彩色十六頁
●活版二色刷十六頁
●光澤紙寫眞版四頁

正價拾錢 郵稅五厘

博文館

小波作・春汀畫

よい事をお聞かせ申しませう。よつちやんはよい子です。よつゝの春から幼稚園へ上りました。ようち園の先生はよい先生ばかりです。よい先生はよい事を教へて下さいます。よう年畫報はよい本です。よつちやんの事は幼年畫報に出て居ます。よい子の行ひを讀んでよつちやんのようにおなりなさい。

●本法は女髪結師安部歌子女史

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者をして悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

ちゞれ毛くせ毛
毛はへうけあい
二大奇方劑

●東京市麴町區三番町六十七

濟世園

●結婚媒妁

書面御照會は返信料御封入の事
東京本郷區森川町一番地衣北裏九〇

御來談は午前に限る

槙廼舍

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液（モウセイエキ）



禿（はげ）、脫毛（ぬけげ）、薄毛（うすげ）、生際（はえぎは）惡（あし）き人（ひと）試（こゝろ）みよ……

本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髮の毛はへぎは眉毛髮等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢◎特製一圓、二圓●送料六錢

本舖 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒りん病 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人病 わきが ぢ

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町停留場横

中央醫院

諸ぢ病 梅毒 横根 下疳 全身梅毒等 りん病 消渇

子宮病 血の道 月やく とまりたる病 子なき婦人

生殖器諸病 神經衰弱症

記憶力思考力減衰症等 生殖器病萎縮遺精早漏夢精發育不充分症等

わきが 色の黑き人 にきび ふきでもの

そばかす あれ性 皮膚諸疾患 いんきんた蟲等症

▲病狀記し郵劵四錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八番地淺草橋通瓦町電車停留場横

中央藥院

女ハ丙の巳

女(丙の四)



天の成せる水晶は月の雫が凝つて不斷の光りを放ち大和屋製の・・・**水晶おしろい**は白百合の露を湛へて夏木立茂る巖間に湧く清水の如く而も用ゆる人の面に春の霞か冬の白雪の美くしさを優す。

麓の宿



女子大學家政講義

會員募集！

東京小石川區高田目白臺 日本女子大學校通信教育會

■新學期開講■

會則附き 內容見本 申越次第 進呈

◉途中入會者の福音!! 第二回新學期は開れたり!!

家庭の和樂と、幸福なる生涯は家政講義に得らるべし開講以來空前の好評を博したるは本講義の優秀なる所以なり、講述が如何に懇切に平易に實際的なるか、科目の撰擇と解說の方法の如何に注意せるか、先づ內容見本によりて本會趣旨と講義錄內容の一斑を知られよ

■入會の絶好機！特典あり！直に申込まれよ

女(丁の一)

發行所 東京小石川區久堅町一〇八 精美堂
電話番町三九二三●振替東京二八三八

おもしろい幼年世界の増刊

おはなし會

第一巻　第拾二號

□既成發行□

□蜆の龍宮行……尋常　巖谷小波

▲一年生へのおはなし　受持　木村小舟

▲二年生へのおはなし　受持　武田櫻桃

▲三年生へのおはなし　受持　武田櫻桃

▲四年生へのおはなし　受持　竹貫佳水

□英雄幼物語……記者

○其他面白き記事澤山……

□菊判紙數八十頁　口繪石版畫一枚　光澤寫眞版二頁　正價八錢　郵税一錢□



女(丁の二)

第六卷第十二號

少女世界

五周年紀念號

既成發行

菊判二百五十六頁（定期號の二倍）

口繪石版其他豐富

定價（本號に限）廿錢

郵稅二錢

名譽の純金ブローチは誰の胸に飾らるるか

口繪

●花の香（三色版）滿谷國四郎
●秋ばれ（石版）鏑木清方
●霞ヶ丘（石版）岡野榮
●初秋の日（凸版）太田三郎

外に二色刷寫眞版八面



少女會館

紙數を二倍に・て文章和歌、談話室、等空前の盛觀を呈す

女（丁の三）


最上醤油
元祖
開業貳百六拾七年
内外國金銀名譽賞受領
米國太平洋博覽會
日英大博覽會に於て
最高名譽大賞受領
宮内省御用達
千葉縣銚子町
濱口合名會社
電話銚子一二一番　振替口座五〇二一一番

女(丁の四)

名流婦人

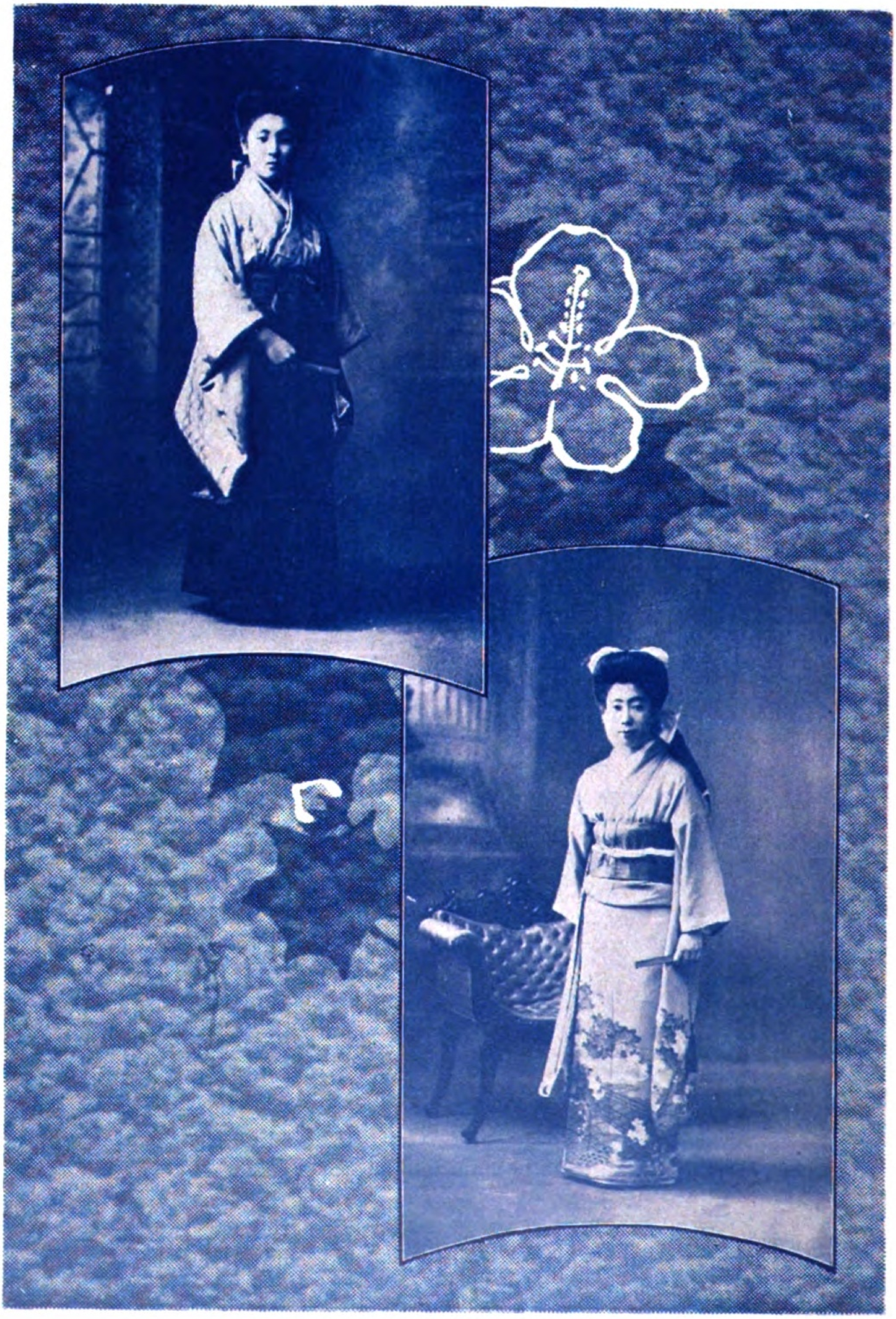


（右圖）桂公爵夫人かな子　（左圖）貴族院議員高橋新吉氏令嗣夫人延子（伊東元帥令孃）

寫眞帖



芙蓉



石渡葉子（石渡敏一氏令嬢）

山崎八重子（山崎直胤氏令嬢）

鞆津仙酔島の奇勝





宇治川上流の秋色

新學期會員募集開始

●時世の進運に伴ひ面目更に一新せり

▼普通科▲壹ヶ年効

▼高等科▲修了力

本會に入會した婦女は▲生活上の利便と娯樂を得▲専門家としての素養と職業を得▲流行と新敎材と手藝界の大勢を知る▲研究の資料と豊富なる智識を得

（講師）東都に有ける有名なる各學校の敎師と都下に於ける優秀なる専門の技藝家●

女子手藝講義錄

入會規定及内容
見本無代進呈

講義課目

●裁縫科和洋各種●裁縫小物科各種●袋物科各種●編物科各種●組糸科各種●刺繍科和洋各種●絓繍科各種●造花科花卉果實類●細工物科各種●割烹科●手藝圖書科●手藝敎授法●

毎月一回五日發行

●婦人令嬢 社交上生活上實用上娯樂上の基礎を作る原動力は手藝にあり●

女（戊の一）

今回入會諸嬢の便を計り

入會申込所

東京市日本橋 大倉書店

振替貯金東京二三八番

全國各地書店に入會申込支部を設置す

英語世界（第五巻 第十一號）秋期增刊

（旣成發行）

イデオムの研究

洋裝菊判舶來紙六十八

定價拾錢　郵稅一錢

發兌元　東京本町　博文館

英語の慣用語法、之を**イデオム**と云ふ。イデオムは文法以外の文法にして語法の生命は一にイデオムに存す。本書は是等**イデオム**の活用。イデオムの解說、文法とイデオム、日英イデオムの比較、英詩及び小說とイデオム、會話及び作文とイデオム、解釋及び翻譯とイデオム、誤解し易きイデオム等の諸點に就き、普通文典に洩れたる文法以上の文法を普く諸家の講話に依り詳密なる攻究を下したり。

執筆者氏名（ABC順）

秋山正議　阿保織八郎　深澤由太郎
五味赫　服部保　日高只一
平田喜一　細川文五郎　井上十吉
今井信之　伊藤彌門　上條辰藏
神崎保太郎　片山義行　喜安璡太郎
増田藤之助　宮井安吾　村井知至
長井氏晸　大宮英之助　齋藤恒太郎
榊原彌　笹岡民次郎　清水起正
武信由太郎　脇豊藏　山崎貞
山口造酒　横地良吉　其他數名

□□□□□□□□□□

□ 大懸賞‖英米名家署名判斷 □□□□□

女（戌の二）

明治四十四年度
受驗界
附 官立諸學校入學試驗問題集

菊判紙數二百四十頁 口繪石版寫眞版豐富 正價二十錢 郵税二錢

九月十五日發行



△中學世界 第十四卷第十二號 增刊▷

内容の充實、而も便利至便、廉價無比、行き屆きたる編輯法、嚴密なる校正、凡そ受驗に關する百般の緊要資料を滿載し、本年受驗界の經過を述べて、其趨勢を檢せしむると同時に、次年度受驗志願者の爲めに少なからざる參考と暗示を齎すもの、これわが中學世界の増刊「受驗界」にして、年々の好評學界に洽ねし。本年は更に紙質を改良し、紙數を增加し、またこれを刊行して學生諸君の急需に應ぜんとす。來十五日の發行を待ち玉へ。

記事要目

◎當年の受驗界總評
◎諸學校試驗官の講評
◎競爭試驗受驗記
◎試驗問題の諸研究
◎各學校入學志望者と入學者數
◎官立學校入學者氏名一覽

問題學校別

△各高等學校
△各高等工業學校
△陸軍經理學校
△海軍經理學校
△水産講習所
△駒場農科大學實科
△各高等農林學校
△東京外國語學校
△上田蠶絲專門學校
△各高等商業學校
△東京音樂學校

△東京高等師範學校
△陸軍士官學校
△海軍兵學校
△海軍機關學校
△商船學校
△札幌農科大學豫科實科
△各醫學專門學校
△各蠶業講習所
△東京美術學校
△秋田鑛山學校
△府立大阪高等醫學校等數十校

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

大橋富子孃の面影



秋の野山





漁村の雨

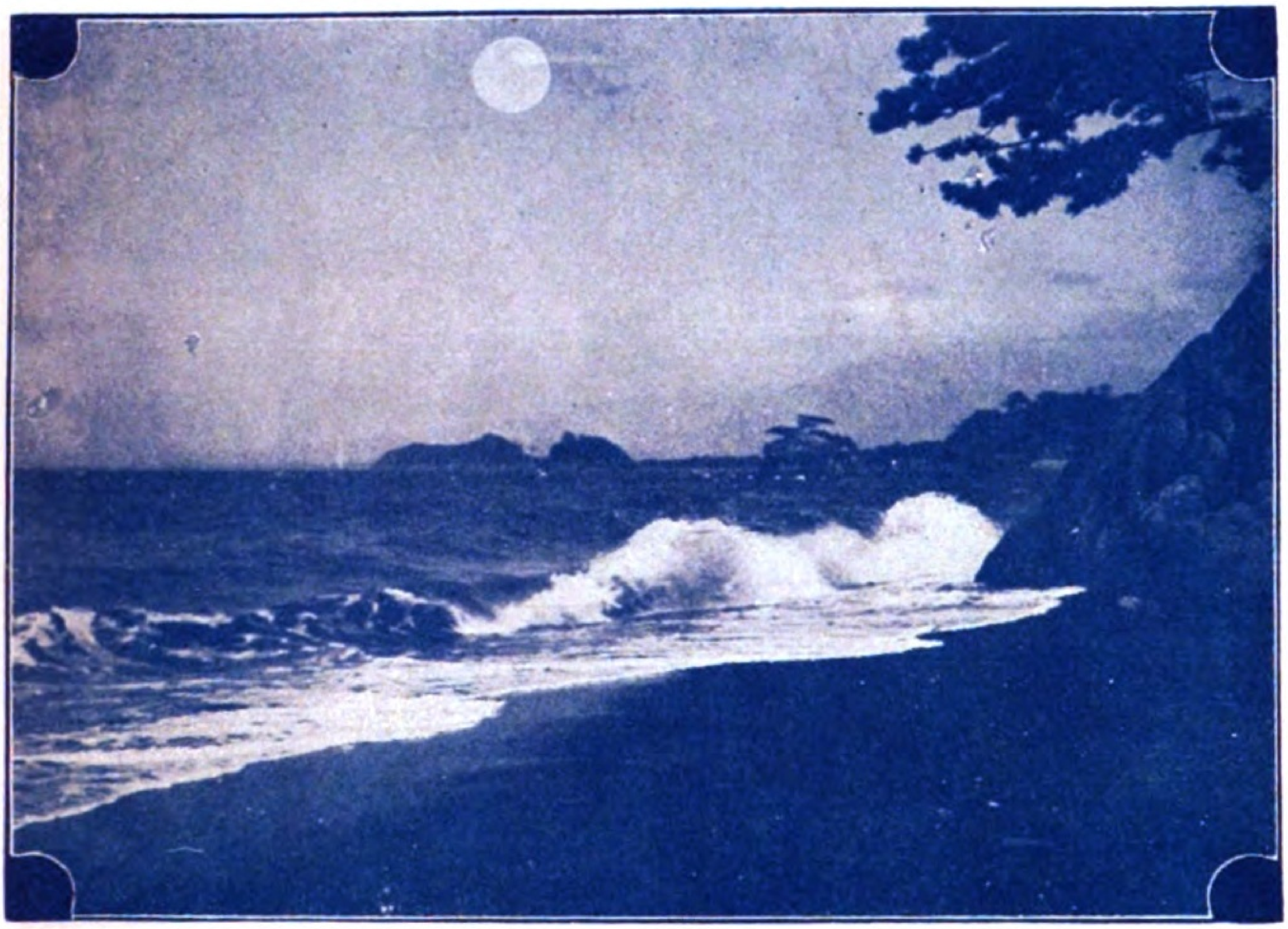
令嬢かゞみ



中村信子（中村是公氏令嬢）

仙石亘子（仙石　貢氏令嬢）

今宵の月



駿州靜浦海岸の月



嚴島土浦入江の月

面目一新せる本誌を見よ

日曜畫報

正價一册拾錢
郵稅一錢

最近發行本誌概要

九月十日發行
第三十七號要目

▼口繪—秋の門△英國帝國祭(二頁)△文野の珍客△美人糺の森△帝劇九月狂言「歩路」△帝劇九月狂言「扇屋熊谷」△美人はたち前後▲漫畫時事(小川千甕)▲女房百態(櫻井知足)▲表紙(一羊)▲裏繪(富永勝重)

▲時事評論(淺田江村)△呪ふべきか祝すべきか覺束なき新内閣の運命(福本日南)△地方人に私約したる利益問題をどう片付けるか(安達謙藏)△新大藏大臣山本達雄(周而)△新文部大臣長谷場純孝(偶歩)△金髪夫人十把一束(藤橋)△謡曲風聞錄(南六郎)園藝失策談(花咲翁)狐の憑いた帝劇(歩太郎)△寄席の閑書(三柳子)△新大臣の遊振り(妖婦星)△新俳百先生の十一福島清先生△白人會句集女いやがらせ△新大臣の奥向(齋所モ)△平和宗の活如來(小波)通俗監安樂(清秋庵)△勞働者の霜枯れ時(知久峡雨)△懸賞今道心(五)懸賞ゑさがし△落語もう半分(三遊亭圓右)川柳時事△讀者の領分△週間九星判斷等

四六判四倍大本文(光澤紙)廿四頁●寫眞版及木版挿繪澤山●本文二色刷乃至六色刷

社會各方面の出來事を、鮮麗なる二色刷寫眞版と、輕妙なる記事とを以て報道評論するは本誌獨擅の特色とす。各劇場の寫眞及び記事を、常に率先して掲載し得るは、週刊にして畫報なる本誌のみの有する特權なり……………

精巧なる表紙繪、皮肉なる漫畫、奇警なる人物漫畫傳、時事の人物、問題の批判、各階級の人の噂等、一本を備ふれば以つて應接室を飾るべく、以つて智識と娯樂の源泉を得べく、以て社交裡の話題に窮することなかるべし……………

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

女(己の一)

爽節の絶好伴侶

■太田三郎氏近業三種■

ひこばえ

最新刊

三色版、石版、網版、木版、凸版、各種色紙應用別刷貼付

裝幀優美無双

正價金九拾五錢

郵税金八錢

曩に草花繪物語の絢爛に醉ひ又蛇の殼の素撲を懷しまれたる紳士淑女青年男女諸君に敢て此の書を薦む。本書は著者の彩筆の花の如く美しき一面と水の如く淸き一面とが渾然融和せられたるものにして、一卷概ね艶麗の着彩畫のみを以て滿たさるゝも然も高雅の趣を失はず、淸艶宛も雪白の絹糸を以て五彩の美玉を聯ぬるが如き觀あり。更に各種複製の技術亦之に伴ひて其極致に達し燦爛たる聯珠爲めに一層の光彩を加ふるを覺ゆ。初版既に賣つきんとする憂あり。乞ふ速かに高需を賜へ。

草花繪物語

再版

■正價金壹圓五拾錢　郵税金拾貳錢

油繪、水彩畫、ペン畫、裝飾畫、鉛筆畫、四十三面挿入、製版多種多様、箱入

蛇の殼

新刊

■正價金八拾五錢　郵税金八錢

三色版、石版、寫眞版、着色凸版、三十六面、凸版八十有餘面、裝幀頗る瀟洒

●東京　博文館　本町●

振替口座東京二四〇番

六(己の二)

菊判紙數三百
二十頁口繪石
版寫眞版澤山
定價廿五錢
郵稅二錢五厘

九月一日發行





▼小說
結婚前後……(春汀畫)……田口掬汀
敵國の友情……(古洞畫)……新田靜灣

▼脚本
史劇 配所の正則……(春帆畫)……小田春宵

▼新講談
本町小町……(蕉亭畫)……邑井貞吉

▼活社會
飛行器模型製作販賣業△寺の下足番△野菜と果物

▼演藝界
演藝當座帳△劇通非劇通△歌右衞門詮議△講談界聽風錄△歌右衞門の名跡△大入袋△相撲笑話△市川伊達蔵△下馬評

▼長廣告
お月見の今昔△夏と今年の京都

▼花柳界
色三味線

▼忙中閑
納涼會記事△本町詰

▼新流行
化粧品と装身具

▼百花園
懸賞俳句△俳句△句相撲△狂歌△狂句△都々逸△端唄△理想の夫婦發表△理想の親子出題△滑稽問答室△繪さがし△小品文△一口噺△上の句附當選披露△上下附新題

▼紹介
文藝地理東海道五十三次△瀬戸内海寫生一週△日本アルプス△お伽百話△近藤勇△滑稽十二ヶ月△俳諧江戸調

▼時報
颶風襲々襲來△演藝界△歌舞伎座問題△實川延三郎逝く△朝鮮藝妓表はる△藝妓屋娶女の無效△增刊豫告△次號豫告

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇號

女(己の三)



女(己の四)



女學世界

第拾壹卷
第拾貳號

姿見かゞみ

九月十五日刊



良夜

玉露女

「好い月ぢや。此世をば我世と思ふ望月の。と道長卿が云はれたが自分の心も今は缺けたる事もなし。芳江お前が忠實に育てゝ呉れた澄男も遂々卒業したしナア」

「御意に御座います若様も早や學士におなり遊ばしましては此次は御奧様お迎へ遊ばして御新婚旅行には歐洲あたりへ御越し遊ばしまするやう左様になりますと私もお役ずみで……」

「アハヽヽ左様なると芳江も乳母の役卒業か。」

父なる侯爵と乳母芳江との物語るを迷惑げに聞き居給ひし澄男君は此時ふと話頭を轉じられつ、

澄「お父様の事が今朝のジアパンガゼットに出て居ります。」

父「左様か一昨日此別莊へ來た人があつたから。」

澄「ハ左様で……藤村侯爵に初對面の印象と云ふやうな意味で。」日本國家を左右する此侯爵が個人としての面影には紅燈綠酒の裏に他愛もない話の種も聞いて居たが初對面の此人は矢張り○○大臣藤村侯爵として一點犯すべからざるものであつた。「ア貴君はガゼットの○○氏で……」とキラリと見た眼の光も忽ち笑顔に消えてしまつて約一時間程縱横に快談せられたが其間に只一言も人の噂に及ばなかつたのには驚いた、殊更此方から人の噂に話を向けると巧みに話を他に轉ずる手腕の美しさ、嗚呼侯爵は偉人である」とこんな事が書いてありました。

父「アハヽヽ左様か。ヤ何によらず人間は人格が第一だよ人は死ぬまで自己の德を磨かなければいけない。大坂城を出る時。木村長門守重成は其母右京の局

に人知れず暇乞して白無垢の肌着の胸に短刀を呑むで家康の前に向つたがイザ血判と云ふ時差進へて相果てんと覺悟した當の敵手の家康公には「ほう長門かよ憶へば二十年前汝の父常陸が余に託して釣舟の銘ある秘藏の刀を預け。亡きあとは倅宮松を頼むと言はれたが……さても天晴れ成人しやつた喃。刀はよき折!! 今取らする」とお小姓をして渡された。電光一閃これをたゞ一つ動かせば……と長門は悶へたが其刄は我身へ立たうとも目的す御人には加へられぬ、それは大御所の人格であつた。又家康も老體を三度まで切つて辛じて其血を絞り血判し並居る諸將只片唾を呑むで其二十歳の美少年が心のまゝにさせた。と云ふのも麻裃平服ながら其人格四方を拂つて見えたから……だね文明の教育を受けた今の人は猶更人物が偉大でなけりやならん筈ぢやないか昔の人は皆さうだつたからお前達も益ゝ心を磨いて下さい」

澄「ハ。それに付いて矢張りガゼットに燈臺守の親子と云ふが出て居りましたが外國にも實に美しい人達が御座いますね。」

父「どんな話かね」

父君は笑ましげに我子の眞目なる顔見入りたまふ。玉盞紅に見ゆるは葡萄酒にても?。ゆるやかにすゝりて卓に置き給へば芳江は心得て殿にも若君にも注ぎ參らす。澄男君はそを脣に受けてうるほへる舌なめらかに語り出したまふは。

「去る四月十八日朝佛國西海岸の沖合なるベル島の一燈臺守が燈臺掃除中急病起りて下に降りて家に臥しつ妻は夫の枕邊に看護るうち次第に夫は死の影迫りて今は切れなむ玉の緒の細り〳〵り行く中に夜となりければ濤聲一入物凄く四方は暗黒に燈臺の火は必要となりぬ。急ぎ昇りてランプを點じ降り來れば夫は今や息絶えなむ斷末魔!! 折も折我子の一人慌しく來り燈臺の廻轉せざるを告ぐ。そは航海者の一大事さては夫の廻轉機取離したまひしまゝなりしよ。女の力に取付くる事はかなはず如何にせむと思ひまどふ母親に、十歳に足らぬ兄なる子は「我今より昇りて手もて火を動かし居らむ」と云へば弟も「さらば我も行かむ」と云ふ

かくて涙と共に二人の兒は父のむくろに嘆ける母を殘して其夜の九時より翌朝七時迄十時間。かよわき兩手に燈臺の火をまはして職務を全ふせりとかや」

澄「近來の美談として外國の諸新聞は筆を揃へて賞めて居りますさうです」

芳「まあ感心な親子で御座いますこと、それで思ひ付きまして御座いますが」

と芳江は靜かに打笑みて、

芳「若樣の奧方には當世のお姫樣の中で一番人格の高いお方を選び出して差上げたいと存じます。私に少々存じよりが御座います……」

澄「オヽ月も高くなつた夜も更けたやうだ其事はまた後でも宜かろう乳母や」

と澄男君は恥かしげに止めたまふを

父「マ宜い、序ぢや。今夜は色々の話が出たな」

と父の殿はまた盃を重ねたまふ。



低けれぱ低い山にも秋の月（禾木）

高樓の夜は更けて父子が清談に月光冴えたり時は七月十日の夜、所は相州葉山の里時の○○大臣藤原輝澄侯の只一人の若君なる澄男の君が今日文科大學を優等卒業して雪井の宮よりしろかねの時計たまはりしを祝はむとて其日の午後より葉山の別莊に父なる君の訪ひ給へば學び家の歸るさ何の宴彼の會とまはりて燈ともす頃澄男の君も來りまみえ給へり。

今父子只二人、海に向へる高樓に種々の物語りして御座せば　母亡き後をひたすらに育くみ參らせし澄男君の乳人芳江も侍りて三人各々の胸に異樣の望三色に持ちながら同じ笑顔樂しく、時を過せるなりけり。

＊　＊　＊　＊　＊

「同じやうな靜かな宵の續くこと」

美しき聲につぶやきつゝ眞白き指に窓掛引けば外は涼風そよ吹きて月影さやかに四邊をてらす。

遠く房總の山々より近く江の島の漁り火まで一眸のうちに見晴らして逗子の海原足下にひかへたる花園伯爵家別邸の。此處は姫君百合子の部屋。電燈華やかに輝きて黑くぬりたるピアノ艶々と映りぬ。

玉の御胸の扉つゝましう閉ぢてほどばしる才と、美しき德とを包み給ふ此君の。花の唇一たび開けば玲瓏玉をまろばすと云はむもおろかや宛轉自在の天與の美音、樂界の明星社交の花と時めき給ふ花園百合子。

今姫は其妙なる姿を窓より出して月を見上げつゝ昨日の事を思ひ出して何事をか打案ずる樣なり　昨日の事？

昨日は東台の森深き樂堂に朝野の名士星の如く集りて名ある樂人技を競ひしがそが發起人と立てられし某貴婦人は百合子姫を訪ひて言葉の限り出場を迫りぬ。父君亡き後は母君の御手の寶と賞でられてたゞひたすらにありし昔を忍び草に「身分を落すな」とのみ教へられし此君は公衆の前に聲を賣る!!! とやうの申込みを卑しとて何としても受け給はぬを遂には種々に說き迫りて。

「此度の演奏會に姫の出でますは國益となる事情に存す。そは或る外國貴族との關係にて引いては妾等發起人の身の立ち場にも深き意味を含めばせめては只一目其外國貴人に逢ひたまひて一言の禮など云はれなば妾もかく車を曲げて願ひに參りし甲斐のあれば」

とまで云はれければさらばとてたゞ來賓としての心もて馬車を驅り給ひしにあな!!!。プログラムには題未定として姫の獨唱ある旨記されたり。

そを一目見るよりつか〳〵と姫は外國貴族の前に行

き前に出場を迫られし事の由り始終ことごとく打明けて。願はくは惡感情を持ち給ひそ。何處の國にも道德心なき貴婦人の一人や二人はあるべければ只誰人をもゆるしたまへ」。

とばかり。驚く人々には目もくれで直ちに邸に歸り給ひしが……夜に入りて別邸にいささかの病を養ひたまふ只一人の母君を見舞たまへるなり。

百合子「久し振で逗子へ來たが相變らずいゝ處！都のちりにもまれて虛榮と利己心の固まり見たやうな人達と暮すより一生此處に隱居して居たいけれど…………」

徴かに獨言ちたまへるなれど其御聲は小さき銀の鈴など振るやうなり。

突然横手の木立の間より黒き物むくむくと近より來りつ。見れば汚れし衣まとひし見るもいぶせき若者にて低く徴かなる聲して

若「姫樣に折入つて御願ひがございます」と云ふ

百「誰？ 何に來ました」

と百合子は屹として云へば若者は窓下に立寄りて。

若「私一生の御願ひ私は葉山の入口の森戸に居る賤しい男で御坐いますが今母が大病で餘命も長くはないやうな樣子。しかも原からの盲目で 私には外に父も兄弟もない天にも地にも只一人の親が不圖した事から貴姫樣の御聲の美しいのを承知し



投込んだ音はなけれど水の月（乙衛）

て何でも一度自分の枕邊で歌つて頂きたいと毎日々々私にせがみます私も思ひあまつて御願ひに出ました。何卒今宵私の伏屋まで御越し下されませむか。もう今日は朝から申暮して明日までまつてと申し聞けても少しも聞入れませぬ一徹の老の心何とかしてかなへて頂き度。」姫は重くうなづきつ。

百「私にも只母一人あるばかり……くはしくは道すから伺ふとして私すぐに行きませう。一寸母様に申上げて來ます……。イエお母様とても左樣な譯ならお容しになります。斷りなしに行く事は出來ませんから……あなた母様がお呼びになつたらよく委しくお話して願つて見て下さい　其飛石づたひに裏庭の方へ行くと左手に燈火の見える日本間がお部屋です。」

森戸橋畔に小やかなる伏屋あり貧しげなる老婆一人夜いもの薄く横はれるが、今しもその息子とも見ゆるかの若者は姫を伴ひて歸り來りつ。

「さあ　母さん姫樣がお出下すつたよ」

母は見えぬ眼に此方向きなほりて心をつくる樣なりしがうれしげなる顔もせず。一言の禮も云はぬを若者は何事も病の爲めなればと氣の毒氣に詫びながら席を進む、姫はたゞうなづきしが靜かに

百「何か歌つてあげませう」と云ひ給へば

老婆、賤機!!!。」と呼びさま病人はゝね起きて荒々しく手を延ばす。心得て若者は三味線を與へつゝ。

若「毎日々々氣が向くと獨りで彈いて居ります」

と姫に語る。

百「妾は唱歌が專門ですから賤機も歌だけ○○に敎へてもらつたのですよいつもピアノで譜を見ながら彈いてはうたつて見ます。いつ聞いたかよく知つて居ますね。氣分にさはりはしませんか」

柔しう問ひたまふを煩さしとやうに顔しかめて老母はずん〳〵彈き始め。不思議や病める人の粗末なる三味線彈けるに似もやらで心ゆくばかり音を立つると。好きなればこそ。と姫は强ひても怪しまで靜かにうたひ出し給ふ。白羽二重地に秋の草花見事に染め出せる袷衣に絽博多の帶は空色。眞白き指膝の上に組み合せ

て長き睫毛伏しめに。端然と坐し給ふ姿の美しとより れたり。

は神々しく音樂の神のかりに御姿現して貧しき老婆の曲は遂に終りぬ。

爲めに一時の惠みの聲を聞かせ給ふかとばかり……。」

歌「狂女は聞いて振り返り。「狂人とは曲もなや、物に狂ふは我のみかは鐘に櫻の物狂ひ、嵐に浪の物狂ひ、菜種へ蝶の物狂ひ、三つの模樣を縫ひにして……。いとし我子に着せたし」となげき口説きつ一筋に面白花をすくひなば失せにし我子に逢はれむと川風はこぶすみだ川に、船人の慰みの種となり居るあはれの狂女を目前に現はして老婆も今や恍惚として夢見る如く彈けば傍への若者も我を忘れて聞き惚 あらせす。



武藏野の面影

折しも外に人聲のしてつかづかと入り來るを若者は打笑みて無言に見上げぬ。

老婆は盲ひたりと云ひし兩眼パッチリと見開きて

「ア!!! 殿樣!!!」と頭下げつ急ぎ床片付けて麻の坐ぶとん取り出す。

怪しとも怪しき此場の樣に百合子は驚きて其人を見れば白髯見事なる氣高き老紳士!!!おゝ。それよ。去年外務の大臣が菊の宴にちらと見覺えし〇〇大臣……。

姫「藤村侯爵!!!」と云ふ間も

侯「百合子樣、あなたの人格に服しました。こんな狂言をして甚だ相すまんです。これが溌男です」

さてはと見返れば若君は汚き衣其まゝに樂しげに煙草の煙を吹き給ふ。

老婆は平伏して。

芳江「先程からの御無禮申譯も御坐いません私は芳江と申し若樣の乳母でございます。實はかねてから若樣の奥方には恐れながらあなた樣をと存じましたが。昨日上野へ參りましてあなた樣の御樣子見上げまして。お確り遊ばしたお心は分りましたがお柔しいお情の程を拜見致し度。この樣な事を存じ立ちましたので・・・此家はお出入りの植木屋の家でございまする」

丁寧に打詫びつゝかねて用意の果物など取り出しまく\/にもてなしつ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

あはれ花園百合子の姫が藤村侯爵夫人となりたまひしはかゝる逸話のありはべるに。

賢婦の心がけ

瀧鶴臺の妻は怜悧でしたが非常な醜婦で、嫁する前に、父兄は何んな貧しい所へでもやるから誰れか貰つて呉れまいかと、一方ならず氣をもみました。所が當人は一向平氣で、瀧先生のやうな方へならゆきたいと常に言つて居た。鶴臺の名は當時既に世間に響いて居たから、人は之を聞いてとんだ希望だと皆な笑つて居ましたが、鶴臺は之を聞いて大に喜び、これは家の爲にならうと早速所望して妻にしました。するとなか\/氣がついて、家事を整理する上に寸分の隙がなかつた。さる程に或時赤絲でかゞつた毬が一つ袖から轉げ出たので、夫は訝かしく思ふて之を尋ねますと、妻は顔に紅葉を散らして『私は御覽の通りの不束物ですから、善い事は出來ない迄も、せめて過ち丈はしたくないと思ひまして、惡念の出た時には赤絲をつないで毬に卷きつけ、又善い行ひの出來た時には白絲をつないで毬に卷きつけて居りますが、始め二三年の間は、赤い毬が大きくなるので常に自ら省みて愼みました爲ですか、この頃はお蔭で二つとも同じ位になりました。まだ白が赤より大きくならぬのがお耻かしうございます』といつて、白い絲の毬を袖の中から出したので、鶴臺も其の心がけの淺からぬのを深く感じました。

秋の山づと





常陸大洗の宿

其日々々

みをつくし



△六月廿八日

數日來降りつゞいた雨が今朝は豪雨となつて、笙の川の水量も目に立て殖え濁流滔々と押流す樣は却々凄まじい、當地へ來てからもはや半年になるが、こんなことは始めてだ、饗庭野へ演習に行かれた夫も、かう降りつゞいては嘸困つて御出だらう、あの潔癖な方が汗とよごれた、襯衣などゞうなさるだらう、それとも從卒がどうかして上げてくれるかしら、併し軍人だ實戰のことをおもへば十日や廿日位何でもなからうが留守して居る身にはさうもおもへない、

午後よりは水量また〳〵ふえ見る〳〵岸を浸すこと許り矢を射るよりも早き水勢は、大木を根こぎにしあらゆる物を押流して凄まじなんどいふばかりない、上流に架せられた二つの橋も危なく見えた折柄、いづこか堤防がきれたと見え警鐘がひゞきわたつた、其中續續見舞の人がやつてくる、聞けば上流の方が浸水甚しく床上に達せし家も多く往來は腰を沒する有樣とて皆グショぬれになつて來られた、うちは川下ながら却て土地が高いから大丈夫とのこと、

私は始めて洪水を見たこと故、どうなることかとひやひやした、在學當時上田先生の修身の御話の時「人格の修養」といふことに就いて「人は事にあたつてよく人格のあらはれるものだ、非常の事變に際し笑つて從容死に就き得る程の覺悟あるものは、果して幾人かあらう」、といはれた時、私ばかりはと少し不平におもつたこともあつたにと、おもひ出すと恥かしい、其中聯隊からも報をきいて櫻井中尉が兵をつれて來て下さつた、私が御挨拶に出ると「聯隊には若松大尉が殘つて

居られ只今電話で出水の報を得て直に兵を引つれ御見舞にいつて來いとの大尉の命を奉じて櫻井は伺ひました、急遽の際、訪問の服裝も整へず甚だ失禮の段あしからず、何なりと御用あらば申付け下されたい」と述べられた、見れば長靴ズボンはいふに及ばず、マントも御腰のあたり迄ぬれて雫がポタ〳〵落ちるので途中の樣がおもひやられる、が、一絲亂れぬ其態度、一言一句のむだのない而もよくつくされた其言葉、あゝこれでこそ帝國軍人だ、百萬陀羅の御世辭述べられたよりも深き同情を得た心地して御留守の心細さもおもえず唯いかになりゆくかと見て居た。

追々時刻うつりてもさして增水の模樣もなく雨さへ小降りになつて來たので、さらばと一同引上げられた、夕刻よりは少しく減水しはじめて氣遣つた程のこともなく、日が暮れた　聞けば當地では折々あることださうだが、始めてだから殊の外物おそれした、然しこれも學問の一つ、何事も實地にあたらねば經驗は出來ぬものだ、此夜波高く風さへふきすさぶので

波の音松のあらしのすさぶ夜は都の空ぞ戀しかり
ける

と東京にいます母上にけふのことを報じた手紙の終りにかきつけた。

七月三日

今日は武夫の第五回の誕生日、丁度きのふ夫も歸宅なされたから賑々敷祝ふことが出來る、武夫は朝からおとうさんに何かおねだりしてニコ〳〵もので居る、けふの御客樣はことし二年生になつた從兄の太郎ちやんを餓鬼大將に泉ちやん勇ちやん一郎さんなんどの腕白連だから、其つもりで御馳走をこしらへる先づ口取に茶碗むし、鯛のおかしらつきにオムレツそれから折よく馬丁が釣つて來てくれたので鯉のあらひと鯉こく汁とを加へ食後にアイスクリームと葡萄糖を水で冷して出すことにする、ひる過ぎると勇ちやんを先頭に續續やつてくる、をばさん今日は、武ちやんおめでたうといふが否やはや庭では相撲がはじまる、カケツコがはじまるといふさわぎ、一しきり遊んだ後皆お座敷へ

並ぶ、お座敷の飾りもけふはスッカリ子供向にかへて床には大きな世界地圖をかけ床脇の棚などには大川のをばさん、松島のをぢさん、めがねの兄さんなどから下さつた贈物が所狹く陳取つて居る坊ちやん達は坐に就くがはやその片はしから盛んに平げる、口取とあらひとが最もうけがよかつた、夫もけふは少さいお客樣のお相手になつて頻りに盃を重ねられたが折を見て一場のお話をせられた、それは自分の少さい時は日本の國も今の樣に大きくなく世界に名さへしられて居なかつたが國人が擧つて努力の結果今では國も大そう廣くなり此地圖にある樣に朝鮮、樺太迄も我が國のものとなり、世界のすみ〳〵迄も赫々たる名が轟き渡つて居る、丁度子供が成長して一人前になり家の名を擧げた樣なものだ、大きくなつたとはいへこゝにある通り地球の面積からいへば一粒にもあたらぬ位のものだから諸君が大きくなる時分にはもつともつと大きな者となし益々國威を發揚せねばならぬ、それが親へは孝、君には忠となるのであるから折角勉強して立派な人になり國家の爲に働かねばならぬといふことをおもしろをかしく諧謔を交へて諄々と説かれたので小國民連大受けだ、僕は今に何になるかんになるこんな事をするのだ、あんな事をするのだと大さわぎだ。



愚痴短氣りんきいかりの胸の火をさめしづめる勘忍の神（手島堵庵）

私も此樣を見てつく〴〵と菅公の母堂が「久方の月の桂も折るはかり」と詠せられた心がくみしられる、過日も新聞に賴山陽の母は山陽が生れてからの日記をつけて居られたよし書いてあつたが。世の母親たる者がそれ程子供に注意して居たら不良少年など出來る筈はあるまい　毛蟲の如く忌まれる彼方も實は半以上は親の罪である。よしまたそれが、親が注意して居て、而もよい子が出來なかつたら其時はそれ迄の運命と快くあきらめることができようが、等閑にしておいてよくならなかつた時には、後悔しても追付ずいかに口惜しからう。其思ひをせぬ爲且は世の爲國の爲親としての責任は出來る限りつくして國家に有用の材をつくらねばならぬ。世に親の慈悲程宏大無邊なものはあるまい、父上に早くわかれて、母上の慈愛一つで人となつた私は、人一倍親なつかしく、親の惠の難有くおもはるゝが私の思ひよりもより、以上幾倍か母上は私の上をおもつて居て下さらう、其限りなき恩愛にむかひまゐらすにはどうしても私が武夫を立派に育て上げなければならない、扨どうしたら親しとての責任を完全につくすことが出來ようか、これから成長すればする程、私の責任もます〳〵重くなるけれど、大きくなるのは樂しみながら、また心配でもある。

其中食事も終つたので福引をしたり、椅子取りをしたり、餘興の薩摩琵琶——これはお隣の御子息が休暇で歸つてゐらしつて慰み半分にして下さつたのだ——は廣瀨中佐を打切りとして、それ〴〵お迎へが來たので殘り惜しげに歸られた、後は大風の凪いだ樣、武夫はくたびれたかすぐ寢入つてしまつた　あゝ彼が五月の夢やいやに……。

廿一日

朝起きると電報が來た淸さん(主人の弟)が十時の汽車で來られるとのこと、定刻に夫の出勤を見送るとすぐ淸さんの大好きなアイスクリームをこしらへたり、オレンゼリーを冷しておくやらごた〴〵して居ると間もなく着された。

淸さん此度四高を卒業して角帽かぶる樣になつたの

だが土木工科なのだ、いつか私が「工科なんて氣がきかないのね、といつたら「でも大臣や外交官ばかりでは夜が明けませんよ、だつて。暑い／＼ので早速アイスクリームに渇を醫しオレンヂゼリーはまたゝく間に平げて漸く人心地がしたといつて居る矢張り若い者は元氣だ、だが可哀さうに試驗に餘程頭いためたと見えてあの丸かつた頬がこけて居る　勉強もする時にはしつかりしなくてはならないが、此お休み中は呑氣に遊んで第一からだをこさへなくつてはいけませんよといつて上げた、益々氣焔をはいて相將氣取りて居るかとおもふと、大學の徽章つけたが新らしいと何だかねうちがない樣だから墨をぬつたり、拭いたりしたのだつて、何て無邪氣な人だらう、何でも此度は大分人員が超過したので、工科の中でも土木と電氣とは更に大學の入學試驗をうけたのださうで、四高からいつた土木の連中では九人の中五人しか合格しなかつたので、其中へはひれたのだからホントに御めでたうといつたら、清さん先きまはりして「だから何か奢れといふのでせう」、「エ、さうですとも勿論、だが三年間猶豫して上げるから三年の後こそ利子つけて御奢りなさいよ」といつたら頭かゝへて首ひつこめた、「こん度はこちらから祝つて上げる筈ですが何れ兄さんからは立派な御祝ひが



ひかれなばあしき道にも入りぬべしこゝろの駒に手綱ゆるすな（手島堵庵）

出ませうがこれは私だけのホンノ志ですよ」といつて暇々に編んでおいた靴下と投書して貰つたのをためておいた圖書切符とを上げたら——つまらぬものでも之は少しも人の力をからずに私一個の力でつくつたものだから受ける方は兎に角贈る方では千金に換へられぬ志なのだ。殊に清さん養家は財產家とはいへまだ部屋住の身だし、何といつても養子だから自由のきかないのはわかつて居るから——これは難有う嫂さんにこんな心配していたゞいて、今に僕が奉職したらキツトおごりますよといふ、そんなことはどうでもよいが私は弟や妹がないから實の弟の樣な氣がして末賴もしい。

晝食後暫く午睡して、三時頃からボートにのつて常宮迄ゆかれた、晩餐には夫も歸られて久々で兄弟打寄り樂しく食事をなし食後の笑談に花が咲いて床に就いたのが十一時。

八月三日

相變らず暑い、此間からおとまり客などで隨分いそがしかつたし蟲干も少し片が付いたから、けふは一日竹に暇をやる　朝の用がすむといそ〳〵と出ていつた一體從來の召使の待遇は餘りに自由を束縛して居る樣だ、生意氣なことをいふ樣だが私は家の持ちはじめから理想の一つとして月に必ず一二回は休暇をやり、祝祭日、誕生日、祖先の忌日等には彼等にもひとしく御馳走して日頃の勞をねぎらふべくはかつて居る、一家の經營上召使は主婦の手足の樣なものだから十分心服させておかなければ家庭の圓滿に缺くる所があるとおもふだから許す範圍內に於ては自由も與へ相當に人格も重んじて心身の慰安を計り、主婦自らが儀表となつて彼等の心服を得決して壓服せぬ樣心掛けて居る。

昨夜さよ子さんから來た手紙の返事を出した後此間蟲干に用箪笥の抽出しからさがし出しておいた光子さんの文章をよむ、頂度卒業の一月許り前だつたが上田先生が「我が國今後の家庭は果して改良の必要ありや」といふ題を御出しになつて論文體に書いて御覽なさい

とおつしやつたのだ、あの頃は隨分向ふ見ずだつたが光子さんのは却々思ひきつたことが書いてある。「從來學校を卒業して主婦となりし人々より「在學當時苦心して學びし學問も餘り活用するの折なく理想といふも容易に行はるゝ者に非ずして一度家庭の人となりては其餘りに無意味に平々凡々而かも窮屈なる生活にあきたらずして轉々活氣に充ちし學生時代を憧憬す」とは往々耳にする處なり之其人の罪か果家庭の罪か。抑日本の男子は未だ以て女子と小人との觀念容易に失せずしてともすれば婦人を奴隷視し家庭に在りては終生の友たるべき主婦に對してすら共に倶にといふ觀念なく動もすれば己れ獨り紅燈綠酒に快をとる如き有樣にてはいかで婦人をして家庭に安んじて在らしむべき日本の男子はつまり婦人に義務のみを強ひて權利を少しも與へぬなり、勿論從來の婦人が責任を負ひ權利を持て得ぬにもよりしならんもいかで新時代の敎育を受けし婦人がかゝる待遇のもとに滿足さるべき、人は己を知る者の爲に死すとかや、其志のある處をしつて宜しく之を遇せんに婦人たるものいかで向上發展せざらんや之よりして、家庭も大に面目を改めん、吾等も深く自ら修養すると共に此弊習を打破して婦人の權利を要求せざるべから



結構なうは露もてろ芙蓉かな　（寥松）

す、然れども彼の歐米婦人のいたづらに女尊男卑の風あるはまた吾等のとらざる所なり。婦人の地位を認めらるゝに至らばます〱向上發展をはかりてそれに答ふると共に一面へり下りてわが婦人の美德即ち淑德を發揮せざるべからず、形はかはれど武士道のさかんなりし頃の武家の妻女の奥床しき心掛こそあらまほしけれ」と、それから家庭のことに說き入つて縷々反覆書いてあつた、光子さんの面目躍如として見るが如しだ、私も全たく同感だ、殊に婦人が地位を得た後は昔の武家の妻女の心掛がありたいといふ所は至極同感だ、人は强ひて情をためるといふかもしれぬが私は別段婦人が夫の戰死の報をきいても涙一滴落さぬといふ覺悟がすきだ、涙は婦人の命とはいへそれも時によりけりだ、這般の消息は却々歐米婦人やハイカラ者流のよくしる所に非ずだ、かくてこそ花あり、實ある婦人が出來て家庭も健全に發達するであらう。



記念の撮影

光子さんとは北米の野に嘸や得意の腕をふるつて居られよう。わが國にもいつかは此理想を現實にさせたいものだとおもつた。

△八月五日

けふもまた上天氣殊に珍らしくも涼風そよそよと少し寒い位だ、久々で皆を連れて金ケ崎へ行く、久し振りで出たので武夫も美代子も大喜こびだ、歸りにはあれをかつて之を買つてと行きからお土產の話だ、お辨當こしらへて

居た初は少しおくれて來たが道で一緒になつた。皆競爭で石階を登り神前に禮拜する。いつ見てもあかぬ眺めの鷗ケ崎で町々を目の下に遠く日本海を見晴しつゝお辨當つかふ、美代子はのり卷が大層氣に入つた、それから月見御殿へのぼる。こゝは吹きさらしとて一しほ涼しくすゞみがてらの人も大分來てゐる山上には此地の由來をしるした碑がたつて居るが漢文でよくわからない、暫く休んでそろ／＼下りる。歸りに氣比神宮へまはりお約束のお土産――武夫はお伽話と鐵砲、美代子は人形――を買つて竹へもお留守居の御褒美に豆らくがんをとつて歸る、夫は大津へ御出張でけふは御歸りにならぬのだから御湯へはひると早目に食事をすませた、皆寢かした後餘り月がよいので庭づたいに濱へ出て見ると銀砂をまいた樣な空に一輪月がかゝつて遠く沖の方に明滅するいざり火と相對しあたりは森として唯足もとをあらふさゞ波の音ばかりが微妙な樂の音にきこえるいかにも神々しい夜だ、岸につないである漁船に限なく光がさして晝のつかれに寢入つて居るいざり男どもの姿までてらすので

　舟とめて帆かけて遊すぶいさりをのかりねの夢を
　　てらす月かな

と口ずさんだ遠く電燈のちら／＼するのはけふいつて來た金ケ崎だとおもふといろ／＼な感想が湧き出して來る。

　南風きそはず金枝玉葉の御身にて具さに櫛風沐雨の苦をなめられあの山上に弓折り矢盡きる迄立籠もられし當時の光景はいかゞなりしか、けふは吾人が遊樂の地となりて大平の氣に充ちみちし樣とくらべては轉た感慨深く學校で漢文の時伺つた漢楚興亡兩丘土といふ句も思ひ出されておもはずも

　せめきあひし敵も味方も土となりて天つ日かげの
　とはにかゞやく

月はいよ／＼高くすみのぼる夜風はひや／＼と肌寒くおぼえたので惜しかつたが家に入つて床に就いた。

名流雅談（一）

△紫女と岩清水の歌

紫式部が良人左衛門佐宣孝の外出せし留守の間に鰯を食ひしを、宣孝が歸つて之を見これは『無下にいやしき物を好ませ給ふものかな』と言つたので、紫式部は少しく顔あからめて『さな笑ひたまひそ』とて左の一首を詠んだ。

日の本にはやらせ給ふいはしみづ（岩清水）
　まゐらぬ人はあらじとぞ思ふ。

△形影相伴ふ

木村重成の妻が、夫に宛てた遺書は、千歳の下、尚ほ人をして感慨せしむる所がある。曰く、一樹の陰、一河の流れ、是れ他生の縁と承り候にこそ、そもおとゝせの頃よりして、偕老の枕をなして、只影の形に添ふが如く思ひまゐらせ、思はれまゐらせ候、この頃承り候へば、この世限りの御催ふしの由陰ながら嬉しく存じまゐらせ候。彼の項王とやらには、世に猛き武士なれど、虞氏の爲に名殘を惜み、木曾義仲は松殿の局に別れを歎きぬとやら、されば世に望み窮りたる妾が身には、せめて御身が御存生の中に、最後をいたし、死出の道とやらにて待ち上げまゐらすべく候、必らず／＼秀頼公が多年の海山の 御鴻恩御忘却なきやう頼み上げまゐらせ候。

△文豪と才媛

美濃の醫者江馬天香の娘の、細香といふ才媛は、身なりも何も構はない極くのんきな婦人であつたが、頭腦はしつかりして居たので、或時頼山陽が江馬の家に宿つた時に之を認めて 是非妻にと申込んだが、細香は肱鐵砲を食はせたので、流石の山陽も大に器量を下げた 尤も山陽は其時はまだ名が現はれて居なかつた。然るに程なく山陽の名が 一世を動かすやうになつたので、細香は深く己れの不明を恥ぢ、且つ悔恨の餘り遂に一生獨身で暮した。而も細香は洒々落々として 其後山陽の門に入り、深く學を修めて又文名を一世に馳せたとは面白い話である。

△名流の親交

萩の尼は號を瑞祥院と稱し、江戸の人で、馬琴とも親交があつた。或時馬琴が、尼より贈られた服紗を、過つて火の中へ落して焦したので、其の詫びに、

こがれつゝわたしかれたる川舟の
　風のふくさにいとぞくろしき

とこがれ、ふくさを詠み込んだ一首の和歌を添へて 服紗を返してやると、尼は

よの人のたぐひにあらずまめなりや、
　けふくさの戸にかへすこゝろは

と又やけふくるの文字を詠み入れて返したといふ。

△憐れみ深き妻

西島燕雨といふ有名な俳諧の宗匠が、或る大雪の夜に、ふと思ひ起して、今夜は實に珍しい大雪ぢや、いで此れより雪見に出掛けて一句浮べようと、思ひ立つては寒さも物かは、直ちに召使の小僧を呼び、今より雪見に出かけるから、其方は供の用意をせいと命ずると、小僧は、もう寢ようと思つて居たに此の寒空の而かも夜中に雪見のお供とは情けないと思つたが、主人の命令には素より反く譯にもゆかず、據處なく身仕度をして、提灯片手に内庭に立つてぶる〳〵震へながら主人の來るのを待つて居ると、主人が用意を調へて中庭へ下りて行かうとした時に、燕雨の妻は、寒さに震へてゐる小僧の姿を見て憐れに思ひ、兩眼に涙を浮べながら主人の袖を押へて、

我が子なら供にはつれじ夜の雪

とよんで無言で燕雨の顔を眺めた。と流石の燕雨も忽ち妻の心を容れて、『小僧、供には及ばぬ、其の提灯此れへ、其方は風を引かぬやう早く寢よと言ひ置いて、獨りで立ち出でたと云ふ。

△風變りの婦人

江戸の人高島彌兵衛に文鳳といふ娘があつた。才優れ學に篤く、幕府の儒臣林大學頭の門人となるを許された程の婦人で、江戸城内の御殿女中數百人は文鳳女を招いて敎へを聞き、家に集る門弟も又六百人もあつたといふ。若い時夫を迎へてまめやかに仕へたが、或日樓上で宴を催した時に文鳳は、手づから膳部を運ぶ中、ふと足を踏み外して落ちた物音に驚いて、夫は二階から、何か物は破はれぬかと問ふたら、文鳳は甚だ悅ばずすはやの場合に、妻は何うでも構はずに物を氣遣ふとは賴もしくないといふので、兩親に乞ふて夫と離別し、再び夫を迎へなかつた。とは風變りの女である。一體が雄々しい方で、或時も夕暮に柳原を通ると盜人が後から忍び寄つたので、早くもそれを悟つて、銀の簪を逆手に握り、寄らば眼を突かうと身構へしたので、盜人は勢ひに恐れて立ち去つたといふ樣な話もある。

△柏原の少女

寬永の頃、丹波の國の柏原に六歳の少女があつた。名を田捨女と呼び非常な穎才であつた。或る大雪の朝こゝろなく窓から銀世界を眺めて居たが、やがて人の下駄の齒跡を印せるを見て

雪の朝二の字〳〵の下駄の跡

と吟んだ、此句が廣く喧傳されたので岡主は少女に、

柏原に惜しや捨て置く玉の露

といふ句を與へた。長じて北村季吟に學び出藍の譽があつた。若くして良人に分れて妙融といふ尼僧で、世間に知られてゐる。其の良人に分れた時の歎には、やさしい彼女の面影が見えてゐる。

秋風の吹き來るからに糸柳
心細くも散る夕べかな



秋野の千艸の異れる趣味

桐　廼　屋

▲萩

◎空に新秋の意うごいて、先づきよく澄めるものは、いさゝ小川の流れなりけり。

◎秋初めて立たむとする日、野中に流るゝいさゝ小川へ傳ひゆけば、其處に萩花あり　土橋あり。土橋の袂、夏草の茂みに裹まるれば、萩の花妻、露の瓔珞を挿しぬ。

◎朝風涼しくそようと吹けば、白露はら〳〵はら〳〵と零る。實に可憐の風情や。

◎萩花を眺むるに、水邊に添ひて眺むるあり、垣根に植ゑて眺むるあり、唯だ野原に亂れ咲くをば眺むるもあり、孰れか哀れ淺からねど、晩春の山吹と新秋の萩花とは、流れに添ひて眺むるこそ、尙ほ一入の興はありけん。

◎嘸ぞや昔は愛でられけむ。淸涼殿の御庭に植ゑられては、萩の戸の名を擅まゝにし、野山に咲きみだれては、駒に鞍置きて眺めに來る丈夫もありしに、今は其事絶えてなく、唯だ荒寺の垣根に寄つて、果敢なき世の無情をかこつめり。

萩が花眞袖にかけて高圓の　顯昭法師
　屋上の宮に領巾ふるや誰れ

緣先や昨夕に見殘す今朝の萩　樗良

▲鴨跖草

◎鴨跖草と云へば甚とゞ難解しきやうなれど、螢草と云へば、三尺の童子も、其れぞと點頭きぬべし。

◎その葉は飽くまでも濃緑色にして笹の形に似、その花は鮮かなる瑠璃色にして宛ら胡蝶の戯るゝに似たり。故に又の名を瑠璃草、翠胡蝶、翠蛾眉などゝは云ふぞかし。

◎また、鴨跖草と云へるは、古へ此花を絞りて、衣服に青色を摺りつけしが故なり。されば坂上大娘が大伴家持に贈りし和歌にも、『つき草のうつろひやすくおもへかも我が思ふ人の事もつげこね』とあり。

◎露草と云へるも、また此草なり。清少納言は枕草子に、『見るに異なることなきものゝ、文字にかきてこと〴〵しきものは、露草』と記しぬ。



◎古へ、顔色の秀れて青き人のことをば、露草に譬へしこと、今昔物語の中に見えたり。『左京太夫某と云ふ人ありけり、色は露草の花を塗りたるやうに青白くして、眼皮は黒くて、鼻鮮かに高くて、少し赤かりけり』とあれども、此は譽めしにや。將た貶せしにや。餘り際立てる色を引きて譬へぬれば、なかなか可笑さに微笑まれつ。

◎鴨跖草は、伊勢より出づるもの最も良ければ、衣服に染むる爲めに、故ら其國にて栽培せしとぞ。

月草に染めぬ衣のいかなれば

和泉式部

うつし心もなくなしつらん
露草や家中の兒の剃こかし　几董

▲水引草

◎秋は立てども、尙ほ夏にもまして暑き日に、扨ては杉の村立てる木下蔭、扨ては清水滴る谷間などより、紅き花梗を抽出して、凉しき風に搖々とゆらめける狀、又なく愛らしげなるものにこそ。
◎その形狀の、いたく進物を結び水引に似たればや、なほ其名をも水引草とは云ふなり。

結ぼれて水引草や八重葎　觀魚

▲檀特花

◎初秋の頃、野原の、稍々濕りたる所を漫歩きすれば、小さき芭蕉にも似たる葉の間より、赤き花を出せるを見ることあり。此は檀特花なり。
◎別に是れがと云ふ趣味もなけれど、其丈高やかに伸びて、目醒るばかり鮮かなる色には、流石に捨てがたき心地ぞせらる。
◎赤き花散りて後は、黒き實を結ぶなり。其實甚とゝ堅ければ、珠數を作るに好しとぞ。

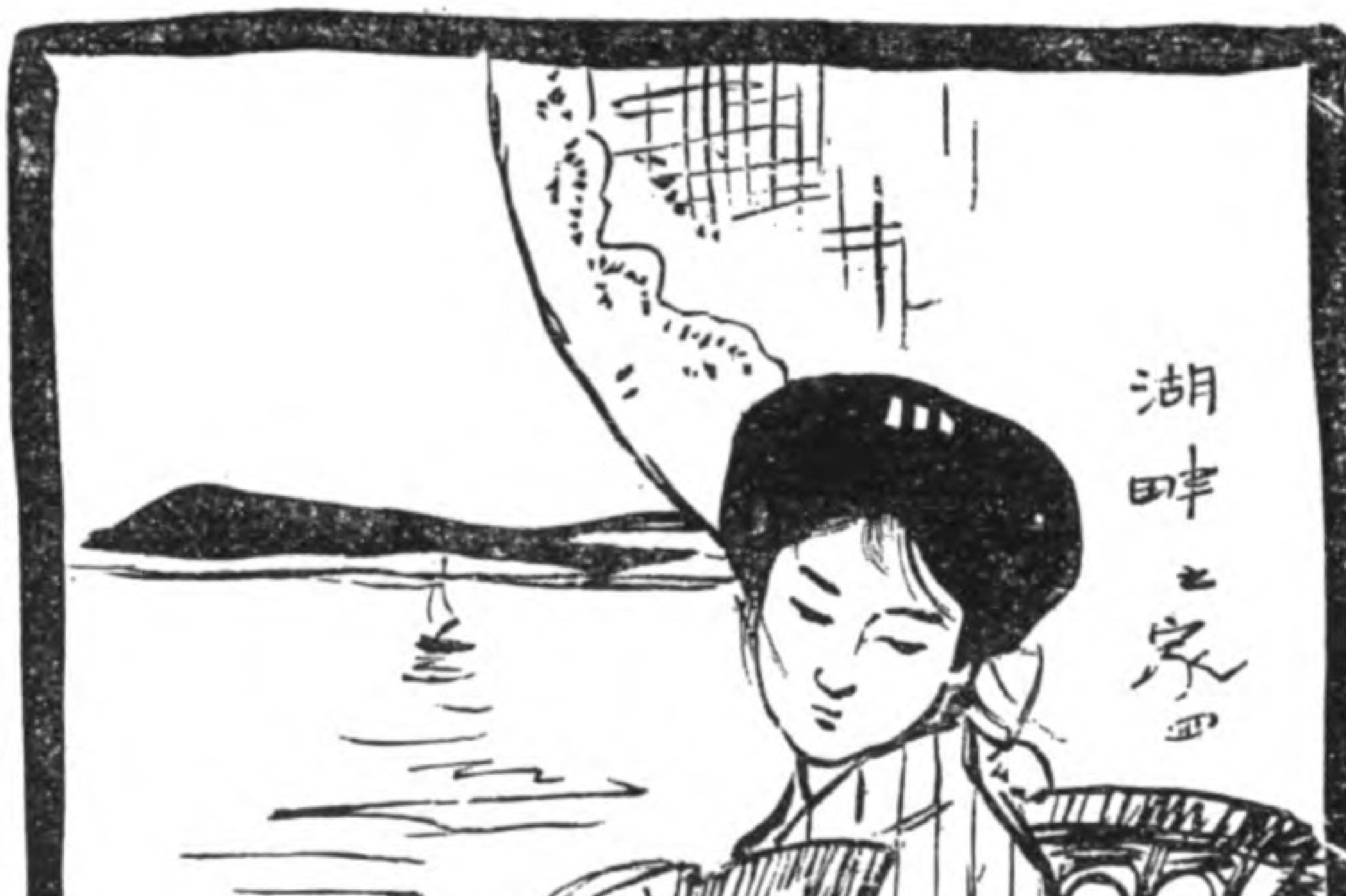
檀特や花を包みし葉の幾重　芳存

▲曼珠沙華

◎初めて之を見れば、唯だ美しとのみ思はるれど、熟熟之を見れば、稍々忌はしき心地せられ、更に之を想へば何となく物の哀れを催さしむ。そは曼珠沙華の花なりけり。
◎彼岸の頃、野邊に出づれば、畔道と云はず、小川の堤と云はず、葉なき莖のみ簇々として簇生し、宛ら線香花火の如き花パッと朱く咲きぬ。彼岸に咲ける故に彼岸花とも云ひ、墳墓の畔には尙ほ一入多く咲けるが故に、死人花、幽靈花、地獄花などゝ名けて、人々之を忌み嫌ふも哀れなり。
◎曼珠沙華の、宛ら焔の燃ゆるやうに紅色なれば、狐松明、野松明などゝも稱へ、稀れには白く咲くものあ

れば、其をば白燈花と稱へぬ。名け得て甚とゞ妙なりと思はる。

◎この草、春の季頃までは蒜に似たる葉ありしが、莖の抽出する前に至りて悉く枯れ、更に花の咲きて散りぬる後、再び葉を出すなり。同じ根より生えるものながら、其葉と、其花と、相見ぬも亦た物の哀れの一つならずや。されば支那にても無義草と名けて、曼珠沙華を忌み嫌ふこと夥し。



◎さりながら印度にては、此花を又なく美しき物に數へぬ。法華經に摩訶曼陀羅華曼珠沙華と記されたるが曼陀羅華とは朝鮮朝顏、曼珠沙華とは此花のことにて共に其花の美しきを賞したるにこそ。

◎朝鮮朝顏も毒草なれば、曼珠沙華も毒草なり。印度にて美しとされたる花の、共に毒あるは如何なる宿世の緣なるぞ。殊に曼珠沙華は、其莖を嚙めば俄かに舌の痺るゝやうに覺ゆるにぞ、一名舌曲とは云ふなる。

◎曼珠沙華の毒には流石の鼠も恐れたりと見え、鼠の犯さぬ用心にとて、泥に混じて壁に塗こみたる家、田舍には多くありけり。

山科や藪に交りて曼珠沙華　志計

曼珠沙華赫として蓼おぼる　田士英

▲弟切草

◎古へ花山院の御時、晴頼と云へる鷹飼ありけり。鷹の疵を癒す妙藥を有ちてゐたれば、他の鷹飼達その妙藥を教へてたまへと强ひて乞ひしも、晴頼、此は家傳なりと言ひて、些かも教へざりけり。然るに或日、晴頼の弟、密かに其妙藥を洩して、其は斯く〳〵の草の葉なると他に告げゝれば、兄の晴頼、忽ち激怒して其弟を斬殺しぬ。是れより此草をば弟切草と云へるやうになりけるとかや。

◎野邊に、山邊に、高さ一尺有餘の小さな草の、哀れに顫へる小さき黄色の花を見る毎に、常に此の悲しき物語の思ひ出さるゝ哉。

瑠璃色に咲かせてしがな藥師草　李溪

▲忘草

◎忘草と云はんよりも、萱草と云ひなば、些か其れと點首かれぬべし。夏より秋の末かけて、野山の濕氣ある所に、其樺色の、宛ら百合に似たる花を開き、其綠色の、恰も菖蒲に似たる葉を戰せ、赫々たる天日に對して、怯めず臆せず咲き匂ふ有樣は、なか〳〵に人目を引くぞかし。

◎この草を家の背後に植うれば自から憂ひを忘れしむとのこと、夙く支那にて言はれたりと見え、詩經の中にも、妻が夫の遠征を憂へて、假令堂北に萱草を植ゑぬとも、妾が憂ひは忘るべきかはと云へり。

◎萱草の萱の字は忘るとの義なれば、移して直ちに忘草と呼びぬ。此は專ら憂ひを忘るゝ謂ひなり。

◎懷姙せる婦人、この花を佩ぶれば、男子を生むとぞ。是れも支那より傳はりし傳說にて、彼國にては、一名宜男草とぞ云ふなる。

忘草わが紐につく香具山の
　古りにし里を忘れぬがため　詠人不知

見[illegible]えてあからさまなり忘草

秋野の草の異なれる趣味（其二）

▲桔梗

◎料露に紫色の鐘重げなる狀、なか〳〵に手弱女の立てろかとぞ見る。古へ朝貌と云へるは、桔梗のことなりとかや。

◎桔梗と云ふは近頃のことなり。古へはありのひふき又きちかうと漢音のまゝにて詠みたりき。

◎燕の或は高く或は低く飛ぶをば、詩經に頡之頏之と云へり。はれつるべのことを桔槔と書くも之が爲めなり。ありのひぶきのことを桔梗と書くも之が爲めなり。桔槔は、燕のやうに上下へ動き、桔梗の花は、朝に上へ向けども、夕べに垂首るゝ故なりとか。

◎桔梗の名所は、其名のあらはす如く信州木曽の東北なる桔梗原なりとかや。さりながら今は唯だ其名のみ殘りて、大概畑地になりたるも慨めし。

あきちかう野はなりにけり白露の
置ける草葉も色かはりゆく　　紀　友則

朝露の花すき透す桔梗かな　　柳　樽

▲狗尾草



◎其狀たゞ小さなる栗に似て、野にも、山にも、畑にも、田にも、彌が上に生え茂るなれば、古人も其の禾粟を亂すと謂ひて甚とゞ憤りぬ。

◎其穗、如何に伸ぶればとて、更に實ることもなければ、故ら帥冠に秀と書きて莠と訓ましめぬ。稍か皮肉なる文字ならずや。

◎粱は朱を奪ひ、莠は粟に紛ふ。共に赦しがたき似而非者なれば、聖人は口を極めて、佞人の忠臣に似たるに譬へたりき。さりながら植物學者の說に依れば、莠こそ却りて粟の原種なりと云ふ。若しも此草なからましかば、吾等は粟を喰ふこと能はぬぞかし。

◎古へ、七夕の折、禁裏にて芋の葉に露を移し、狗尾草にて之を結びて、院中へ献りき。其は此夜天の河を渡る牽牛星をば、一名犬飼星と云ふ故なりとぞ。

ゑのこ草己がころ〳〵穗に出でゝ
秋置く露の玉やどるらむ　　讀人不知

ゑのこ草人を迎へて戰ぐなり　　柳　雫

▲吾亦紅

◎秋の野に甚とゞ淋しく立てる吾亦紅の花、彼の七草が美しきに比ぶれば、その餘りにくすびたるぞ覺ゆるなる。

◎高さは女郎花に比べて較々高けれど、海老茶色の小さき花

相群りては、花か、あらぬか、宛ら桑の實とも見ゆべし。

しやんとして千艸の中の吾亦紅　　路通

▲藤袴

◎丈も、形も、甚と女郎花に似たれども、其花淡紫色に發き、麗はしき匂ひぞすなる。

◎孔子は藤袴の香氣を賞して、實にこそ王者の香草なれと云へりき。

◎我國にては、古へより其名に因みて、宛ら人が穿くなる袴のやうにぞ、和歌にうたへりしも笑止なる。

何人が來て脫ぎかけし藤袴
　來る秋ごとに野邊をにほはす　　藤原敏行

濡れて干す露の野中や藤袴　　桃里

▲女郎花

◎往時、平城天皇の御時、小野賴風と云へる者ありき。密かに仇し女に契りけるに、其妻これを嫉みて、怨恨の情堪へやらず身を放生河へ投げて死にゝき。賴風假かに其妻を慕ひて、厚く屍骸を葬りけるに、秋に至りて、其塚の上に可憐なる草花生え、風にも堪へずなよ〳〵しけるが、軈て黃色き花を開きぬ。人は此花を女郎花と名け、其塚を女郎花塚と名けぬ。これぞ世に云ふ山城の女郎花塚の由來なり。

◎其姿の甚と女性に似たればや、古來和歌などには、皆な女性に擬らへて詠まれてけり。

◎七月の異名を女郎花月と云へるは、秋七月、初めて此花の咲くが故なるべし。

女郎花匂へる秋の武藏野は
　常よりも尙ほ睦しき哉　　紀貫之

薄ふく中にも立てり女郎花　　雪弓



▲茜草

◎今は、其名をすら知らぬ人もあるべけれど、古へは、無くてはならぬ草なりけり。

◎抑や茜草とは如何なる草ぞ。野山にはびこる蔓草なるが、其葉は棗葉に似て圓く小さく、一節每に四枚づゝ着きぬ。初秋の頃に至れば、四瓣の白き花開き、軈て山椒のやうなる實を結びぬ。

◎秋も較々深き比ほひ、赤紫なる其根を掘りて絞れば、美しき染料を得、世に云ふ茜木綿とは、此染料にて染めたるものなりかし。

◎日、晝、紫などの枕詞に云ふ「あかねさす」は、茜射す意味にて、矢張この草の名より出でしものなり。

◎星移り物換りて、蘇枋を煎じて赤色の染料を作り出すやうになりては、茜草を擦ること直に廢りぬ。是れぞ軈て其名を忘らるゝ初めなりし。

◎西洋にては、茜草と云へば直ちに誹謗の意となるとかや。

茜さす紫野ゆき標野ゆき
　野守は見ずや君が袖なる　　額田女王

榛根より秋を染めたる茜かな　　篠元

▲尾　花

◎秋の野に無くて適はぬものは、實に尾花なりけり。旅人の廣き野に行きまよひて、夕暮れ、何處に草枕せんと思ひ惑へる時、尋々しう手招きするさま、可笑しとも、可笑しき極みなれや。

◎紫式部が云ひけむ言葉も、洵に其れぞと點首かれぬべし。「枯れ〳〵なる前栽の中に尾花の、物より殊に手を差し出でゝ招くがをかしう見ゆるに、また穂に出さしたるも、露を貫ぬきとむる玉の緒、はかなげに打靡きなど、例のことなれど、夕風なほあはれなりかし。」

◎尾花の形の、甚とゞ手招きするに似たればや古へより斯樣に詠みたる和歌の例、いみじう多かりけり。

秋の野の草の袂か花すゝき
　穂に出でゝ招く袖と見ゆらん　　在原棟梁

中ば散る尾花咲きけむ月夜哉　　蘭　更

▲葛　花

◎紫ばみたる紅き花の、其れも甚とゞ可笑しけれど、裏白なる廣葉の、風のまに〳〵宛ら掌を飜すがやうなる風情こそ、實に言ひ盡し難き興はありけれ。



◎されば和歌の枕詞にも、葛の葉と云へば、直ちにうらにかかりて、恨み、うら淋しなどと次の句を詠み出づるぞかし。

◎葛こそ、眺むるにも、物の用に用ふるにも兩つながら得適ひて、此上なく尊くありけれ。其根は掘りて葛粉を製し、其莖は刈りて葛布を織るとかや。

◎葛布を織るは盛夏の頃なり。詩經にも、『葛の覃うて中谷に旋る。維れ葉莫々たり是れ刈り、是れ獲て、絺と爲し、綌と爲す。之を服して斁ふことなし。』とあるは、周文王の妃が、自から葛を獲て葛布を織り、其勞作を歌へるものにぞある。

◎葛粉を製するは深秋の頃なり。之を採る人、山に入りて其根を掘り、之を搗き潰して、一夜水に浸し置くなりと云ふ。大和吉野より出づる葛粉は、洵に天下一品のものなりとかや。

うつろはで寸時篠田の森を見よ
　かへりもぞする葛のうら風　　赤染右衛門

葛の葉の怨みがほなる細雨哉　　蕪　村

千早振る神のいかきにはふ葛も
　秋にはあへす移ろひにけり　　貫　之

武藏野のつゝきの岡の眞葛原
　秋ふく風の果はみえけり　　千　蔭

奇警な諺

これは朝鮮人の間に廣く行はれてゐる俚諺の中から選んだものです。從來日本に行はれてゐるものと似たのもあるが、中には又我々の思ひ及ばぬ奇警なのがあります。

△晝の言語は鳥が聴き、夜の言語は鼠が聴く。
人は何時も言語を愼むべきことをいひたるもの。

△寢所見てから脚を延ばせ。
我が身の地位を先づ度つて後に志を行へといふなり。

△夫婦喧嘩は刀で水を斫る如し。
直ちに又和合するの意。

△虎の居ない時には狐が先生。
鳥なき里の蝙蝠と意同じ。

△怒りて岩を蹴つて我が足尖を傷く。
逆境に處してすなほに之れに順はざれば卻つて自ら傷くの意。



△打つ眞似をすれば泣くまねをする。
まことに世間は演劇の如きものなり。

△我が錢三文は他人の錢百兩より優る。
平凡の中に奇拔な所あり。

△我が足は嫡子より優れり。
我が足にて自ら歩き廻はれば、我れを活かすに十分なるも、嫡子は例令我れを扶助する義務あるも、到底さうは行かずとなり。

△知つてる道も聞いて行け。
すべて何事を爲すにも愼重なるべきを教へしなり。

△角のある石は善く石鑿に打たる。
強情な者は傷害を受け易しとの意。

△曉の月を見やうと夕方から待ち暮らす。
遠き將來の事の爲に心を勞するの愚なるをいふ

△瓦一枚惜んで棟を腐らす。
一文惜みの百知らずと同意。

△男やもめに虱が三升、女やもめに銀三升。
二つ並べた所に面白味あり。

△角をなくした牛の相。

面相の滑稽なるを笑へるなり。

△睡れる虎の鼻を衝いて起す。
愚人に對する警言。

△全痴は妻を誇り、半痴は兒を誇る。
世間に此の例少なからず。

△へまな者は仰向にひつくり返つても鼻を傷く。
へまな者の意想外に失敗を重ねるを笑ひたるもの。

△虎に犬を貸して返した事なし。
貪慾の者は財貨にあくことなしとの意。

△馬を逸して後厩を直す。
意明かなり。

△交際すればこそ絶交もすれ。
忘れなければ思ひも出さずと同工異曲。

△甘ければ呑み込み、澁ければ吐出す。
人情自ら利を主とするの意。

△延びて行く葛にも限りあり。
達觀すれば人の榮華も羨むに足らずといふ意なり。

△食鹽が腐る。





△清水に蛆が湧く。
右二諺ともいらざる干渉を爲す者を冷評する詞。

△飯を貰ふて粥にして食ふ。
餘りに卑吝な者を嘲れるなり。

△眼を閉づれば鼻を殺いで持つて行かれる
少しの油斷もできぬ世の中の樣を形容せるなり。

△外孫を愛するよりは葱畑でも耘ぎれ。
葱畑は耘ぎるの要なきものなり。即ち要なき事を爲す勿れといふ意。

△瓜を倒に食ふも人の好き。
瓜を倒に食へば末苦きが故に此の語あり。即ち蓼食ふ蟲も好き好きといふと同意なり。

△町内に舅十二人。
多情の女を評する詞。舅十二人あれば夫も少くも十二人ある譯なり。

△打つ姑より止める小姑がなほ憎い。
小姑は鬼千匹といふと同じ。

△生れたての小犬は虎の恐しきを知らず。
考へが幼稚にて恐しいものなしの意。

玉碎を悼むの辭

花にあらしの嫉みあり、月やは雲にぞ隱さるゝ無常といふもわりなしや、大橋富子の君、生れつき姿うるはしく、心はえいうに、才貌人にすぐれておい立ちたまひ、父母君の手の中の玉かざしの花と愛でいつくしまれつゝ、はや髫髪のころになりまたへば、よろづ學びの道は更なり、遊藝にもそれ〳〵師をえらびてはげみたまひけるに、技ことのほかに秀で、上達のはやきなみ〳〵ならざりしぞ、人皆感じあへりける。

斯くも果報めでたくうまれたまひし身の、ことし初夏のころより、偶と心地常ならで、假の床に起臥したまひしに、日數ふるまゝに難いよ〳〵おもうなりて、樣々に手をつくせし醫師の力も、朝夕こゝろを委ねし看護の效もそのしるしなく、八月二十四日といふに空しくなりたまひぬ。

ひごろ孝心深く、友にもなさけ厚く、才大人びておはせしことゝて、知れる限りの誰れ彼れ皆聲を放ちて泣きぬ。あはれ十二歳を一期として玉と碎けて散りたまひ、いつくしき同胞をふりすてゝ一人黃泉へ旅立ちたまひしこゝろの中ぞいかならん。

天の成せる麗質、こゝろばえの優にやさしき、さながら天の御使のごとくおはせしこの君を奪ひ去りにしねたみの嵐は、天魔か破旬か、そが猛き手に誘ひ行しぞ口惜しき、時雨の前の初紅葉、まだ染なさぬいろちぐさ、一と葉だも猶なみだなり。



田舎芝居印象記

松平鏡子

一

夏の幾日かを叔母にともなはれて、東京から西へ二十里餘、さる土地の旅に暮しました。汽車驛からは奥へ一里半、溫和な風光に富んだ一小村なのです。物數寄の藤岡の叔父が、此地へ別莊を構へてからかれこれ三年あまりたつて、叔母や私にも、顔馴染のいい人ではある。

村の芝居と云つても、お祭のそれと事變り、やゝ開けた店屋通りの、その中に交つて建てられてゐる、それこそ、この地唯一の常設館！　旅廻りの役者が來ると、此座で幾日間演らせるので、まあ村郞野孃の娯樂場なんです。役者と云つても、東都の檜舞臺に隆々たるのはもとより一人も來りません、大根も大根、うろぬきの尻尾の樣な、へなちよこばかしなんですが、それだとて人々の胸に映ずる樂しみは、とても我々の帝國座どころのお噺ではありませぬ。

閑話休題――

蟬時雨のあと涼やかに、庭の面は水打つたやう、どこともしれず蜩の音が…あれ、私の胸をおそふて聞えて來る。

「鏡子さん」一言目に開いた障子、二言の聲と共に叔母さんの美くしいお姿が現はれた。知つてゝ返事しないなんて、ずるいわね。

「どうなすつたの？」つと傍へ寄つて私の膝へ手を置く、…細い指…、

「今日はね、鏡ちやんお芝居見物よ、ホヽヽヽ、大變好いの（？）がかゝつたつてばあやの話だから行つて見ませう、今夜が千秋樂で飛切りの藝を見せるつて…暑いだらうとは思ふけれど、もうぢき歸京つて了ふん

ですからねえ、何だつて見とくとお土産話になるんですよ、ホヽヽヽ」

「今すぐ？」「いゝえ、これから御飯を食べてお風呂へ入つて、少し涼んで出かけませう―、ちつと早いと思つたけれど、爺やに敷物を持たせて席を取つて貰ひに遣りました、一番好い場所つてホヽヽ、どんなところだか……」

手を取つて下さる叔母樣の後からたち上つた、私も樂しみなのよ、何故つていふ程でもないんだけれど……。御飯なんか碌にのどへ通りやしない、そは〳〵してそは〳〵して……芝居を見るつて樂しみより、まあ好奇心なんですね、私つてばまつたく變手古よ。

少し庭をぶら〳〵すると、

「叔母樣私しお先へ失禮してよ」

「まあもちつといゝぢやあゝりませんか、未だ御飯が落附きもしないのに、お風呂なんて毒ですよ」

笑はれても關はずお湯殿へゆく、木の香の高い檜風呂にじつと沈み乍ら、私の心はとつくに何處かへ飛んでつちまつてゐる。

洗はうとして流しへ出た時叔母樣もいらした。

「ま早いわね、も少しまつてゐらつしやいよ、お脊だけでも流して上ますから」つて仰しやる。

せはしない心を落付け落付け、それでも平常より十分許り永く入浴つてゐた。

白粉を掌へ解き乍ら、叔母樣の方を振り向くと、矢つ張り笑つてゐらつしやる。あんなことを仰有るけれど、叔母樣だつてお嬉しいんだわ。

姿見の大鏡の前で、濡れた髮をそつとかして、衣紋を直すとつと外へ――、戸をあけて一足ふみ乍ら、

「もう支度しましてお宜しくつて？」

「ま、も少し待つてゐらつしやいよ、叔母樣も大忙ぎで出ますからね、

「えゝ…ちやあお待ちしてますから、何卒ごゆつくり」云ひ捨てゝ居間に引返した。

二

モスリンの二尺の袖、淡色紫の友禪、花を描いた

袂も輕く心地よい。褪紅色の羽二重に白百合の花、葉は碧と黒の陰陽、それを小さくお太鼓に結んで、私はもう一度姿見の前に立つた。

水色のリボンを飾けた下髮を抑へて、

「うつとうしかあないの？」

「いゝえ」と答へたのが、何だか自慢なのでした。

ふつくらと……いつもよりやゝつめ加減に前髮を下したお下髮、前髮の根と肩のところへ、八吋のタフタアリボンをかけたのを、私はそしてさはつて見ました。

「好かつたら出かけませう、鏡ちやん、手巾を忘れないやうに……」



香水を輕くふつて渡て下さる。

内玄關へ出ると、もう爺やもばあやもまつてゐた。

揃へてあつた履物つゝかけて外へ出ると月は十日ばかりのふくらみを見せて微笑んでゐる。

少しゆくともうそこからは、村の娘の群の幾組かにもあつた。

「遠くつて？」「いゝえ、わけはございません」

「嬉しいのね」と云つて又笑はれた。

三

ちらほらに見えた紅い光が、近づく儘に大きい大き

い、其癖色はだん〳〵薄く、一町程も手前に來ると、紅提灯の姿もはつきりと眸に入る。

いくらかの人だかりと、この提灯の灯の明さと、内から響金切聲がなければ、此所に芝居が開かれて、村の人の心を引つけて居やうとも思はれぬ。うちみたところ、間口の巾は二間、瓦屋根の二階が片ばかりにちよんぼりとふくらんで、家の大きさが一列の中にすぐれてゐるけれど、××座と白く、セメントでかためた文字を消せば、芝居舞臺とは受取り憎い。

ずつと入るとすぐ一間の土間、下足番も何にもないので、履物はお客樣御自身御持參遊ばさるゝ。

「お歸り時分にはお迎へに參ります」と云ひ殘して爺やは去つた。案内の女うしろから續いて二階へ上る、花道を斜に見下した、舞臺に近い端である、××座の一番好い所!?　ホヽヽヽ、成程ね、後には窓がいくつも切つてあつて、吹き込んで來る夜風は可成涼しい。

本來ならば二階より下の方がいゝんだけれど、こゝのは二階が低くて、舞臺がまた高いと來てゐる、十一二の子供が立つても丈がとゞかない位なんですの、下で仰向けに頸筋の痛むを厭ふとあらば、演ずる人の足元ばかり見て居なくつちやあなるまい、此座は全たくの二階本位で、下は小さく桝がしきつてあるけれど、二階は何の區劃もなく廣やかに出來て居ます。

海老色の木綿に黄色くのしをかいた幕が閉つてゐるから中はわからぬけれど、客は女六分に男四分、女には娘が多い。銀杏返しやぐる〳〵卷や、廂をつんとお鍋のふたの樣につき出したのや、……男は大抵浴衣がけの、頸へ手拭をまきつけた、お百姓風の人が多く、それがみな口をもぐ〳〵させて……ゐないのもあり升が、入る前に兵粮を蓄へて袂へひそませて來るんだと、ばあやは語つてきかせて呉れました。

今夜の芝居の藝題は、菅原傳習寺子屋段それもほんの片ばかりで、あとは何とかいふ新派ものでした。

見くびつて來た爲か、思つたよりはよく演ります、それでも源三夫婦が、鬘の中へ手拭を押込んだのをも

ち出すのは、物憐れな感じのうちにも滑稽に思はれて、微笑を禁じ得ませんでした。

けれども、まだ舊派の方が好かつたのです、新派と來たらおはなしにならない、私は一體新派は餘り好かないのです。昔風のかでなければいつそ西洋風のものなら、自分の生活とかけ離れてゐるせいか、さう目立つて缺陷もわかりませんけれど、新派の、かういふものだと、兎角惡いところから目に入る。

こゝでやつたのは、もう時代遲れの書生芝居なんです髪の結ひ方なんて、もうそりやあ可笑しい。



芝居となれば大抵はさうだけれど、田舍のは殊に大きい山がなければ、善惡に關係らず見物人が承知しない、そこで殺伐な切り合ひや、敵打風を加味して、それに學生が出る紳士が出る、職人、巡査、商人、娘、甘酒屋から夜鷹蕎麥迄、一時間のうちに夏になつたり冬になつたり、大くもない人數が大車輪で押し出すんです、一人が三人前も受あつて……。

而して終りは捕縛、裁判と來る、これがまた御見物

樣の御意に適つて、やんやといふ大喝采が……大向ふから湧くのださうです。

たゞ見る舞臺の大きさは、巾四間半、奥行二間足らずその眞中に疊一疊程高いところがあつて、そこに戸を閉てれば座敷となり、とりはづせば汽車のレールともなる、その下が所謂活劇のある場所なんですが、立て格子を置けば區劃になつて、花道に近い方は表、一つが家の中となるんです。その建つけやまた頗る簡單なもので、背景は唐紙、それに極彩色でいろ〱な景色や木が描いてある、これは兩側使へるのだつてばあやは敎へて呉れましたの。

笹の葉を板に立てたのを置く〱と藪になるんだし、…「オヤ〱竹藪で何か拾つてますよ」つて云つたら、「もうそこは川邊なんですよ、袂へ石を入れて身を投げやうとするところよ」つて、叔母樣は笑い乍ら仰しやつた。

竹藪變じて大海となる、世の變遷の烈しいのは兼ねて聞いたが、かう迅せはしいものとは思はなかつた……だつて、ホヽヽヽ、竹藪を忘れて引つこませずに置くんですもの……。

物事は簡單にすれば出來るものねえ、何も帝國劇場の廣大な建築の中でなくとも、十分芝居を會得せしめる、第一お金もかゝらないし、こゝに集まつてゐるものは心から大根の活劇にチャームされてゐるんだもの人間の生活も、もつとあつさり出來さうなものだ。御飯を食べぬ工夫、寢なくも好い工夫、しまいには働かなくも好い工夫つて……ホヽヽヽ、今お手をお上げなすつた方は誰方？

幕合の長いのに何より閉口よ、一體廻り舞臺でも何でも、ところへもつて來て、そら、その烈しい變化でせう?! なか〱容易のこつちやありませんわ。ガタン……ビッシャン……中には幕の裾をまくつて、首をつつこんでゐる呑氣な手合もゐる、振袖の姫御前が向鉢巻で障子をかつげば、片はづしの奥女中がすつぱだかで立格子をしよふ、一口でいへばそんな風な活圖畫が、演せられてゐるんだと、かつての實見者は語り

升。

幕の間はねえ、駄菓子だのおせんべいだのを、箱に入れた人や、ラムネや氷を岡持へ入れた女や、そんな風なのが五六人、變なアクセントで呼び乍ら、桝の仕切をふんで縦横に賣つてあるきます。

この二階はね、もう一遍おつこちた歴史をもつてゐるんですつて、だから一番好いにも拘らず人は餘りのつて居ない、私なら下にゐてつぶされるより、上から棧敷ごと落ちた方が餘程いゝわ、のどの乾きが少許か感じられるので、オペラバックから夏蜜柑を出して三人してわけて食べる、オ、酸つぱい酸つぱい何か外のものをつて云ふと、ちやああのお菓子でもお買ひなさいなつて叔母さまは笑ひ乍ら、キャラメルの包みを出して下さつた。



ふと下を見ると、見覺えのある顔の一つが、こちらを見上げて微笑んでゐる、黙つてそつと小手招きをすると、つと立ち上つて姿を人ごみの中に消したが、暫くするとドン〳〵、まるで廿日鼠のやうに、ひよつこり二階へ現はれた、....この人はお菊さんていふ――。

「先刻から來てたのよ、わからなかつて?」

「わしも早くから來てたんだに、どうしてわからなかつたんべな」

口を利かせると片なしだけれど、懷かしい言葉のひびき……。

「誰かまだ來てゝ?」「はあ、おみつちやんも米さんも、外に五六人……」「來られないでせうか!」「呼んで來ませうか」

「いゝの!……いゝわ、歸りにはあへるでせうから、あなたは此處に居てもいゝの?」

「えゝ!」うなづく手へ叔母様はそつと、半紙にくるんだお菓子の包みをおく……。

…………。

はねたのは十一時過ぎ疲れた足を立たせるとひよろひよろする、人に遅れて二階を降りた。

木戸は押すな押すなの大混雜、階段にたゝずむ私の腦を驅けめぐる印象! 十九世紀のタイプ、紙錦の光る袂、茶色の幕、自殺、決鬪、裁判!!、私の目はぼうとする、

「さ、そろ〳〵降りませう!」

うながされて、また二歩三歩、トン〳〵と段をくだる。

人群のその中には、迎へのぢいやの姿も見た。

叔母様の駒下駄と並んで、ばあやの揃へて呉れた空氣草履に足を載せると、お菊さんと二人先へ門を出た、座の者が出口に立つてお辭義をする。

「おゝ佳い月!!」

あとから出た叔母さまの白い手をとつて、私は天を仰いだ。(完)





今様心學道話

橘姫

言ふことの易ければ天下の人挙つて言はんと欲し、行ふことの難ければ天下の人挙つてこれを避さんと欲す、唇動けば千言萬語たちどころに生ずと雖、鋤を執つて、畑に立てば、全身を悉く動かさゞるべからず言ふて而して人は生くるものにあらず、行ふて而して人は生くるものなり、梅は言はず櫻は語らねど、梅おのづから清香あり、櫻おのづから明艶あり、野は無名の草によりて保たれ、世は無名の人によりて保たる、野の草は野に生えて野に枯れ、無名の人は世に生れて世に終る。その色めづらしからずとても、その匂ひゆかしからずとても無名の草ありて緑野千里に春暖く、沃野萬畦に秋豊かなり、その名知られずとても、その誉れ聞えずとても、無名の人ありて世に太平の春を歌ふの歓あり、鼓腹の秋に踊るの楽しみあるなり、然れども今一歩を進めて超越の境に入るこそ人間の最も尊いところの人格が完成さるゝのではありませんか。

超越とは越えると云ふ意、是れは近頃拵へた熟字であります、尤も超越と云ふ字は以前からあつたかも知れないが、今妾が申す意味では使はれて居なかつたらふ、兎も角も人間の意識を飛び越えた所にもう一つ意識があると云ふ意味です、極く分り易く言へば　向の方或は先の方と云ふ意であつて即ち超越の境の事である、誰方にも直き分るやうな言葉にして云つて見たいと思つて餘程考へて見たがどうも向の方と云つても意味をなさず、先の方と云つても意味をなさない、然らば佛法で用ゐる彼岸と云ふ字を使つたら何うだ、と考へて見たけれども此文字は此世を去つて彼の岸に行くと云ふ事を重に意味するのであつて超越の意味にも當

り兼ねる、超越の境と云ふのは死んだ後と云ふよりも寧ろ生きて居る間に考へて見たい境である、先づ一番分り易く云へば、超越とは五官を越えると云ふ五官以上のところ、かりに世の中には五官以上の人と五官以下の人とがあるとして考へて見たら分り易いかも知れない。

後者はどんな人かと云へば高島屋、或は三越、或は十合と云ふやうな呉服店があるが、其店の前には毎も幾十名の人が立つて阿呆みたやうな顔をして、金の看板を眺めて居る皆金のない人だらふと思ふ、金のある人はサッサと中へ這入る、幾百名這入つて居るか知れない、なか／＼繁昌して居る、彼れは何う云ふ連中かと云へば多くは眼の人、眼を悦ばせたいと云ふ人である多くは…彼の物を見て彼れが欲しい此物を見て此れが欲しいと云ふ考になる。

それから又音樂、謡曲、義太夫、浪花節なんかなかなか盛んである、何んでせう、それらは皆耳を悦ばせたい人である、多くは…芝居なぞが流行るのも、耳を悦ばせたい人があるからである。以上は矢張眼と耳の人である、五官以下の人である。夫れから飲食店の盛んな所では夜十一時頃他の店は皆閉つて居るが、飲食店だけは光眩きほど燈火を點けて居る、彼れは何かと云へば舌を悦ばせたい、即ち飲んだり食べたりするのである、それから些と云ひ難い話であるが遊廓、藝娼妓のやうな者がなか／＼澤山居る、是等は多く觸れると云ふ感覺即ち觸官を悦ばせたいのである、斯ふ云ふ人に人格の高いと云ふ人があるであらふか、斯ふ云ふ仲間に立派な人が居るであらふか、以上の人はかりに五官以下の人と名を付くるのである、尤も人間だから五官は離れられない、人々に尊敬さるゝ彼のキリストも御飯を食べ水を飲み、自然界の美を見て眼を悦ばしめ、鳥の歌や、或はエルサレムの宮殿に登つて祭司逹が謡ふ歌には耳を悦ばしめたらふと思ふ、又マグダラのマリアが價たかきナルドの香水を持つて來て其足に塗つたり何かした時には、其觸覺は嬉しく感ぜられたに違ひはない、人間だからして五官を免るゝ事は出

來ない、超越したと思つて自殺する人がある、是れは餘りに極端な超越である、肉體を殺してしまつては、夫で終局である。其次は、昔の坊さんのやうに、人里を離れてさうして山の中、谷の底に這入つて、人間と交通しないやうにする、是れも矢張五官を超越する譯である、全く超越は出來ないが幾分か超越をするが然しさう云ふ超越は駄目だと思ふ。キリストは、弟子の爲に祈禱をされた時に彼等を世より取り給へと祈らず惡き世にありて、罪に陷らざるやうに祈られた、全く此五官を超越してしまう譯には



行かん、それかと云つて五官以下の人に成つてしまへば是れは詰らない、そこで超越の境に這入ると云ふのは五官以上の境に這入ると云ふ事である、譬へばミルトンと云ふ人は今より三百年ばかり前に世に出て非常に英國の政治界に奔走したが晩年に至つて明眼を失つた、彼は失樂園と云ふ書物を著した、眼を失ふたミルトンは肉眼で見る事の出來ない靈の世界を見たのである。ミルトンの價値は眼のあつた時代ではない眼を失つた後にいよ／＼偉い事を現した、數年前に此世を去つた英國のマテソンと云ふ人は

盲人であつた、けれども彼が著した「キリストの姿」と云ふ書物は眼のある人が味ふ事の出來ない所まで、深入をして味ひ得た事を著した、又ベトウエンと云ふ人がある、是れは殆んど世界始つて以來の大音樂家であつたかも知れぬ、ところが全聾、耳がさつぱり聽えないけれども世界無比の音樂者として名ある作を幾つも世に殘す事が出來た、即ち耳を越えた人であらふと思ふ、ヘレンケルの如きは眼も見えなければ耳も聽えない、口も利けない、眼なく耳なく口なきの人である、然るにその「ヘレンケルの著した書物を讀んで見ると眼あり耳あり話す事の出來る人よりも優つて實に偉い、世界を見てそれを現して居る、若し私等も肉眼だけで見るならば餘り澤山は見えない　失禮ですが諸姉の中に非常に眼の宜い人があつても壁の外に何があるか恐らく見える人はないでせう、又ピアノを奏してると其音以外にどんな麗しい天の音樂があるか聽えないでせう、さうなつて來ると耳では聽えない耳以上になつてこないと駄目です、五官以上の境と云ふのを手近にお話いたしますと、私は佛像を見る事を大變悅びます、何を見るかと云ふと、釋迦如來が定に這入る所を描いたのです、彼は無想の世界に這入つた即ち是は五官以上の世界である、夫から又其思想と共に理想の世界に這入る、是は諸姉も時々なさる事だらふと思ふ、具體的の理想と云ふ事になれば學校などでは二宮先生等を龜鑑にせよと敎へられる、又基督敎ではキリストを敎へられる、サア其理想が一つ此所に出で來ると皆樣も御承知のやうに、理想は始終進步して止まない、小さな子供が螢々此所迄來たら甘水をやらふと云つて螢を呼び寄せるやうな工合に、此所まで來い〳〵と呼ぶのである、もう此所まで來たから追ついたと思つて見ると又理想が飛上つて居る、もう一つ飛付いて見るともう一つ飛上る、其理想の境に這入つて見ると實に面白うて堪らないのである、之を誰方にもよく分るやうに極平たく肉的に譬へて云ふと、太閤秀吉が信長の草履取りから武士に成つて見たいと思つて武士になつたな、ところが今度は 侍頭に成つて見たいともう一つ飛上

つて侍頭になつた、それから小大名でも宜いからして大名に成つて見たいと思つて成り上つた、三萬石の大名になつた所が今度は考が大きくなつて遂に三十萬石になつた、いよいよ大々名になつた、ところが、どうも關白に成つて見たいといつて遂に關白に飛上つたが然し、もう一つ飛上りたいとは流石日本人だから思はなかつた、もう一歩飛上れば天子樣になるより他にない、さう云ふ工合に私共の理想が上へ飛上る、理想のない人は何時までも、小さな蟲が地上に蠢いて居るやうな譯で何時までも地上に匍つて居る、五年前に會つた時も三年前に會つた時も故の木阿彌で些つとも變りがない、けれども理想のある人は理想が向上するからして、人格も段々向上する、世の中は三日見ぬ間に櫻かなで非常なる、進歩を遂ぐる譯である、其處が人間の偉い處である、私は今花を見て居ます然し只もう眼を閉つて居つちやあ駄目です、眼は一向働かない



肉眼は彩色つた花を見なくちやあならぬ、肉の耳は音を聽かなくちやあならぬ、肉の舌は實物を食べなくちやあならぬ、けれども五官を越えたところの心靈は眼に見えるものちやあ滿足しない、エリサベスの如く三千枚の衣服を拵へて簞笥の中に藏めて置いても心は些とも滿足しない、秦の始皇帝のやうに萬里の長城を拵へて其内に住んでも些とも心は滿足しない、顏淵のやうに食ふに食なく休むに寢床なしと云ふやうな貧乏な生活をしても、五官を越えたところにある心靈の世界を味ふて來ると、快樂其中にありと云ふ事で、愉快極りないと云ふところに這入ることが出來る、五官は金がないと滿足させることは出來ない多くは‥‥五官以上のところに在る、心はたとへ金はなくとも之を悅ばせる事が出來る、金はなくとも之を樂しませる事が出來る、むかしリンコルンが南北戰爭の際義勇兵を募る大演說をなした時に、其顏が天の使の顏の如く輝いて居つたと書いてある、又キリストがヘルモン山頭に於てお祈禱をした時にイエスの顏は雪の如く輝いて居つたと書いてある、五官以上の境に這入つて、所謂超越の境に這入つたならば、其中を養ふた結果として私共の顏容が輝かざるを得ない、自らにして喜悅と平和と希望と愛と、中に在るものは悉く表に現れて所謂後光がさすと云ふ事になる、今日學校の倫理敎育に於て何ぼ口を酸くして學生の耳に胼胝が出來る程實踐躬行を言つて聽せて見ても、其利目がないと云ふのは他ではない、五官以内の事のみ敎へて居る、所謂五官以内の人に向つて五官以内の事を敎ゆる、孔子は生と天道とを得て聞くべからずと云はれた、常識の敎へばかりで五官以上に飛越て行つて、靈味津々たる妙境は敎へられなかつた、此頃は祖先崇拜が喧しい、祖先の靈が如何に偉いものであつたか、理想が如何に尊いものであつたか、意識が何れぐらい超越したものであつたか、即ち祖先が如何に神々しいものであつたと云ふ事を敎へるのなら宜いのである夫は中江藤樹先生の如き人でも味ふて居るけれども、今の祖先崇拜と云ふのはなんだかお宮に參つて拜殿に額を擦付けて、さうして

五穀豐穰家內安全と云ふやうな事を祈れと云ふそんなことで人間が進めるものならば至極結構である、祖先崇拜も昔の武士は祖先のお蔭で御飯を食べたから難有味があつたが、今の人間は朝から晩迄稼いで居るから祖先崇拜も夫程感じないからして、祖先崇拜と云ふことを何ぼ唱へて見ても利目がありません、夫よりももう少し手近い我心との裏に五官以上の世界がある。その中にあるものを或は哲學から、或は宗敎から、或は倫理の方面から開いて來さへすれば、其所が發現してチャンと人格が出來る、人格が出來さへすれば、今日道德の何のと云ふやうな事はさう喧しく云はんでも自然で行へるやうになるのである、然らば諸姉等よくお考へ下さいお互の中には何うも眼の人、口の人、耳の人、或は觸覺の人が多くありはしないかと思ふ、三越や高島屋の前を通つて涎を流す人がなきにしもあらずと思ひます若し夫私共が眞個に人格を養成したいならば、金を主人公と仰ぐ代りに之を奴隸として使ひ衣服を主人公の如く大切がる代りに我家來として召使としてこれを見て行き世の爲め人の爲には金錢を見ること破れたる草履を見るが如く、其他衣服や寶玉を見る事實に敝履を棄つる如き思に這入つた人にして、初めて仰ぎ尊むべき人格の人だと思ふ、例へて言へばナイチンゲールの如き人は矢張り名譽も彼の



女の心を支配するに足らず、世の快樂も亦彼女の心を支配するに足らず、金錢も彼女の心を支配するに足らす、只世の爲め人の爲に思ふて盡したと云ふ一念がナイチンゲールの心の中に往來して居つたと云ふ事を考へると得も言へぬ尊く且つ美しい人格ではないか……

世の中を逃げてしまつて超越すると云ふ事は易い、自殺して超越するのは易い、然し塵の浮世に生れたからには塵を吸ひつゝ、眞黑ろに汚れて居つても構はない、チャンと心の中に養つて御らん遊せ、心の開拓は夫で十分出來て來る、心の開拓が出來さへすればどんな事に出會つてもビクつくものぢやあない、どう云ふ寶を眼の前に突付けられても、自分が取るものでなければ一指だも觸れないと云ふやうになる、是位立派なエヲイ境はないと思ひます、想ふに五官以上の考、五官以上の理想、五官以上の意識、五官以上の神性を修養し發展をしたならば必ず向上し、品性は益々高く清らかになる、諸姉がお互に今日より後、我は五官以上の人であるか、五官以下の人であるかと云ふ事を熟考たいと思ひます、兎角矛盾の多い現世ではあるが諸姉樣方が何の信仰もなしに只朽ち果つべき寶を慕つて此世を送つていらつしやる理由が私には些とも分らないです、彼のナポレオンの如く全歐洲を馬の蹄にかけて飛び廻り、萬事意の如くなりし榮耀榮華も夢の間にて終はまことに淋しきセントヘレナの秋の月と云ふやうな儚い月日を送つたのは皆樣御承知でせう、然れば諸姉樣昔今の別なく尊き、高き、潔き人格の方々を模範として向上進歩し、尊き人格の人間と成りたいと思ひくだらぬ乍ら小妹の理想を述べました。長々へたのながだんぎておあきなさいましたらう。



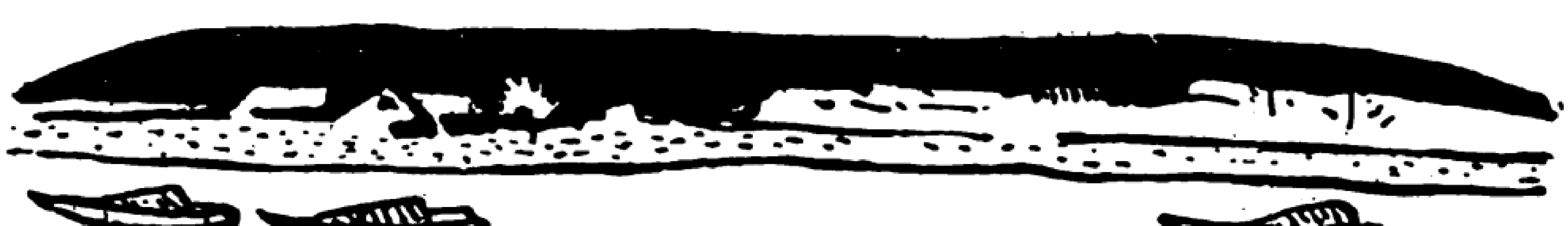


戀しい日本

シヤトル　白菊

御手紙もつい〳〵面白く拜見致します。皆樣御壯健で被居るさうで、うれしく存じます、私共も例の通りゆかいに暮らして居ります、當地もどうやら……然し午後になりますと風が强くていけません、又時々霧がふかくとざして一日、日光を見られぬ樣な事もありますの、東京は如何です、大分お暑い事でせう、貴女、今年はどこへ被居るの、鎌倉の御別莊ですか私はいつでもペンキぬりや煉瓦造りの 殺風景な家の並んだ町に住んで居ります、あゝ親しき君はなつかしき鎌倉に樂しく夏を過ごさるゝになどてか我れは……ついぐちにもなりますわ。

げになつかしき鎌倉の海、山、あゝあの松原、あの田舍道、而して江の島、大島の火山の煙もなつかしいのです、學校の遠足が江の島にあつた時、面白るかつたのれお寺で御べんたうは喰べて終つて未だ足ないで片瀨まんぢゆうを 皆樣買ひましたつけれ江の島の波うちぎはで、田中樣がぐつしよりぬれてしまつて、大騷ぎしましたのれ、私はいそぎんちやくが岩にくつゝいてる所を、パラソルの先きで突くと、急につぼむのが面白くて一所懸命やつてると、貴女がいきなり 後から被欣して、目を



かくしたものですから、私のパラソルは水たまりへどんぶとばかりおちてしまいました、あの頃の貴女は今と大分 ちがいますのれ、勿論私もちがひましたけれど、あゝ芳子樣、日本はよい所ですれ、私は故鄕が戀しくて〳〵每晩の樣に 日本の夢を見ますのよ時には、未だ女學校の教科であの面白味のない數學に苦しんでる夢なんか見ましたわ、さめての後のをかしさ一人でくす〳〵笑ふて良人に何にがをかしいのかなんて、笑はれた事もあります、又此間は 天洋丸かなにかに乘り込んで いざ出帆と云ふ所で目がさめてしまつてなんだか悲しく思ひました。

仰せの通り月日はどし〳〵行き過ぎてしまいます 私が出立の時未だお下髮の文子樣も最早今年御卒業なさいましたのれ、おうれしいでせう、 皆樣が別して おかあ樣のお笑顏、目に見える樣です私共の時代も面白かつたと思ひますわ お茶の水橋を貴女と私とあの春子樣とよく渡りましたのれ わざ〳〵遠道をとつて、人通りのすくない駿河臺へ來かゝると年上の春子樣がいろ〳〵な唱歌なさいましたつけ、時には春子樣急に沈んだ調子で例の獨身主義をたう〳〵と お論じなさつた事もありました貴女も私もあくびをかみころしてきいてゐましたのれ、あの春子樣今でも體操の先生して被居しやるでせうかしら、よく教場で小さな紙切へ未來の貴夫人なんて私に書いて およこしなさつたものですがれ、私なんだかあの方がお氣の毒に思ひま

す御自分一人で大勢の御妹さんや御弟さんの　お世話なさつてそれに病家だつて餘り豊かで被居らないやうですのに學校をお出なさつたばかりの時、御父樣が亡くなられたのでせうずゐ分お氣の毒ですわ私が米國へ來ましてから三度しか　おたより下さいません今ではどこに被居るか解りませんのよ、私の御友達で今迄續いて音信して下るのは貴女お一人きり、松枝樣も君子樣も武子樣もはじめ一年　位の　間　は度々御便り下さいましたけれど、其後はまつぱり御消息わかりせん、思へば貴女はよく八年の長い年月、御親切におたより下さいます私涙から感謝致します　御送りの女學世界いつでも面白くよみます、　五月號もようございましたのれ、私も御同樣に野菊樣と磯千鳥樣のお二人大好きですわ、さつぱりして被居しつて、　それに向上的の事を仰しやつて、潮風樣もよく御筆が達者で被居いますれ、嫌はれ式部つて云ふ御方ぐちな仰しやつたのれ、弱者〱って御病氣が全快なさつて、理想の御良人樣がお見つかりになつたら、さためし、吾れは強者ぞ〱と仰しやるでせうれ、　どうも失禮よけいな惡口云ひましたこと、　若子樣、私近頃口が惡くなつていけませんのよ、然しまあもすこし　惡口書かして頂戴、あの千代子樣の事よ、私内事樣きらひなの、いつでも戀とか憧憬とか、蜜語だとか、　時々歯がうきさうに思ひますのよ、そのくせ、あの人をチャームする御筆つきに、　つい〱つり込まれて、終り



まで讀んでしまいますのずゐ分にくらしい事ですれ、千代子樣はかない悲しい戀のけいけんがお有りなさるのでせう、よくあんなに書けます事れ。

　現代婦人評論　今度は音樂家ですれ、皆樣天才ですのれ、私多くの天才の御方は結婚なさらぬ方がよいと思ひますのよ、貴女の樣に夕ごはんの後に、ピアノひいて御良人樣におきかせになる樣な方はほんとに幸福です。

　晶子女史每々若い人々の爲めよく氣焰をはいて下さい　ますのれ然し私には皆が皆迄よい御説とは思はれませんのよ、小學校教育に就ての御意見は私も賛成ですわ、ほんとに今の讀本は漢字が少な過ぎますのれ、假名遣も早くしつかり定まるとようございますれ。

　老人達に對する御意見も至極御もつともですが、その老人達も刻一刻天國へなり、地獄へなり行きつゝあるのですから、少し無理だらうと思ひますわ、今の老人樣が皆居らなくなれば私共若い者がもつと自由に活動出來る樣になりますでせう、然しれ今若い者が老人になつた時は又その時代の若い人にやはりいろ〱云はれますでせう、科學は未だいくらでも進歩しますもの、思想だつて未だ進歩しますでせうと、私は思ひますのよ戀愛教育貴女どうお思ひなさつて、加納子爵の家庭談話會は結構ですが、女史の所謂戀愛教育は今の舊思想の人達の居る

國はなか〳〵此邊の事だらうと思ひますわ。私は女史の『ほるとがる、めきしこなどの動亂など外事として驚かぬ國』と申すのを新聞紙上で拜見致しましたが、これは日本が驚かないと云ふ意味なのでせうね、貴女はどう思召して？

　ほるとがるの事は餘り知りませんが、めきしこのあの革命の原因はこの米國が後からつゝいたのだと云ふではありませんか、米國は全米大陸を欲しいのでせう、いろ〳〵な惡い事をしますが今に痛い〳〵目にあひますでせう。

　日本はどこに革命があつたつて驚きはしないでせう、驚くわけはありませんもの、私思ひますのよ、今に此世界に非常に強大な、而して善良な或國が出て平和の使命をはたすだらうと、其時はすべての軍備をとり去つてしまつて、眞の文明心の太平を樂むやうになるのでせう、けれど十年や十五年ではむつかしいでせうね、今のやうに各國軍艦のこしらへつこをして居ては早く戰をしたいだけしてしまふとよいと思ひますわ。

　ほんとに貴女の有仰るとほり、日本の女子は感情が強いですね、一般に日本人は皆感情が理性よりもかつて居ります、ですから白人の進歩も及ばない鬱ばしい情が日本にはあります、白人種はたいていの人が理性が勝つて居て、日本人のやうにすぐものに感じて目に涙をたゝへる人は少ないやうです。女子でも日本人は他人に同情した場合など口數少なくて涙をすぐ目に



うかべますでせう、けれど米國の女子などは口先きでいろ〳〵な言葉をつかつて同情するやうな樣子しますけれど、なか〳〵涙はだしません、どうも世の中の事は一長一短で感情の強過ぎるのは時に盲目的になつて工合のわるいものですし理性の強いのはなんだか溫かみがなくて殊に女子に必要なやさしみがなくてギク〳〵して居るやうでいけません双方交ぜ合せたら丁度よいやうになりますでせうにね、色で云つたら赤と白でせうか赤と白と交ぜ合はせた、――少し赤の感情の方が多い――桃色は女子に適當だらうと私は思ひます。まあ繪具にたとへたつておこつてはいけませぬ。

　芳子樣におこられるとこはいですから もう理くつぽい事はやめませう。

　此手紙ごらんなさる頃は青葉影なつかしき夏のま盛りでせう、貴女は日にやけてこまつて被居るでせう、それとも昔のやうにおてんばはなさらないで、しとやかに日よけのあるおえん側におこしかけてやさしい御手にうちはもつて、うつとりと海でもながめて被居るでせうか、お寫眞頂戴なしばらく花のおすがた拜見致しませんもの。

　御庭は今いろ〳〵の花盛りでせうね、朝顏、撫子、けしの花白百合、コスモス、又はダリヤなど、とり〴〵にうつくしい事でせうね又野原も美しいでせうね、すゝきや、女郎花、きゝや

う、蓮など、いろ〳〵咲きみだれて居るでせう、あすなつかしき日本の夏よ。青々した稲田、ころ〳〵ころがつてる、とうなす畑すう〳〵つゝ立つて居るとうもろこしの畑も なつかしく思ひますのよ。

夕ぐれは近くの山から、森から、又は田畑から涼しい風をおくつて來て油蟬のあつくるしいのもやんですゞ蟲がやさしくなきだして螢がどこからか一つ二つとんで來たのを 蚊やり火たきながらじつと見て居ると私は極樂へでも 行つたやうな氣がしたものです。私は田舍の夏を愛します。東京の夏も なつかしいです生れ故鄕ですもの、朝はもやがぼうつと家々をぼかして居る頃から朝顔賣り、唐辛子賣、神まき賣、などが通りました金魚屋呼んで、和金、りゆうきん、などよく買つたものです、入谷の朝顔見に行くとて朝四時頃から起きて妹と 二人して大騷ぎした事もありました、よしずばりのびやうぶのかげで妹はよく手風琴をひいたものです、夜になつて人通りの多い表通りへゆくと切組燈籠を所々て見ました今でもやりますかしら涼み臺を表へ出して煙草盆持ち出し、線香花火をパチ〳〵やつた事もわすれますの又鎌倉邊りで地びきあみ見るのも 樂みでした魚のはねるのも、漁夫の子供が澤山集まつて來て桶やら、ざるやらにあみからこぼれる小魚を入れてる樣子 繪卷に書いたらよいと思ひましたっほんとに日本の夏は面白いですれ秋の風晶



では皆たのしい事ばかり殘つて居ります、いやな事は皆忘れて居りますなかしいのれ、或人が海外へ 出ると皆日本を理想化すると有仰いましたが私もさうなのかも知れませんわれ、けれど、どうしても日本はよい處ですわ世界中で一番よい國です早くかへつて見たいものですれ。

あゝもうおそくなります、時計は今九時半です、貴女のお目もおつかれでせうつまらぬ事ばかり申上げまして どうも失禮もつと〳〵申上げ度い事ありますけれど、こゝらで止めませう

サヨナラ

七月一日　　花子より

芳子様

うたかぬたかわかりませんが少々ばかり左に

あさまだき色とり〴〵にうつくしき
朝 顔 咲 か む 故 里 の 家
あふぎ見る天つみそらの新月の
か げ さ へ こ ひ し 故 鄕 の 夏
なつかしき西のふるさとさして行く
船 の 煙 も 見 え ず な り け り
やがてこむ大いなる日に吾が國は
世 界 の 主 と な る と 知 ら ず や



秋野にすだく蟲のさま〴〵

物集梧水

秋が來た

金風蕭殺として起り、白露地にあまねく、是れよりや、天には月いよ〳〵明かに、地には蟲聲水の如く流れんとする、一年中最も清涼な季節が來やうとしてゐる。

野邊に出でゝ見よ

盛夏日中一叢茂き藪の中で鳴いてゐる蟋蟀は、些か聲が寂れたやうだが、倘ほ夕陰にギイッチョ、ギイッチョと鳴いてゐる、螽斯はハタ〳〵と宛ら夢のやうに淡く西に東に飛んでゐる、夜るになれば、遠くの方から涼しい風に送られる、蜻蛚の聲がコロ〳〵〳〵と玉を轉がすやうに聞える、石や瓦の間では頻りに蟋蟀がツヾリサセ、ツヾリサセと鳴いてゐる、鈴蟲は秋草の根で、松蟲は秋草の葉末で、共に秋の清涼を賛美してゐる、眞暗に茂つた叢の中では轡蟲がガチャ〳〵ガチャと喧く鳴いてゐる、馬追蟲も負けずに涼しい聲でスウイッチョ、スウイッチョと歌つてゐる、嗚呼この美しい自然の音樂を聽いたなら、月下に奏するピアノ、ヴイオリンも、何のものかは、都會に住んでゐる紳士淑女は、屹度田舍の、賤が伏屋の侘住居を羨しく思ふだらう。

昔嵯峨野の秋

は何んなに風雅やかだつたらう、殿上人達が寮の御馬に跨つて、數多の童子を引具し、路々題を求めて和歌を詠みながら、嵯峨野の秋を訪づれ、やがて其處へ

來ると、童子を四方に放つて、さては松蟲さては、鈴蟲と、さま〲の秋の蟲を撰んで蟲籠に入れ、而して御所へ歸つて獻ると、程なく歌合が始まる、蟲籠の蟲を遣水の邊に放つ、而して徐ろに月の昇るのを待ちながら、やがて御宴が始まる、誠に風雅の至極は此に盡きてゐると云つても可い位である、この蟲撰に出かける方々は、孰れも藏人所の立派な人々であつたから尚更趣味津々たるものがあつたに違ひない。全體この蟲撰の始まつたのは何時頃であるかと云ふのに、他の御催しよりは稍々後れて、堀河天皇の嘉保年中であるとやら、無論宮中の年中行事には加つてゐなかつたけれど、毎年、秋には必ず行はせられてゐたに違ひない尚ほ加茂神社の社司に仰せつけて、毎年八月朔日には必ず美しい蟲籠に樣々の蟲を入れて奉らしめたのである、その蟲籠と云ふのは、高さ五寸許りの小さなものだけれど、其中には小さな草や苔を植ゑたり、籐の花の形した籠で飾つたりして、却々立派なものであるそれを拵へるのに、社司の妻や娘などが、大分骨を折つたやうである、抑や斯かる風雅やかなことは如何して起つたかと云ふにこれも支那を模倣したのである、元來

唐の玄宗皇帝

と云へば、飽くまで風雅な方で、毎年秋になると、宮中の美人等に命じて、競うて蟋蟀を捉へて小さな黄金作りの蟲籠へ入れさせ、其れを、夜るになると、枕邊に掛けて、その鳴く聲を聽きながら寢に就かせられたのが、抑や抑々の濫觴で、其れから我國へ傳はつて宮中にも行はれば、後世には民間にも行はれ、德川時代の元祿頃には、既う徐々蟲賣商人が荷を擔ひで、蟲を賣りあるくやうになつたのである、江戸職人歌合にも「秋の夜の哀れを月にながむれば擔へる蟲の音にぞ恨むる」と云ふのがある、今も緣日や夜店を漫歩きすると、蟲賣の大きな行燈が目に着く、大きな蟲籠、小さな蟲籠、船の形したのや、扇子の形したのゝ中で、頻りに野邊の草葉を戀しがつて鳴いてゐる、嘸ぞや昔

の玄宗皇帝が恨めしいだらう、扨て萬葉集の和歌を調べて見るのに、蟋蟀を歌つたのは澤山あるけれど、松蟲や鈴蟲を歌つたのは一首もない、思ふに、支那では古來偏へに蟋蟀の哀韵を愛して、更に松蟲鈴蟲の鳴く音を顧みなかつた其れを、其儘我國で模倣したものと見える。

夕月夜心も萎に白露の置くこの庭に蟋蟀鳴くも（萬葉集）　湯原王



庭草に村雨ふりて蟋蟀の鳴く聲きけば秋づきにけり（萬葉集）　詠人不知

松蟲と鈴蟲とが持囃され出したのは、恰度宇多天皇の頃である、凡そ秋蟲の名ぐらい混同し易いものはない今ではチンチロリンと鳴くのが松蟲リン／＼と鳴くのが鈴蟲であると、整然と決まつてゐるけれど、果して宇多天皇の頃も其通りであつたか如何かは覺束ない、

當時の歌人壬生忠岑は、松蟲は箏の音のやうである、鈴蟲は谷川の水の聲のやうであると云つてゐるが、唯し是れだけでは孰れが松蟲で、孰れが鈴蟲か、判然分からない。リン〳〵と鳴くのは松風の音のやうだから松蟲、チンチロリンと鳴くのは鈴を振るやうだから鈴蟲斯う整然と決まつたのは尙ほ百年許り以後の、一條天皇の頃からである。其後は久しい間、リン〳〵が松蟲チンチロリンが鈴蟲と決まつてゐたけれども、足利時代の末から戰國時代の世に及んで、連歌が頻り流行るやうになつてから、何時しか其名を取換へて、リンリンが鈴蟲、チンチロリンが松蟲となつて了つたのである。

紫式部は一番松蟲が好き

だと見えて、源氏物語の中に、『秋の蟲の聲孰れともなき中に松蟲なん秀れたる』と云つてゐる、但し鈴蟲に對しては、華やかで可愛らしいと云つて褒めてゐる無論此時分は、リン〳〵が松蟲で、チンチロリンが鈴蟲なことは云ふまでもない、當時、松蟲鈴蟲と云へば實に秋の蟲の兩大關で、和歌に詠まれ、日記に記され物語に書かれ、一通りならぬ持て方であつたが、緣語の關係上、松蟲は大概待つにかゝり、鈴蟲は大概ふるにかゝつてゐた、

秋の野に人まつ蟲の聲すなり我れかとゆきていざとぶらはん　　詠人不知

秋の野の露にぬれつゝ誰れ來とか人まつ蟲のこゝら鳴くらん　　紀貫之

年經ぬる秋にも飽かず鈴蟲のふりゆくまつに聲のまされば　　藤原公任

鈴蟲の聲ふりたつる秋の夜は哀れに物のなりまさる哉　　和泉式部

松蟲鈴蟲の名所は、當時能く調べられてゐたと見える、近畿地方では奈良の春日野が第一であり、關東では奧州宮城野の原が最も良い松蟲を產し、リン〳〵の聲を十五も重ねて鳴くさうである、斯く我國で持囃されてゐたの反して、支那では餘り詩にも賦せられてゐ

ない、唯だ茲に一つ面白いのがあるから記して見やう
これは王漁洋がチンチロリンを歌つた詩である。

稻熟田家雨又風、枝々龍爪出林紅、數聲淸響不知處、山中晩鴉黄葉中

次に蟋蟀のことを調べて見るのに、支那では上古から甚だ多く詩にも賦し、詩經などにも『十月蟋蟀入我牀下』と載つてゐるが、思ふに、これは今日の所謂竈馬のことだらうと考へられる
古人は等しく皆な蟋蟀と云つてゐるが、精しく區別すると、コロ〳〵〳〵と、玉を轉がすやうに鳴くのが蛼蜊、ツヾリサセロと鳴くのが普通の蟋蟀、リウ〳〵と蚯蚓のやうな聲で鳴くのが竈馬である。



蛼蜊は立秋の頃から鳴き出し、その聲の美しいことは、或は松蟲鈴蟲に讓らぬかも分らない、然るに昔から一向詩歌に詠せられないのは、早く鳴く音を收めて了ふのと、普通の蟋蟀に混同されて了ふ故であらう。

竈馬を一名裸蟋蟀とは能くも云ひ得たもの哉、些かは翅があるか知らぬが、打見たところ、恰度海老のやうな裸體の奴である、よく暗い濕氣た處に澤山ゐて人を見ると、矢鱈に跳びたがり、又洗椀の陰に來て。

飯の洗ひ流しを喫つてゐる、洵に哀れな奴だ、冬になると、裸體の故か、非常に寒がつて、牀下どころか、室の内まで上つて來る、芭蕉が吐いた「無慘やな兜の下のきり〴〵す」は必ず此の竈馬のことに相違ない、普通の蟋蟀は秋風がそよ〳〵吹き初める頃から鳴き出して、初冬の霜の降りる頃まで鳴いてゐる、漢詩に所謂ゆる寒蛩、和歌に所謂ゆる。

きり〴〵すは皆な蟋蟀

のことである、支那では上古から、蟋蟀が鳴き出すと、普段怠けてゐた婦人達は驚いて、急いで冬着の支度に取掛るので、一名促織、趨織など〻云ふ異名を命けられてゐる、我國でも古來蟋蟀の鳴くのをツヾリサセと云ふやうに聞いてゐたのは、支那の此傳說に據つたのである。

秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきり
ぎりす鳴く　　在原棟梁

秋更けぬ鳴け霜夜のきり〴〵すやゝ影寒し蓬生の
月　　太上天皇

蟋蟀の切々たる哀韵は、松蟲鈴蟲の其れに比べると餘程まさつてゐる、平安朝の歌人共は、幾干口の先で哀れを唱へても、元來が樂天的、嘆美的だから、松蟲鈴蟲を蟲籠に入れて其美しい聲に隨喜する趣味は解してゐても、眞成に蟋蟀の悲愴な趣味を解してゐないやうである、支那の詩聖、常に悲愴な調を以て勝つてゐた杜少陵は歌つて曰く。

促織甚微細、哀音何動人、草根吟不穩
床下夜相親、

試みに蟋蟀の一匹を捉へて蟲籠に盛り、簷下に掛けて見よ、風淸く、露冷かに、夜もすがら悲愴な音に鳴きながら、酸楚たる夢は枕上を回るであらう、此間の趣味、到底彼の螢や蛙の聲に嘆美した樂天的歌人輩之大人らの味ひ得ぬところである、斯く云へば蟋蟀は唯だ詩趣横溢のやうであるが、具さに其生活狀態を研究して見ると、却々以て怪しからない、第一

蟋蟀は女天下

である、雌は大きいが、雄は小さく、雌の強くて喧嘩好きなことゝ云つたら、些しでも氣に入らない雄はドシ／＼咋ひ殺して了ふ。故に支那では昔、恰度軍鷄の蹴合のやうに、蟋蟀を闘はせて金錢を賭ける遊戯が流行り、人々我れも我もと強さうな蟋蟀を捜すのに腐心したのであるが其れを試す方法は、雌の側に雄を持つてゆくのである、一度に雄二匹を咋ひ殺せば將軍と稱し、三匹を咋ひ殺せば大將軍と稱するのである、大將軍の資格なる蟋蟀は其の強いと云つたら非常なもので、愈々闘戯場に登れば威風堂々、一蹴して敵手を一尺許り遠くケシ飛ばして了ふさうである、斯かる大將軍になると、實に千金に値すると云はれてゐる、寔に莫迦なことだ併しこの闘戯の爲めに或は產を興すものあれば、或は產を破るものもあつて、張廷芳と云ふ富豪の如きは、到頭これが爲めに父祖傳來の資產を蕩盡して了ひ人々の笑草になつたとやら、いよ／＼莫迦の極である、蟋蟀の女天下などに比較べて。



蟋斯は溫順しく貞操

深い上に、一度に仔を產むこと九十九匹だから、直に子孫が蕃殖する、詩經にも螽斯の羽詵々、薨々、揖揖など〻云つてゐる、是れは其の如何にも澤山群がつて盛んな狀態を歌つたものである、一體この螽斯とは何であるかと云ふのに、其れは土螽である、俗に機織螽、精靈螽など〻云はれてゐる、秋の初め、荒れた田野などに出て見ると、其處此所に澤山飛んでゐる、その翅響がハタ〳〵と如何にも果敢なく夢のやう聞え、その翅の襞の色が或は赤く或は黃色く見えるので、能く小兒等が此螽を捉へて、絲に繫いでは飛ばせて遊んでゐる、支那の小說金瓶梅などにも、花柳社會の婦女達が此螽を飛ばして遊んでゐることが書いてある、この螽の後肢を捉へてゐると、一所懸命になつて機を織る樣子をするので、機織螽と云ひ、又舊曆の盂蘭盆の頃盛んに飛ぶので、精靈螽と呼ぶのだとやら この螽に交つて、圖抜けて顏の長く、兩方の眼が飛離れて着いてゐる一種の螽がある、

其名を蠜螽

と云ひ、俗に米搗螽と云つてゐる、蠜螽と云ふ譯は其顏の樣子が恰度神官の冠る立烏帽子に似てゐるので禰宜に擬へたのである、とやら、甚だ侮辱の意味を含んでゐる、この螽の兩肢を捉へてゐると、猶且機織螽のやうに頭をペコ〳〵下げるので、每時も意氣地無い者のお引合に出される、洵に氣の毒な次第ではあるが何の藝能も無いから已むを得ない、其段になると、同じ蝗の一族でありながら、莎鷄や轡蟲は、些しは藝能があるやうだ。

莎鷄は署月の頃

炎熱煆くが如き野原でギイッチョ・ギイッチョと鳴いてゐる其れであるが、唯だ藪に住むものとして殆んど顧みられず、一向和歌にも歌はれなかつたのを、德川時代になつて、蟲賣が蟲を賣りあるくやうになつてから、徐々俳人に吟じられるやうになつたのである。

莎鷄身を責られてぞ鳴きにけり　一茶

轡蟲の喧しさ

は、流石の清少納言も嫌つたと見えて、側で聽くのは否だと云つてゐる、これは何人も同感に相違ない、眞暗に茂つてゐる藪の中で、ガチヤ〳〵と鳴き立てられては、如何に涼しい秋の夜でも、身體から汗が出る思ひがする、併し轡蟲といふ名に依つて、昔から能く駒を引合に出して和歌に詠まれたものだ、

駒とめて籠の野邊を尋ぬればをぐらにすだく轡蟲かな
大江匡房

我がせこは駒にまかせて來にけりときゝにきかする轡蟲哉
和泉式部

機織蟲とは馬追蟲のことか或は莎鷄のことだとも云ひ、或は轡蟲のことだとも云ひ、諸說紛々としてゐるが何うも馬追蟲らしく思はれる、

秋來れば機織る蟲もあるなべに唐錦にも見ゆる野邊かな

此他機織蟲を詠んだ和歌は、實に數限りもない、して見れば必ず美い聲なのに違ひないことが想像される、秋の夜、スウイッチヨ、スウイッチヨとなく馬追蟲の聲は、松蟲、鈴蟲、蟋蟀などに比較べてをさ〳〵劣るとは思はれないにも拘らず、古來一向和歌に詠まれてゐないのが、是れ不思議と云へば不思議、私かに機織蟲のことでは無からうかと思はれる第一の理由、次に其聲が機織る音に似てゐるのが第二の理由である併し單だ機織る音に似てゐるだけなら、莎鷄や轡蟲の方が寧ろ餘程能く似てゐるのであるが、莎鷄や轡蟲では斷じて無い、先づ、莎鷄なら、盛夏酷暑の頃に鳴く筈なのに、機織蟲の和歌は孰も〳〵皆な秋の季節に詠まれてゐる、又枕草子を繙いて見れば、清少納言は轡蟲を嫌つてゐるのに拘らず、機織蟲を賞してゐる、是明かに別種の蟲であることを證するに足るのである斯く次第に推進めて考へて見れば古へ歌人が讃美した機織蟲は、秋の夜清しい聲で鳴く馬追蟲の他には、何にもなくなつて了ふ、是れは如何しても馬追蟲に相違ない。

何者の果てか、隨分優つたものである。

名流雅談（二）

△和歌と米百石

細川幽齋に宮川尼といふ姉があつて夙に賢婦人の譽があつた。義昭將軍が普請の料にもとて、幽齋は本國から澤山米を取り寄せたが、普請が了つて後ち其れが餘つたので宮川尼に、米百石遣はすから大津まで取りに寄越せと言つてやると、尼公の返事に

御普請の役にも立たぬこの尼が
　百の石をばいかで引くべき

とあつたので、幽齋は之を見て成程と感じて、わざわざ從者を遣つて此の米を送らせたといふ。

△悟つた辭世

寶暦年中に、豐後の國池泉寺の門前の砂上に、辭世の詩歌並に俳句を書きつけて永眠した女乞丐があつた。

漸出二非人界一、今日昇二上天一、捨二破蓑破笠一、曉夢寺門前

知りしらぬうき嬉しさの果はいま
　もとの裸のもとの身にして

蚊にいとひ犬にはくれるかばねかな

△大江山の歌

小式部の母和泉式部は夫、藤原保昌と共に丹波の國に赴き、小式部のみ獨り京に留つて居たが、或る歌合せの會のあつた時、小式部も亦其の中に加つた。其頃小式部の歌は母の添削を經るか或は代作だらうと云ふ取沙汰のあつたものと見えて、折しも中納言定頼が小式部の許へ來て、『如何です、丹波の使はまだ戻りませぬか、お待ち遠うでせう』と言つて戯れて立たうとすると、小式部は定頼卿の袖を捉へて、

大江山いくのゝ道の遠ければ
　まだふみも見ず天の橋立

と詠んだので、定頼卿は大に恥ぢて謝したといふが、これは小式部がまだ僅か十三歳の少女の時の事である。

△夫を改心せしむ

狂歌師朱樂菅江の妻は、才名のある女であつた。ある年の春、櫻の花の盛りの頃、菅江が遊里に遊んで幾日も宅へ歸らなかつたので、

よしやまたうちは野となれ山櫻
　ちらずばねにも歸らざらなん

と記して遣はすと菅江も流石に心が醒めたと見え匆々家に歸つた。

△愛情の板挾み

昔、攝津の國に蘆屋道満の娘といはれて居る女があつた、容姿も人にすぐれて、美しく心ばえも宜かつたので、言ひよる者も夥多あつた中に、殊に二人の男は同じやうに娘を想ひ、同じやうに情をこめて居た。そこで母は何方か一方へ身を寄せるやうにと勸めたが、娘は、二人の心が同じやうで、何れの情も深くて淺い方もなく、彼方立てれば此方が立たずといふ樣なはめに立つたので、いたく思ひわづらひ遂に此のいやしき身の爲めにいつ迄男子を爭はせやうとて

住みわびぬ我が身なげてん津の國の
生田の川は名のみなりけり

とうたうて、遂に、生田の川に身を投じて失せたといふ現代人には夢のやうな話である。

△引越の蕎麥代り

これは近頃の話である。郵便貯金の鼓吹者として名ある樫尾銀子が或處から下澁谷へ移轉した時、從來東京邊の風として其の引越の印として向ふ三軒兩隣りへ蕎麥を三つ位づゝ配るが例だが、女史は蕎麥三つ位あつたとて食べては一人の食量にも足らない、それよりは此の方法こそ相互の爲めであらうと、十錢のスタンプ押した郵便貯金の通帳を配り向ふ兩隣り近所へ訪ふて、お蕎麥の代りに此の通帳を差上げますから、古新聞、紙屑またビールの空瓶などをお拂ひの節は、二錢でも三錢でも此の通帳に貯金して下さいと申込んだので、近所の者は何處の田舎の婆さんかと孰れも呆氣に取られて居たといふ。

△世の中にいらぬもの

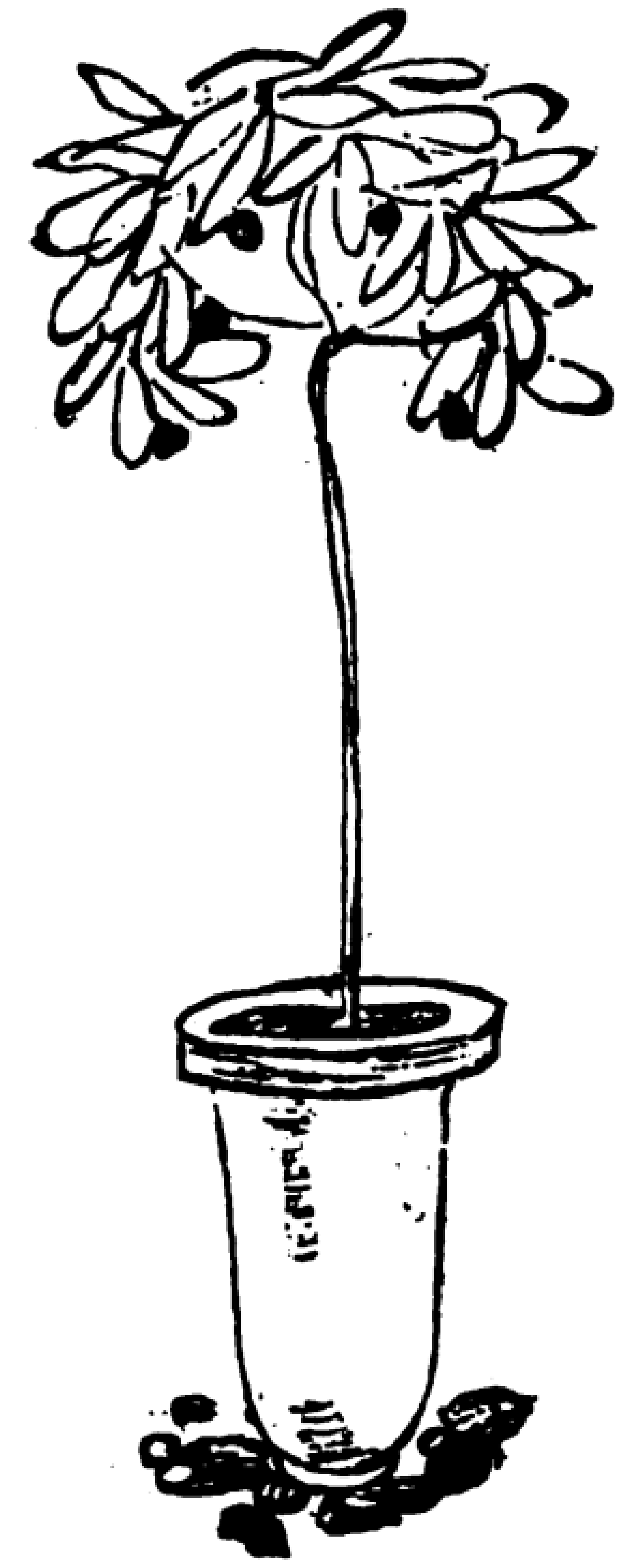
或る俳諧師の許へ客が來て、俳句の附合を始めたところ、その家の下婢は其の客の何時も長座して、夜を明すことさへあるを厭ふて、

世の中にいらぬは蚤と蠅蚊いし
とまつて食ふて人を寢かさず

と口吟んだので客は之を聞いて匆々に逃げ歸つたといふ。

△妻の奇智

荻生徂徠は柳澤侯に仕へて祿二百石を頂戴して居たが或日君侯が微行で徂徠の許へ立寄られたので、其の妻も君前に出て何彼と歡待申上げて居ると四方山の話の序に、君侯が徂徠も定めて不自由であらうと仰せられたので、妻はすかさず『いゝえ何う致しまして四百石を頂いて居ますれば、格別不自由も覺えません』と答へると侯は其の祿の二百石多いのに不審を懷かれたが、今更二百石與へて置いた筈だとも言ひ難いので、其の儘に濟されて其年より徂徠は昔に倍して四百石づゝ得る樣になつたといふ。女の奇智よく二百石を贏得たのである。



自慢話し

胡蝶

濃いと云ふより寧ろあくどい青葉の森へ、水無月の強い日光が射して、いかにも暑さうな、其日盛りを田の草とるとて、這ふ樣にして働いて居る百姓の事を思ふと海水浴の温泉のと遊び歩くのは勿體ない。

「天王寺梅田行、城東線は乘替へ」

ドヤ〱と乘込んだ一群の男女、白襟に紋付大方祝宴の出がけであらう。向ふ側の狹い處へ割込んだと思ふと、もう扇をパタ〱、高話をはじめる。

小肥りの眉を落した、五十格好の御寮人、黒いもので塗つた鍋かぶりの、鬢も髱も油でこてつけ、襟を思ひきり拔てしきりと衣紋を氣にしながら

「アンタ何ぞ上げまほか、」と折詰から料理の殘りみた樣なものを出し、まづ一口頰張り、あちこちの手へ廻す、お齒黑の口が馬鹿に大きく見える。向ふにかけたのは、二十七八の御新造風、深川鼠に秋草の片裾模樣の紋付に、白を重ね、絽縮緬の長襦袢がちら〱見える。髪は一糸亂れぬ油がため、丸髷は塗物の樣に光る。

其隣りは皆からをばはんと呼ばれる人が居る。古めかしい小紋の紋付に茶博多の帯締めて、薄い髪の毛を猿芝居のお初の樣に結てゐる。

「あんさんの卷いたはるおもじ、えろうえゝのでおますなあ、なんぼ取られまつたんや、」と帯を引張つて見る。

御新造はよう問うて下さつたと許り會心の笑をもらす。

「ようおまつか、之はなあ、三越で買うたのや、さか

い、上等だつせ、ソーヤ、何たら檬やいふてまつた、小母はんなんか、見た事おまへんやろ」

「なんぼ取られまつた、え、八十圓、えろうはづみはつたなあ、」と驚の目を見張る、「しつかり儲けて娘にも買うてやりまほか」と羨ましさうに撫でゝゐる。「あのちよこ／＼締めはる厚板なあ、あい譲つとくなはれなあ」、「さあなんぼやろ、直段次第で譲りまほか」と微笑む。

窓にもたれ、コックリ／＼居眠りをして居る色の黒い男、官費の白切符を自慢さうに帽子に挿でゐる。

御寮人は「チョット／＼、あれ取つておくれんか」、と揺する、白切符は愕然、涎を手の甲で、こすり乍ら突立つ、「あれ取つておくれやす、」と棚の包を解かせ、中から梨と林檎を出して剝かせる。

御寮人「サット／＼サイダー一つおくれんか、」と列車ボーイを呼ぶ、「サイダーは御座いませんがオレンチでは如何」「アカン／＼」と云つたは汽車の響で聞えぬと見え、オレンチの栓を抜きコップを添へて來た、「ナンヤオレンチ私サイダーと云ふたんに、オレンチならいりまへん」と見向きもせぬ。

高の知れた飲料一瓶どうでも善さゝうなもの、連れの内にも、氣の毒だから取つて置ふと云ふ人は一人も無い、こゝら物質的な大阪人の性格を遺憾なくあらはしてゐる。

寄せては返す白浪の、大濱公園、水族館の旗が浦風にヒラ／＼遠き沖合に淡路島が夢の樣。

「ヤア御機嫌さん、如何だす儲かりまつか、」

「ヤモウねつからあきまへんなあ、」

薩摩上布に雪駄履き、絽の一重帶に、細い金鎖をからませ、拜金宗の本山から出さうな、金の打出の槌から大判小判の溢れ出た、俗な扇子をパチ／＼させる。

「どうです、米の上り樣は、えらいこつちやすなあ、」

「眞實になあ、堂島はえゝ景氣だつせ、今日は十五萬石の取組が出來たよつて、赤飯でよばれました」と酒臭い息を吹く。

開闢以來の米の高價と、細民の困難をさも愉快さ

うに、語りあふのは堂島あたりうろつく米の蟲であらう。

もう濱寺へついた、向ふ側の電車のゝりばは、人で一ぱい、水泳服を手拭でしばつた、學生やはでな浴衣に海水帽かぶつた、婦人が垣をつくつて電車をまつてゐる。

窓外ばかり見て居たらお蝶さん〳〵と呼ぶ人がある。

ふり向て見るとオヤ松井の奥さん‥‥

「ハア今日は買物に、高島やと、十合へ參りまして、一汽車此處で涼みました」と大きな包を棚へ上げて被居る。



色白の丸顔つんもりと、格好のよいお鼻、小さい口元却々の美人だが、其薄い唇で、親類知己の間を攪亂させるとはさて〳〵おそろしい人。

長い事、東京に御出だとてお言葉はなまりのある東京辯だが、物質的な大阪人を兩親にお持ちに成つたゞけ、お裝りから、氣風萬端は、矢つ張り大阪式。

いつも、お振袖に大きな帶締めて、人形の樣に、裝り立た、孃樣をば衣裝自慢で、お連れに成るのに今日は珍らしく一人お孃樣はときくと

「えゝあの子も此頃は學校や、稽古事が忙しうて夫に

な、來月は舞臺へが有りますので、今日はその買物に參りました、まだ一向あきまへんのに、師匠が是非出してくれいと申ますよつて、え、夫れ何と云ふても〇で御座いませう、私方で肩入れせんと〇が寄りませんから、出演して欲しいとたつて頼まれまして」、と御自慢顔。

御新造と、小母はんは、芝居の噂で持切り京やがどうの、松島やがえゝのと、年にも恥ぢず、役者の品評に餘念ない。

例の御寮人は懐中から綺麗に切つた板昆布を出し、又してもクチャ〱と、絶えず口を動かす習慣の付てゐる人と見える、伊達帯一つで、戸棚へ首を突込で、口をモゴ〱させながら、口穢なく下女を叱る．家庭のさまも思はれて淺ましい。

松井の奥様は棚の包を下ろし、何か捜して彼在る、「お買物が澤山お出來になりまして」と水を向けると奥様は莞爾「えゝ一向よいものも調ひませんが、一寸見て頂きましよう」と包を開らく。

友染の花紅葉まあ綺麗目がさめる樣子供の無い自分も一寸欲しい樣な氣もする。

朝はお粥、跡の二度は鹽昆布のお茶漬食べても宜い衣服が着度く、夫も外見の一點張り．甲入れ帶とか、三尺許りほんの出る處だけ、縮緬付て　胴は金巾が付てゐる、東京人が見え無い處へ、金を掛るのと大きな違ひだ。

「之は高島やで買ましたの、飛切の友染一尺一圓十五錢ですよ、こちらは十合で買ましたの、私の繻絆にしようと思つて、反十六圓五十錢です」と、白地に芭蕉模樣の友染をお擴ろげに成る、之は扱で何圓何十錢、帶上げは割に高いもの、之でも何程．今日の買物丈けで烏渡百何十圓、帶と染物で三百圓では足が出ます、師匠の付届けからお客を仕舞たら、五百圓では上りますまい、眞實に女の子持つとお金が掛つて不堪りません、と自慢だか愚痴だか分らない。

大阪といふ處は、眞實に物質的だ、此間箕面の動物園へ行たが、虎やライオンの檻の掲示、實に振つてる

る。

「此猛獸は數千圓を出して買ふた直段の高いものですから、棒を投つたり、惡戯をしてはいけません。」

と書いてある。兒童を主とした動物園の掲示も、大阪はさすがである。それが東京だと

「おそろしい獸だから傍へ寄つては危ない」

と書く。

ユーゴーの母

ヴイクトル、ユーゴーの父ジョセフは有名な那翁黨の一人で、遂に其の信任を得て少將にまで陞進した人であるが、其の夫人は之に反して熱心なブルボン家黨なので、夫婦の間兎角睦じからず、常に風波が絶えなかつた。そして那翁の朝の倒るゝ頃から夫妻が別居したので、ユーゴー兄弟は母の保護を受くることになつた。其後母は殊にユーゴーに望を囑し、將來は必ず國家の爲に盡すであらうと、日夜寢らず誘掖したが、母はたまたま烈しい肺炎に冒されて病褥の人となり、ユーゴー兄弟に代る代るに看護される事になつた。當時恰もヘンリー四世の銅像を建設するに就て懸賞で詩を募つて居たが、其の期日も最早近々數日に迫つた時に、母は傍らに侍して看護に餘念のないユーゴーを顧みて『お前の應募する詩はもう送つたか』と問ふと、ユーゴーは『何彼と取紛れて居てまだ作りません』と答へた。母は之を聞いていたく失望の面地で『そんな事とは思はなかつた、わたしの病氣は運命だから仕方がないが、其の爲にお前が世に出る機會を逸がすのは殘念だ』といふと、ユーゴーは之を聞くや否や直ちに筆を執つて詩作に從ひ徹夜燈火の下にあつて一篇の長詩を草した。そして翌朝母の目の覺むるのを待つて之を母に見せると、母は吾が子の心力を盡したものを見て非常に喜んだ。かくて此の一篇は先づ慈母の涙にうるほされて送られ、審査の結果遂に優等の賞を得たといふ。これがユーゴーが世に知られた初めである。



人格小主觀

今關登世子

△吾人の思想感情は甚複雜なるのみならず、其の意志となり行爲となりて表はるゝ狀態も亦極めて多端なり、然れども是等の思想感情は個々分離して作用するものにあらず、互に相連絡して其の中に一定の秩序と統一とを保つものなり。人格とは人の人たる資格にして統一ある精神狀態を有し之を備ふることを自覺し、小心翼々として本務を守り、慈悲を施し、慾情を抑へ氣質を和らげ、正直な習慣を眞理の泉より汲み來りて人を信じ、人に信せらるゝやうになることこそ即ち人格の修養とはいふなり。

△品性とは個々の人が行爲に關して有する一定の習慣的傾向をいふ、通常人格の高下を稱するはその品性の價値につきていへるものなり、即ち品性の善良なるものを人格高しと云ひ、不良なるものを卑しと稱するなり。

△是故に人格の修養は主として品性の陶冶に俟たざるべからず、品性を陶冶せんとせば理想を定め、行爲の主義を以て日夜愼獨、反省、自賴の工夫をなすを要す。

△日本の女性は優しかるべし、然れども意氣地なきを許さず、日本の女性は强かるべし、然れども暴なるを許さず、優しくして强きはこれ日本女性の本領なり。

△對者を蹴らんとして立止まる馬は競走上到底最後の勝利を得る能はざるが如く他を排して進まんとする人も畢竟道の理に洩れざるべし。

△艱難は心身を試錬する砥石にして、神のあたへ玉ふ好機と思ひ、愼重、忍耐、勇氣を以て戰ふ考なかるべからず、病を知らぬ者は病人に同情なき如く、艱難にあはざる者は他人に同情を持つことうすくして、人

としての尊き德をかぐべし。故に艱難は天の恩惠と申すべし。

△滿足は自然の富なり自信は成功の秘訣、萬難は總て天父の命ずる所と信じ、奮勵、努力、正道、を辿つて自己の本分を盡すの覺悟なかるべからず。

△婦人は柔順にして愛嬌あるべし柔順ならぬは花に色なきが如く愛嬌なきは花に香なきが如し兩者は實に女の生命なり、柔順なれとて何も自覺なき人形のやうなれと云ふにあらず、愛嬌あれと申しても決して笑つて許り居れと云ふにあらず、笑ふべき時には大に笑ひ、泣くべき時には大に泣き、時にはプンプンと腹を立つべし、たゞこゝに注意すべきは直にケロリと機嫌をなほす事なり、度を過す事あるべからず。



御嶽昇仙峽

△自己の知りたる凡ての事を話す人は土藏に納めし凡ての物を抛りだすに同じ何事も知らず顏程床しき事はなし、如何程深くある學問も、表へひけらかしては其奧行もしれる心地して、片腹いたきものなり、學問にもせよ世事にもせよ、己れのよく知るを進んで人に見する勿れ、人が物珍らしやうかたる話は、たとへ自分がなに程深く知りぬきたる

事柄にもせよ、初めて聞きたる顔をなして感心してきくべし、忘れてもそんな事は早くより知つて居るわなどと口に出す事勿れ。

△健康と勇氣とを失はず何事をなすにも一種の趣味を以て即ち失望と悲しみの渦の中にまきこまるゝことなく常に心を其外に置き批評的に己を見つゝ、且はげまし、且なぐさめ進む事必要なり。

△人間は滿足と云ふ事は到底出來ぬ物なれば、先づ衣食住さばかりの不足なく、利の爲めに我意をまげねばならぬ樣の事なきは、富貴と云へばいはれると思ふ、若し巨萬の富を得なば、國の爲め人の爲めにつくさざるべからず。

△他人が如何に我を憎むも、我は他人の幸福を計るが君子の道なれど、其れは却々難き事なれば、表面だけにても平和に交らざるべからず。

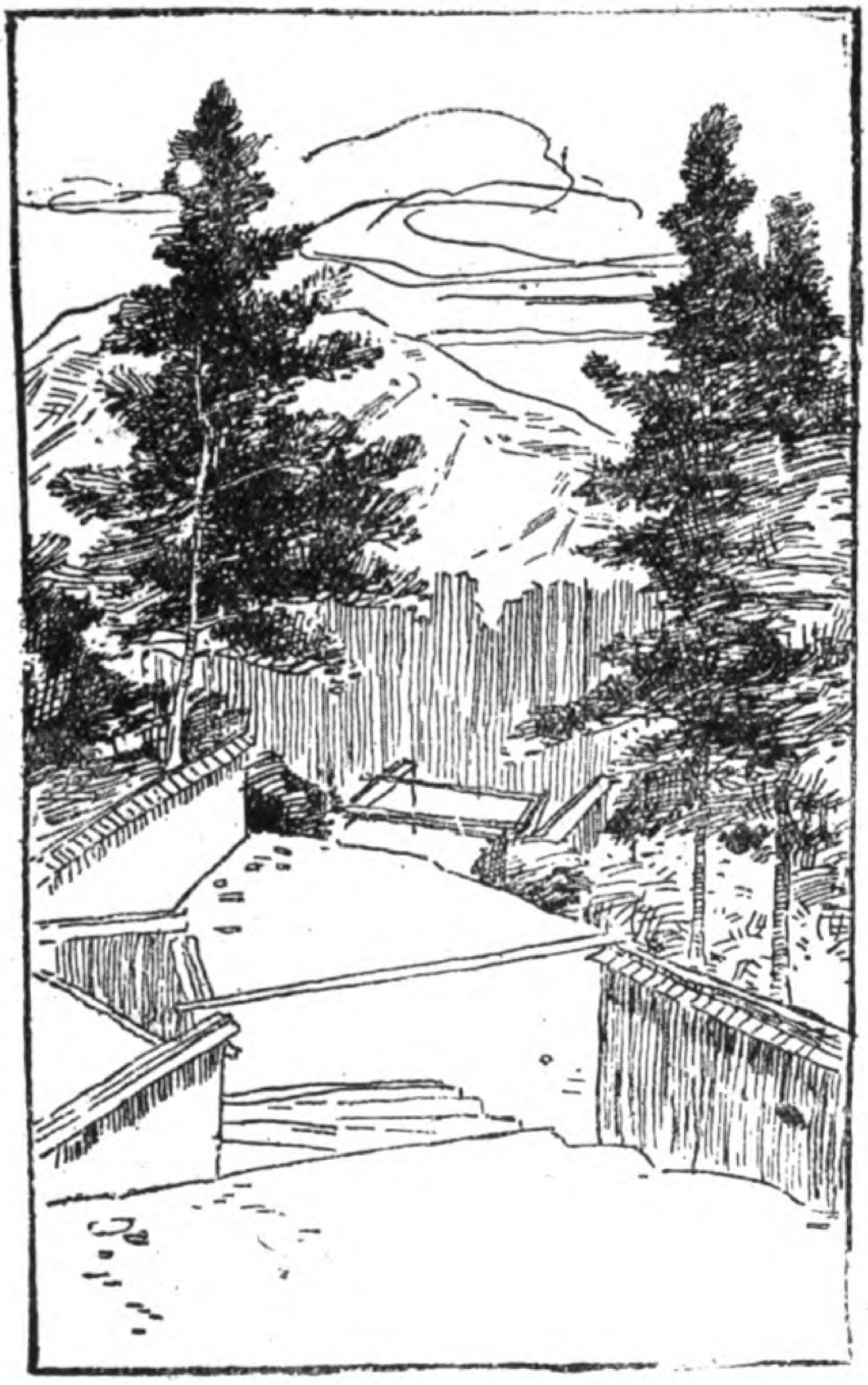
△交際術は人の心を讀みつ、讀まれつする、謂はば讀書の如きもの也、されど悉く書を信ずるは書なきに如かずとか、人と交るには、須く精透なる批判的眼識なかるべからず。

△衣食住に法外の費をなす者を贅澤と云ふ、然れども何が贅澤なりとて、時間を浪費する以上の贅澤あるべきや、生活を織る機の筬は一瞬も止まらず、無益有害に過したる時間は、醜く不揃ひなる糸となりて織り込まれ、人前に出せぬ一生の織物が出來上るべし、着物は錦の模樣美しく、立派なるものを着けながら、日々心の織れるものが、粗末千萬となりては、この上の恥はなかるべし、眼の衣裳で恥はかくすとも心の衣裳比べに恥かゝぬこそ眞に美裝せるものとはいふべけれ、西諺にも「結果」と「將來」とは神のものなり、たゞ「義務」と「今日」とは我がものなりとあり、現在の義務に忠實にして今日を我が物として有益に使はゞ、將來は心配するに及ばず、安んじて來るの結果を待つべしとの意ならん。

△時間の浪費者は惡魔の親友なり、よく時間を使ふものはその大敵なり、すべて慾張りはいかぬ事なれど、時間だけは慾張りがよし、一秒々々は時の金粉なり勿

體なしとも勿體なし時間の難有味の分らぬ中はまだ人間としては下等のものなり。

△自己も他人も等しく人格を有するものなれば、自己の人格が尊重するものは同時に他人の人格を尊重し、之を侵さす之を擁護すべきは自明の事なりとす、今若し假りに他人の人格を損するを許すべしとせば、他人が自己の人格を害する事も亦至當の事となす、一切の道德は破壞せらるべし、この故に人格は平等なりといふ觀念は他人に對する道德の根本なりと知るべし。



相模大山神社

△感情は人格の一要素なれば他人の人格を重んずるものは又その感情を重んぜざるべからず、冷笑。高慢、不親切　侮辱等は皆他人の感情を害ふことの大なるものなり、殊に注意すべきは吾人の言動が不用意の間に他人の惡感を惹き起すが如きことあるこれなり、此の如きはもと惡意あるにあらずといへども、自己の德を損じ、他人の感情を害したる責任は逭るべからず。

△吾人は他人の人格を害せざるに止まらず、進みては他の人格を高めしめむことをはからざるべからず、之

が爲に或は忠言を寄せて人の不德を改めしむるも可なり、善人を推薦して模範を世に示すも可なり、慈善をなして世に感化を及ぼすは最可なり、しかれどもこれをなさむには、先づ自餘の本務を全くせるものにあらずば決して行はるゝものにあらず。

△竹の風にうごかされ雪に倒さるゝも眞直なる姿を失はぬが如く、自己の人格を重んずるを自重と云ふ、吾人は自己の人格を重んじ苟くも他より之を害せられむとする時は之を守りて一歩も退くことあるべからず。又己が人格を維持せんが爲めには貴重なる生命財產も犧牲に供する場合あり、古より身を抛ちて國家社會の爲につくしゝ人の多くは、これ皆自己の人格を重んじて自己の理想主義を維持したる節操ある人なり。

頓智妙辯の貴婦人

獨逸の宰相ビスマークが、或る事件の爲めに墺都ウインナに赴き、或る集會の席で頓智妙辯で名高い某公爵令夫人に逢つて、御機嫌宜しきやと問ふと、夫人は、否甚だ惡しいと答へた。ビスマークはハツと思つて何か言はうとして躊躇てゐると、夫人は微笑しながら『當地の女は他國の使節が來られると、何の爲めに來られたかを知らない間は皆な心配しますので、妾が機嫌が甚だ惡ろいと申したのも、つまり貴下の來意をよく知らないからです』といつた。で、ビスマークは『其の樣に貴婦人達に心配させるのは誠に不本意ですから、心の底を打明けませう。自分は友人アンダラシー君(當時墺國の首相)に逢つて一の磁針を求めたいと思ふのです。此の針は太平と稱して、磁氣を以て歐洲全土の平和を一緒に吸集する力を以て居ります』といふと、公爵夫人もさるもの『貴下が墺國へ來られたのは、そんな譯ですか、そしてその磁針も亦北方を指すものでせう』と輕妙に當時の外交方針を諷刺した。地方鄰國の跋扈を抑へて歐洲全土の平和を計らうといふ考を持つて居るビスマークは、此の語を聞いて二の句が次げず、からからと大笑し談判は已に畢きたり、歸つて皇帝に復命せんと言つ別れたさうである。

名流雅談（三）

△老婢の鑑識

能役者に觀世權九郎といふのがあつた。鼓を習ふて千々に心を碎いてゐると、毎朝茶など給仕する老婢が、或日、『あなた樣はほんにお上達遊ばしました』といふので、權九郎は笑ひながら、『お前にそんな事が分るものか』と嘲けると、老婢は、『いゝえ御親父の新九郎樣の鼓を數年聞いて居りました時は、毎朝煮たぎる茶釜に一拍子毎にそれが響きましたがあなた樣のは是れまでそんな事はなかつたのに、こゝ四五日以前から一拍子毎に響いて聞えますから、さてはお上達遊ばしたと知りました』と答へたので、權九郎は始めて吾が藝の奥妙に達したことを知つたといふ。

△文字の使ひ方

蘇東坡の妹は幼少の頃から聞えた俊才であつた。或時東坡、山谷等が相會して「和風細柳、淡月梅花」の間に入れる一字を錬つて、斯うもしたら、あゝもしたらと、久しく呻吟して居たが、やがて東坡が先づ一字を唱へて、「和風搖細柳、淡月映梅花」といふと妹は笑つて、まだ面白くはないと言つた。で山谷が次に唱へて『和風舞細柳、淡月照梅花』と言ふと、妹は少しく可くなつたと言つた。あまりの批評なので、それぢやお前のは如何かと問ふと、彼女は『和風扶細柳、淡月失梅花』と唱へたので、兩人は掌を拍つて賞めたといふ。文字を學ぶ者にはよい手本である。

△危く破鏡を免る

豐後の國の片田舍に貧しく暮す夫婦があつた。或時妻は良人の機嫌を損じて離別を言ひ渡された。非常に悲しんで、さま〴〵に詫びたけれど何うしても聞入れられないので、泣く〳〵家を立出でようとして、

すれ〳〵の中に花咲く木賊かな

といふ一句を遺して去ると、良人は後で之を見て大に感じ、早速呼び戻して以前とかはつて睦しく暮したといふ。

△婦人の名工

長崎に龜女といふ香爐を作るを業として居る婦人があつた。女ながらも酒が好きで、貧乏も意に介せず、借金取りも首までは持つて行かないと高をくゝつて居るやうな、女としては一寸困りものであつたが、香爐の製作に從事する時は何物も眼中になかつた。ある時長崎奉行が其製作を命じたが、半年經つても出來なかつた。其の中奉行は交代の時期に近いたので、督促は矢のやうに來た、でやう〳〵約束の期日迄には出來たが、なか〳〵送らうとはしない。そして或日之を臺の上にのせて、磨ん

で煙草をふかしながらぢつと見詰めてゐたがやがてふと風致の氣に入らない所を見出すや忽ち大斧を振り上げて、こな微塵に打ち破はして了つた。婦人でこんなに名人肌の者は稀れであらう。

△うつむく百合の花

加賀の千代女が、或日某侯の召に應じて席上で書畫を描くことになつたので侯が席に出られた時に、千代女が平伏してゐると、『頭をあげて描くべし』との仰せに、千代女は畏まつて直ちに筆を取つて百合の花を畫きその上に

　うつむくはそのおきてなり百合の花

と題したので、侯をはじめ、近臣に至る迄、いたく其の奇才に驚いたとか。

△拾ひし命

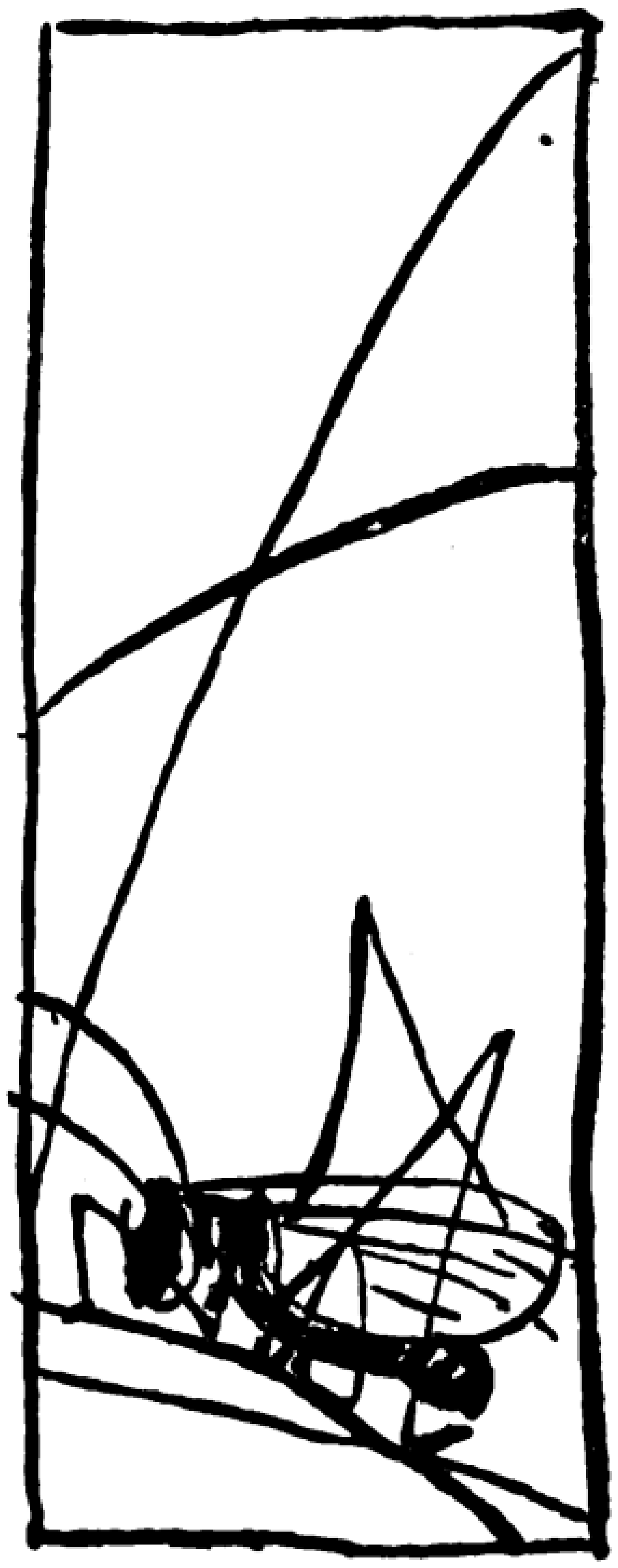
春秋庵永女は江戸の竹内某の娘で、讀み書きは勿論、絲竹の道を初め、茶道挿花等にも秀で、且つ盆畫、歌留の類に至る迄悉く究め、殊に和歌は天眞であつたといふが、二十歳の年に行儀見習の爲めに武家奉公に上つた。そして或る年の正月五日の節分の祝ひに、主人は自分の叔父などを招いて饗應したので、永女は其の席に侍して琴を彈するなどして興を添へたが、段々時刻も移つて夜おそくなると、叔父はいたく醉つて辭して歸り、主人は其の儘寢に就いた。そして翌朝になると叔父の方から使者を以て、昨夜酒宴の席に金十百兩の包みを忘れて歸つたから此者に渡されたしと言つて來たので、主人を初め皆の者が家内隈なく捜したが、更に見當らなかつた。主人は前夜給仕した女中共に訊くと、永女が前夜屏風の下で何か懷にしたといふことであつたから、主人は甚く怒つて永女を訊問したが、永女は一向知らぬことで、いくら訊かれても白狀のしやうがない。で此の女如何にも強情といふので、夕刻いよ／＼手打といふ事に定つて、今や刀を振り下さうとすると、叔父の許から急使者で、あれは當方の粗忽で、金子は籠の中にあつたと言つて來た。主人初め皆の者は大に驚き、殊に主人は永女に對して今朝來の苛責を許せとの諚を下した。が永女は却つて恐れ入つて狂歌一首、

　おちたるをひろはぬ御代にひろひしは
　　けふのいのちと節分の豆

△春の夜の夢

春の最中の、花を散らさぬ程に吹く風は心地よげに眠りを誘つてとのゐの外は大方夢路を辿る頃、二條の院には、まだ夜の大殿にも籠っせられず、仕へまつる男女など打寄つて物語などをして居る時、周防の内侍は、よりふす枕もがなとざれごとを言つた。その時大納言忠家卿は、つと簾の下から腕をさし入れて、これを枕にといふと、內侍は

　春の夜の夢ばかりなる手枕に
　　かひなくたゝん名こそをしけれ



皮肉な批評

しのぶ

百人百種、人の性格はいろ〱ですが、一寸惡ていな私の批評を申上ませうか、

そも〱押しなべて婦人にはバニチイと云ふものが強いですネ、現今の婦人をお覧なさいよ、兎角今日は帝國座を見物に、明日は三越に買物へと、一年中の大半を先づこんな事に費るゝのが多い樣です、それがお自慢の一つだから、從て流行先掛のお衣裳や、又はリングなどゝお供がいるから、自然之等にお熱心のかたむきがあるのは已を得ない次第ですからネ。

いつかも中佐令夫人とやらが、萬引して云々と諸新聞にありましたので、御存知でもありませうが、實に婦人の虚榮心程危險な且つ恐いものはありませんと思ひます。然し相當の教育でも受けた人には、どうしても出來ない筈ですが、假にも斯な事すると云ふのは、まあ一種の病的としか考へられませんネ。

人生の最も大切とせねばならん臺所には、我不關焉で、お鍋が一任仰せつかると云ふ樣になる、それで偶々お鍋が請求するタワシ一つでもなか〱おむつかしいですからネ。

たつたこないだ買つた樣だがもういけないのかえ、あれでもばかにはならんからネ。

とはちと當を得ない話ではありませんか、是では大切の臺所を預かつて居ると云ふお鍋の心痛もさこそとお察ししますよ。

こんな奥樣に限つてつまらんお話の樣ですけれども先づかうなのですよ。

食物のことをかれこれ云ふと人の品がさがるから、決して云ふものではないと常にお聞かせなさるゝものの、毎日のお惣菜のお世話ぶりと來たら、常にあんな事おつしやる、奥樣とは思はれん程、お心根のさもしいのはご親類の方を畜生に置きながらご自分方召し上る物を其の一人の畜生にはお分配にならぬのみか、お粗末の物ばかりでも食客だ、當然の樣におつしやると云ふではありませんか。

捨てる神あれば助ける神とやらで

お情深いお鍋どんが、お氣の毒と、時にお上と同じ物を附け樣ものなら、そら大變、俄かに雷さんのがみがみ今にもおつこちさう、

お前共がそんな取り計ひしないでも、していゝ事なら私がするからネ、

と云ふ有樣で皆恐縮な風です無論お鍋共の生くさものを頂くのは朔日か十五日で折にお客樣のお下り物頂戴するのが關の山、それでも我が兒は可愛いものがしてお鍋の頂く鹽鮭を、

母さん私にも頂戴よ、

とおねだりになると、

あれは毒ですよ、坊など頂くと直ぐに又あの病院よいゝ物變りに上げるからネ、

とはまあひどいではありませんか、

たとへ召使だからと云つても雇つて居る間は一家内ですものを、皆同樣に注意してやらなければ、お鍋の方でも内心面白からず物事萬事さじ加減するので、

家の女中はどうも蔭ひなたをしてネ誠に困りますよ、ほんとにあれらはいやしいものでして、どうしたらいゝか却々苦勞ですよ。

實に（天に唾すれば我が面に隕つ）の言に適中して居るではありませんか、

然しお家ではこんな風の奥樣もお外出の時にはいつも何かといろ〳〵のお買物があります。此の間も例のお買物を旦那樣のご前に取り擴げられて

此のおもちやいゝでしせう坊やのにネあの三越あ

たりの澤山陳列してあるものを一々見て行くと、もう〳〵しまひには、どれを買つていゝか私目がまつてしまひますよ、

とさもお得意らしいお心の程がわかりませんわネ平常餘りお小言のない旦那樣もけふは何だこんな高價なおもちや許りを買つて來たのか子供は直ぐにこはしてしまうにそんなつまらん事するよりか臺所道具の一つでも買つて來ればお鍋は大助りだ、



とはさすが旦那樣ですネ、其の時の奥樣の言ひ草がおやあんまりひどいわ坊やは喜びますのに、

まあお笑ひなさいきすなよ、まだこんな方がありますからお話しませう、

或る人が病氣全快祝のしるしかで、今にもはね出しさうな大鯛をいたません樣にと、大籠には青笹が一面にわざ〳〵使に持たせておこしになつたすると是を頂かれた奥樣のお動作を一寸申ませうか、それは呆れますよ。

おや〳〵こんな大變の物頂いてほんとに困つてしもうネ、私大嫌よ、折角下さる物ならこんなつまらん物よりか、風月の栗饅などの方がよつぽど氣がきいてるのにネ仕方がないからお鍋やお前是を魚新に持つて行つてネ、どうでもいゝからこしらへて貰つてお出で。

と如何迷惑相なお樣子でせう、是では餘り心ない話ですネ、いくら商賣柄の魚屋が手一つ濡さんでも、してくれるからと云つて、こんな情ない仕方にしておしまひなさるとは、どうもはやコンモンセンスのなさ過ぎるのも程がありますわ平素割烹がどうの、和洋料理がかうだのとお氣焔にも似合ないネ、人の手煩はす迄もない事、ご自分で甲斐々々しう臺所にお出馬になつて、庖丁片手にさしもの、大鯛も見事いろ〳〵にお腕をおふるでになつての食膳で、皆樣お揃ひにお賞味なすつたら、さぞや下されし方もご滿足におはすらんにとつい〳〵いらぬ氣をもんだ事もありましたよ。

それから今一つを可笑い沒常識の事と思ひますのはネ、女がご飯澤山頂いては下等社會の勞働者みた樣でみつともないと奥樣のお意見だそうで、お子樣からお鍋に至るまで、紅猪口位のにおきめになると云ふのですそれは

量に過るときは袋を裂く

と云ふ事がありますから過ぎるよりもいゝか知らないけれど、其變りいつも三時になるとそら餅菓子だアンコロだと間食を常例になさるので、胃活や健胃散の御用が伴ふと云ふあんばいで、時折はお醫者に走つたり看護婦會に電話を急いだり、それは大騒ぎですよ、だからいつも續いてお丈夫の方と申たら先づお酒召し上る旦那樣位のものでせうネ、それでも奥樣はお上品のお積りだからを可笑ぢやありませんか、氣の毒なのは朝から働き續きのお鍋どんです、

公然の食を恥ずる女は隱密に食ふ

と云ふ諺が思ひ出されますネ、

えゝあなたうそなど申上ますものか、皆根據あつて

のお話ですもの、ちつと皮肉過ぎて憚る所はお免なさい、今一つ、申し上げますからネ。

此間先生へ伺ひましたよ、實は久しくお目に懸らないので、思ひ立つた時參らないと又おつくうになりますので、急に參つた譯なのです、其の時何か手土產でもと考へましたけれどなまじかの物を持參しちや却つて如何かと一層手振りにきめたのです。所が參つて見るとあなたお子樣が出で入らしたら、奥樣はさあお挨拶はとおつしやつたので直ぐに兩手をついて

そばさん入つしやい

とニコ〳〵してらつしやるのですものゝまるで私はうつとりしましたよ、可愛らしいので。



一時見ない內もうこんなにおなり遊ばしたかと自分の年取るのには氣がつきませんからネ其時思ッたのです、あの人形でも持つて參つたらと後悔しました。

お孃さんは人形がおすき手毬がいゝですか

と此の小主人公をあひてにして居ますと傍に入らした奥樣がネ、

え丶此兒はよく皆樣からおもちやを頂きますよ昨日も〇〇さんが入らしてネ、お人形を頂きましたが、おもちや許り澤山はつまりませんでネ、此の間高木さんから水蜜桃一籠あちらの名產とか

つて送つて下さいましたが、皆大喜びでした、あの方はよくおこまぎのお附きになる方でしてネ
どうもはや全くお返事が出來ませんでしたよ、邪推かも知れないけれども、何だか名產のお催促かお土產のお請求かの樣思はれましてネ餘りいゝ氣持は致しませんでしたよ
よく世間で周旋事でも頼みに行つた時、其の家の奥樣に名產を贈れたら、再會の時には必ず持つて行くべしだ、
とかお話の樣に聞いてをりましたけれども、今日はしみじみ成程と思ひましてね、自分のまだ世間にうとく不馴れであつた事に今更驚きましたよ、うつかり私の樣な呑氣者は伺はれないものと思つて居りますホ、、ホ、
(犬は肉をもて打るれば吠えず)
てふ意味はこんな所にありはせぬかと思つてますが如何でせうネ。
あんまり皮肉な事のみおしやべり續けてもう御退屈でせう、今度は少し滑稽じみたお話でもして見ませうから、暫く我慢なして下さい。
四五日前私は下町に用たしに參りまして、其の歸るさですよ、日比谷公園に立寄つてあの噴水の傍のベンチに此の大兵肥滿の體をどうと下して雜誌見る〳〵一息して居りましたらネ、傍のベンチに大方此頃の休暇を利用して妻君同伴のご散步でせう旦那樣と申すのは口髭の濃い桐の薩摩下駄召されてパナマを手にせられたお額から下は隨分日に燒けて入らしやる所、さすが兵士あひての日々のお任務の程を察せらるゝのです、奥樣は廿七八位の一癖ありさうなお髮は立派に束髮に結はれ、お服裝の邊から察しても、全く立派な奥樣の樣でしたが、どうでせう奥樣がネ、あなたと旦那樣に寄りかゝつてのお話と云ふのが。
伊香保にあなた、いつ連れてくのよう、早く行かなくちやあ又休暇もなくなつてしまうだものネえと旦那樣のお膝を打つ樣手を上られた、旦那樣のお聲はよく聞き取れないが、奥樣へのお返事らしい、する

と又かん高いお聲で、いゝこと、ではきつとネ、明日に定めて頂戴よ、いゝこと、なら去年もとう／＼だめだつたでせう、いまいましいわ。

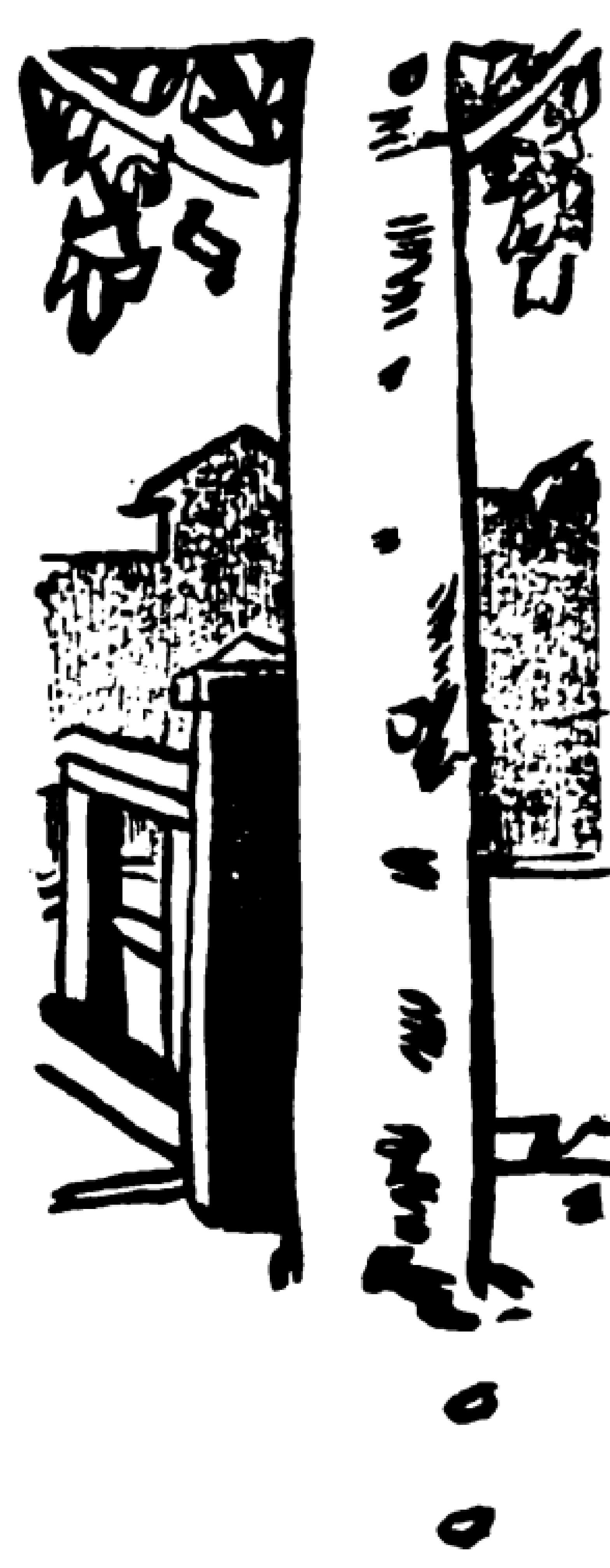
先づこんな對話なのでしたが場所柄もありませうにネ、神聖の夫婦のお話とは思ひませんです、之を聞いては何んぼ平氣な私でも一寸驚きました、よしや夫婦は懇意なものと云つて禮儀は持つて行かなければネ、苟も所夫とする人に向つての動作や言葉遣ひとしては餘りに不作法と思ひますよまるで藝者共のドルダンつかまへて物でもねだつて居るかの樣に思れましてネ。

△公私内外の別



と云ふぢやありませんが是では内外の別も何もあつたものではないと隨分可笑しさこらへで、居りましたが失禮ながら遂々他を見て笑ひましたけれどももう何ともお感じのないのか、それともわざとにか別にご存じもない樣でした此奥樣お育ちが所謂裏店育ちの御出身か又は下宿屋のネーサン上りかなと、私は價を附けて見ました、隨分物ずきでせう、若しも違つた時は甚ば失禮ですけれども、

夫の賢愚は妻を見て知れとさへ云ふ位の物ですから、妻なる者は大に注意を要すると思ひます。



移民地の婦人のさま〴〵

田駒不二子

移民地の婦人に就て話せと仰るのですが、「様々の人格」なか〳〵六ヶ敷問題ですね、が折角お尋ねになるのですから四五の奥様のお噂さをしてみませう、

○良妻として評判のあるのは、大谷夫人でせうね大谷家は南海道の或縣下での富豪で、御家柄で御座りますとか、現に御舎弟は日比谷の議場に一椅子を占めて居られます。

旦那様は大兵肥満で磊落な豪傑風の方です、浮世を七分三分に送るとでも云ふのでせうが、何でも思ふた事は誰れにでも遠慮などなしに……最も此方から、見て遠慮せなければならぬ方もないが……ドシ〳〵と言ふてお仕舞ひなさるのです、他の方が仰つたらば随分癪にも觸る様な事でも此方が仰ると角も立たず、毒々しくも聞えず、皆が默つて居ります根が竹を割つた様なお心だと承知して居るのと、一種人を敬服させる様な高潔な英雄肌があるからでせう、此太平洋沿岸の日本人で此方くらゐ立派な方は御座りますまい、

夫人はごく小柄な柔順な方で御座ります、旦那様が二言目には「馬鹿云へ」つてね氣の弱いものなら、氣絶して仕舞ひさうな大きなお聲でお通しになる性ですのに、そんな時は夫人は些とも逆らはず、ニコ〳〵と柳の枝に風が吹く様にシナ〳〵と受けて居られますとか、移民地の婦人には兎角非難される人の多い中に此夫人ばかりは評判がよろしう御座いますと云ふのは出入りの人にお心を付けられるのがお上手なばかりではありません、恐ろしい脂肪の多い旦那様のお足を毎

晩就床前に洗つてお上げなさるのが名高いのでも御座りません、之れは旦那樣のお腹が布袋樣の樣で躊躇む事が出來ぬからたと夫人が仰て居られます、夫れは他でもありません、この旦那樣は英雄何とかを好むと昔から相場のきまつて居りまする御多分に洩れず、お若い時から隨分此の方が御盛であつたものとやら、其の爲めに夫人は人知れず袖を濡された事が御座いますつて

此の病氣は日本男子には珍らしくない事で、高位高官に居られる方ほど御盛で御座いますが、妻の身として之れほどつらい事はありますまい、此の旦那樣もツイ數年前までも此のお道樂があつたので御座りますがそんな時は夫人は決して嫉妬がましき擧動はなさいませず、相手を自分の妹かの樣に可愛がつて、痒い處へ手の屆く樣なお世話をなさいましたとか、之れがなかなか普通の女に出來る事では御座りませんて、傍の人が同情せぬものは御座いませんでしたとか

サレバ了得の旦那樣もいつしか、夫人の優しい赤心に御感じなされて、夫れ以後はプッツリとお改めになりまして、近頃では立派な御邸宅をお持ちになつて「登美には若い時から隨分苦勞さしたつけナア」と仰ては、今度は旦那樣から夫人に痒い處へ手の屆く樣にお勞はりなさいますとか、之れも夫人の御心からで御座いますね。

まだ此の外に「登美の馬鹿奴」を前提として、お自惚になる一ツ話もお耳に入れたく御座いますが、あんまり委しくなりますと、天機を洩すの恐れありでね、此の位で御免かうむりませう前のお話だつてね、今は昔語りになすつて居られますから一寸お耳に入れましたのですからね、其おつもりで……。

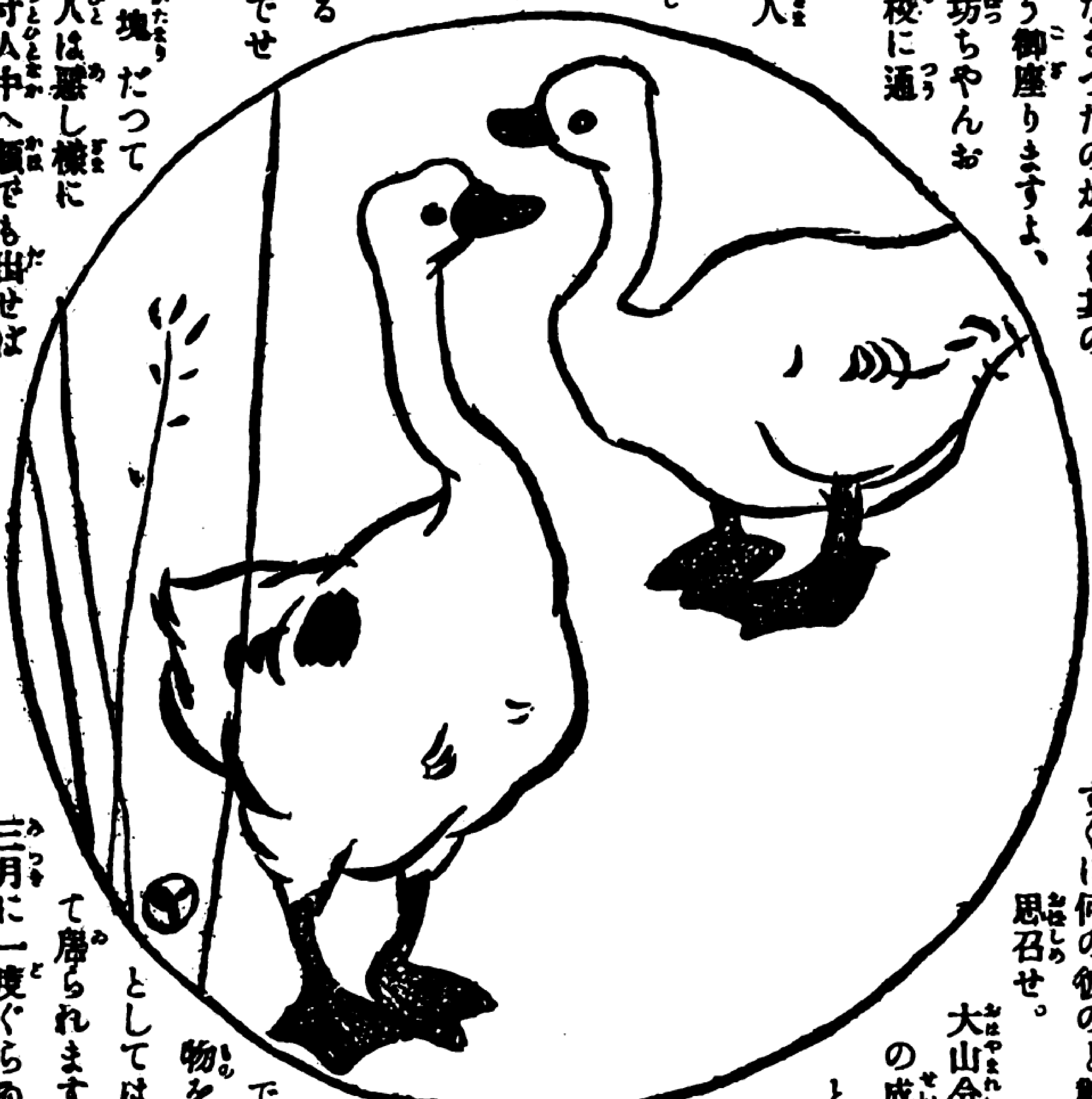
私も此の貞順な夫人に一度お目にかゝりたいとお慕ひ申て居ました處、一昨年の博覽會に御面會の機を得ましたよ、エヽ〳〵噂の通りお優しい婦人らしい中に蔑りがたいリンとした處がおありなさつて、夫れで御交際のお上手で御座いますのもお德の一ツで御座りませう、旦那樣とは從兄妹の間柄で、お幼い時から兄

さん兄さんとお呼びなさつたのが今も其の
儘でね、お可愛らしう御座りますよ、
御子樣は十五になる坊ちやんお
一人、只今は高等學校に通
學して居られます。

宅などは、あの夫人
の爪の垢でも飮で置
けつて始終私に申
ます。

○交際場裡の立役
として內外人に
知られて居られる
のは大山百合樣でせ
う。

御夫婦とも虛榮の塊だつて
人が申ますが、兎角人は惡し樣に
申たがりまして、一寸人中へ顏でも出せば



すぐに何の彼のと難癖をつけたがるものと
思召せ。

大山令夫人は○○學院を優等
の成績でお卒になつた才媛
とやら御用新聞に載て居
ましたつけ。

御立派な邸宅にお
二人の坊ちやんと、
孃さんとお三人の外
に下女一人、お出入
りには自動車があり
何一ッお心に叶はぬ
事は御座いませんとか
で、何時も最流行のお召
物を召して、在留の日本人
として立派なお暮しをなさつ
て居られます。

三月に一度ぐらゐお伺ひ致します每に新

らしいお召物でお迎へ被下ます、金縁のお眼鏡は實用か體裁か、掛けてお居での時もあり、ない時もあり四十のお歳には珍らしいほど若々しいお手には、私共の名も知らない美しいお石が光つて居ります、夫れはモーお頭の先きからお足の先きまで一分の隙もないお裝で御座います、

御交際がお廣いだけに、私共の樣なものが參りましても、些とも手持無沙汰な思はおさせになりませず伺ふ毎にピアノと蓄音器の新らしい譜が參りましたつてねお聞かせ被下ますの、時には新らしい筈のを二度伺ふ事も御ざいます、私なんかは音樂の趣味ありましても、まだ習ふ暇も御座いませんので自分には彈けませんが、米國へ參りましてからは耳だけこえましてね一寸上手下手だけは聞き分けられますからね。此の夫人のを伺ふて居りますと、立働きの多い私はいつも定まつた樣に頭が下りますの、でも幸な事には夫人は向ふの譜を睨みつめて居らつしやるので、終りのキーをピンとお叩きになると同時にクルッと椅子を此方へお廻りになる時分には折よく醒めますから、まだ一度も見付けられずにすんで居ります。

まあこんな御家庭ですから、嘸御幸福でせうと岡目には見えませうがね、上の坊ちやんは御自分の連れに次ぎのは先妻の御子、御嬢樣だけお兩人の中にお出來になつたとやら、夫人の前身にはなか〳〵込入つたお話も御座りますとやら、道理でね、四六時中眉宇に晴れやらぬ曇りが御座りますのですよ。

旦那樣ですか敎育は如何か委しくは存じませんが書棚には立派な金文字が澤山愚鈍嚇しに列べて御座います、何時も寄附金の時は筆頭で御座います、出せは出すでね、大山は野心があつて出すのだつて申す人も御座いますの、まあ褒貶交々で御座います。

只今は久し振りに故山に遊で居られます、帝國ホテルの幾室かを借切て、折々在留地を通過せられた貴顯紳士の晩餐を差上げたり、御見物の御案内などしたを御縁に、花々しい御交際に日も之れ足らずの有樣ですつて。

〇氏より育ちとか申まして人間は育ちが肝腎で御座りますね、サア金が出來たから之れから人格を造らうと焦心たつて、ソウ容易に造られるものではありません

山田樣の御夫婦は旦那樣が三十一二で、奥樣は四ツ下で入來しやるとか御兩方とも父親は軍人でおありなさるとか、仰せがなくともその邊と首肯かれます程お人柄の上に現はれて居ります。



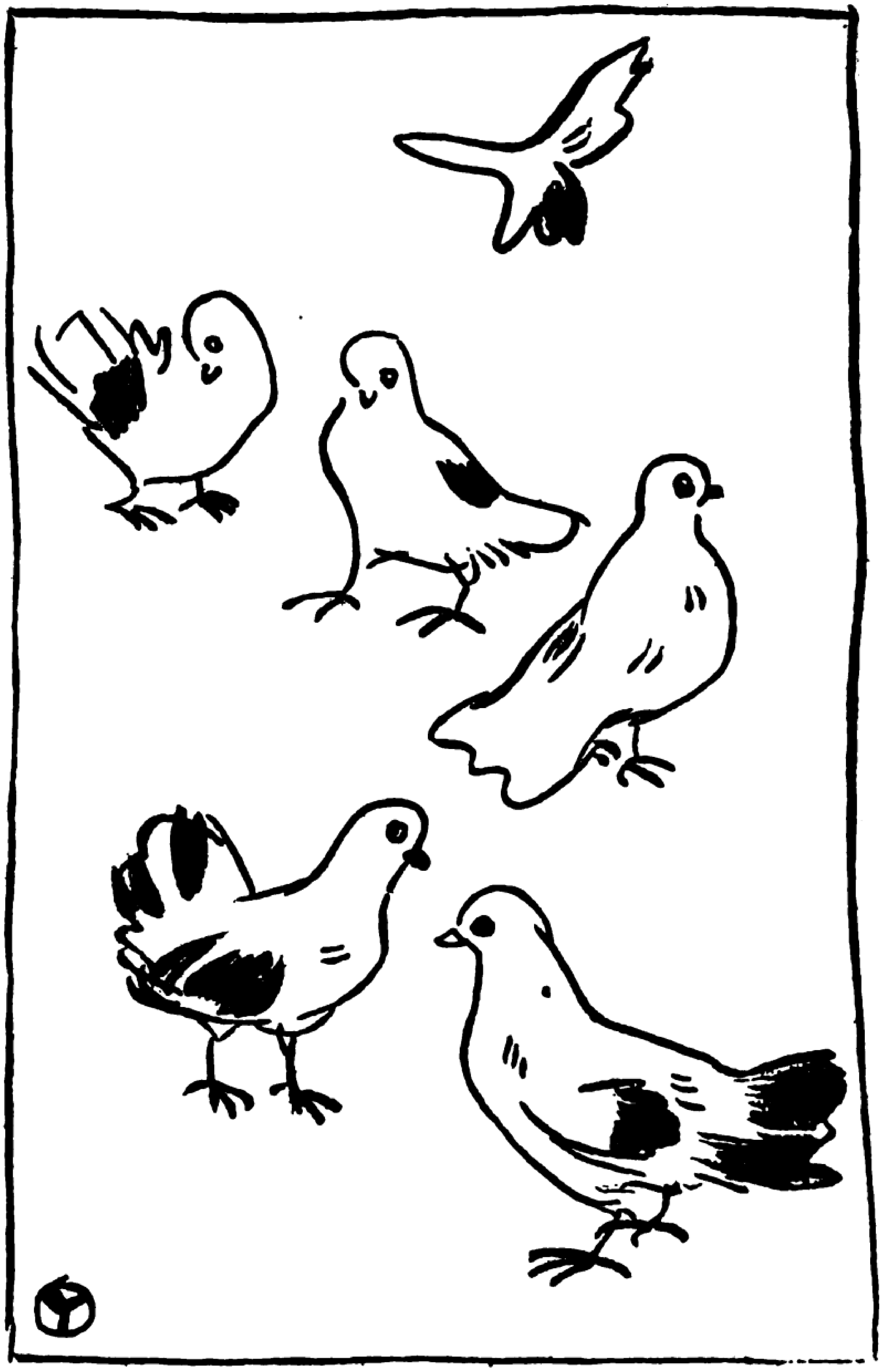
旦那樣の只今は成功者とは申上げられませんが、御不自由もなく暮して居られます大きな商店に働いて居られるのでありますが、普通働き人に有がちな、卑しい擧動はありません、軍人の息子はどこまでも眞面目で、氣位のあるのは嬉しう御座ります。

坊ちやんと孃さんのお二人は丸々とよく肥つてお母さんその儘な黒目勝ちなお眼、キユツと結んだ蕾の樣なお口、栴檀は双葉よりとやら、瓜の蔓には茄子はなりません、御近所にゴロ〳〵と遊で居る子供には

見られぬ品位が備つて居ります。
良い遊び友達の少ない此地では、御子様の御教育に餘程お骨が折れますとやら。
來る友を見よと申す事がありますから、子供の爲めにならぬ様な子供とは、日米人に拘らず遊ばしたくはないと思て、成たけ宅の廣庭で遊ばす様にして居ります、其の代りおいたはいくら致しましても放て御座ります、此間からも時々御近所の子なしの方が淋しいから貸して與れ、と仰ては連れてお行きになります惡い子供もないからと安心して宅は靜でよいなどゝ喜で居りますと、半日ぐらゐ遊ばせて頂て歸ると、五仙だの喧嘩だのつて覺えて歸りますのですよ、ダカラ大人の方にも迂かとはねえとお顔をしかめて居られました。

○田原兼子様
之れも矢張り令夫人と奉られて居る方です、旦那様はパリ〳〵の成功者、兼子様は或女學校の四年生とやらで御通學の初夏、御父様はフトした商業の御失敗が因で、御病氣にかゝられ、間もなく澤山な借財を遺してお逝きなさつたと云ふ御不幸續きから、學び盛りのお妹さん等もみなみな中途で廢學の上、夫れ〳〵自活の道をお立てになつたさうなが、丁度お年頃で居られた兼子様は、勸める人のあるに任せてお嫁きのなつた、其の旦那様と云ふは大の飲酒家で、多くも取らぬ月給は酒屋の拂ひにも足らない仕末、イツソ思ひ切つて離縁を貰はうかとお母様と御相談になつた事もあるとか、處が幸か不幸か旦那様は、心臓麻痺とやらで不意の御最後、矢張り多飲が因で御座りますつて。
夫れからはモウ〳〵結婚はイヤ〳〵、敎師になつて終身を送りたいと仰て、檢定試驗を受ける御準備をして居られた處へ、米國の成功者で數十萬弗の產のある人が、妻君に十歲の男の子を殘して死に別れ、今は後妻を搜しに歸朝して居ると云ふ話をお母様がお聞込になつたのでありました。

相手のお歳は五十三、兼子様は三十、お母様と御夫婦になれば丁度よい位の違ひですが、伯爵夫人孝子の方から考へればまだ若いぢやありませんか、と仰つたかどうかは存じませんが兎に角、お母様が大の御賛成でとう〳〵御結婚なさつたのが只今の旦那様、文字と云ふたら御自分の姓名だけも覚束ないほどの旦那様に、達



筆の兼子様はまたなく調法がられて居つしやいます。ヤガテ密月の旅かけて海道遙かに此地に渡つて参りますと、聞きしにまさる盛大なる御店の構へ多くの店員や門前市をなす如き出入りの人々から、「今度の奥様は教育があるのださうな―と尊敬せられ…實際此方のお出でになつた頃は此位の教育を受けたものも少なかつた

のです……旦那様からは一も金や、二も金やで大切にされます、一年後には花の様な嬢樣がお生れになる幸福な御家庭内での奥様の勢力は大したもので御座います。

然しね、此奥様あまり外出はお好みでないとか、御交際も廣くなさいませんから、御家の中の装飾なんか實に幼稚な事、附屬品なんぞは立派な品ばかり用ゐて居らつしやいます割に些とも映た立たない、支那人の家へ行た様だと仰る方が御座ります

夫れから、いつ伺つても婦人の讀むの様なものは、客室は勿論、御居室にも見た事は御座いません、何時かも私が「奥様は婦人雜誌で何を一番御愛讀になりますか」つて伺ひますと「私なんか雜誌處ですか、毎日來る邦字新聞すら讀だ事は御座いません、朝から晩まで下女と二人で二人の子供の事にかゝつて居ります、夫れに田原も、子供の敎育はお前に任せてあるのだから、外出などせずに田原の子供よと、大きくなつて人に笑はれぬ様にせよと申ます」ですつて、子供があればないものよりは一層に讀書もせねばならず、外出もし交際もして見聞を大きくして、子供の敎育に備へる必要があるのぢやありますまいか、與謝野晶子様の子供の爲めに併せて親自身をも敎育した結果になつて居るのです、之れは却て子供に感謝せねばなりませんから云ふ立派な意見を聞かせて上げとう御座います、

先年博覧會のありました時も、モー後一ケ月で閉會すると云ふ頃でした私は、奥様は博覧會へ幾度お出かけになりました」つて聞て見たのですよ、スルト「此頃はツイ暑くなりましたし、夫れに子供でも連れて出ますと、却て苦しみに行く様なもので、お金を使ふて苦しみに行くんではつまりません、私は齒痒くてなりませんでしたから「奥様なんかお結構ぢやありませんか、御嬢様と仰ても襁褓のお世話が要るぢや御座りませんし、誰方かお伴を連れておいでになればよろしいのですもの……兎に角もせひ一二度は見物なさいませ、色々參考になる物や、敎育になります事が數限りも御座りません、私なんかはモウ四度參りました

が、まだすつかり見物は出來ませんから、終りまでに殘らず見たいと思てます」と云つてやりましたの「モウ四度もお出でになりましたつて、お子樣のない方はお氣樂ですねえ」とさもお轉婆な女がと云ふお顔をして居られますのが、此方には可笑てたまりませんでした。

○良人の性質、趣味には善かれ、惡かれ同化するのが婦人の美德とほめてよいならば、松波米子樣が第一でせう、

此の方は私と同船で十六日の旅を致しましたもの、横濱を出て一日二日と經つうちに、ツイ徒れ〲に話しかけては女同志のいつしかお心易くなつて、果ては身の上話しなど眠られぬ夜を甲板の上で更かしたものでした。



米子樣は或る軍港地の縣立女學校を卒てからはお母樣がないものですから、二人の兄樣二人とも海軍士官の、家事の世話をして居られました、卒業後五年の内に兄樣は夫れ夫れ奥樣をお迎へになつて、暖かい家庭の人となられました、ソウなると米子樣は邪魔にはなりませずとも、小姑と云ふ名は免かれませんです、早く良緣を求めてと、兄等が心配して與れましたが私には之れならばと心動かされる樣な處がありませんで、イッソ單獨で米國へ渡米したいと思つたが

只だ一人の妹を米國の様な遠い國へやつては草葉の蔭の御兩親にすまぬからと。どうしても許されませず色々と思案に日を暮して居る内に、米國て成功者とまでは行かぬが、或るカレージを卒業して只今は都會で手廣く商業を營む樣になつたので是非内助者が要るから、敎育のある相當な人格のあるものを連れて來て呉れよと、頼まれたのが其の方の親友で今度迎妻の爲めに歸國して居る人、自分はモウ妻が出來たが、貴孃は僕の友人の爲めに行てやつては下さるまいかと、再三の交渉、始めの内は兄は相變らず。御兩親へ對して濟まぬと仰て望んで居りませんでしたが、私が行てもよいと云ふ擧動にトウ〱不承不承にソンナラと云ふ事になつて、只今其お友達夫婦と一緒に渡米する處であるとのお話し。

私も米子樣のお話には少なからず釣込まれました、只の寫眞一枚と、仲人の言葉や鄕里の聞合せぐらゐを便りに遥々御渡米になつて、よく行けばどうだらうか惡う行けばかうだらうかなど獨り考へて上げた事もありました、丁度米子樣の未見の良人の住で居る處と、私の落着かうとする處と同地なので、之れを御緣に今後とも御交際し、お互に便り少ない旅の空で力草になりませうねと、船でお別れいたしました。

三日してから私はまた諸々見物中の一日、米子樣の御住居の番屋敷へお訪ね致しますと、船で毎日顔見合はせて居た時の樣な快活な擧動の米子樣ではなしに何となく不安な色がお顔に見えて居ります、御主人にも紹介せられてよく拜見しますと、色の黒い眼の光の卑い、勞働者風の方で、私は一種云い知れぬ不安に打たれたのでした、委しいお話を伺ふにも御主人が付き切りではならず、暫く航海中のお話などしてお別れしました、が私は米子樣の憧憬して居らした事と現實とが如何にも反對な結果を來したかの樣に思て胸を痛めて居りました、

何時か御主人の居ない時に行て見たいと思いながら一週間ほど經ましたある晩ヒヨックリと、私の泊て居る室へ來て下さいました、エ、お一人でお風呂へ行く

道とか仰てね……二人はモウ古い〳〵お友達かの樣に、懐かしさうに手を握り合ひました。

私が何よりも早く聞きたいと思ふてる事は、米子樣も私に何よりも早く聞て欲しかつたのです。

良人と云ふのは米國の學校を卒たなんとは眞赤な僞實は或る專門學校の臺處に暫く働いて居たのでして、日本の敎育もない、ほんの田舍者で商業だなんて小さい食料品屋ぢやありませんか、夫れも自分一人の店でなしに、ソラね私と一緒に來たあの人と共同なんですよ、そんな小さい店なんですもの利益だつて知れてるぢやありませんか、然し此の方は私も共稼ぎで仕上げる樣と云ふ決心で來たのですからよいとして、第一困るのは人間が野卑なんですよ、今はヤット十日ばかり經た處ですからお互に愼で居ますからまだ〳〵よいでせうが、之れから先きどうなるでせうね……つて涙ぐんで居られましたが、軈てまた思ひ直した樣に、私も折角來たのですから、出來るだけ折合ひのつく樣に心掛けますと……斯うなんです。

夫れからすぐ私は或る牧師の家に勉強かたがた家事の見習に行く事になり、同じ市街に居ても電車の力を借らねばならぬとなると、ツイお尋ねも出來ませんから其の後は手紙で往復する樣にして居ました。

丁度上陸してから五ケ月目に、商法も面白く行かないので、今度は百姓をするとて、お店は人に讓つて、市から三十哩ほど離れた處の、俗に日本村と云ふほどの日本人が澤山農業をして居る或村へお移りになりました、其の後私の處へ屆きますお手紙は、何時も〳〵呪はれたる寫眞結婚よと、良人の事に就て面白くないと云ふ事のみ書てあります。

「良人と私は趣味の合はぬも道理、良人は百姓の子で然も敎育もない者、私はまあ敎育は申ませんが、軍人の家庭に人となつたもの、人格に於て大變な相違があらうぢやありませんか、夫れで何時も趣味の相違から意見の衝突を致します」つて、私もこんな手紙を受たりしますと夫婦の關係なんて存じませんでしたが年役に色々と、今から考へれば机の前の議論めいたお諭し

も致しました、縁あつて夫よ妻よと神の前に誓つた以上、別れたいのどうのと其様な事ばかり考へず、こゝは一ッ良人の趣味に同化された様に見せて居て、最後に勝利を得る方法を講じるのは、即ち眞の教育あるものゝ價値ある處ではありますまいかと書き送つた事もありました。

其後三月ほど一回のお便りもありませんでしたから私からお尋ね致しますと、お返事は「モウ何と踠いても致し方がありません、此の頃は長外套を着ねば外出の出來ぬ身體となりましかダカラ貴姉のお諭しの最後の勝利を得る覺悟を致しました云々。

私はア、神樣は必要な？　處へ鎹をお打ちになるものと感心致しました。

五年間田舍と街とに離れて居て逢ふ機會も御座りませんでしたが、半歳ほど前に第二の子供か産れたとのおはがきが屆きましたから、其の内に一度日曜に出かけますと、お知らせして置いて、ツイ十日ほど前に良人と共に初めてお訪ね致しますと、お宅の表に着く前に窓硝子からお見つけなさつたものでせう、一町ほど走つて來て下さいましたが、私は初めは、誰方が何の爲めに走つて來るのかと思たくらゐ、五年前○○丸の甲板で渡米したらば……と勇みに勇んで居られた、熱い血の涌て居た米子様とは誰れが思はうぞ。

「百姓は之でなければなりませぬ」と仰て男子の着るチヨッキの古いの……私共で、之れは古いからと云つて救世軍なんかにやつて仕舞ふ様なちやありません、モット／＼古いのです……を着込んで、踵の擦滅したボタンの三ッ四ッも落ちた靴を穿いて、「まあ今ふお出になる事が分つて居れば、一張羅でも着て置くのでしたのに……ずゐ分變りましたでせう」と笑て、ソシテ「貴姉は些ともお年を取て居られませんね」つて田舍者が都會の人を見る樣に私の帽子から靴まで、珍らしさうに見て居られました。

お子様二人も色の黒い汚れた風はして居ましたが、お顏があんまりお父様に似て居ませんだけ、私の眼には嬉しく御座いました。

庭になつた櫻の果物と花あられなど出して下さいましたが、田舍には名物の蠅がまつくろにお皿の上にかぶさるのですもの、どうして頂く氣にはなれません、「小母さんにお喰りなさいと仰れ、ツシテ花子さんも只食れ」つて米子さんが大層子供に綺麗な言葉で」仰ると、四歳の花子さんが。

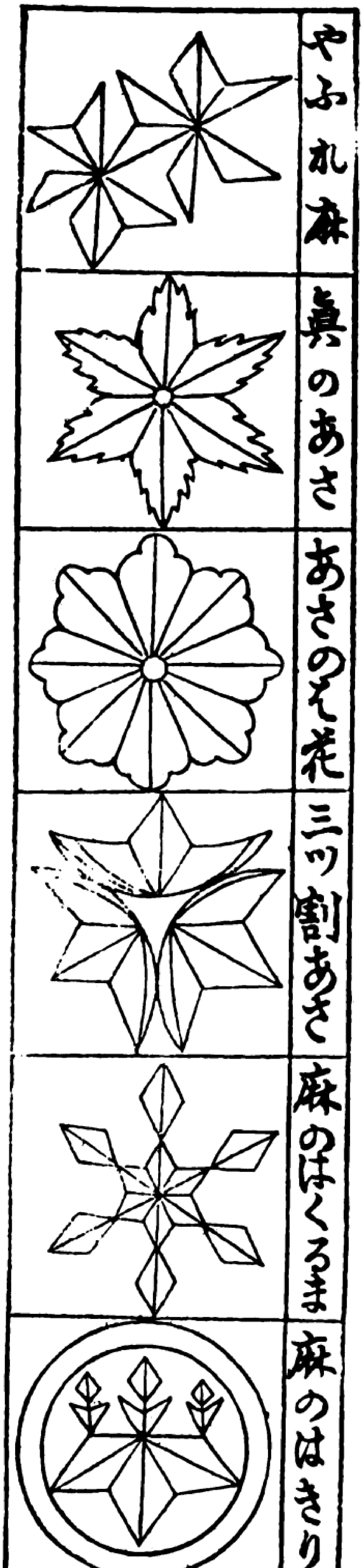
「小母さん喰べ……」

つて可愛氣のない聲で仰ります、之れが地が晴れに出る、と申すのでせうが、米子さんお一人が如何にお骨折られても、お父樣始め、出入りの人の爲めに打壊されるのであらうか、夫れでも二人の子供の愛に溺れて良人に同化してお仕舞ひなさつたのか、最後の勝利も覺束ないものでした。

夕方まで遊ばして貰ふつもりで、宅とも云い〳〵出かけたのでしたが、蠅の澤山なのと、子供の言葉使ひや擧動を見て、ゾツト致しまして是非に夕飯だけ喰て……と追かける樣に仰て下さるほど、磯千鳥の君ならねど、胸つぶるゝ思ひして逃げる樣にして歸りました。

まあ私とした事が烏許がましくも人樣の人格なんかお噂致しましてね。然しまた私の事は人樣がお噂さになりませうから、お互樣ですよオホヽヽヽまあおよろしいぢやありませんか、只今氷レモンポンチでも拵へますから、どうか御ゆつくり遊ばして

麻の葉意匠



奇警な諺（二）

△氣狂の眞似をして餅の上に倒れる。
づるい者を形容せるなり。

△鯉が躍れば目高も躍る。意明かなり。

△東風に當る荻。附和雷同の形容。

△蚯蚓も蹈めば體を動かす。
一寸の蟲にも五分の魂といふと同じ。

△大瓶の中の素燒の皿鉢。
大瓶が動けば中の皿鉢は破るべし。即ち夫婦喧嘩は子供に祟るなどの意を含む。

△口にくつ附いた飯粒。
一度口を動かせば直ちに之を口に入れ得るわけにて、一擧手一投足の勞で仕事を爲し得る時などに言ふ。

△堅い地に水溜る。勤儉なる者は富むの意

△猫の頭の鈴。無用の長物をいふ。

△ふとる南瓜に釘を刺す。



無情殘酷なる事の形容。

△うまく行かないのは先祖のため
其の半面に、成功したのは自分の爲めといふ意味を含ませて、人の勝手なものなる事を諷したるもの。

△負つた兒を忘れて隣り近處を聞いて行く
阿呆の骨頂ならずや。

△蚊を見て刀を拔く。
餘りに大袈裟なるをいふ。

△上れない木は仰ぎ見ることもすな。
出來ない慾心を起すなといふなり。

△急いで食ふ飯は咽喉に閊へる。
速成の用ゆるに足らざる事をいひたるなり。

△走る馬も鞭を加へよ。
順境に在りても油斷すなといふなり。

△錢は諸葛亮。
錢を古今第一の才人に較べたる所面白し。

△口が正直過ぎる家は人が重んせず。
名士に不得要領を構ふる人の多きは此の爲めならん。

△水に水を混ぜ、酒に酒を交せるが如し。

よく和するをいひたるもの。

△十本の指は何れを噛んでも痛し。
子供澤山の親の心中を形容せるなり。

△あべこべに紅。
自分が言ひ出さんと思ひし攻撃の語を反對に相手より言ひ出されたとの意。

△自分の娘は美しい。
なべての親の慾目なり。

△空手で來て空手で歸へる。
是れ人間の本分なり何を苦んで死後に萬金を蓄へんやと附け加へて見れば味ひあり。

△尾を振る犬は後に噛む。
人情の頼み難きを慨せるなり。

△遊んで居る口に念佛。
世の人多く然るが如し。

△松樹を培てゝ亭子を造らんとす。
『かやの實を植ゑて碁盤の四方柾』と同意にて、計畫の餘りに遠き未來にかゝるをいふ。

△文字を識るは患を増すなり。







意明かなり。

△他人の大病は自身の頭痛にも如かず。

△愚者は多言なり。
いづれも意明かなり。

△千金で家を買つて八百金で隣に賣る。
愚を笑へるなり。

△人の口を塞ぐは川を塞ぐより難し。
意明かなり。

△食はれぬ茸は三月から生える。
大器晩成の反對の意味。

△瓶既に破れたり。
最早詮方なしとの意。

△沈默は無識を兎る。

△道を畏るゝものは虎に逢ふ。
二つとも意明かなり。

△晝出るお化け。
恐るゝに足らざるを譬へていふ。

△中庭に鶏が歩く如し。
女が美の誇を現はして歩くを形容せるなり。

△月は足なくして歩み、風は手なくして葉を摘む。
意自から明かなり。
△道傍に家を建てんとすれば三年經つても出來ず。
通りがゝりの人々が彼是と批評して幾度も直さしむるゆゑ。
△丈夫の一言は千年改まらず。
意明かなり。
△我が毛を拔いて我が孔に刺す。
一毛も人に與ふる事を惜しむ吝嗇漢の形容なり。
△姑を怨みて狗を打つ。
嫁が初めての事に鬱憤を遣るなり。
△父は子が己より勝るといへば喜び、兄は弟が己より勝るといへば怒る。
兄弟は緣遠かなるも親子の親しきに及ばずとなり。
△折腰の虎。
虎も腰折れては猫に劣る人間にもかゝる者多し。
△死兒を負ふて來往す。
憐むべく又笑ふべし。



△放蕩息子の發心は三日。
△大家は傾いても三年支ふ。
いづれも意明かなり。
△嫌な子供は第一番にあやしてやる。
いやな菜は多く眞先に食べ了るやうな譯にて。
△折れ刀の柄に漆を塗る。
無用の事なり。
△人の高きは德にして木の高きは害なり。
高き木は伐らるゝこと早ければなり。
△甲を怒つて乙を怨む。
力弱き者は多くは然り。
△一魚水を濁す。
一奸國を亡すなどの意。
△雉子は頭許り草に隱す。意明かなり。
△額の上にかゝつた水は踵迄流る。
惡事に源あるをいふ。
△雀が鷺について歩けば股が裂ける。
分に相應せざる眞似をすれば終に身を破るをいふなり



街はづれの記

松平鏡子

△

……………

……………

入道殿のおもひもの、
常盤の前が清水へ、
微行詣の日は今日と、
洛中こぞる五條坂。
被衣伏目の小女房、
銀鞍朱赤の田舎武者、
車びかせて眷屬の、
公卿も混り見ておはす。

彌生の空の眼も彩に、
柳の萌黄桃の朱や、
紺青ながす加茂の水
淡紫の山の端、
さながら京は錦もて、
七重につゝむ繪卷物、
一枚くれば金泥の、
清水詣あらはるゝ。

……………

……………

ふと眼を開いた、窓が明るい。もう何時であらう？　もう起きる時間が來たのかもしれぬ。……私はまた靜かに眸を閉ぢた……。起きやうとする心に反く心が、も一つ私の身に住つ

てゐて、私といふものはその外の位置に、夢を見たり覺めたりしてゐるやうだ。

臺所で小さな物音がする、勝が今起きたのらしい。

私も起きませう、起きませうと思ひ乍ら、私の眸は閉かうともせぬ、一つの心は靜かに歌ふた。

『……。心は故殿に身は亡骸、御後逐ひても死ぬべきを、これ煩惱か迷執か、女人輪廻の罪業か、忘れ形見の牛若が、前途猶も見まほしく、笑みさへ作れ六波羅の、黃金の柱身は瘦せて。今日の一日の山詣、まことは過ぎし頭の殿、後世安穩におはせとて、冥福いのる我が供養。極惡底下の女人さへ、救ひ給はむ本誓に、縋りてこそは喃鹽埵、汚れぬる身も參りつれ。……』

押込められた一つの心は、弱くも逆ふ力を捨てゝ、私はと一度眠りに落ちた、知らぬ間に……しらぬまに……。

午前四時二十分……。

日は未だ強く輝やいてはゐないけれど、戶をくると目がまばゆい、蚊帳を逃れて湯殿へまはる。汲み立ての井の水は、朝は殊更すがすがしい、手ぐつた綱に汗ばんだ額を冷した時は、想像も及ばぬ心地よさである。

疊んでゆく臥床を丁寧に戶棚に收めて、掃除をするガラス障子を越えて眸に入る青葉の輝き、神秘のメロデイを歌ふには時過ぎたり、やゝ濃く黑ばんだ枝も交る昨日けふ、何とはなしの恐怖も潛む。

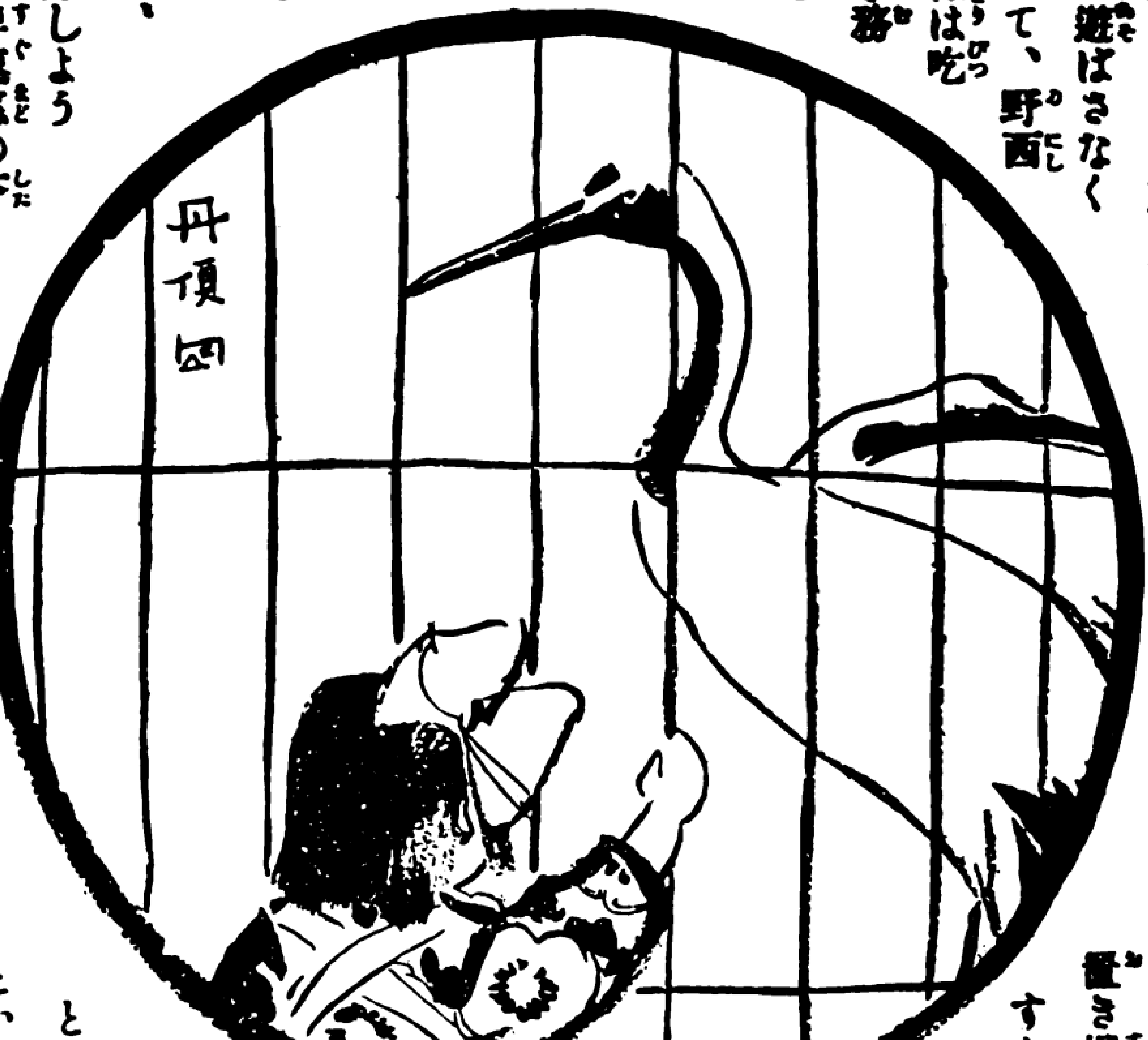
毎朝、御用きゝが來る頃には、庭から庭へ帚木目のあと新らしう、拭き込むだ黃楊の廣緣！　映る姿は裳かわか葉か、座敷をゆく、人の衣の白さへはつきりと。

朝早く起きるのも一つの苦痛だけれど、それでも口に云へぬ好い心持、松平樣ではよくお手がまはるつて他人はいふが、まはらぬ家がどうかしてゐる、私宅ぢや誰もぶら〳〵遊んでゐる者はありませんからね、みんなしてするから不平をいふものもなし、あさ早く起きたつて、夜も早いから同じ事、十一時も十二時も起きてゐたことはまあない。

あれだけの御身分で、召使ひの六七人は、なんて私

達を見て云つて呉れる人もある、妹が靴を磨いて居たら、みどりさまが遊ばさなくつてもお宜しいでせうつて、野西さんが仰有つたつて、緑は吃驚した顔をしてゐた。事務員になつたり交換手になつたりする事は、どうせ出來ないわたくし達其樣な事を爲るよりも家のお手傳ひする方が兩爲なのだし、召使の數が一人でも減れば、つまり私等の働きですものねえ。

餘り好いお天氣なので、私の部屋だけでも大掃除しようと思つて、洗濯を了ふと早速窓の下へむしろを敷いて、棚のものやら、戸棚の品を



運び出す。

置き据ゑになつてゐた本箱を持ち出すと裏側から美知子さんのお寫眞が出て來た。

此寫眞を失してもう半年近く立つ、尋ねあぐんだ末は忘れた日もある今日この頃……。

強ひられて、島田に結つて寫させられたのが不平で溜ぬつて、此寫眞と同じのゝ裏面に、

「實物より數倍と宜しく候」

と書いて、お媒介者の許へ送つたといふ、……今は如何してゐらつしやるか、どうせお緣談はまとまりやしないんだ

らうけれど……。

かれこれ云ふ人が惡いんだわ、あゝいふ氣の勝つた様には、矢張それだけの自信がおありなさるのに……逆境にもまれ／＼て、あんなに曲れてお了ひなすつた、もとはあんな方ぢやなかつた、すねるやうにした人達が、みんな、責任を逃れて指さすのだもの、誰だつて口惜しくもなりますっ姉様の同級生だつたけれど、私との方が仲が好かつた、五つ年下の私を、妹のやうに可愛がつて下すつて、このお寫眞だつて、私にばかし下すつたんだし……。

順境にすら／＼と生ひ育つて、幸福な運命と固く手を握り合ふてゐらつしやるおとなしい姉様とは、段段、遠ざかるともなく離れてゆく、兩方惡い心はなくつても、右と左とふむ路が違へば、親しくならうつたつてなれもしない。

十七でお嫁に行つて、十九の春をもう母と呼ばれた姉さまのまねをするのも、何だか呆氣ないやうな氣もするけれど、廿二のとしを獨すねて、悶えて明す美知子さんの、轍をふむのも怖ろしい、廿二位ではお嫁に行かないのが普通なのだけれど、あの方には何だか淋しい、影が淡いんですよつて德子さんは仰有やつた、勝氣の方だから、口を利かせればはつきりとしてゐるけれど、疲れたらしい眸の色……人の心の總てを疑がふやうに、私の心は汚くなりましたと仰しやいましたが……。私のとるべき路はいづれか？　十七の幼い胸には、裁判きかねる重たい事件である。

如何した心のさ迷ひか、人のやうに空想にのみひた入れず、金剛石だの指環だの、其樣な物に多くの憧憬をもたぬ私は、……眞面目に考る餘地のあるだけ幸福なのかもしれないけれど……。

九人同胞の中に四人の女姉妹、醜き故に母の愛が、私にとりわけ薄いとは露思はぬ事だけれど、……髪飾りの幾品、振袖の幾重ね、十一になる小妹より少くもつ私である、ひとが縮緬を着る時には銘仙を、銘仙をきる時にはメリンスの缺を抱いて、それで平氣に育ちました、いくらかひねくれてゐるのかもしれません：

…逆境の友を一番多く持つ身であつたからで御座いませう。

…………。

私のお掃除は一體永くつていけない、片附ける事が好きで、よく文庫なんかを引つくり返しては改ためるくせに、書いたものでもあると開げて讀む、捨てやうとしたものさへも、いつか役に立つことがあるかもしれないなんて、當にならぬことを當にしては、また藏ひ込んで了ふ。今日は大英斷で、もう大抵思ひ切つたつもりだけれど、それでも隨分藏ひ込んだ物がある。



書棚の中を拭いて本を並べやうとしても、並べ乍ら開いて讀む、――どつちをしてゐるのか不明ないつて、母さまによく叱られます。

私が、泉鏡花の（誓の巻）が一等好きだつて云つたら、好きなのは高津さんでせうと仰有つた藤岡の叔母は、「通夜物語」の丁山さんが大好きだといふ。

鏡花の作なんて好きなつゝうちやあ、文學趣味もまだ語るに足りないつて、憎らしい、〇さんはさう仰しやる、何と云はれたつて私は關はない、卑しい戀愛小説がどこがいゝのでせう、丁山が身を殺したのは、お澄の

優しい心に感じたからであつた、清さんを愛さないからぢやあ決してなかつた、…今の女には無いといふけれど、あの心意氣がわたしは嬉しい！

「…『さう』とばかりいきをつきぬ。良久しうして、

「上杉さん、あなた何うします。」

予は思はずわなゝきぬ。『何を。みりやあど。』

「私なくなりますと、あなた何うします。」

涙ながら、

「そんなことおつしやるもんぢやありません。」

「いゝえ、何うします」と強く云へり。

「そんなことを、僕は知りません』『知らない、いけません、みんな知つて居ろ、かあいさうで、眠られません。眠られません。上杉さん、私賴みます、秀、秀』。予は頭より氷を浴ぶる心地したりき。折から風の音だもあらず、有明の燈影いと幽かに、みりやあどが目に光りさしたり。

（秀さんの事思はないで勉強して、ね、上杉さん」

予は伏沈みぬ。〔かあいさう、かあいさうですけれども、私、こんな、こんな、病氣になりました。仕樣がない、あなたどうします。かあいさうで安心して死なれません、苦しい、苦しい、かあいさうと思ひませんか。私、あなたを可愛がりました、私を、私を、かあいさうと思ひませんか」。一しきり凩の戸にさはりて、みりやあど。顔蒼ざめぬ。其眉愍み、脣ふるひて、苦痛を忍瞼を閉ぢしが、十分過ぎつと思ふに、ふとまた明かに睜けり。『背きませんか、あなた、私を何と思ひます。」と切なる聲に怒帶びたる、りゝしき眼の色恐ろしく、射竦めらるゝ思ひあり。枕に沈める横顔の、あはれに貴く美しく氣だかく、清き芙蓉の花片、香の煙が消ゆるばかり、亡き母上のをもかげをば、まのあたり見る心地しつ。いまはハヤ何をかいはむ。

「母上」とみりやあどの枕元に僵れふして、胸に縋りてワツと泣きぬ。誓へとならば誓ふべし。〔何卒、早く、よくなつて、何にも、ほかに申しこのせ

ん」みりやあどは目を塞ぎぬ。また一しきり、また一しきり、刻むが如き戸外の風。

予はあわただしく高津を呼びぬ。二人が掌左右よりみりやあどの胸おさへたり。また一しきり、また一しきり、大空をめぐる風の音。

……」

讀み次ぎ來たつていつか眸はうるむ。朧になつた文字をみつめ乍ら、打つ伏せると、こと〳〵と胸の波動



が手に取るやう!。夏の胡蝶の翅の薄いのがもつれつほぐれつ寛かに舞ふてゆく、窓の下は風が涼しい!!

△

何だか鬱とうしい重い氣分の朝だ。

腦の中から何かぬけ出して了つたやうに、何をしてももうおつくうで厭! お晝飯はミルク少しを代用して、椅子にぐつたり倚りかゝつた儘、テーブルに積まれた洋書の頁を、無意識にはぐつてゆく。

「姉さま！」

淡色の華な洋裝にぬぎかへたいもうと二人。あゝけふはピアノのお稽古日だつた。

「姉樣今日はいらつしやらないの？」

「寄りかゝつて片手を私の膝において……。

「この次には乾度行つてよ、だから今日はね、……二人して行けるでせう？」

「えゝ」、千代子は相變らず元氣が好い。

「行けるけれど……だけど……」

緑が頸を傾げて云ひ澁る。まだ少さいんですもの、可哀想に……。

「そこまで送つて上げませうか。」

「可いの……姉樣少お顏色がわるいわ、ちつとお寢みなさつた方がよくつてよ、えゝ、みいさんと行けますもの、今日おねだりしたお蔭で、いつまでも二人つきりぢやあ……」

「そんならお玄關迄ね、さ！」

うながして、勢ひよげに立ち上ると、ぽつとしたあたまが重くふら〳〵する。

式臺に腰をおろして、深編上靴の紐を結んでゐるのを、草履をつゝかけてまはつて、髮のリボンを直してやる。「行つて參ります」と聲を揃へて……

「お洋傘は持つてゐらつしやいよ、帽子たけぢやお暑くつてよ。」

「えゝ」うなづいて莞爾、刺繍入のピンクの洋傘をもち上げて見せる。

裾短かなスカードの空色から、のび〳〵した靴下の黒、並んだ姿が植込の蔭に隱れる迄、私は其所に立ち盡した。どうせ歸宅は二時過ぎであらう、それ迄は話相手もない……あつたつてしたくもないんだけれど……。母樣のお留守の寂しさが、つく〴〵と身に沁みる、まだ三時間しか立ちはしないんだのに……。

あさ、M樣一行の豆相巡りの一團を見送るとて出ていらしつた兄樣が、暑い日盛りの一時といふに、汗を拭きふき歸つてゐらつしやる。

おぬぎになつたお袴の塵を拂つて、汗ばんだ單衣を

衣桁にかける、兄さまはお湯殿へからだを拭きにゐらしつたので、室の外へ新らしい白絣に兵古帯を添へて出しておく。

御飯は？　つて伺がふと、茂さんとステーションで食べて來た、まだお腹が張つてるつて仰有る。あら茂さんもゐらつしやいましたの？　ときくと、あゝつて元氣の好い御返事、井戸の水は何してもいゝねえ、鏡さん！　冷水を一ぱい呉れ給へな！。



細長いコップになみなみと注いだ冷水、一點の塵氣も浮ゐてゐない。向ふの青葉が透いて見える、水晶を溶かしたつて、こんな綺麗にならうとは思はれぬ。

『どうしてお寄り遊ばさなかつたんでせう。』

『あしたにでも來るつて云つてたよ、今日はあれからどつかへまはるんださうだ』『さう？　隨分大勢いらつしやいましたの？』『うむ、さうでもないよ、やつと八九人だつたらう、見送つたのが、僕等を入れて四人さ、早川も來て居たよ、あいつまつたく氣に喰はない奴だ、も少しで茂さんと喧嘩するところだつた。

兄樣は喧嘩なんて始まると、やい〳〵云つて彌次り立てるのだから閉口だ、江戸ッ子は、火事と喧嘩は何より大好きなんですつてねえ。

君鏡子さんのお友達をみんな知つてるかい、氣をつけんといけないよつて云ひやがつたから、僕だつて妹の事は傍で見てる、鏡子だつて自分の身分を知らない程の馬鹿でもあるまい、その位の自尊心はある筈だ、考がへられるだけの敎育は十分與へてあるんだからねつて云つてやつた、茂さんなんて人を見てものを云へつて大變怒つてゐたよ、僕もよつぽどぶんなぐつてやらうかと思つたけれど、高が妹の事位で、腕力を出すのも恥かしいと思つて、それきりにして歸へつて來たM君なんども、早川を東京においちやあ碌なことはしまいから、一緖にあつちへ引つぱつて行つて、暗闇で袋叩きにしてやらうと思つて、いくらさそつても行かないんだ、彼奴に一里と路が歩けるもんか、男の癖に頭髮ばかしイヤに光らせて、學校だつて何處へ行くんだか當になりやしない、明大になんてあんな奴は居なくつていゝんだからね。自分こそ氣をつけろつて云つてやつた。相良にも、君は妹のとこへ來る手紙をみんな調べるかい、氣をつけ給へよつて云つたさうだ、自分の自然主義をかくさうとして、いやに君子ぶつたことを云ふ、誰が本氣にするもんか。

つて、兄樣は眞赤になつて仰有る、「鏡さんもあんなものゝ口の端に載らぬ樣、この上とも氣をお附けなさいよ」と云つて下さる。

純潔を信ずるわが胸の中へ、濁つた灰色の汁をさゝれたやうに、いやな氣持だ。早川さんの性行は、人が知つてゐるにもせよ、そんな事を云はれたのが堪らぬ程口惜しい、人には小さな出來事だらうけれど、少女の胸に起る響は、怒濤のやうに荒だつてゐる。……人も自分も知つてゐるけれど……けれど……。

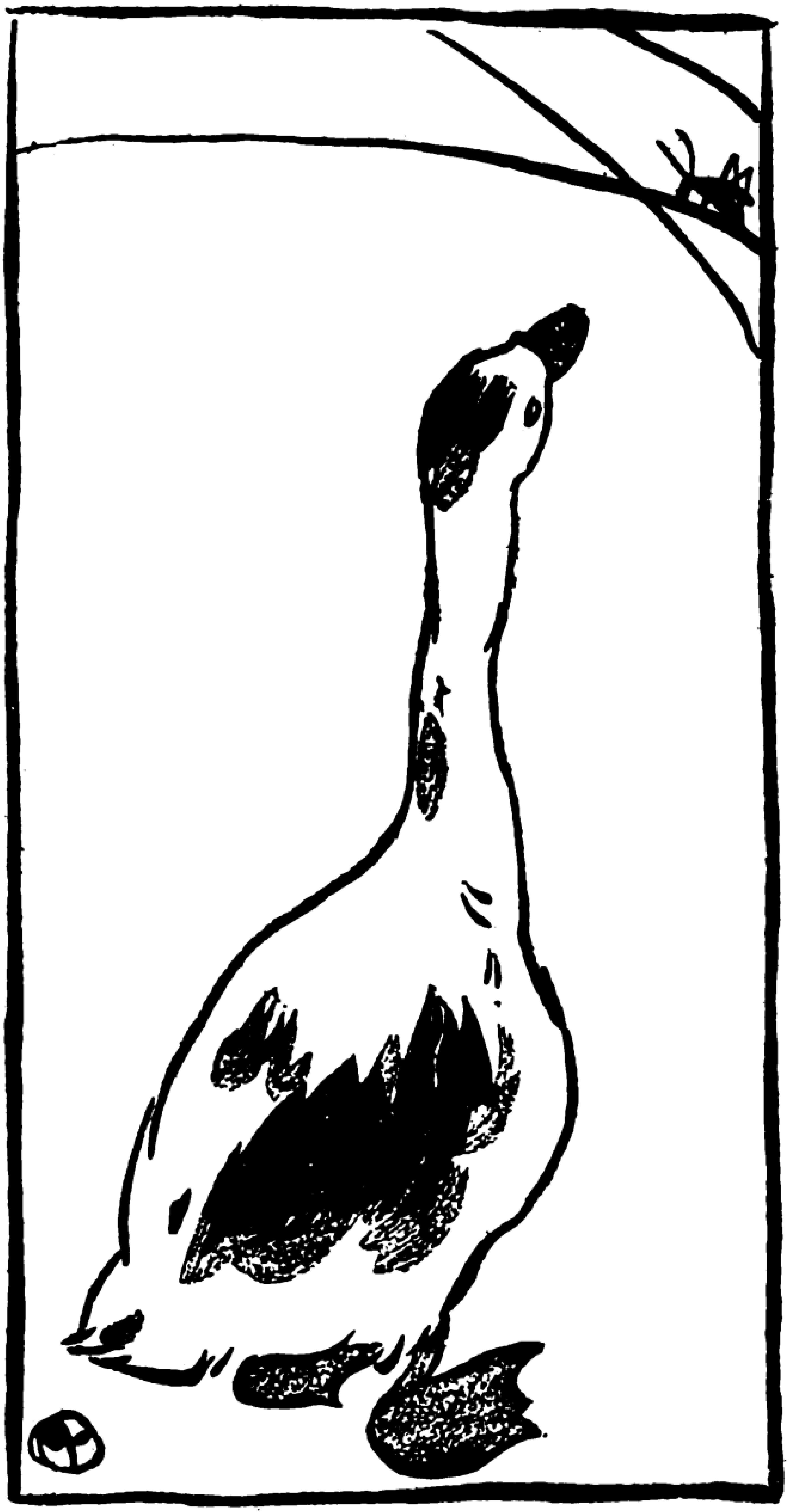
たゞでさへ重いあたまが、くらみさうにふら〳〵する、堪へられぬ思ひの聲を呑むと、膝へ重ねた單衣の袖の、秋草の上に泪が落ちる。

△

朝顔の咲くや親にも叱られず。

あさ顔の花が咲いてから、みんな起されずして床を離れるやうになつた。瑠璃、紫、紅、白、絞、さま〴〵の色を両手にあふらせて、コップにさしたり、押花にしたりする、残された花はそのままに、日の盛まで咲きつづけて、わが家に楽しみの一つは生まれた。

…………



「小川町迄行きますけれど、ご一緒にゐらしつて下さいませんか？」

平常に似げなく園枝さんが、内玄関の格子に寄りかかつた儘微笑んでいふ。

「お誘ひ下すたの？　うれしいわ、わたくしも少し買ひたいと思つてゐたものがありましたのよ、伺つて見ますから一寸お入り遊ばして頂戴な……そして貴女すぐお出かけ？　お急ぎなさいま

すの？」

「いゝえ、晩までゝ好いんですの、私の買物ばかしなんですもの、貴女にも見て頂きたいと思つて……」

「まあ何しろお寄り遊ばせよ、不意打ちなんですもの、私だつてあわてますわ。さどうぞね、散らかつてますけれど……」

手を取つて招じ入れる。モスリンのお單衣が、ふるいつき度程よくお似合ひなさいますのよ。

母さまにお願ひすると、お急ぎでないのなら、早午飯をすませて出かけたらと仰有るので、すぐ、それにしても少し早すぎる十時半に、二人して食臺のとり膳で箸をとつた。即席とあつて膳の上のさびしいこと夥たゞしい。卵燒、茄子のお香の物、隠見豆の胡麻よごし、麥入のごはんは兄が脚氣ですからつて、いひわけがましくおことわりして差しあげる。

「お茄子の艶の好いのは、私大好きなんですよ」つて園枝さんが仰有るのを、「これは、うちで出來ましたの、嵐に當つて大抵は色が變りましたのよ」。何にもないのに御自慢の鼻が高い。

「鏡子さんの話しをきくと、みんなうちで出來たんですねえ、貴女んとこの畑は一體幾反あるんです、僕の目に入るのは金蓮花や鳳仙花ばかしだ、いまに油斷してると、ダリアの鹽漬なんて食わされる」惡まれ口をお叩きなさる田中さんは、私宅のお香々が大のお氣に入りで、この方がお見えになると、三日分の豫備軍が、一度に出陣して了ふ。「君んとこへ行くと全く好い氣もちだ、門を入ると空氣が違ふね、羨やましい！」と仰有つたSさんは、紅燈の下、賣らるゝ女に心をやる、お痛はしいお身の上でした。

みどりさんとこの子になつちやいたいわ、もう歸宅るのは厭！ つて、女中のお遊びに駄々をこねて、暫くを私宅から通學つた良子さんは、わたし達と同じやうに、母さまだの小兄様だのといふ。私は深く母様に感謝する、家庭快樂の原動力は、全く母さまの賜といはねばなりませぬ。

詰らないことも厭な事も、他人の前では顔や擧動に

出してはいけません、人の氣を悲くするばかりで、何の得るところもないんですからね・自分の不平は自分の胸で始末がつけられなければいけませんよ、つて仰有る。

‥‥閑話休題‥‥

唐人髷の鬘だけかいて、あとは園枝さんに直して頂く、「こんな頭髪で重たかあないの、え？」つて、鏡に映る私の顏を覗き込むやうにしておきゝに



なる「いゝえ、‥‥もう馴れつこになつて了つたんですもの」‥‥馴れつこといふ言葉が、何だか耳について、自分乍ら寂しい哀れげな感じがする。

私、思切つて華美な風姿がしてみたくつてしやうがない、人の見ないところ丈でも好い、紅い大模様の袖振長く、でなければ裾の短かな洋裝かなんかで‥‥どうせ出來る譯でもなし、出來たつ

て似合ひはしないんだとは知つてゐるけれど……他人のおもわくのみ氣遣つて、縮まつてゐる自分の心が可哀想だ。

荒い白絣の單衣、二尺二寸の袖丈が、恥かしい程長く重たく感じられる、薄色鹽瀬の、それでも紅の入つてゐる丸帶を、手傳つて頂いてお太鼓に結ぶ。

塵紙と紙入とを帶の間にはさむで、小さい手帳を懷中に了ひ乍ら、手巾をくはへて玄關に出ると、勝が洋傘をもつて來て與れた。

『では氣をつけてね。園枝さんは歸りにお寄り遊ばせないの？　ぢやあまたお出掛け遊ばせよ。お待ち申して居り升からね、お母さまに何卒よろしく。』

にこやかに笑ひ乍ら母さまが……。

……『さやうなら。』

『そんならお願ひ申しましたよ。』

つむりを下げる後から私も『行つて參ゐります』……。

門を出る時また振り返つた、青葉にかくれてよくは見えないけれど、まだ立つてゐる人氣合！　それもまたかあ様の……。

市街鐵道は車臺が小さくて古ぼけてゝ、乘心地があんまり好く無い、上下動、左右動！　烈しく、といふ程でもないが可成よくゆれる。

古本屋の多い神保町通りを過ぎて、駿河臺下で電車を捨てる、降るすぐ目の前に立つてゐる東明館に入つて、園枝さんは小ちやい封筒を、私は花瓶と、玩具を二つ買ふ、弟達のお土産にしやうと思つて。

東京堂へもよつた、繪はがき屋の店にも立つて見た、中西屋で弟の欲しがつてゐたエーロー、マニユアル（飛行機の本）を求めて、須田町の方へ歩向をむける。時計屋の店の屋根に鳥が大時計をくわへた鑄造物と、小川町の交叉點に近い酒店の、戸外に出した木彫の廣告と、向ひあひのガラス商の看板繪とは、私が覺えてからもよつぽど古いものだけれど、是等の異數とりのけると、こゝらあたりも隨分變化つた。

柳の並んだ街を歩き乍らには、飾窓の花束やハン

カチーフや、金銀のガラス玉を連ねて洋傘商の意匠や、寶玉店の置物や、銀色に光る艶々しい手欄によつて、立止つて幾度見たでせう？　わづか二三歩の隙だつたけれども……。須田町の賑はひを左に避けて、三つ井屋の前にパラソルを疊んだ。

園枝さんが髷櫛を出させて見てゐらつしやる間に、私は別に花簪を見せて貰ふ。

白い花に氣に入つたのがあつたけれど、丈長の色と映えて寂しさうだからよして、淡い、うすい淡紅色の、薔薇によく似た大輪の花簪を一つ買ふ。

わたくしねえ、あの飴色の髷留と、横挿しの好いのが一つ欲しかつたんだけれど、當分日本髪ときめれば、大して必要もないと思つて、妹二人の爲めにリボンとお下げどめの大きいのを撰む。

あんなに欲しくつて、一年も前から書入れにしといた髷留と横挿……その爲に溜めた金子もいくらか交つてゐるのに、店先へ立つと思ひ切つては、妹との品を買はうとする、それがまあ幾度だつたでせう、大した貧しさは感じなくとも同胞の多い者は思ひ切りが好い。惡くつてもさうしなくてはならなくなつて來たのでした、二つのものは一つを姉さまに差上げる、妹に強請られゝば、秘藏な品も大抵はあきらめて手離さねばならぬ、殊に中に生れた私などは、さういふ場合を最も多く經て來たのでした。終には晶子樣の仰有るやうに、親に別れても同胞に別れても、遂には自分がこの世と別れても、涙の出ない程思ひ切りよく成りはしないだらうか？。

リボンは夏の幅の廣いの、園江さんに見て頂いてうす色の淺黄にする、緑には淡紅色だつていゝとも思つたけれど……でも少し質味すぎたかしら？！。

政子さんはねえ、大きいハイカラなお下髪留なのよ、つて云つた、それを私は今買つて行かうとする、同じに黒鼈甲の、まあどんなに喜こんで呉るだらう。

もう殘り少なになつたふところ、種々のお土産も大變だと思つて、角の氷菓子屋でバナヽを一斤買ふと、もう二人とも頻りに歸宅りが急がれる。

そびえたつ赤煉瓦の建物、高架線の下を過ぎて、昌平橋から舊甲武で一直線!!

夏なれど夕べは風が涼しい、五時といふに都會の街は黄昏そめて、かなたの空に夕照の、浮いた雲さへ紅に染まつた。路に佇む柳の枝よ、空ゆく雲よ…。さきは葉櫻の蔭を行、今は綠の土手を歸る。草叢に、仄紅は撫子か、右手は外堀の水つゞき、夕日は照つて波は煌々…。

ひた走れば涼風は更に起つて、鬢の毛が亂れる、襟元がすゞしい、私はかうして歸つてゆく、街はづれのわが家に…母も待たう…。

あれ！　純白い羽の水禽が、波を叩いて舞ひ上つた。

（完）

○ふしぎな緣で結婚

米國メリーランド州のグルーム氏が、嘗て州の知事候補者となつた時、多くの推薦者は無妻の者は選擧せぬといふ意向であつたので　周圍の人々は頻りと氏に向つて結婚することをすゝめた。で氏は結婚する事は好まなかつたけれども、人々の厚意を全然却くることも出來ずして、『實は自分は或る淑女と婚約は整つて居るが式を擧ぐのは三年の後だ』といゝ加減な事を言つて居た。ところが、新聞記者等は、我先きに其の名を聞出して功名手柄をせんものと焦り、隨分附會の事實を報道したが、中にも、バルチモーアの一新聞紙の如きは、その技倆を誇らんと、自家想像中の一淑女を捉へ來つて、これこそは其の淑女であると、さも眞らしく吹聽した。其の中氏が偶ま其の淑女に會つたから、世間の風説の虚妄なことを辯じて之を慰むると、淑女は微笑し乍ら『それが貴下の當選の利益になるなら、選擧の終るまで其の儘にして置きませう』といふ意外な同情ある挨拶であつた。で兎も角も誤報の辯解もしないで其の儘にして置くと、やがて氏は當選したので、氏は彼女の恩に感激して遂に夫人としたといふ事である。面白い緣もあつたものだ。

怪氣焰

空蟬

理想よ家庭よとハイカラの色目鏡で見渡せば、夕風涼しき巷を是見よがしの若夫婦が新世帯のお買物にや、お金は奥さんが支拂ひたまへば得たりと品物は良人が持ち役、或は剝げて落ちる許りに白きもの塗り立てし細君の、お年にも恥ぢぬ大丸髷の綿手がら、まだ花嫁かと思ひきや後へにお伴の乳母車には三つ許りの可愛いゝのを乗せて、汗水たらして押して行かれる背の君の、お袖にはさても〱六つ七つ——の大丸髷のおかみさん、瓜二つの嬢さんさへ從ひ玉ふ。是等をこそ天晴れ女權の實現と無性に難有く映じてあらぬ空想にあこがれたまふミスもやおはさんなれども、世の中一般に斯うした女房天下泰平の御代に、細君萬歳を謳歌するはまだ〱前途迷遠。かゝる忠實なる御良人は現在の處眞に雨夜に星です。しかもこんなのに得て小成に安んぜらるゝが多しとかや。

◎

高女卒業の成績を第一の結婚資格と誰れでも注目する中に、是は又風變りな條件で。讀み書きは手紙一通り間に合へば澤山新聞や雜誌を讀み度がらぬ者、割烹よ家事經濟よと理窟をこねぬ者、唯要は柔順の一語に盡せりと仰られし○○さんの御注文



やさしさうで困難の條件に、やつと合格された奥さん、お兒さん三人も擧げられし八年越、君主專制の御家庭に只の一度も不平の色を浮べられし事もなく、今以て三つ指正しきお仕へ振・よそ目にはいぢらしき迄なるを、旦那樣はなほ口ぎたなく罵り玉ひ

「經濟が下手だからいつから始終足りない〱と溢すのだよ、も少ししつかり豫算を立てゝ鐵過せぬ範圍でやつて行かなくちやいかん。」

とか或は

「おまへの其しみつたれた樣子は何だれ、ちつとは當世風を目をあけて見よ。」

なんて仰つしやるくせに、そんならお衣裳一枚新調なさろうにも餘裕のないおあてがひ扶持で、お兒さん三人は奥さん獨りのお兒でもある樣に、着せろも學資も旦那樣は一切お構ひなし、奥さんの御心配はなみ大體ではなけれども、ちつとも顧みも玉はぬのみか

「子供を產む事許り知つてゝ敎育も躾もなし得ない母親が何になるかッ。」

とお小言許りは拔目なし、こんな風に御在宅の時は笑顏一つも見せはなさらず、そんなに仰つしやる程ならなぜもつと高尙な敎育受けた當世風の人お貰ひにならないかつて？　思召すで

しやうが、そこは御性分でかうした氣質の人は、例へどんなに出來る奥さんでも同じ事、迚もだまつては入らつしやいません、却て其都度火花が散りますかられ・・・・

で御自分はどうかといへば、社用々々と月の中は御旅行殘る半月も殆んど宴會許り其華々敷き御職業は自然と世の荒波に拔手の熟練、御風采は徹頭徹尾一分の隙のないハイカラ風其接客の愛想よきと交際上とはいへお金離れのよきは、どうして此人が奥さんに苦り切つてゐらるゝかと疑はれます

でも奥さんは濟ましたもので「良人などは口でこそ八ヶ間敷申ますけれども實家の父の樣に打擲なぞは致しませんし、交際上の外自分の道樂なぞ致しませんから」

とはよくもお諦めになつたもの、此調子でなくては迚も半月も堪へられないでせうよ・・・・

◎

いゝいゝさいが樣といへば早分りのする○○さん、一も妻が二も妻がと、鼻・・・ではない耳につく事夥しく、其大切な妻君お持ちの癖に、兎角折花攀柳の御趣味却々に深く、既に今年中學に入られし御養子の手前恥かしともおぼさぬにや。

奥さん時にはしみ〴〵こぼしながらに御意見遊ばさるれば元より浮いた水草根もなき事とて

「モーよすよまあ〳〵そんなに柳眉を逆立てるなよ、も少し胸



を廣く考へて御覽、いくら私が遊んだつてお前が本妻たる威嚴をおとす樣な事はしやしないし、畢竟自分が自分の腕で一人や二人の女をこしらへたつて何だ、夫も皆繁劇な職務のうさはらしに過ぎんよ、そこを觀破して泰然と構へて居ないのは餘りお前の局量といふものだ、昔は御覽、三年にして子なければどとかいつて公然妾を畜へて、妻妾同居したものだ、夫れでも睦じく暮して居たぢやないか、お前の樣に始終齲いで許り居やしなかつたのは、實に昔の女は度胸が据はつてゐたからだよ、れだから私は昔風の女子教育が贊成だ、當時の女は皮想のハイカラに魅せられて居る處へ以て來て、出來そくないの女の緣の遠い道學者――。餘り失敬な事いふなつてハヽヽヽヽヽまあいゝさそんな連中が婦人の御機嫌取りに、一夫一婦だの女權擴張だのと兎角女の喜びさうな事をはやし立てるから、いゝ氣になつて婦人が巾を利かしたがる、だから其弊害として細君の束縛に怖れ、家庭に忠實な者程ダメだれ、折角鴻鵠の志ありと認めし部下の少壯者も一旦家庭を持つと案外座折して仕まふ者が多いのは殘念だ・・・エ、自分の都合のよい理窟はモー御免だつてハヽヽヽヽ聞きたくなけりやよさう、ぢやあすは丁度日曜だ久し振にどこかへ遊びに出かけやう、エ、今の流行の着物がないつて、たしなみの惡い奴ぢや、いつでも差支へない樣に拵へればよいに・・・・。」

なんて調子でせう 御職掌柄人心收攬にはいとも妙を得られし御良人のしめつゆるめつの此御手腕にはい つしか氷と結ぼれし奥さんの胸もとけて、きのふにかはる爽やかなお顔色

　されど夫もやつと十日足らず 又しても不愉快のおもゝちに行末を案じ玉ふ奥さんもあるのです。

◎

　縣下で屈指の豪商、臭屎物と肥料問屋の兼業で數代連綿たる舊家の若主人公、昨年親父さん急病でなくなり、廿八歳の部屋住が別に確たる後見もなくて跡相續は心もとなし、せめて確り者の嫁御寮迎へればと親戚協議一決して鐘太鼓で探し當てたお嫁さん。

　教育は東京の女子商業學校出との觸込みに、もう田舎者はオツ魂氣て其評判の高い事。

　病身だからとて、中學も三年で止めたあの若旦那に 其嫁さんではと、隣の疝氣を頭痛に病む世間のおろかさよ。

　流石は〇〇女史のお仕込み丈けに嫁御寮自身獻身的の内儀さん振に古風の姑御、物堅き親戚一般の氣受けもよく、手代小僧も敬服すれば、出入者も陰口きかず、はては女だてらに商業學校出たなど〻苦々しい事だ、そんな女が家風も店の掟も破りたがるのだ、と内々不同意をとなへた三十年勤續の藥舖番頭迄何とはなく眞心に責めらるゝと見え、矢鱈に敬意を表し奉ると



いふ有様、天晴れクインの威望大したものなれども、肝腎の婿がれは元來お坊さん育ちのハイカラ好とて、商賣はそつちのけで部屋住當時同樣の呑氣さ、柄にもない市會議員の候補者よ何よとおだてられ果は花柳の巷にも却々の通人、おまけに商賣柄のより取見取りの流行衣服にダイヤの光り燦爛と、其生白き顔色に黒天鵞毛かぶつた樣な頭髮のいやらしさ。其居間には婦人の樣に鏡臺も据ゑてレート、パールの空瓶算を亂してゐますとよ、道理でこそホゝゝゝゝ。そんな風に只飛廻つて許りござる故、店の事も懸引の事も帳簿も悉く妻君任せ、御自分は如何にして妻の歡心を買ひ運動費の支出を潔よくせしめんかに餘念なしとは、はてさて困つた若旦那、

　でも土地の舊志想にとらはれた連中は

「男振はよし氣前はよし夫で お金はうなる程あつて姑も小姑もお人よし、あの大家に嫁てから早々に身代も店も引廻すあの嫁御寮はどんな月日の下に生れた仕合せ者だらう」

　とさゞやきあへりとは物は着眼次第ですれ‥‥

　果して此嫁御寮 其噂さを甘受されましやうかなんぼ學び得た應用に天晴れ技量が誇られるとはいへ‥‥(終)



意地の人

磯千鳥

「あの澄した顔。笑ふと損な樣にして」と一人が言ふと、

「でも美くしい方ね」

「なんの美しい事がある物ですか。あんな無愛嬌の人……」

「それに何時でも獨で入來やるのね」

「そら其筈よ、學力でも何でも皆から超越してらつしやるんだもの……」

運動場の隅か櫻の樹陰に重井さんの姿が見えると何時も三四人の人はこんな噂をしました。何方かと言へば鼻筋の通つた細面のどことなく凜とした顔は蒼い程白いのでした。「而しあの眼丈は良いのね」とは人の缺點なら何處からでも見附けて來るK――樣も之丈は辭む事が出來ない。あの重井さんの眼。切の長い、物の底を見る程な眼には誰しも引附けられて割合に厚い唇に氣の附く者は少いのでした、此評判の操子さん……みさ子さんと仰いました……は私の四年の春是も同じ四年級に轉學して見えたのですが、組が異ふので半年餘もお互に顏を見合しても他所々々しくして居たのは不思議な位。それに操子さんも妾も同じ町に住んでゐて登校時間には人通りの無い街を後先になつて歩いた事も度々で、時にはどうしても話台はねばならぬ樣な氣持になる事もありましたが、何だか口を切る勇氣が無い。無論此時分からお互の身上は薄々知り合つてゐたので、轉學なすつた當時から、學科と言ふ學科は群を拔いて居られて殊に語學の方は先生も一目を置

いて居られるとの話、是は嘘か誠か知りませんが兎に角神田リーダーの三を、英語なんて不必要だわと、投出す人の多い中に、それは〳〵大した評判でした。而し此方は普通の女の生命とする笑顔をお見せなすつた事が無い。他人が賞めた時でも羨む時でも何時も默つた儘時々思ひ出した樣に下唇をかまれるが癖、これが不可ないのでした。それで重井さんには誰も及ばないと言ふ事が明かになつて來れば來る程外の生徒の稱讃の聲は嫉妬と變り、「何ら學問が出來たつてあんなに高慢にせずとも良いのに……」と言つて其人の一擧一動を皆惡く解する樣になりました。

　緣と言ふ物は妙な物で妾は重井さんがこんなに言はれゝば言はれる程益々其人に興味が湧いて來て、何卒折もあれば言葉を掛けて見たい、そして慰藉の一言も言つて上げたい。けれどもあんなに物の出來る人は感情と言ふ樣な弱い物は持つて居られんかも知れん、切角捧げた同情が冷い砂原に水を注いだ樣に超えられる樣な事はあるまいか。こんな事を思ふと如何しても接近する事が出來ませんでした……

　處が玆に妙な機會が出來ました。と言ふのは其年は九月の新學期も初つてコスモスの花がうすら寒く咲く頃でした。或朝何時もの樣に淋しい屋敷町を通つて行くと黑い毛繻子の包を持つて、足早に先を步いて行くのが重井さんなんです。其學期になつて其處で遇つたのは初めなので、懷しい樣な氣持で後から行くと、するりと其人の包から滑落ちて破れた物がある。見ると世にも美しいマヂョリカ皿が（其名は後で敎へてもらつたのです）乾き切つた往來に落ちて眞二つに破れたのでした。後から行く此方さへハッと聲を立てかけたのに肝腎の落し主の重井さんは平氣な物、一寸振向いた切、拾上げやうともせず、妾の居るのに氣が附くと親しげに莞爾笑はれるのでした。

「惜しい事をなさいましたのねえ」と此場合妾は重井さんの顏と破れた皿を見較べずには居られませんでした。

「いゝえ。關ひませんのよ」と惜し相にも見えぬけれ

ど、

「でも拾つて參りませうか」と我を忘れて立留ると、

「打遣つときませう、餘り良いものでもございませんから」と人を引附ける樣な眼元に輕い笑を湛へられました。私は我心のさもしさを見られた樣な氣がして耳の附根迄赤くなりましたが、向では何とも思つて入來らない樣子、是を口切に色々と話をなされましたが、言葉のはき／＼とした、仰る事に何處となく用心深い處はあつても、冷い人とか高慢な人とかの蔭口とは反對に胸の奥には強い情の火が籠つてゐると思はれる樣な御言葉の節々もありました。此んな人を何故あの人は惡く言ふのであらう。やれ理想の何のと大騷ぎをする人達の眼から見れば、重井さんの妙に沈んだ態度が、氣に入らないのであらうが、重井さんには、そんな人達



と一緒になる事が出來ないのだから仕方がない――。ア、此人のなら靴の紐を解いてもと迄、獨で決めました。それからは二人切の時は親しい言葉も交し冗談の一つも言ふて笑ふ樣になつたのですが　學校では相變

らず默つて打沈んで入來る……之が亦妾にすれば此人の心の鍵を握つてる樣な心地がし無上に嬉しいのでした。

其後二人は操子さんと云ふ名で呼ぶ程接近して互の性格も大抵分りましたが、或秋の晩打開話の末で、

「私の眉は妙に斜んで見えやしませんか」と斯う訊かれるのです。妙な事だと思ひ乍ら、

「いゝえ、別に」と言ふと其人は笑つて、

「それなら宜いのですけど。此間ね、人の處へ行つたんでせう。すると繼母に育つか片親の子はきつと眉の邊にゆつたりとした處が無いと言ふんです」

「嘘ですわ。そんな事」と妾は打消した物の操子樣は其何れかで無いかと疑はずに居られませんでした。當時操子樣は親戚の御宅に世話になつて居られたのでしたが、お國が何處か、兩親が如何して入來るのか、そんな事は仰つた事がない。偶話が其方へ滑つて行つて、お生れなすつた處を訊くと、例の意味ありげな笑方をして、

「妾の生は北國よ」、「嘘」、「何故？」、「でもそんな處は無いもの……」と言ふと、

「困るのねえ」と態とらしく眉をよせて「それでは何處にしませう……」

直ぐ茶化してしまはれるのでしたが、それには何か仔細があるのか、それとも謎の樣な事を好んで言つたりしたりする人故、其處に何かの掛引があつたのか分りませんでした。かと思ふと急に沈んだ調子で、

「妾なんか何れ世間から除者にされてるのですから…………」とこんな關係の無い事をふと言はれるのです。

「だつて誰も除者にして居ないぢやありませんか」と慰める積りで言ふと、

「妾だつて馬鹿じやあないんだもの學校で皆さんからどんな仕向を受けてるか位分つてますの。併し向うで惡意を持つて來るなら此方だつて強く行くわ、妾には自分の德で穩に人を制御する樣な間緩い事は出來ない代り面と面と向合つた時一言も出せない樣にしてやるどんな事があつたつて……」と此處迄云ふと其人の聲

は怪しく慄へました。暗い庭で蟋蟀がチチ、と鳴いてしんみりする晩でした。二人は暫く無言で居ましたが軈て操子さんは元の穏な顔に歸つて、

「ホヽヽ、隨分妾も意地張の負ん氣でせう。さう〳〵小さい時、習字の點が人に負ける樣な事があつたら、それこそ眼を泣腫して三日が四日でも上手になる迄同じ處を習ひましたの　さうかと思ふと先生



の前で小學校の先生なんか、と減す口をたゝいて昔氣質の父に細帶で縛られた事もありましたつけ……」一時は感情が亢ぶつても人並勝れて強い意志を持つて居た操子樣は直とそれを脇道へ紛らして終ふのが癖でした

或日私に向つて、

「貴女はどうなさるお積り？」突然こんな事を尋ねられるので「どうするとは」と問返すと、

「無論學校を出てからの事よ」

其頃妾に日々の仕

事に十分興味があつたので。まだ末の事など考へて居ませんと答へると、
「ア、貴女もスヰートホームでマダム振が御理想？」と意味ありげな笑方をして居られる。妾は何だか厭まれた樣な氣がして、
「それにお父樣の考へもあるのですし、妾の自由にはなりませんわ」と云ふと、操子さんは、お父樣？！と笑ひ出して、
「貴女はほんとに可愛い方、妾すつくり好になつちやつた。ホヽヽ、何處の家だつて父親は娘の心持なんか汲んで與れやしませんよ。だからさ「親爺入れる樣な消炭壺が欲しい」と言ふぢやありませんか。「怒る時には蓋をする……」
妾は呆れて物も言へません。
「お宅でもそんな事仰るの？」と笑ひ乍ら尋ねると
「妾？　いゝえ、これで家へ歸ると極く平凡な娘になつて終ひますの。父の考へと此方の考へとは丸切異つてるのですから衝突なんか出來やしません……それと近所には操さんは孝行娘だなんて言つて與れるからねえ。アイロニーですねえ……」
古い因襲の衣を新しい考への上に着せて居る。人と變つた考へはあつてもそれが外に表はれる時は何時も在來の形をとる……。これはこんな勝氣な人には珍らしい美點でした。例へば外國文學の事等驚くばかり知つて居られてもお宅へ上つても敎科書の外洋書の影もない。只綺麗に片附けた机の上の一輪揷に桔梗が一本……これが此方の美はしい半面でした。操子さんは語を繼いで、
「……兎に角妙な女に生ついた物ですね。何事でも僻んで考へたいんですから。併しこんなになつたのも子供の時からの境遇だと思へば時々自分で自分が可哀想になるのよ。ア、妾も貴方の樣に溫に育ちたかつた……」
こんな話をきくと妾は何時も涙が出て來るのでした。

＊　＊　＊　＊

其後重井さんと訣れてから三年になります。卒業後妾は直に此土地へ來る。其暫くは終始手紙の取遣をして居ましたが二三度此方のが附箋して歸つて來たのでつい〳〵疎遠になりました。處が此春、他からの歸途に電車に乘つて居ると運轉手臺の傍に立つて居る女がありました。其處に居た八字髭の紳士が立つて席を讓らうとすると、女は、

「いゝえお構なく。此方の方が結構でございますから……」紳士は可哀想に面目を失して其處に突立つた切り坐る事も出來ず、車中の人の視線は一樣に其處に集るのでした。見ると妙な事にはそれが確に重井さんでせう。直ぐ傍へ行くと向でも大變な愕き方、次の停留所で降りて二人は積る話をしつゝ、靜に歩を移しました。

「相變らず重井式ですねえ」と云ふと、

「何が？」

「先刻の電車で」と笑ふと、

「あゝ、あれの事？　あの妾今迄隱して居ましたけれどすつくり平凡になつちやつたのよ」

「平凡てどうなすつたの」と顏を見ると、

「もうお母さんよ！」と云つて此方の驚く樣子に、

「……お報しなかつたのは御免なさい。あの時は何だか手紙を出すのが辛かつたの」と昔ながらに感情の强い人はそつと妾の手を握られるのでした。そしてふとした事から結婚する樣になつた事、夫の君は畫家で、此地へ來てからまだ十日程にもならぬ事、お宅には姑樣があつて少しの隙もなく子供の世話に追廻されて居る事等細々と話して、

「今から思ふとお互に學校に居る間は自由でしたねえ無論あの時分から人の妻になるのは嫌とは思つて居たのですが、と言つて頭のある女の合言葉の樣に思はれる老令孃の生活も同じ位に詰りません……」と操子さんは嘆息をつかれた。妾達はこんな話をし乍ら其日は別れました、が二三日してお宅をお訪し御主人にも紹介されましたが、驚いた事には御姑の手前があるとかで操子さんは一人で赤樣の世話から料理の買廻し迄

して居られるのには妾涙がこぼれました。あの進んだ考へを持つて居た操子様が今の操子様とは誰が思ひませう。一生を誤解されて過す人、平凡の假面を被つて朽ちる人、妾は重井操子様と言ふ悲劇の主人公の事を思ふ毎にこんな悲しい考へが胸に湧くのでございます。



批評

△良夜――は强ひて題意に協はせやうとして、苦心された結果、見ぐるしい不自然に陷りました。竹のさきに木をついだといはふか、しひて妙趣向をつくらうとして、却つて厭ふべき、俗臭紛々たるものになりました、今時あんなお姫さまなんかあらうとは、十三の小娘だつて信じはしない、子供だましも甚だしい。平常に似合ぬ作である。

△華族系――これまでこの人に書かれた多くの人物は、大抵自分の性格を惜んで、出し澁つてゐるのが多い、二分描寫、三分描寫、新月的、半月的で不滿足が多かつたのに、今度は十六夜のお月樣らしく殘る隈なく描かれたので見る人は皆滿足した、お葉は遺憾なく現像されましたよ、あながち今度の寫眞機械が特別上等のせいでもなかつたらう。危ふく一等に抽るところであつたが、只一つ疵があるので割愛された、それは今こゝで申すまい、併し、元來疵といふものは、すべての天才につき纒つたものである、別言すれば疵は能者の表彰である、この故に大なる疵瑕の所有者は大なる天分の資產家である。

△街はづれの記――別に批評はない、只その細心、用意、慘澹たる思慮を盡して藝術的良心に殉したのを多とする、一字一句の配り方置き方まで苦心した跡が見える、原稿を七八度も書き直したらうとはチト大袈裟の想像かも知れぬが、あだやおろかで出來たものではない。作者の年齡が僅かに十七歲とは丸で噓のやうな話であるが、何もそれが、兎の毛ほども作物の價値に影響することではないのであるから、遠慮なくこゝに斷つて置きます。一字々々を嚼みしめて見て味が盡きない。

化粧のしをり

○御婦人が少し御注意なされば、御自分のお顔や手足を綺麗に見せる位な事は何でもなく、やれ美顔術の、理容法のと大騒ぎをなさるにも及ばず、又何の白粉だ、化粧水だ、香水だ、香油だとハイカラな詮議をして時間と金銭を無駄費ひなさるにも及びません。そこで夏期は一年中で一番よく皮膚の美を發揮し得る時期ですから、この期を利用して少し皮膚の御注意を遊ばす様に御注告申上ます。

○一體夏には肌が美麗になるといふのは、發汗の爲めに皮膚の毛孔中に溜つてゐる脂肪や垢の様な汚物が内部から押し出されて、自然的に排除されるのと今一つは熱氣の爲めに皮膚が伸々と騒るからであります、さてこの際に巧みに化粧すれば其美が一層引立つが、下手にやると却つて飛んだ醜いものにしてしまふのです。

◎夏季に於ては冬季の如くに化粧を厚くするのも悪いが、少しもせぬといふのも好くありません、そこで淡白といふことを主眼としたなら自からも爽快を覺え又他にも快感を與へるものです、で其の順序はまづ最初に洗面ですが、入浴の時にしろ洗面のときにしろ例の如く石鹸を使つてごし〱摩するなどは夏に限らず皮膚の爲めに垢を取り膩を去つて、一寸はさつぱりさせますが、實はパサ〱に荒してしまふのです。

○殊に夏の如く皮膚が伸びて軟かくなつて居る時などは、一層荒れますのです、此上に白粉をつけた所で旨く乘る筈は無いのみならず石鹸の成分中には角質を溶解する性を持つて居るから、顔面などはかサ〱になる許りでなく、劇しい刺戟の爲めに却つて吹出などする様になるのであります。

◎又小兒などは太陽の熱氣の爲め弱い皮膚は忽ち作用を受け、水脈は循行を防げられて直きに汗母を出來す、入浴の度にこれを石鹸で洗つてやると汗母はその爲めに益々殖えるばかりです。

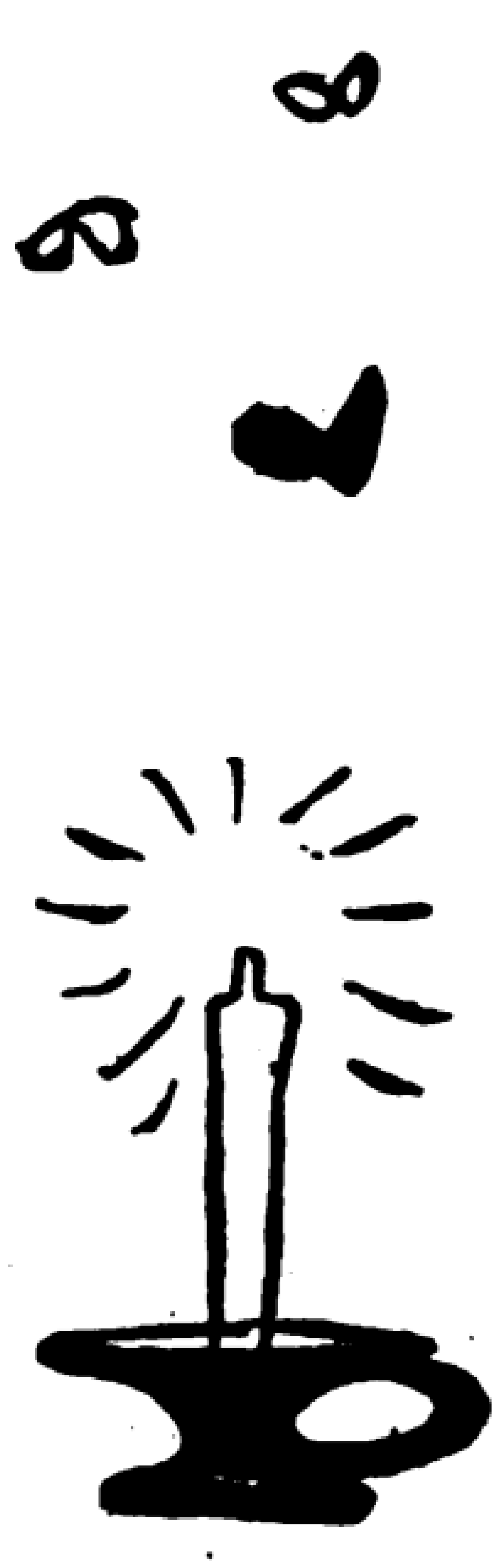
◎然らば石鹸の代りに何を使ふがよいかといへば、糠と麩が一番よい。これを等分に交ぜて使ふと、顔などは艶々と滑かに光る様になつて白粉の塗も極く好い、さて顔を洗ふには髪油や垢の溜り易い生え際と汗の脂の滲る鼻の兩脇と目の周圍を靜かに十分に洗ふのです、洗ひ了つたらば乾いた布で水氣を拭き取る、此際水氣の付いた儘自然に乾かすといふ事は夏でも冬でも大禁物と思はねばなりませぬ、乾いたらば上等の水白粉を薄くのばして幾回も揉み込むので、決して他の時季のやうにクリームを白粉下としてはいけません。かうして下が出來たら愈々白粉ですが煉白粉でも粉白粉でもコテと塗りつけるのは、發汗を止めるから衛生上に悪い許りでなく、其中盛んに汗が出そめると剝げて實に見苦しいものとなります。

◎でこの汗の出ぬやうな塗り方、即ち汗止めといふのは好くありませぬから、汗は出るに任せて拭取る、最も好いのはレモン液を落して手巾で拭き其後で粉白粉を刷毛につけて一面に叩いて置く、そして粉白粉は晒布の袋に用意して置いて、出先きなどでも前の手巾で汗を拭いては叩く

やうにするがよろしい。

◎大抵な婦人が夏に於て一番恐れるのは日焦である、そして日光の反射作用の爲め、戸棚の中にでも隱れて居ない以上どうしても焦けるのであるが、是を巧みに防ぐ法もあるから御安心なさい、それは前に述たレモン液で外出の際など必らず數滴を塗り、手巾にも浸して所々拭くと日焦を防ぐ上に顔面に一種の爽快を覺えて、腫物なども未前に防ぐ事が出來る、又他の法は化粧を施さぬ顔面へポンピアンクリームといふ透明なクリームを厚く塗りつけて置いて歸宅の後加里石鹸で洗ひ落せばよい、要するに夏は薄く化粧し汗は出るに任せてドン／＼出し、是を拭き去る事さへ怠らねば自然に艶々しい色澤を現はす事が出來るのであります。





矛盾した生命

野路の雨

自己を欺くものは最も不幸だと思ふ。

こゝにある人を點出します、書くに先だつて其名を彼女といふ代名詞を適用しませう。

多血性の感情に走りすぎた彼女はとかく心の平安が保てないと見えます。

其癖見掛けは如何にも樂天家らしい鷹揚な、世事に頓着しないと云つた樣なあの態度、パッチリと濕ひのある眼、何處か名人肌とでも云ひたい香が致します。内實自分でも那麼な風を、大に衒ふて居る傾向が現はれて居ました。鳥渡見るとあの快活な話振りから、いつも無邪氣な其話題が、側面からは心に何の憂愁も含んでない人としか思はれません、眞實に男の樣にさつぱりとして敬入る方ね、なんて評されるのを聞くと私は彼女の爲に一掬の同情を注がずには居られません。

淡白な水色のさらした話振りの中に潜むであの愁哀を、恐らく看破し得るだけ微妙な官能を持つた人はありますまい、それだけ彼女が自他を欺くのが巧妙と申すのでせうか、それとも世間の觀察といふものが鈍いのでせうか……。

結局總評を下したら不得要領な人格と云ふのかも知れません……けれど私だけは知つて居る、彼女の鋭い神經――感傷的な心を塗り隱くして居るすべての動作が皆、涙のしとりが含まれて居るではないか……。

彼女が沈默して居る時は非常に人格といふものを考へる、談話するときは重んじてる人格を零にして了ふ。

「貴女は月見草の花だわ、何も春の花の樣子をして人前を飾らなくとも可いぢやありませんか」

と私が思ひきつた事を云ふと、ちらつと眉宇に暗雲が

掛つて、

「全くだわ……だけど私も其赤裸々といふことが猶つらいもの……誤解されたつて介意ふものか」

と調子だけは淡々と諦らめた樣に、云ひ捨てるが、あれで內實三日や四日はそれに腐心して神經を惱まして居るに違ひない。

彼女は何だか月見草の樣な性格だ、

ある時、私の處へ遣つて被行つた、而して私の机の處へそつと坐つたあの姿が奈何しても夕闇に咲く花の樣にあはれでした。

「奈何したの」

「いゝえ……何でも無いけれど、家庭なんかつく〳〵厭になつ了ふ、到底私なんかそれに權衡を採つて行く惱力はないわね」

人前には浮々しているが、いつも私と面と向ふとかうしたしんみりとした聲をきく。だから始めはわざと悲哀を誇張しているのかと、邪推して見たが、さうではない、不思議に私と二人はある偉大な情調で結びついて了つたのですもの……何で私を僞つて居りませう……。

ある會社の重役をして居る兄樣を、阿母樣とお嫁さんと何不自由ない暮し向きだが、矢張り其處に暗鬪がある。

彼女は何だか俗界の渦卷を經めぐらして、其泥の香に染みさせるのは可哀相です、

たとへば尾花にすだく蟲の音、月に宿かす片庇の草の庵に超然として趺坐させたなら、あの感傷的な心がだん〳〵に癒へて行くであらうか……。さもなければ一層歌舞喧爭の街に放つて置くかもしくは鏡花の筆に掲る樣な魔女にでもなつて了ふがよからう……。

さういへば、彼女は鏡花崇拜で、其小說の女主人公が大好きな相だ、それが好い、一層小說の樣な屈曲した運命の變化にでも逢つたなら、却つて彼女の精神的活路を見出すかも知れないけれど、現在あり勝ちな葛藤窟で在來の家庭の苦勞をさせるのが、全く可哀相です。

「私尼樣にならうと思ふたけれど……」

と眞顔で云ふから。

「そりあ、可いぢやありませんか」

と笑つて答へると、

「……だけれど廢めて了つた」

「まあ、奈何して」

「だつてね、新參の内はお味噌も摺らなくちやならないし、加之に人の軒にたつてお經を讀まなくつちやならないんですとさ」



偶とすると這麼風で、自分から云ひだしては、すぐ打消して了ふ、がそれは上の空で一度考へた事は、いつでも綺麗さつぱりと諦らめた事はありはしない。

彼女のお宅が一度非運に落ちたことがある：：どうして今のお暮しなぞは及びもつかなかつた。那麼事の機會がある感化をあの方の心に及ぼしたのかもしれない。

最も尼になりたいなぞ串戯らしく口にするのは、久しい以前からです。

8町の一廓、今はもう一體に町家になつて了つたけれど、まだ以前は蓮池だの蘆の葉が横樣に水に漬つた沼なぞに多い小路に、石地藏を安置してある尼寺がありました。

丹塗の剝げかゝつた門には鬼蔦が搦まつて、初秋は殊に美はしい生垣のほとりを、毎朝若い尼樣が掃除をしている、未だ少さかつた彼女は、ひどく其趣が印象されたと見えて、私尼になりたいわなぞ、云ひ出す度毎勝氣な阿母樣によく叱られて居ました。

それに彼女の一族には佛緣の方が多い處へ、彼女が非常に薫陶を受けたのも眞宗の老僧でありました。四時五敎の春の花、三體卽世の秋の月を慰安として靜かに考へさせて上げたいけれど、あの女の生命のやうな黑髮を斷切て無念無相に彼方はなれるでせうか、なれたにしても私は友として、いざとなればきつと傍觀することが何で出來ませう‥‥。

「私が尼になつたら、さうね‥‥‥白綾子の着物に濃紫の袈裟掛けて、美しいでせう、だけれどさうなると十軒店へいつて首を見立てゝ來なくつちや‥‥ほゝほゝ」

と人にいふ、誰がそれを眞實にするものか、眞實に弱い〳〵女、私は齒痒い、何故さう自己を僞つているのだらうと、貴女の眞實の人格は誰も知つては居ないのに‥‥。

彼の方は決斷の人ぢやない、事にふれ聞くにつけて煩悶の人なのでした。

彼の方をお家庭で私はどうも世間並の小姑の足跡を踏ませたくありません、けれど彼女はよく人に、所謂小姑的の口吻をはかりて内の嫂さんがどうした、斯うした、善いの惡るいのと、かけかまいなく話して居る、それで居て、決して此樣なさもしい人格ぢやない。

「私、なりたけ嫂さんの氣に合つてゆく樣にと眞實はつとめて居るんだけれど、矢張附燒刃ぢやないかと、自分でも氣が引けるし、先でも遺り惜からうとお氣の

毒でならないわ」

それだけの柔しい美しい氣を持て居ながら、どうしてさう人前へ出ると、全るで人格が變つて了ふのと、云ふと。

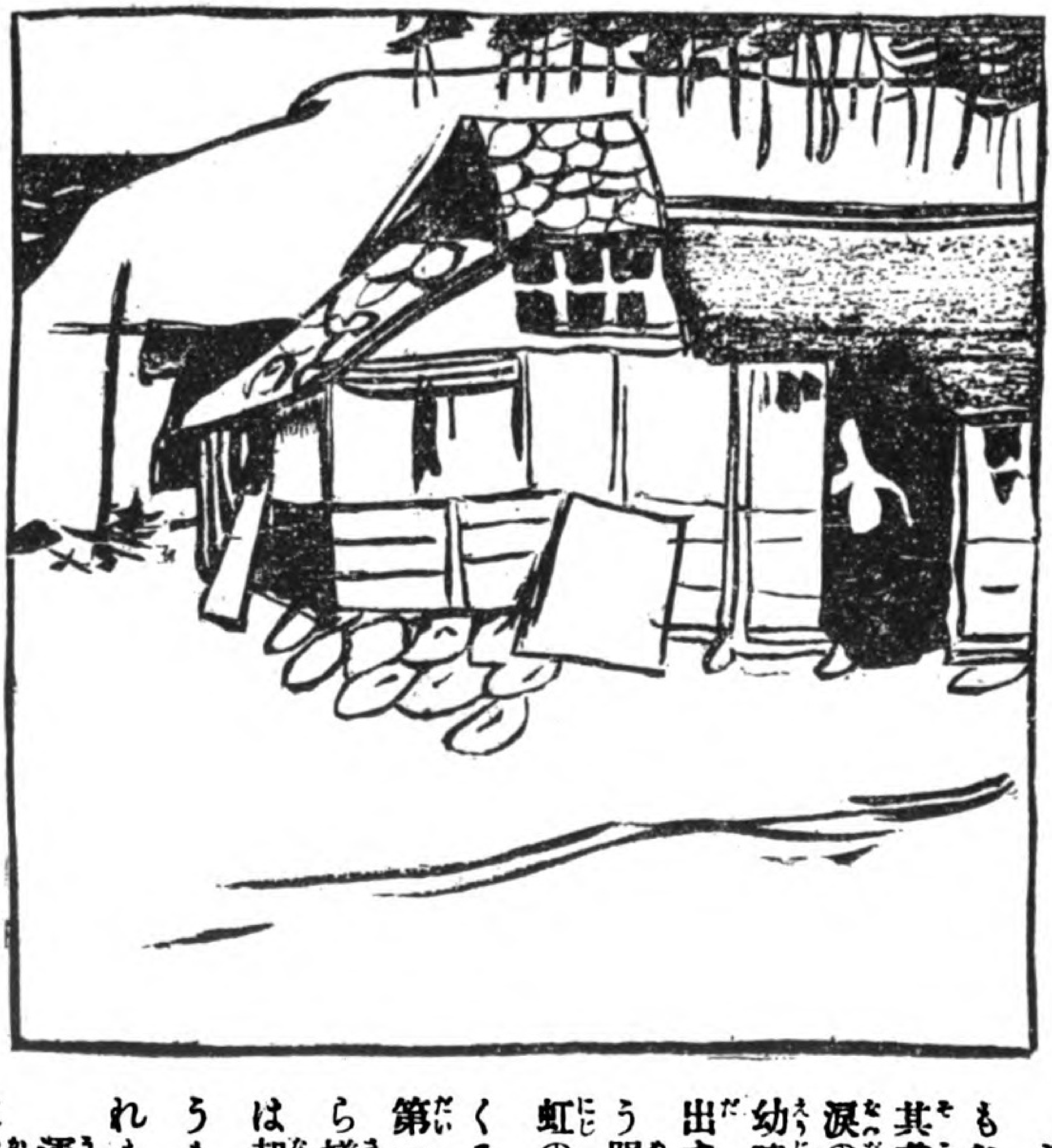
「いゝわ、仕方がないんですもの」

なんで、仕方がないと澄ましては居られない癖に……。

私は猶なつかしい友の眞價を默するに忍びません……斷片的に此面影を追及して見ませう……。

……………

ある時私に寄越したものに。



――樣、これは私の告白ですよ。

追懐といふ語を如何にもなつかしがりますね、其處に潛んで居る暖い涙の味をさかのぼる吾幼時――廣き世間に踏み出すべき出發點――。かう眼を眠るとぼうとした虹の輪の樣な思ひ出が、くる〱とくるめひて、第一出發點の自我があから樣に展開されます。今は却々に昔が戀しい私どうも落付いた氣分にはなれませんのよ、

運命の幾山川を經る度に必らず出發地のいかに樂園であつたかを省る此心は、丁度細い白銀の錐の先

で貫かれる様痛切な感覺から轉じて、瑠璃の鏡にてりかへる人格といふものに焦慮される。

ソドムゴモラの滅亡の火に鹽柱となつたローの妻は、神が後を顧みる勿れといましめなされたと自ら破ぶつた無熱地の地獄の境。

私も大方這麼類だわね、私の行爲はすべて失敗に歸して終ふ。自ら破つた性、人格をあとで考へると私は狂氣の様に顔を被ふて泣くのでした………。

……………………

彼の方は今でこそ髪にはリボン一つ、つけないで、あゝやつて居るが矢張り昔の幻影を追ふて居るのだ……何と云つても今は兄様の食客だもの淋しい境遇です、あけぼの染の振袖に糸錦の帯かゝやかした十六の春の美はしさ、彼女の忘れ得ぬも無理ではないと思ふのでした。

手紙のその二、

昨夜○○様にお目に掛りました、

半圓形の月が蒼澄んだ空にぽつかり浮いて、堀割の水がしづかに光を吸ふて居る町のはづれでした。

眞實に久らくでしたの、それからそれと、私は話たいやうな氣持がするのに、向ふではちつとも冴々として被入らないのよ、さうしては、詰らない〳〵と一々○○様つたら云ふのですもの、ですから遂ひ

「それだつて、貴女はもう旦那様が隨いて被入るから結構よ」

と丸髷のお姿をぢつと見ました、御存じでせう、新派學士とマレーチ遊をしたのを……。

「力になる様な人なら善いけれど」

といかにも同情を呼ぶ様な表情をするので

「奈何でせうかね……貴女は幸福だと皆云つて居ますわ」

「左様ですか……私なんか……奈何せ」

と俯向ひて笑つて被入る、それが眞實に術なさゝうなのでしたが、私はあとで聞いたほど、悲境に落ち入つて被入るとは思はなかつたのでした。

お互に境遇が變ると、何だか遠慮が出來るものね、

さうかと云つてなつかしい昧は同じで放れ難い思をしながら、暫らく一緒に歩きました。

――様さうしたら真實に意外な事に出會しましたのよ。

月明りの町が突然軒燈に輝く、不忍池の邊に來かゝると、ある待合の格子が開いて、艶めいた銀杏返しの女が「お近い内」にとか何とか云つて送り出したお客が、ぱつと流れた火影で見ると、奈何でせう、私だつて知らない顔ぢやない、○○様の夫なのよ、



顔を見合した時は、三人ともきつと夢にもかけない様な珍無類の風でしたらうよ……。

……………

……………

角帽時代には○○様はあんなに打解けていらつしつたのに奈何したのでせう妙におど〳〵して被入るの、此晩ほど私は異性

と親しく口を聞いた事はありませんでした。○○樣の沈默が私の心をそゝり立て、鳥渚弱者の前に反抗的な誇が起つて、微醉の人を相手に冗談云たり詰らない事を笑つたり…其時は妙に心が動搖してある感興にそそのかされました、電車や車や往來の人が走馬燈の樣に動いて居る。夜の市街は心までもあかるくなる樣な白熱燈がすべての影を鮮明に地上に印しました。此とき私はある羞恥がむら／＼と起つた、で彈かれた樣に別れて了ひました、そして○○樣とお二人行くのを見送つたとき、矢張り自分は獨りだと思ふと、實際今までの態度が餘り輕々しく男の相手になつて、人格を無視されたのだと感じた時、さあ私は慚愧、後悔、カッと熱した頰を押へながら、夢中になつて仲町の通りへ驅け込みました……。

…………………

悲痛の聲弱き聲、貴女も女ですね、と私は讀んだときすぐにかう叫ばずには居られませんでした。

また、ある時。

——樣、私はどうしても敗者です、智慧の敏い八方美人と對抗して行くことは出來ない、と自覺しても、其道から脫することが……あゝ矢張其處に執着が殘る。

ある人は自分の爲すべき事自分の立場から以上に差出て、傍觀するにいまわしいほど足の爪先から頭の上までもこせ／＼と遣つてのける、年は若いが利巧者だの確乎しているのと、信用を博して居るけれども、私は自己の働きより以外に立出でゝ人の働きを奪つて己れを利するといふ事は、出來ないのです……詰り失敗者の失敗者たる原因でせうけれど、さうした性格は天賦本來の物質である、何故各自が本能のまゝ世間を通過し得ないのでせう。貴女は愚痴だと云つてお笑ひになりませうが、私は、自分が到底弱者だと思ふと、眞面目に努力する事が厭になるのです。世界の言葉を一つならしめんと築き上げた、バベルの塔が壞されて以來、どうせ、私達の樣な思想な數千年來沒交涉なものです。

──様は疲勞しています、もうどうか私の人格云々を責めて下さいますな、この心は大童になつた落武者の樣に、討死するか逃走するか、行雲流水の定めないものです。

私は一度かう云ふことを云つた事があります、弱者は人の同情に生きるかも知れないが、私は弱者になりたくない、强者たらんと粧ふのはそれが爲です、全く自己を欺いて居るのです…。

…………………………

彼女は不幸ではありませんか、

私は今永々と綴つて見た其面目。かうした人もあるかと思ふと、一層深く心理を推察して悲しまずには居られません。

然し私の云ふところ、思ふ處、彼女の人格を十分に現はす事は不可能であるかも知れませんけれど、彼女のすべてを忍ぶほど私の脈管には同情の血潮が沸然と湧きます。

鋭い燒かれるやうな此暴さを彼方は奈何していらつしやらう？

避暑にも行かないといふから、又机の前で默想にでも耽けつて居るのでせう。

私の家へも、○○様のお宅へも見えず、したがつてあの付元氣の話聲も聞かないこと、數日餘り…。

今夜は訪問して、露骨に彼女の人格を解剖して話して上たら、

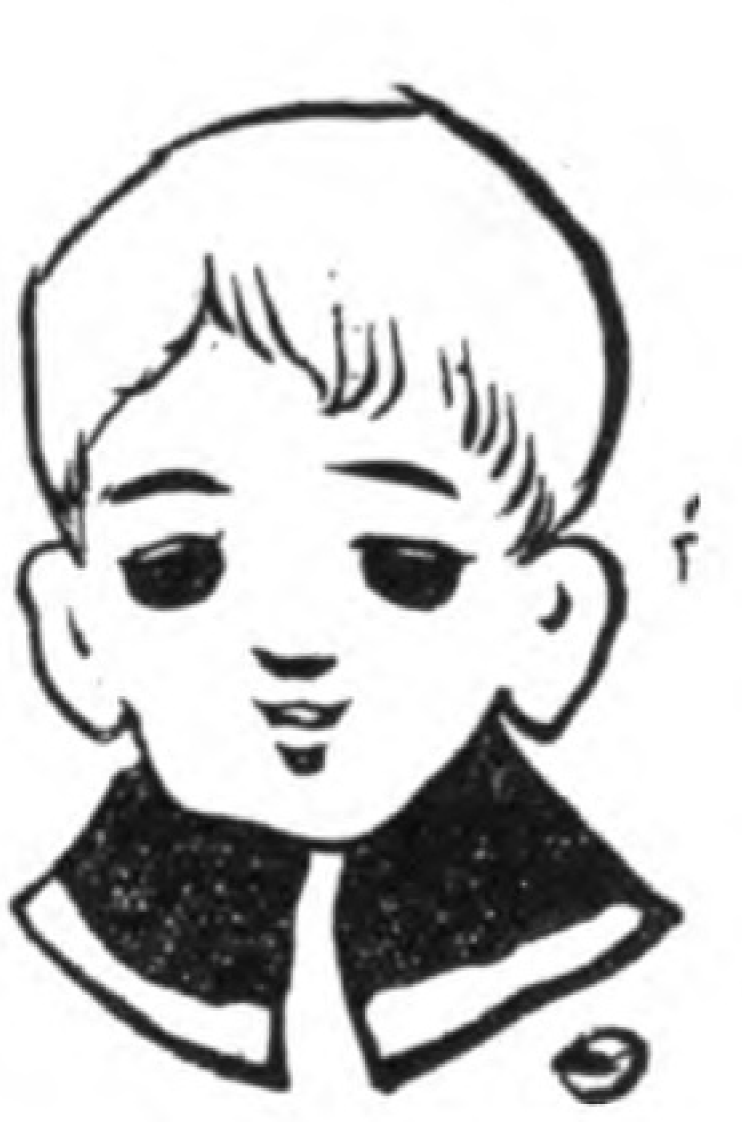
「眞實にさうだわ…いゝわ仕樣がないんですもの」

淋しい微笑のあの顔が眼に付く、而して又煩悶させるのも罪な事だけれど…。

秋草そめた浴衣を着て、おくれ毛の多い、白い襟あしを見せたあの姿が…眞實に月見草の樣なしほらしい其都度私は「何故自分で人格を下げて了ふの…」と叫びたくなる…。

私は彼の方の幸福を祈りませう。彼の方を解するものは恐らく私一人だと思はれる故。偶とするとそんな時「私は弱者になりたくない」と叫んで被入るかも知れない…。





華族系

内藤千代子

一

立てこめし朝霧はいつか晴れ渡つて、水天髣髴の間に薄すりと伊豆の島山の赫奕たる日光は宛ら玻璃の如く輝き、立ちならんだ海水茶屋、ひるがへるフラフ、こゝ藤戸ケ濱の一帶は今し人の出盛り、渚の賑ひ、笑ひ聲、浪にひゞいて熱砂吹く風頬にぬるし。

せゝらぎ亭のお葉さんは美しい女でした。花ならば濃紫の桔梗か、藤戸辨天とは漁に出る村の若者たちの取沙汰で、尤物だとか、いはくのありさうな代物だとかその容色はすぐ避暑客の口の端に上るのでした。

けふも清ちやんと云ふ小女を相手に、早くからいそがしく働いてゐます。紺地にあらい横縞の縮みの浴衣に博多の帶をきつちりしめて、髪は引詰めの束髪、でも生ぎはがいゝからちつとも可笑しくありません。やや面長の、ふつくりした顋のあたり、いかにも輪廓がいゝ、肉の厚い落ちついた鼻、眞紅な脣が凜と結んで眉は少し薄過ぎたが、中肉の脊は思ひきり高く、黑繻子を打ち合せたお納戸のふつくりした脇明けのあたりから、たら〳〵見ゆるしよひ上げの紅がなまめかしい。

「いらつしやいまし、お掛け遊ばして？どうぞこちらへ、」

お葉さんの聲はひくいので掛茶屋の姉さんなんかにはむきません、悠然と入り來つたのは牛蒡縞の熨斗目形、旅館の浴衣にパナマ帽・芙蓉の煙を吹かせつゝ眼鏡をかけた二人づれ、一禮して麥湯くんで、行けば、

「姉さん、いつも美しいね、」

ト八字髭の二ッ三ッ年下とみえる三十七八の方のが巨蟹の脚のやうな毛の生えた節高指に指輪嵌めた手で煙草盆引よせ乍らニヤリト笑ふ。

「何誰様でゐらつしやいます、」

お葉さんは眞面目顔、

「君の方ぢや知るまいがな僕等アとうから……まだ君が東京にゐた時分のことも知つてるんだ。」

「おや、左様……」

「何は、相替らず御健在かね、」

「はア、父はおかげ様で……」

「お父さんもお父さんだか、何さ、その例の、」

「お人違ひで御座いませう、」

端然たる眼をあげて、沖の方を打見やる。その時あちらの方の縁臺で呼ばれたので「はーい」と答へて空盆を下げたまゝその方へ行く。

「君！」飛びこんでゐらしたのは高山男爵の若様、お葉さんは嫣然してふりむくと、もう脱衣場から猿股一つて右手を輪の様にふり乍ら、海邊をさしてかけてらつしやる。御きりやう美しの若様。お葉さんはこの若様を見るのがうれしかつた。

この方の御令妹様、お十六ばかりなのがいかにお腹ちがひとは云へ、それは〳〵何と申上げてよいやら、ダイヤの指輪も錦の御帯も烏が孔雀の羽を拾ふたやうで、光る様なお兄様のお傍へならべては、まるで今戸焼のおかめさんみたい。

他人でさへさう思ふものを、お母様のお心になつたらどんなでせう、若様をおうとみ遊ばすは定のこと、このまた若様におつき申してる乳母さん、五尺三寸もある大きな方をいつまでもなめぬばかりに可愛がつてお世話をやいて、これには流石の若様もはしたなくは有仰らぬけれど。

「ほんとに僕ア困つて了ふ。日曜に寄宿舎からかへるのだつて、我奴が居るとうるさくつてね、無能のくせに下らない干渉ばかりしたがつて……」

なんて可愛いお口許からおこぼし遊ばす。

お葉さんは熱心に若様の行衛ばかりみつめてた。身

をゝどらして水煙立てると、もうどれもこれも同じ樣な黒坊主ばかりで、どれがどれだか、見分けも何もつきやしない。

「お葉さん……今日は」杉浦樣のお孃樣がはひつてゐらつしやる、パチンと白茶のパラソルつぼめて、あまり人が一杯なのに何處へ掛けやうかとためらう風情、思ひ切つては華族前髮、眞紅のリボンを左にさして、白絽の襟に緋博多の帶高く結んだ身じまひの正しさもなみならず。



「まアようこそ、今日はお一人でゐらつしやいますか、」いそ〱と坐をまうける、令孃は笑ふ度少さい金齒が可愛う光る。

「ヤヽ」と立ち上つたのは「送り狼」との綽名を取

つた中本さん、オヤと思つてみてると

「失禮ですが貴女は杉浦みち子樣で……」

「僕は中本と申します、どうぞよろしく。いつ當地へお出になりました、御令妹もお一緒ですか、どうも御別莊の眺望は絶佳ですからな、恐らく當地第一でせう何ですかお母樣も……左樣で御座いますか、かねがねお名前や外ながらお姿はお見受け申して居ましたけれど失禮を……」

　令孃は困つて、「ハイ、ハイ、」とばかり齒がゆい樣なのを、

「ちとお遊びにお出下さい――、はアぢき泉屋のそばで井東と云ふ家に居りますから……」

なんて早稻田の徽章の帽子をいぢくつてる。

　淸ちやんはお茶をはこぶに暇なく、サイダよ梨よと呼ばれてはこまねずみの樣にかけまはる、お葉さんもひわ色の襷かけて如才ない調子であちこちと動きづめかつては朋輩とはり合つて、園遊會の接待係りに客をひいたる事はありたれ、いまかゝる實地に應用しやうとは……。

　折しも脫衣場から走り出していちじるく視線を引いたは、めづらしくも眉を落してあと靑々とした二十五六のおかみさん、雪のやうに白い身體を黑白龜甲形のメリヤス水着に包んで、丸髷に經木の游水帽、兩手で帽のはしをおさへて、はねる樣にして浪打ぎはへかけて行く。

　淑女に對する禮儀を守つてか、毛脛の大男がしほらしうも黑の水着をつけたもあれば、帽子もかぶらず兩鬢ふり立てゝ猿股一つの女もある。

　また向うの緣臺を占領してさわいでゐる十人あまりは、二三人の若い女もまじつて、姬御前の身のあられもない、多勢の人も居る中で、曲線美を惜しげもなう赤いお腰卷だけになつて海風に吹きなびかせつ水瓜をかじり、ビールを飮んでゐる、お葉さんは見るに得堪へず顏をそむけた。

　隨分醉漢につかまつて仕末におへぬ事もあるので、お葉さんの嫌ひなものは、よつぱらひと緣談と牡丹餅

とは毎年茶屋の手傳ひにたのまれる清ちやんの名言。毎日汐風にさらされ乍ら、色も黒まぬ素顔の美、ことしも某館に滯在のなにがし富豪の若旦那が、心も空に憧れてゐるさうなですけれど、相手がお葉さんでは橋渡しする人もありません。柳眉たちまちさかしまに、額に黒雲が湧きませう、大ていなものはその意氣込に驚いて引下つて了ひます。

　その中高山の若樣が上つてゐらしたので、お葉さんは後の井戸端へ行つて、甲斐々々しくつるべをしごき上げ、お頭から水を浴びせ申す。お十八にしては大柄のお脊も高くて、



お二十ぐらゐには見える。毎年片瀨の天幕生活にきたへ上げられて、泳ぎも達者になされば細いけれどもしまつた肉づき、病ひ氣のない青年の美しさ。

　やがて、ビシヨビシヨにぬれた光澤のいゝお頭からタオルかぶつて、「君、お茶を一杯くんないか、ヤー君の顏どうしたんだ、」

　ふき出しなさるお葉さんはあわてて、手の甲でこすると、鼻の頭が砂だらけ。「あら、若さまだつてこんな召し方して……お襦袢の襟が折れて居りますわ、まぢつと遊ばして？：……」

おとなしく脊をおかゞめ遊ばすを、直してお上げ申しながら。

「若樣のお身體のお立派でございますことねえ、若樣も軍人におなり遊ばすので御座いますか、私は海軍が好きで御座いますよ、」ほゝ笑むと。

イヤ僕ア帝大の工科へはひるんだよ、造船の方へとまじめでおつしやる。

まア若樣のやうにおきれいな方が船大工のおまねなんぞ……金槌でもおもちになつたら、お手の皮がやぶれて了ひませう、」と笑へば、

「ウソ云へ」つてひろげてみせられたあたゝかいお手を、お葉さんは一寸さはつてみて、そのまゝかるく握りしめ。

「まあどう遊ばしたので御座いますの、タコだらけ：……まるでかたいつたら角のやうでございますわ、あらこんなにおけがのあとが……」

「これはね、ナイフがすべつたんだもの、こつちの手は火藥が破裂してやけどしてね、」

ボートのチャンでベースのチャンで評判の運動家、ボールを受けるために左右の指が關節から屈まつてゐて、しかも不似合なほど大きい。

「午後からは釣に行く、」

とてさつ〳〵とかへつて行かれる白飛白の後姿、飽かず見送つて、似てゐらつしやる、とまた思つた。人なつかしさうな物の云ひ方、黒い切長な眼をみはつてぢつと相手を仰がれる時、可愛い若樣、お美しい若樣、あんなおきれいな方の奥樣におなり遊ばすのはまアどんな方だらうと考へて、お葉さんは肩を打たれるまで知りませんでした。びつくりして向き直ると。

「魂ぬかれたやうに何をボンヤリしてるんだい、いま歸つて行つた田舍源氏の主人公みたいな奴ア一たい何だい、」

赤褌組と自稱する五人づれ、本郷邊なら聞がいゝ節でも歌つてゐさうな麥稈帽かぶつて、日に燒けた顔にまつ白な齒を出して笑つてゐる。

「まアいらつしやいまし・先刻から田口さんのお孃さ

んがお待ち兼で…………」

「え、來てる、？さうか。おい今のあれ誰だい、何、高山：華族系をひいた顔だなア、君は華族さん好きだらう」

「好きで御座いますよ若様たちは皆さんのやうにお人が惡くないから。あ、竹田さんいらつしやいまし……」

ゴムの水帽、足袋はだし、板子かゝへてし美しう腕までひだでくゝり上げた黒の海水服、人もなげなる令嬢はにつこりして、一寸帽子をかたげて、



「河野さんゐらしたの、」

「いえ、まだお見えになりませんま、お掛けあそばして……けふはお暑うございますことね、」

「象」と云はれてる農科大學の伊東さん「和尚」とはその帽子の恰好から。栗蟲の樣に肥つた鈴木さん、「藥罐」の中村さん、（之はすぐ熱しすぐ冷めるから。頭のはげるわけではないので）いづれも一騎當千の人物がどや／＼と御入來。

空はいよ／＼深碧に輝いて、雪とくだくる浪がしら、磯の松原の中

をルイザに結つた女が水色の洋傘かたむけて行く。

二

長い夏の日も山もあなたへ沈みはてゝ、いつか夕づゝは空にきらめく。名殘をとめた夕映の雲の色臙脂の海も沖合からたそがれ初めて轟々と鳴る浪の音。

お葉さんは店をしまつて山かけの家へかへつて來ます。駄菓子燕菓子いろ〳〵入れられたガラス箱や、ビールにサイダ、梨、まくわ、葡萄、殘り少なのふかし芋、大きなしよひ籠に入れて、淸ちやんと二人でせおつて、藥罐や急須を手に下げて、折から散歩の人の出盛る中を、伏目になつていそいで行く。

かぼちやや西瓜のごろ〳〵とつんである土間にはひれば、燃木の煙にくすぶつた家の樣、奥の間には母がかたみの總桐箪笥、この家には不似合な鏡臺や針箱やお葉が秘藏のアルバムも光つてゐる。黑い疊、黑い天井、お葉さんの顏のみが夕闇の中にほの白う。

つかれ切つた身體でまた行水の湯も湧かしたり、夕餉の支度もせねばならぬ、明日の朝の米をとぐ、お汁の實の里芋をとん〳〵とんと切る、渦をまく靑松葉の蚊いぶしに、家の中に息もつまる樣。

やがてその煙りの薄らいだ時分には、ほの暗い三分心の洋燈のもとで、無言つた父親とうまいお菜もなくお茶づけさく〳〵とかきこむ自分の姿がたまらなくあはれに見えました。

心持のちがつた父親と、こんな暗い家でわびしいはかない生活をつゞけることは、お葉には堪へられないのでした、自分の身一つであつたらば〳〵と思ふたび父親にすまない樣な氣がして空恐ろしくもあつたが父親さへ見送つて了つたならば、お葉さんはもうこんな土地にゐる氣はありません、たゞ花やかな賑やかな、侍女時代がおもはれてならないのでした。しつかりしてる樣でも世間見ずと云へば云はれるお葉さん、子爵家戀ひしの念の外には、何の餘裕もないのでした。

お葉さんの母親は土地の人ではありませんでした、緣あつてこの家に嫁入つて來ましたが、先夫の忘れ形

見……その時の連れ子がすなはちお葉さんなのでした、三味線が上手で聲の優しい、骨細な美しい人でありました。

生れは東京の神田とばかり、くはしいことは人に語らず、誰も知りませんでしたけれど、何でも長らくある華族樣に御奉公してゐたとの事で、行儀正しく物しづかな、品ある樣は昔の上も偲ばれました。

浪風あらき漁村のすまひ秋につけ春につけ、折々はよわい女氣に堪へかねる懷舊に伯爵邸の榮華の夢は我が一人子の耳にもらされるのでした。

感じやすい少女の心は母と同じ樣にいつか都の空をかけめぐるやうになりましたが、花恥かしき十七の春お葉さんは麻布の某子爵家に、行儀見習として上りました、白丈長の高島田、肩上げのあとも初々しく、その頃から才はぢけた人見知りをせぬきび／＼した子であつたので、夫人の御寵愛も淺からず、朋輩達にも可愛がられて、初奉公の泪も知らず、たゞうか／＼と寢覺こひしき故鄕の空もいつよりとなく、忘れ行くに、水道の水のきゝめは有がたいもので、天成の麗質はいよいよ光りをまし、紫矢飛白など着た時は、何處のお孃樣と、申上げたいくらゐ、氣高う立ち勝つて見えるのでした。

かくて宏壯な子爵邸の奧深う、三年の月日が無事にすんだなら、今頃はお葉さんも緋の手柄に、可愛いのでも抱いてゐるのでせうけれど、夫人のおめがねで、相當のところへ緣づけて頂きたいと云ふ母親の願ひはあだとなりました。

よくある習ひなどゝお笑ひ遊ばすな、お葉さんの初戀人、それは子爵家の若樣でした。

淸樣と申上げて二男の君、その頃江田島に在しました。

羽左衛門に似てゐらつしやるとやら、評判の方で、丁度その年夏の休暇に御歸省の、白の制服制帽に、短劍ガタつかせた凛々しいお姿、一同と共にお玄關に居ならんで、お靴をぬがせまゐらせたその時から、あはれお葉は物狂ほしいまで思ひつめて了ひました。

御足音をきいてさへ身體も打震ふばかり、もし朋輩から清様のおん上でも話しかけられゝば、息もとまるかとおもはれました。

一方の清様はまだお二十に滿つか滿たず、淡白な軍人氣質のそんな感じは夢にもなくて、馴るゝにつれてはお言葉の數も增せど、お菊をお葉とお呼び遊ばしたりお葉と、信とまちがへて叱言を有仰るやらその花のやうな、顔せも可憐な風姿も、御眼にうつつて居るのや否やおぼつかないものでした。

いよ／＼明日は御歸校ときいた前夜など、氣が遠くなつて高いお廊下からすべり落ちたほどで、里心が出たのであらうと、優しくなぐさめて下さる夫人に對しても、たゞ泣くより外はありませんでした。

思ふて思ふて思ひぬいたとて、とても甲斐なき思ながらに思はじとすれど猶思はるゝ。

結婚を意味する戀でないだけに、お葉はどうしてもあきらめられませんでした。いやしい育ちの田舎女、大それた事は願ひませぬ、たゞ／＼此方で思ふばかりもしもこの心通じた時がありましたなら、清様？　可哀想とおぼし召して下さいませ。形は捨てぬ影を追ふ泪は君も許すらむ、と、勝氣の女なれば色にも穗にも現はすまじの用心固けれど、その後清様は御歸省の度犯しがたい威容さへ加はつて、ます／＼近づき難い人となるばかり、御飯のお給仕申すのさへ手がふるへてそのお茶碗やお椀のふたを取つて投り出すやうになさるお癖などは、はら／＼して坐にも堪へぬほどでしたそのくせもし外の朋輩が御用をする時は、すぐ妬ましさに胸は燃ゆるやうでした。戀しい君の本邸に居ます間はたゞ／＼嫉妬の炎と羞恥の念に身を燒かれるやうで、夜さへ安眠は出來ませんでした。

あはれ頬もやせ、悲しみに曇る瞳はけしう輝けど、召し使はるゝ身のはかなさは、空蟬のからばかり、つとめて立ちはたらいて居るのでした。

その中に清様は兵學校も御卒業です、お葉さんは丁度十九の厄年でした、故郷の母親の大病？

可愛い娘に抱かれて、薄倖な母親は逝きました、お

葉さんは泣く〳〵も親類達のすゝめを入れて、子爵家からは一まづお暇をいたゞいて下りました。

優にやさしい都ぶり、折目正しく父親に仕へて、光るやうな美人なのですもの、たちまち村中の自慢の花となりました。子爵家の夫人も御心配して下すつて似合の縁邊や、また村一番の名家から縹緻好みで是非との懇望もありましたけれど、お葉さんの頭はいつも横にのみ振られました。

誠に感心な女でと……よろこんだのは伯母なる人で、彼女はあと取りの一人娘、私がいまによい婿持たせてやりますと吹聴してゐましたが、二十二のけふまでまだ獨り身のはねつけた、縁談の數はいくつでありましたらう。

清様は少尉に任官するとまもなく肋膜を病んで、いまはもう軍職もしりぞかれ自暴自棄のおん身を逗子の別墅に養なうて居らるゝ。

夫人へ御機嫌伺ひは絶えず出せど、清様のことは氣がとがめて御見舞一言申上げられませんでした。

三

夜毎日毎に浪の音が高くなり、海松ばかり打ち上げられて、海邊に秋が立ちました。お葉さんの顔もさびしくなりました。

金線まばゆき芙蓉の峯に落日の夕映、縁の柱に凭つてぼんやり外をながめてゐると、大きな行李を前にしてゆられ乍ら走つて來る車がある、それとみてお葉さんは頭を下げてニッコリした。

「御きげん好う」とふり返つて、車上の令孃は云ひました。

「お近い内に……」とお葉さんの聲にまたふりむいてうなづいたが、白いリボンのマガレット、青磁色の矢の字は山蔭にまがつてかくれ去つた。

お葉さんはホロ〳〵と子供の樣に熱い泪が頰をつたふた。

東京へ行きたい、東京へ、お邸が戀しい。私は〳〵いつになつたらこの村を出られるのかしら、

軒の低い煤けた家で朝から晩まで賃機や人仕事、人にとやかく云はれ乍ら、聞くに堪へぬ蔭口をつかれながら、何が樂しみ、何がのぞみでかうして居なければならないだらう。

好人物の父親はお葉のことについては何とも云ひませんでした。三つの年から手しほにかけたのを、一時は人も羨むまで、孝行娘などゝ評判されたものが、お葉は人の變つたやうに、他人の子なんか育てるものぢやない、と二言目には引合に出される位になつて了つたのですけれど、強ひては娘の氣にさからひもせず少しばかりの畑でも作つたり、繩でもなつたり、二合づつの晩酌が何よりのたのしみ。

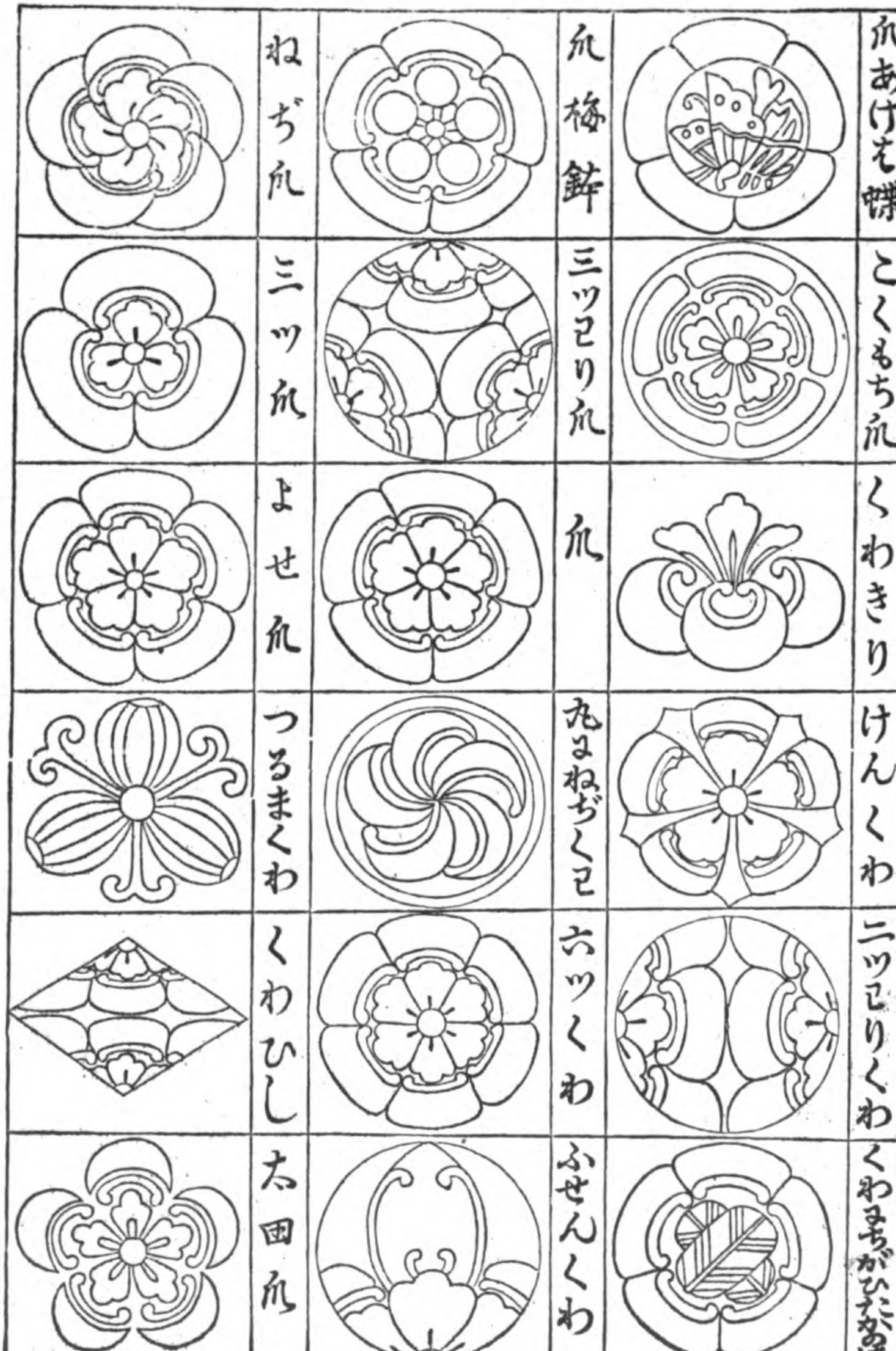
避暑避寒にはずゐ分都人士も入り込む土地故、すねて立ちたる女郎花、金にまかせて我が手活の花とこゝろみた人達も一人や二人ではありませんでしたが、お葉さんはそんな時、いつも口惜しがつて泣きました。あんまり、氣の強さにあきれて、この頃では誰も手をひいて了ひました。男嫌ひだとか不具だとかいろんなことを云はれるのも、もうさま〴〵な噂をしつくされてから後でした、村人は憎しみの眼をもつてお葉さんを見て居るのです。

さすがのお葉さんもだん〴〵世間がせまくなつてゆくやうに思はれて……この凋落の秋に對しては燃ゆるが如き胸の血も、流石に平靜たらざるを得ないでせう、詩の國の建設、感懷橫逸の境地は正にこの時………、多感なる、お葉の眼底に映ずるものは、そも何でせう。

初秋の空清く澄みて、ほの白い新月は夢のやうな光りを投げてゐる、とゞろ〳〵ととゞろく濤聲、サラサラと風が鳴ります、病葉が二つ三つ舞ひ落ちました。



木瓜の意匠


瓜あげは蝶
瓜梅鉢
ねぢ瓜
こくもち瓜
三ツ已り瓜
三ツ瓜
くわきり
瓜
よせ瓜
けんくわ
丸にねぢくわ
つるまくわ
二ツ已りくわ
六ツくわ
くわひし
くわにちがひたかのは
ふせんくわ
太田瓜



千どり

紅梅

ひつそり閑とした京の街の雨の夕ぐれを、四條手前で車を下りて七八間……呼べばこち向く花うりむすめ、娘買ひたや花添へて……と小唄にうたふといふ、その花賣りの若い女に道を問ふて、二人は千どりの門に着いた。

白茶の麻暖簾に、紺で鳥といふ字を、恰度鳥のやうな格好に面白く染め拔いた、その傍に、同じ色の文字で、輪の中に「千どり」と吊して記いてある。頭の上には四角な行燈があつて、それにも同じ文字があつた

「あれ、此方にくゞり戸が御座んす。此處からお入りなすつたが好う御座んしよ。」

と云ひ〳〵、乳母やは、低い小門を重さうに開ける鈴の音が、ちり〳〵〳〵んと薄暗い敷石の上を傳つて向ふへ響いた時、突き當りで、障子の開く音がした、、ぱたりと閉して、左の手へ傘の柄を持ち替へたが

「乳母やあ、其方の包みは私が持たうよ。」

と云ふのをかまはず、片足あげて膝で支へて、又ちよつと持ち直す。

小窓の障子が開いたのは、懷しい姉が、ちらと此方を見たのである。と　白い面がふつと消えて、今度は傍の格子戸を開けて待つ。

「まあ、美以ざんの珍しい。乳母やあも御苦勞な……さあ〳〵お上りなさいまし。此の降る中を好うこそようこそ……」

と下へもおかず手をとつて、合羽よ傘よと世話をやく。

庭をへだてた彼方の廣い廊下を、通りかゝつた女中

を見ると、姉は一寸手をかざして呼び止めて

「あの、お君さん‥‥小盥にお湯をとつて、此方へ廻さして下さいな。」

「は、好うおす。」と和やかな京辯で‥‥島田の影がついと消える。

　手足を拭いて敷臺に立つた時、乳母は自分のびん櫛をとつて、ふつと吹いて、手早く亂れ毛を掻き上げて呉れた。

　いそ〱と先に立つ姉に従いて、幽かに心覺えのある。例の階段わきの八疊に通されたが、たつぷりした友染縮緬の座蒲團をしいて、桐胴の火鉢を中にさし對つた時、私はふと、姉が澤々した丸髷の端に、ちらりと赤い手絡が目に入つた。

「實際にまあ思ひ掛けない、來る氣なら何日來るともちつと早く葉書でゝも知らして下さりや、停車場まで迎ひの者も出しましたに‥‥でも好く御兩親が、かうして遣して下すつたわねえ。雨は降るし、もう久しくは成るし、分り辛くてお困りでしたろ。」

身も心もそは〱と、今更らしう打ちまもる。

「えゝ、餘りおなつかしくつて‥‥それに、此の間からのお文も拜見いたしましたし、せひ一度はと心にかけて居りましたものですから、遂々今度は、母さんから父さんへ、願つて頂いて、乳母やと二人で參りましたの。」

「まあ、それはお嬉しい、久しくお貌も見ませんが皆樣おかわりも無くつて‥‥おゝ夫は〱、ぢや、今度は少しゆつくりしても好いんでせうねえ。さう〱此方の阿母樣には、まだ懸けちがつて美以さんも初對面あなたの事は、平常からよく噂にも出ますもの、來られましたら嘸喜ぶで御坐んせう。あの、此の春に淸水の方へ普請をして、其所の隱居所に參つて居りますの。」

　三尺の襖を脊に、白い指を火鉢のふちに一寸かけて片手は風にしなうやうに後に支へた。朧な縞御召の袷の胸に、紫がゝつた繻子の帶、淺黄縮緬の帶揚げがふと、歌舞伎で見た宵庚申のお千代を思はせる。母に

よう似た色白の瓜核顔で、溢るゝほどの愛嬌こそ無いが、品のある目元なら鼻筋なら、紅を含んだ口元まで水ぎは立つた姿容。

「あ、お出でやす何やら彼やら忙しなうてあかんのどしやろ、御挨拶も出來まへんで御免やすやはる〳〵の處を好うこそ〳〵お越しやはつた。おゝ、女子しゆの氣がつかず、未だ茶々一つあげまへんでなあ。」



と莞爾して女中頭のお芳といふ、見知り越しの赤前だれが、襖ぎはに突き膝して叮嚀に會釋した。

「まあ、お芳さんいつもお忙しくつて結構で御坐いますわねえ。どうぞ最う、お客様扱ひには成さらないで構はず御用をなすつて頂だい。」

「なあんの貴女、こないな事ばかりもありへんけどな、ま、御ゆるりと居やはつておくれやす。」

「恰度風呂も湧いてある、ちやとお二人で汗洗ふてお出でやはる間に、お好きなものでも拵へまほ、な、お内儀はん、何なと此方の好えものをな。」

「あゝ、異つたものも出來ないけれど、美以さんは僞か鳥むしが好きだつたわねえ。ちやお芳さん、鳥蒸しと、それからフライでも……。」

「あい〳〵、好うおます。ついでに蝶足のお取膳でな、ほゝゝゝゝ、おや又後ほど上りまほ、御免やすえ。」

すらりと立つて、廊下へ出る。

前は、しよび〳〵〳〵〳〵とせゝらぎの聲。

中硝子の障子越しに、雨は倘穢のやう、銀流す河原をへだてゝ長蛇の走る峯々は、夕の街の、飯炊く煙りとともにぼうと霞んで、對ひの曳船の人の足どりが千條の絲にあやつられて傀儡めく。

「美以さんは、何故まだ島田にはあげないの、此の桃われも好くうつるけれど、私しや、早く文金におあげのが見たいわよ、あゝ、此の風ぐるまの前ざしは、東京の父さまが何時ぞや奈良へ行かれた時、二人へのお土產につて、名のある蒔繪師に拵へさして下すつた品……私も未だ大切に持つてゐる。髮結さんは、矢張り以前から來てたお光さんかえ。」

とさし覗く。

「えゝ。」

といつて、口ごもりつゝ

「姉さんは、何時から丸髷にお上げなすつて、私ちつとも知らなかつた。」

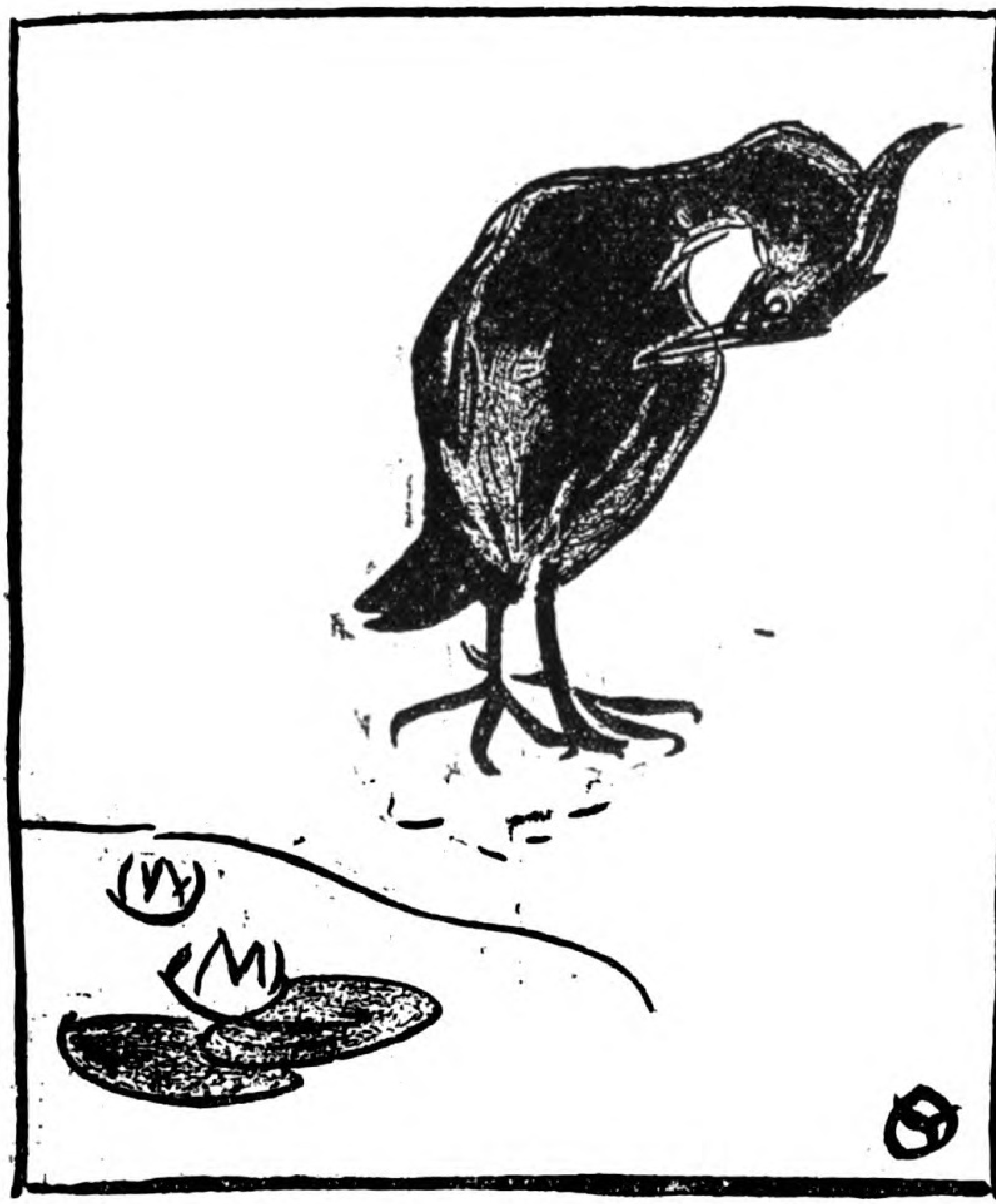
思ひ切つて云つてのけると

「あゝ是れ……

はつとした樣子で、面はゆさうに手をやつて。

兄さんもお出でゝないものを、晴れがましく、恥しいから厭だ〳〵つて、散々申し上げたのを、未だ二十五にも成らぬ若さで、正月が來やうと盆が來やうと、折目々々の時にまで、奉公人の手前もあるに、何時まで結び髮にばつかり結はして置かれやう。親がすゝめて結はせるものを、亡くなつたものに何遠慮、嫁とは思はぬ、里に遣つておいた娘が歸つて來たと思つて居

るものを、つひ一度でもいゝから、結つて見せておくれつてねえ、美以さん。髷入れやら櫛笄を、何時の間にやら買つてお出でなすつて、此處でも名うての、お藤つていふのを呼びよせてねえ、遂々これに結げましたの。誰に見せる樂しみとてはなし、人の見る目もはづかしい、たとへ一度が一日でも、お老人のお心さへ濟みやと思つて居たものを、つひ昨日、親類筋に婿取る娘があつて、恰度、阿母さまはお風邪氣、氣分の



わるいに押して出て、窮屈さうにして居るのが厭だつて仰しやるので仕方が無しに私が代理、婚禮に切れは忌むから、と云つて毛手絡も餘りだし、白の眞綿も地味すぎるから赤い眞綿を薄くして巻いて行つたら好からうつて、こら、お母さまが御自分で格好よくかう伸して：：里で拵へて貰つて來た、彼の富貴の葉の模様を着た時、まお美しいお嫁さんのやうだつて……お老人は何につけても涙もろくつてねえ。必度。兄さん

の事でも思ひ出したんでせうよ。ほゝゝゝゝ。」
と笑ひながらも、襦袢の袖口で目のふちをそつと拭いて
「まあつまらない話しをして、あゝ、大分暗くなつて來た、どれ、お照らしでも點けさせませう。」
云ひつゝ、姉は、すぐよかな襟あしを見せて、部屋の片隅の呼鈴を押す。
白い絲のやうな雨が又一しきり、流れを亂して落ちて來た。

△

京の泊りは、一夜さ明ける。
小雨はなほもしめやかに續きながら、さすがに初秋の朝風清々しう、湯殿の筧をほと走り出づる加茂川の水の、音も澄みわたるさわやかさに、淡く身じまひして座敷に入れば、姉は黒塗りの高足膳を前に据ゑて膝もくづさず笑ましげに、乳母やを相手に語らふて居た。
「久し振りでお出でのだから、今日は乳母やと三人して、智恩院から淸水の觀音樣まで、ぶら／＼お詣りに行かうと思ふてゐたのに、生憎雨がまだ止ます、退屈でもあらうけれど、一日位は家の中でいろ／＼話しもして見たい、乳母やも東京に居る心算で、窮屈にせずと、打解けて居た方が好いよ。」
銀色曇らぬ眞珠の光り、細やかな小指に塗椀の蓋を除ければ、うす衣かつぐ田毎の月、山葵が涼しう芬とかをる。
「美以さん、是は御存じの祇園どうふ、お芳さんが自慢で今朝は拵へて、呉れたの。」
「まあ、お旨しさうねえ。」
お箸をとり上げながら、ふと目につく。
對ひ居の、姉の後の簞笥の鐶に、すつと挿された住吉踊りの玩具があつた。麻の葉鹿の子の淺黄のと赤いのと、二段三段、幕のやうにうち廻らしたその中に麥藁と紙でつくられた、腰衣の坊さんたちが、環に成つて、隙もる風に浮かれて居る。

「あれ、面白いものがあるのねえ。」

箸もつ手を一寸膝において、振り返つたが、ほゝと笑つて

「まあ、飛んでもないものを見つけられて了つたわねえ。掃除の時に、誰でも一寸片付けておいて呉れゝは好かつたのに……。知るべの家の幼さい兒が、一寸一寸遊びに來るからなの。私の事をまはらぬ口で、叔母たん〳〵つて大騷ぎやつて呉れるのよ。玩具も種々買つておいて遣るんですけれど、是と起き上り小法師が一番の氣に入りでねえ。來る度に、私が始終抱きかゝへして居るものだから、馴染のお客なんぞは、私の兒か何ぞのやうに……時をりは、お土産に持つてきて下さる。坊のだい、あまちやんだい、だあまちやん、だつて、ほゝほゝゝ、達磨さんの事ですよ、時々分らない事を云ひ出しちやあ、皆を散々笑はせるの。」



涼しい目ざしにうれしさを見せて、曇らぬ心は三日

月の眉根にたゞよふ……。

私も聞いて居て嬉しかつた。

乳母がお膳を下げるのと引きちがひにひた〳〵と足音がして、入口に小女が膝をつく。

「お内儀はん、八百粂はんが見えまつせ。明日の仕度に豆なと栗なと頼みまほか、芒もついでに伺うどすやろ。」

「あゝ然う、例もの通りに見計らつてと。お芳さんへ云つてお呉れな。」

かしこまつて女は去る。

「あゝ浮かりして居て氣がつかなかつた。美以さんも是非手つだつて下さいな。明日は舊のお月見だから、

「まあ〳〵降るとして置いても、せめてお盛物の仕度だけはねえ。」

「まあ實際に、明日は恰度お月見に成るのねえ。私、何にも出來やしませんけれど、手に合ふことをさせて頂だい。」

「ほゝゝゝゝ。早お晝飯にして初めましよ。あの、店の嘉兵衛殿の裏山へ行つたなら、此の雨でもう、栗がよう笑んで落ちて居やう、宅の柿はまだ少し色が早すぎるけれど、却つてそれも愛嬌もの、お枝豆もゆでたり、お芋も蒸したり、後はお團子拵へて盛りつける許り、東京の宅ぢや斯ういふ事もした事は無し、何一つ分らなかつたのが、此宅へきてから皆お老人のなさりつけでねえ。是をしなくつちや、何やら物足りないつて仰しやるの、女はどうでも、他家へ嫁く身、その家々の仕來りを、粗末にしては成りませんわねえ。」

私は尊い敎へをきくやうに、やさしい姉の詞のはしをじつと心に染めて聞く。

「さう〳〵、お盛物つていへば、折角美以さんが持つて來て下すつた昨夜の包みを、まだ開かずに納つてあつた。御佛前へも上げ、お母さまへも屆けませう、彼れは兄さんの大好物、よく心付いて下すつたのね。」

やがて、姉は袋戸棚の包みを出して、水引や熨斗を除け、栗田やきの美しい菓子器に三笠山を手ぎはよく盛つて、隣室の佛前へ供へ、鈴を鳴らして合掌した。

「貴郎、美以さんのお土産ですよ。」

在すが如く囁くのをきいて、私は思はずほろりとした。

仄ぐらい佛壇の奥の方には、お燈明の灯が小さく赤くまたゝいて、そゞろ淋しい想ひが胸に湧く。香のけふりのよく〳〵と立ち上るのを、姉はしづかに拂ひながら、又ひと筋、尖を赤くして立て添へた。も一つ赤いのは丸髷の手絡で、心も氷る餘寒の朝を、凛と開いた椿のさまに・・・小すゞめも來て囀れかし。



昔は兩刀たばさんだ家からとて、親たちの物堅さ、幼い時からの許婚で、姉は、十九の年に此處へもらはれたが、年まはりが悪いため、式は翌年あげる心算で居た處、はかり難きは人の運命、その年に、秀雄がふとした事で亡くなられたので、未だ盃もせぬのを幸ひ、立派に他へ嫁つて呉れとお年よりが仰しやつたを、一たん心に誓つた上は、たとへ何うならうとも緣あつて私は此處へ嫁いだ身、他に身を置く家はない。運なくして夫とする人を先立てて見れば、此上はその人にかはつて只一人の阿母様に

お仕へ申し、死水とらして頂くのがせめてもの願ひ、何卒〳〵御両親も、宿世拙い私をこの上とも、不孝不貞の女だと世間の人にさげすまさせて下さいますな：：…。」と云ひ切つて、今年で恰度足かけ四年の春秋を、夫のあとを引き受けて、多くの男女を立派にこれまで引廻して來た。二十二といへば未だ花の盛り、初縁なれば振袖に立て矢の字しめた高髷姿、じほらしい花嫁御と唄はれ呼ばるゝ人さへあるに……。

雪に枝垂るゝ柳の姿で、しつとり坐つて

「あゝ美以さんとは、只一度しか逢はれなかつた。もう、兄さんの貌もお忘れでせうねえ。でも兄さんは必度貴女の心持を喜んで居らつしやるわ。お酒といつては一滴も頂けず、奈良漬にさへ赤くなられた程で、亡くなる恰度十日ばかり前に、ふと東京から父さんが見えて、其の時のお土産の、此の三笠山が、大そうもなく氣に入つて、何日になく一つそつくり召し喰つたが後は阿母樣から私から、その晩、夜伽の衆が賑はつた今も何かなしに其の折の事が思ひ出されて：…私しや悲しくつて泣くのぢやない、染み〳〵美以さんの志がうれしいから……。」

と涙ぐみつゝ手を取つて云ふ。

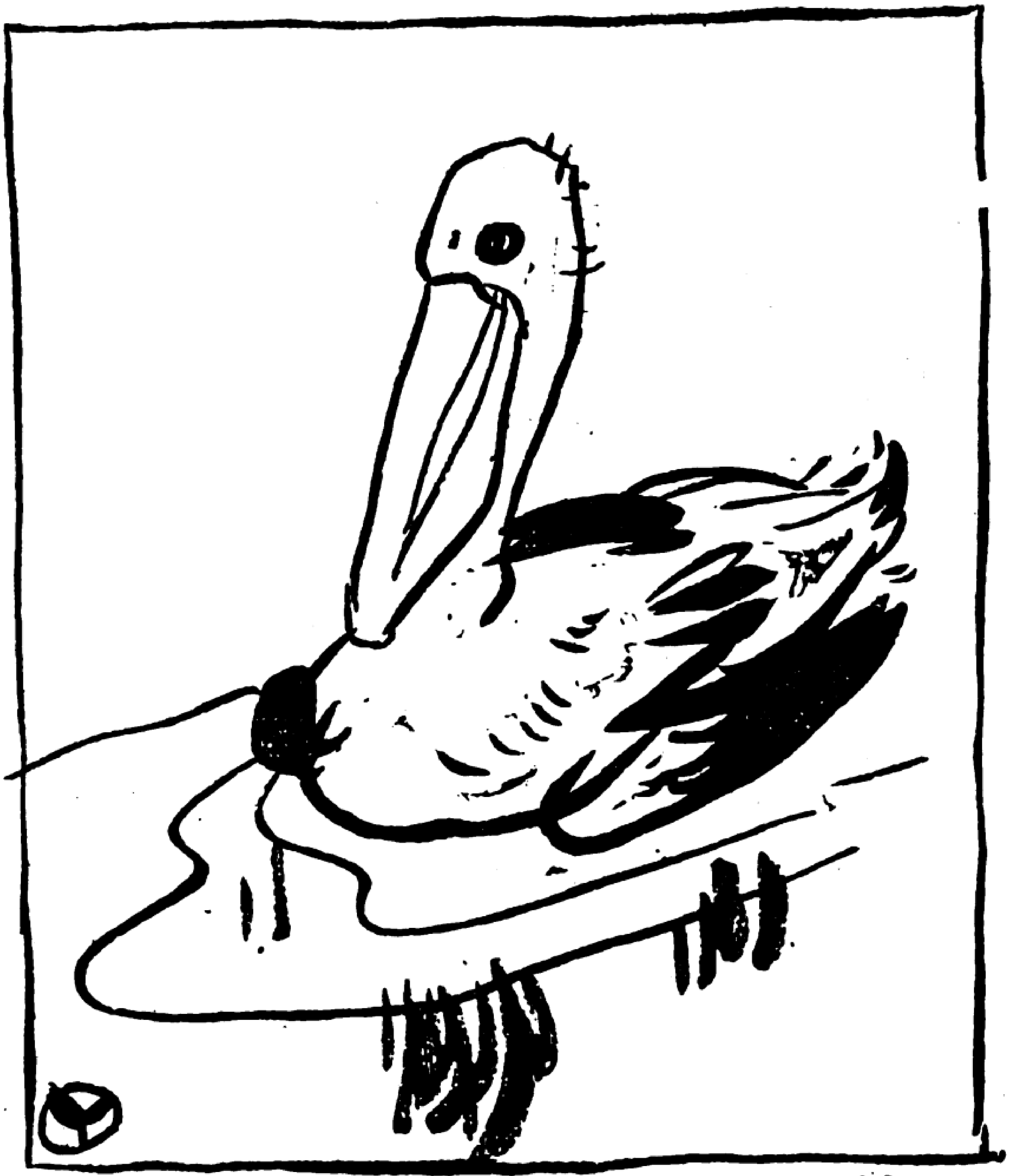
午後から姉は、湯殿に入つて髪を洗ふ。

所在なさにふと思ひついて、床わきの違ひ棚から硯箱下して縁先へ…心しづかに墨すり流して、ちくの赤い眞書の先をかむ。紅葉を散らした卷紙のべて、うすく濃くちらしがきに、終りにかしくと筆をなびけて宛名へかゝると、不意に勝手の方でくづれるやうな笑ひ聲、昨夜晩くなつて挨拶に來た、嘉兵衛とかいふ、此家の古番頭も交つてゐるやうだ。

ぽーんと水面に桶の當る音がして車井戸ががら〳〵と鳴る。

表二階で手が鳴ると、女中の溜りで「へえい――」と細く長い返事、何となしに間がのびて可笑しらしいのを、じつとこらへて見やる向ひの廊下べりを、蝙蝠の飛ぶやう、忙しさうに、三四人が、ぱら〳〵と行き交ふ。その中の一人が昨夜のお芳で、手すりにそふて

此方へ來る。
「お一人はんでお淋しいやしな。」
　とするりと入つて
「お手紙どすか、ついでのありまつせ、私僉に出して來まほ。」
「は、難有う、まだ二三本かきますから後にゆつくりで好いんですよ。」
　はたはたと箱の蓋して、封じたまゝのをその上に、、、けさんで止めて傍へ押しやつた。
「實際に、お忙しいのに、お構ひ下すつちや厭ですよ
て



卻つて放つておいて頂く方が勝手なんですから……。」
「可厭や、どないにお世話しますやろ、貴女はんこそ、さぞ不自由やろ思ふのんえ。」
　茶棚の食籠の蓋をとつて、燕羊羮などすゝめつゝ、ついと立つて急須をとり、宇治の葉を新しくして白湯を注ぐ。白地に蘭の葉を藍で出した六兵衛のさゝやかな湯呑みに、裏葉色の香りたかきを、茶盆のまゝに前におい

「茶々ひとつ喰らんか。」
いひつゝ居ざつて向き返るとたんに、左の鬢からすゐと出た銀脚の松葉の先が、例のおどりの環にかゝつて、稲田に風の渡るけはひ、カサ〳〵と鳴るかと思へば一つしぼるゝ。
「おゝ痛た、ま、京やはんの嬰兒はんのどすせ。」
と落ちた法師を掌へのせて
「ほゝゝゝ。御坊はんは一人落いてのけた。」
と袂を口元にあてゝ打ちわらふ。
「あゝ姉さんもお一人ではお淋しからうと思つて居りましたつけ、好いお友達が出來て、何様にかまあ嬉しいでせう。」
「ほんまに、お内儀はんたらいとしおすせ。こないな樂しみでも無うて何ないしまほ。こちの旦那はんが亡くならはつてからは、何やかやと氣づかれで、藥の氣の切れた事無いのえ。御隠居はんの前では、終始笑顔して居やはつても、何かにつけて、思ひ出しては泣き考へ出しては泣き、ロづかの中にえらう痩せなはれた貴女やがて、以前よりは蚊細う成らはつて見えますやろ。そやかて彼様に心のしつかりした方けに、一月と臥せらはつた事も無いのんえ。

今の話の京屋はんは、京極でも名のうれた小間物屋はんでな、今年の正月の事どつせ、私が諸共に淸水はんへお詣りした其の歸途や、石段の下から、小さい草履を赤い紐でお足へ結ひつけて、乳母やの食指へつかまりながら、よち〳〵上つて來やはつた。やつと歩き習ふた許りで、頭を靑う剃りこぼつて、じゝつ毛はんと兩の奴はん丈を殘してな、愛しげな嬰兒はんどしたえ。

お内儀はんと摺れちがひに、何思ふてかひた〳〵と寄つて、いたいけな手々で袂を押へて『母ちやん。』云ふて取りついたのんえ。人ちがひしたのやろ、乳母やがあはてゝ『嬰兒はんたら何いふのどすえ、他の叔母はんおすやろな、貴女御免やす。』いふて笑ひながら別れたのんえ。然やつたら又、内儀はんが急いで呼び返して、袂から大きな繪ゴムまりを出して福引でもろた

のやが、嬰兒はんに進げますわ。』いふて、乳母やにそつと渡いてやらはつた。

それから二三日して、私一人祇園はんへ詣る途中で又はつたりとその嬰兒はんに逢ふたのどす。乳母やが後から呼び止めて、前日の詫びやら禮やらいやはつて、ちとお内儀はんにもお遊びに、と此樣云ふ。

それが緣で夫からは、私が合間見て、嬰兒はん借りて來ては半日なり一日なり、遊ばしては送つて歸すのんえ。此方に嬰兒はんがおへんよつて馴染も早く、叔母たん／＼云ふて大人しうよう遊びやはる、宅でわや云ふてむづかる時は、直に乳母やが連れて來やはる。



此家の電車

お内儀はんも、京やはんにはお子達が三人も居やはるよつて、此の嬰兒はん一人、私の處へ貰て了ほか、そやつたら此家の家の跡も立ち、親類方への義理も立つ、云やはるのや。草場のかげで旦那はんが、さぞ嬉んで居やはろ思ふたら：他に何にも樂しみは無いもん、何樣にいとしうおすやろな。」

じつと見る目に露が浮いた。

「まあ、夫程になすつたら、兄さんも何樣にかお喜びなさるでせうねえ。私も今度かうやつて寄せて頂いたのを幸ひ、せひ歸るまでには、お墓詣りをしたい事、

お芳さんお手透の時に、御案内して下さいましな。」
「大事おへん。何時なりと貴女はんの御都合のよい時次第。あ、お墓所詣りで思ひ出した。此の前には、今いふたお墓所詣りの歸途どした。山門から出しなに、七つばかりの男の兒が、父はんやろ、顏色の蒼い、目目病んだ人の手々引いて來やはつたのが、土の上に瘦せさらばふた兩手をついて『おかみ樣、お慈悲をお願ひ申します。』いふて頭を下げたのや。お內儀はんも愛しげに見やはつて、紙入れから仰山な、紙幣二三枚包みなはつて『父はんが病うて不自由やろ、目々の藥など買ふて上げなはれ。』いふて渡いた。その親子の衆が淚をほろ〳〵こぼしてな。お情けの程がおうれしい、父はんが常から欲しいと云ふて居た、團子も餅もたんと喰げられやう、おかげで兩つゆもしのいで臥せられます、一生の御恩に着て、お志の佛樣の後世をお祈り申します。』いふて震へながら、頭へ上げて頂きなはつた。少し行て振返るとな、二人とも折り重なつて、此方を拜んで居たのどつせ。

それからその次の御命日に、又つれ立つて詣つたのんえ。すると、ま、お聞きやす。前の日の男の子が、手桶に水一杯入れて、こちのお墓所をせつせと洗ふて居りましたもん……な、人の情けは此處どつせ乞食やなんぞ、犬猫同樣、恩も義理もそれ切りの奴や思ふて居た私もな、それ見た時は悚然としたのえ、誓ふた詞を反古にせず、そやつて心つけて吳れやはる親御の心が賴もしく、モウ嬉しくて淚がこぼれた。お內儀はんもその時はな、目々押へて禮いふたのんえ。」
流石に自分も心うれしく、身じろぎせで聞ゝすました。

雨はいつしか上つたと見えて、夕小暗い對ひの山々水の色さへ微白にうかんで、月やのぼるらし、るり色の空を仄々と、虹見るやうな白い限。

△

やましろの
井出や見ましと　駒とめて

なぞ水かはむ　　山吹の
花のつゆそふ……　はるも暮れ……
…………　…………
…………　…………
…………　…………
…………　…………

面ぶせながら掻き鳴らす小琴の糸の音も澄みて、中秋の月はほのかに上りそめつ。

圓錐形に剪られた矮檜葉の、丈を揃へて行儀よく、敷石の左右に並んでこんもりと奥は深い。數寄屋の前を散歩にして、枝ぶりの奇な老松が低くさし伸べた枝を撞木に支へ、清水をはつたつくばゐの傍を、笠に苔蒸す石燈籠の木かげの瞳がひらりと赤い。

小縁の先には三寶に白紙をしき、團子、栗、柿、枝豆、衣かづきなんど、型の如く盛り上げて、青磁の瓶にはわざと尾花のみを投げ入れにした——千どりの離れの四疊半に、叔母は小柱に脊を凭せて、目を閉ぢたまゝ浮とりと、頭は雪をあさむいても、まだ面ざしの艶々しさ、いと上品にながめられつゝ……洗ひがみを輕やかな總髪の銀杏返し、さながら烏のぬれ色にふつくりと筋を見せた姉の半身は、圍ひの中からすらりと立つて、帶にはさんだ緋袱紗を四つにたゝんで茶碗を持ち添へ、枝に節なきやなぎ腰しとやかに、膝を突いて

「美以さん、何うも御苦勞さま、さあお薄茶を一服あがつて下さいな。」

「あら、難有う御座います。叔母さま、さぞおきゝ苦しう御座いましたでせう。ちつとも澂はないものですから、何ですか手が震へましてねえ。」

一曲終つて爪をときつゝ、姉をかへり見てほゝ笑んだ。

「何の、よい心持にきゝましたんえ。中々お見事なものぢや、それに、久しぶりでお澄はんのうす茶の手前どれも御馳走、戸外はお月樣で灯も要るまいに、晩うならんうちに戻りまほうかな。」

「あれ、未だお早いのに、お歸途には二人して、お送りして參りませうから、もう少し御ゆるりとして下さる

いまし。」

「何の、モウ十分だつせ。又明日にでも訪ねまほ、表の通りをお月見がてら歩くのもよい心持やけ、あんた方も其所まで行つてはどうやろな。」

と云はるゝに強ひても止められず、衣紋竹に風を含んだ單の道行おきせ申して玄關に出づれば、上りがまちに腰かけて、そろ〳〵お船の仕度をしかけた角といふ下男、

「やつ是は…モウおかへりで御座りますか、お内儀はん、えらい御造作にあづかりまして…。」

挨拶もそこ〳〵に、提灯とつて先に立つ。

月かげ圓かに匂ひこぼれて、濃みどりに浮き出た四條の橋を、二人は叔母の手をとつて、かたりことりと半ば渡つた。おぼろに走る加茂のながれは、眞珠の色に橋下の冥をさつと刷いて、千鳥なるらし、ピヽと啼いて面を掠めつ。

丸い白地に淡く水をめぐらして、二三羽ちどりを放つた提灯に、ちらりと紅がほのかに點る。

その後から一寸押へて

「あい、もうこれで別れまほ。何處までいて貰ふてもおなじ事や、さあさ、引取つてお呉れやすや。」

「其樣なら是で御免下さいまし。角さん、隨分氣をつけてね。」

「へい〳〵、畏まつてござります。お内儀はん、いとはん、何卒このまゝ……。」

「ぢや叔母樣、また明日……。」

かたみに詞を交はしつゝ、やゝうすれ行く人かげを見送つて、二人は橋のたゞ中に欄干に身をよせて佇んだ。

「まあ好いお月さまねえ。心の底まで澄むやうな………。」

優しうも冴えた聲音で姉は云ふ。

いつしか其處の草むらに、里以々々里以々々こほろぎが啼く。

「ほんとうに早いもの、いつぞや美以さんが御兩親と連れ立つて、お出での時、兄さんの案内で、祇園の夜

ざくらを見物しての歸りみち、彼の時には、お月樣が、恰度紅ばらの花の上から薄い絹をきせたやうにぼうと霞んで、美以さんや私の髮から帶から、散る花びらで雪をあびたやうでしたつけねえ。歸つてから先刻の數寄屋で二人そろつて熊野を合せた時の樂しかつたこと…全く夢のやうですわねえ、今から思へば……。」

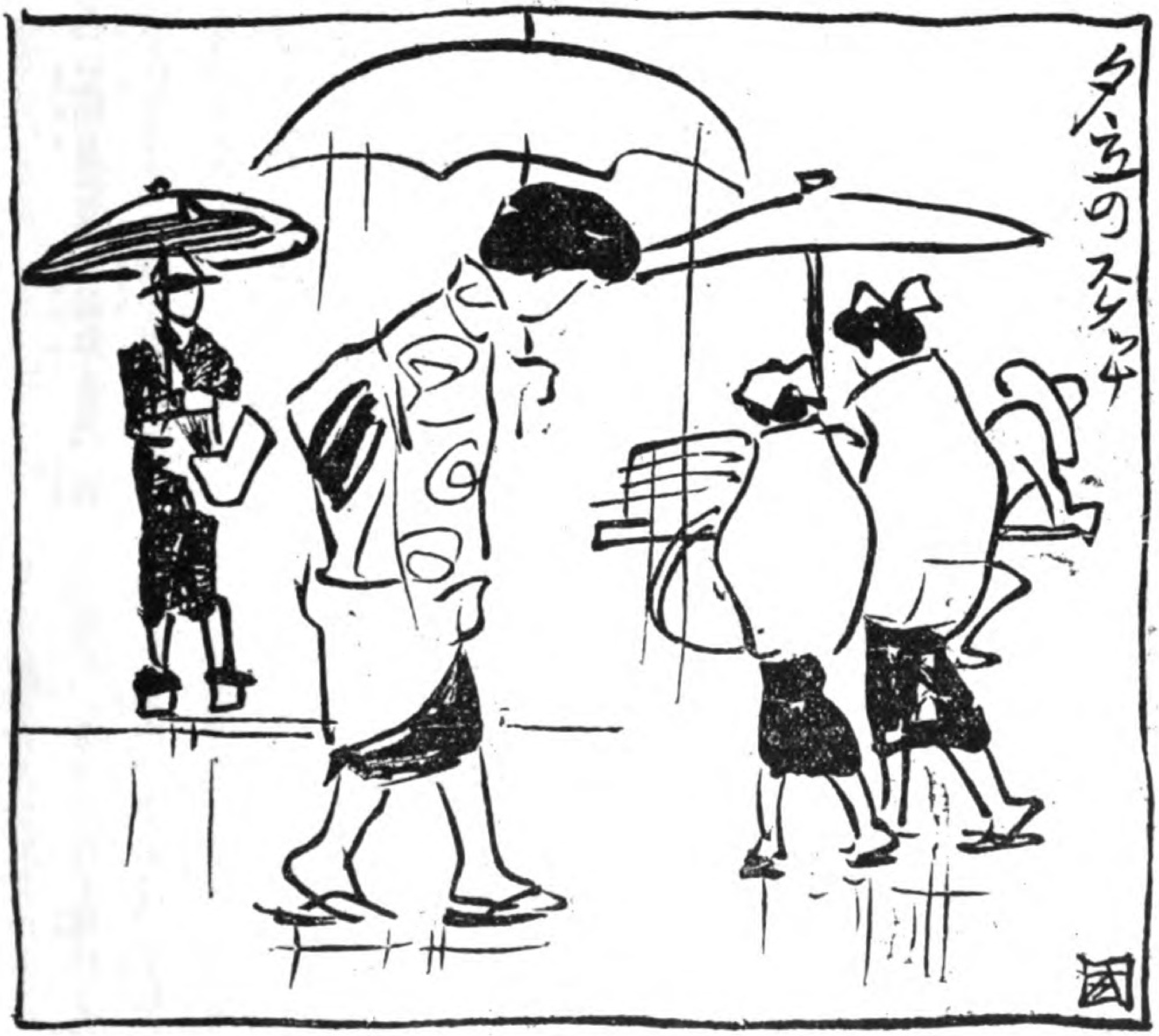
うれはしげに瞳をふせて

「ねえ美以さん、今夜のやうな月のよい晩に嵯峨へなと身をかくして、人目も何もない處で、心のまゝに泣けたなら、嘸うれしいだらうと思ひますわ。」

「まあ何うなすつて、姉さんは……。」

怪しみつゝさし覗く私に、つと貌をそむけて肩で泣いて

「嗚呼、美以さんは何にも知らない。清い清い心のお前さんに、此樣な事はきかせたかあ無いけれど、ねえ美以さん、世の中といふものは、うはべ他から見



るやうな、そんな綺麗な事ばかりは有りませんのよ。ねえ、私にして見た處が、頼みにして居た兄さんを先立てゝ了つて、か弱い腕にこれまでの年月、隨分重荷でしたわよ。でも、何うやら斯うやら通して來たのか外に何にも樂しみは無い、只兄さんの名をきずつけぬやう、お年を召した阿母さまに御安心がおさせ申したい許り、夫を……それを……。」

と云ひ淀んで

「恐ろしいのは人ごゝろ、幼い羊の周圍には虎狼がかず知れず、牙を鳴らし爪を鋭いて、倒れたら飛びかからう／＼と待ちかまへて居る。

和泉の家には跡目が無い……。今の嫁に養子でもせなんだなら、さしも賣り込んだ千どりの家も他人のもの、養子には誰、彼家の婿に當るのが恰度亞米利加から歸つて來て、まだ獨身で身分もつり合ひ……などとまあ／＼うるさいこと、聞いて聞かぬ振りはして居ても、いつかは阿母さまの耳へも入る道理、然う云ふ事に成つたら私しや……。」

ほろりとなつて、さしうつ向く。侘しげな片頬を、月が走つて颯と蒼い。と、脊を掠めて腕車が二臺、通り魔のやうにすうつと風を切つて、橋をとゞろに祇園へまぎれる。後は又もや寂として、一しきり、里以里以里以々と悲しげに果敢なげに、蟋蟀が姉の切ない想ひを啼く。

「大勢の男女に立てられて、榮耀に華美に暮らしても私の心の淋しさ果敢なさ、他から見たら、身代の好いにしがみついて、可惜女一代を捨てゝかゝる業つく張とも云はれませう、けれど、痩せても朽ちても、親から貰ふた魂だけは、曇りはしません、阿母さまのお氣にも入り、私にも安心の出來る人さへあるならば、いつ何時あの家を明け渡して、自分はたとへ草の庵に若隱居しても、それで心の願ひは屆く。

たとへ血緣がつながつて居やうと利者であらうと、兄さんの心持にそぐはない、上辷りのするやうな人を二度の夫に迎へて、よい衣類着飾つて、大路をこれ見よがしに練り立つたとて、どれほど嬉しい事がありま

せう。破けても玉と成つて終りたい。ねえ美以さん、私の心は逐うからもう坊さんのやうよ。春が來ようと秋がゆかうと、暇さへあれば佛いじりで、此間もお芳さんに笑はれたの。大勢の中でも彼女が一番たより多く、もう〳〵氣が結ぼれて〳〵、胸のあたりを强うく糸で締めつけられるやうな心持の時にも、何だ彼だつて氣をまはして、よく面倒を見てくれますのよ。ひよつと早死でもした時に……。」

私はぎよつとして、姉の貌を見上げた。

「……たとへ私が此處の土に成つても、彼女だけは命日〳〵をかゝさず詣つて與れませう。」

頤を襟に深く埋めて、言葉尻を幽に消したが、ひたと面を袖に蔽ふて、欄干の上に泣き伏した。

脊中へそつと袖をのせて

「まあ姉さんのお氣の弱い、東京には父さんも母さんも皆な健康で見て被居る。決して姉さんお一人きりぢやないんですもの、もつと〳〵心强くして被居つて下さいな。ねえ、兄さんも土の下から、姉さんの志は必度守つて被居る。何の狼が吠えやうと、姉さんつよく成つて下さいまし。」

泣きたいのをぢつと耐へてうつ向いた。

『相續者が無い…。』姉の生命は旣に此の一語にちゞめられて居はせまいか。

と思ふと、禁じえぬ哀愁は胸をついて、あやなく、はつと共にくづ折れた。

「ありがたう、美以さん。」

涙をはらつて嬉しげに

「又愚痴を云ひ出して、貴女にまで氣をもませて濟まなかつた。もう〳〵此樣な淋しい厭な話しは止しませうねえ。さ、早く歸つて晴々とお琴でも出して合せませうよ。」

きゆつと握り合ふた互の掌は燃ゆるやう。

さは云へ、身に沁む夜氣に肌寒げな姉の肩は、思ひなしか、削がれたやうに細り見える。

「さあ美以さん、乳母やが待つて居るでせう、私もうくだらない事は何にも思はないで、强く成つてくらし

ますわ。ね、何卒安心して下さいな。」

打ち頷いて手を執りつ………。

返り見れば、浄らかな趣をたゝへた水の色は、或は白く或は青く、射す月かげに山々の褶襞までがくつきりと、千古の翠のたゞ中に、幽に見えるのは叔母が行く清水の塔で、塵も止めぬ自然の色は、溢るゝ歴史の匂ひと相俟つて一しほの床しさを添へる。

橋を下りて、とある軒端のうす暗に、突然、後から二人の中を押し分けて、姉の優肩にからまり寄つた酔どれ男があつた。が、きやつ！と云つてゞ、どうと反つたも道理。

「無禮もの………。」

右手の袖をひらりと煽るかと見れば、月に輝めく五寸の細足、銀簪逆手にきつと立つた。

祖母が昔を思はするその俤……かげらふ月に、姉は片頰に笑みを含んだ。

（終）

○流石は大人物の妻

ヂスレリーの夫人は、良人が議院に出づる時には、必ず馬車に同乗して往くのが常であつたので或日も例の如く共に馬車で往くと、途中で車窓の戸が落ちて、夫人の指をしたゝか壓し潰した。けれど夫人はぢつと痛さを忍んで一言もそれを言はず、指を挾まれたまゝで乗つて行つた。車の動揺する度にひどく痛んだけれども、尚ほ辛抱して少しも色に出さず、やがて議院に着して、漸く車窓を擧げて指を取り、微笑しながら良人に分れて傍聽席に入つた。こは、良人が車窓の中で辯論等の方法に就て沈思してゐるところへ此の痛みの事を言つては、親切なヂスレリーは甚く心配しようし、従つて折角の構思を妨げやうといふ夫人の心遣ひから殊更に默つて居たので、其の夕ヂスレリーは稀れなる大演説を作して大勝利を得て家に歸り、始めて夫人の負傷を知つたといふことである。

奇警な諺（三）

△巫女は自分の祈禱も出來ず、占卜者は自分の死ぬる日を知らず。
意自から明かなり。

△食物は食ひ廻すと段々減り、言葉は語りまはすと段々大きくなる。
これも意明かなり。

△雀は稲落し場を素通り出來ず。
多慾者は利を見て勇進する能はざるの意なり。

△子供が見てる前では水も飲むな。
父母は子供の敎養に深く注意すべきをいふなり。

△十尺の水の底は分るが、一尺の人心の底は分らぬ。
意自から明かなり。

△水は滯つて見てこそ深さが分り、人は交はつて見てこそ人柄が分る。
自らか明かなり。

△木に上らして置いて木を振る。
常に身がろゝ人の心得えて置くべき事なり。

△生きてる口には物がはひる。
人は何うかして食つてゆくものだ、其樣心配したものぢやないと、生活を極く樂天に見た言葉なり。



△兩手に餅を持つ。
忙はしく嬉しきことの形容なり。

△花鉢に植ゑれば猫ぢやらしも花草なり。
地位は人の價を左右するの意。

△癖は犬にもやられまい。
まことに困りものなり。

△貧乏なればこそ絹の衣服も着くれ。
不如意にして晴着の外に着るものゝなくなる事はよくある事なり。

△ゆる〳〵歩いても牛の歩み。
意明かなり。

△虎でも子供を置いた谷を顧みる。
親の情をいへるなり。

△澁い梨でも嚙みしめて見るもの。
苦言も傾聽すべきをいふなり。

△子供の言葉も耳から逃すな。
博く智識を求めよとの意。

△豆を播けば豆が出來る。

因果の理を說けるなり。

△踊る奴の上に飛ぶ奴がある。
世間は廣し慢心を去れといふなり。

△若年の難儀は金を出しても買ひたし。
艱難汝を玉にすと同意義。

△針盗賊が牛盗賊になる。
小惡が長じて大惡となるを云ふ。

△秋の暑さと老人の健康。
當てにならぬをいふ。

△馬鹿にした草で目を突かる。
油斷大敵の意。

△十人の匙が寄れば一盤になる。
小集れば大を成すをいふなり。

△大巫が在れば小巫は舞はず。
日在れば月出です、及ばざるを恥づるの意なり。

△陰も日の當る事あり、日向も陰になる事あり。
人の運の定めなきことをいふ。



○少女の一枝のペン

ポーリン孃といへば、佛蘭西の婦人記者中でこれ程眞理の爲に道德の爲に人心を鼓舞した者はないといはれてゐる程の才媛である。父は巴里の名士のモーランといふ人で、父の歿後、革命の亂に遭ふて悉く家財を失ひ、母は五人の子女を抱いて途方に暮れ、殆んど饑餓に瀕した。此の時ポーリンは僅か十七歳の少女であつたが、一家の困難を見兼れて、決然パンの爲に筆を執つた。此の健氣な少女の心が天に通じてか、其の處女作として世に出した一篇の小說は案外に成功し、其の後ド、パブリヲトといふ巴里刊行の雜誌の寄書家となつて天下の喝采を博し十七年の久しき間、一枝のペンを以て一家を支へて來たが、多年の心勞の爲めか、遂に病を得て、再び困難に陷つた。然るに今度は無名の文士があつて、原稿を寄贈してパブリストの寄稿を助けてくれたので、幸ひに安んじて療養することが出來た。此の陰德家こそは後年「文明論」の著者として十八世紀の文壇を擡がした有名なるエル、ギゾー氏であつたので後五年を經て、ポーリン三十九歳、ギゾー二十五歳の時に兩人は夫婦になつた。

大橋富子孃の面影

栴檀の二葉の頃より、行末さぞと人々にほめられ給ひし花の姿の十二の少女、黒髪房々と肩に垂れ、色白に鼻筋とほりて、物言はるゝ聲の細く消しき、目に一種の愛嬌ありて、身のこなしの活々として快き姿の、朝な〳〵學舍に通ひ給ひしことも、今は早夢と消えて恨ぞ多く殘るなり。あゝ君は朝顔の花なりしか、秋風にほろゝ散る女郎花なりけるか。

そのかみの事どもしのび參らすに、番町小學より精華に轉じたまひ、讀書、作文、習字、わけても裁縫は大人はづかしきまで上手なりしには、皆な〳〵感じあへり。玩弄の人形は殊に好みたまひしが、衣裳は母君より貰ひし色様々の布片を集めて、それに自から配合をとゝのへて縫ふて着せらるゝのがお樂みなりしとか。優しきこゝろがけ想ひ出づるだに涙の種なり。

智慧かしこき君は、幼きころより物事よく聞きわけられ、友にあひては同情深く、且つ物の仕末のよき事など、大人も驚くばかりにて、亡せたまひし後、母君何ごゝろなく君の用箪笥を開けられしに、日頃預けたまひし品々の、きちんと整ひてありしのみか、リボンなどは一々鏝をかけ、丁寧に紙に包んで仕舞うてありしに、皆な〳〵胸つぶるゝ思ひせられしとぞ。

孃は又年に似合はぬ細心にて、母君より毎月給はる小遣を無駄に遣はずして貯へ置かれしが、今は餘程の高になりしとぞ。庭に咲ける草花など、女中の仇に手折るを、こゝろなき業なればとて大事にせしめたまひしなど、些細の事にも心づきしとぞ。

遊藝には心いと深く、ピヤノは音樂學校の合田孃、長唄は住吉小糸氏、踊は藤間氏、茶は森脇氏にと、それぞれ師を選びて學ばれしが、中にも長唄の桃太郎は殊の外お得手にて、お客様のもてなしに、妹君と揃ふて試みられしその聲容の美、今も猶目に在りとて、知れる限りの人惜まぬものはなし。

お得意の桃太郎は、ことし彌生の頃、柳原伯、高田博士など入らせし時試みられしにそれが名殘の曲とな

りました。お得手のものなればとて母君殊に命じて簫管の蓄音機に吹込み置かれしが今は形身となりました。

友情殊にあつくおはせし故、父君に伴ひ關西地方を旅したまひし折など、姉君、妹君、さては數あるお友達へ、それ〲到る處の名所々々にて繪葉書を送られました。學校では曾我子爵令孃、番町の三井氏の令孃など殊に親しく、其他數あるお友達より令妹豐子孃に送りこされし文の數々、

姉上様は、なが〱御病氣のところ、新聞におかくれの事が出て居りまして、私は實に殘念です、さぞ御兩親様はじめ豐子様にも、御愁傷の事と存じ上げます、常は同級で仲のよい友人でした。實に殘念です、先はおくやみ端書で失禮ながら豐子様まで差上げます。

駿河臺鈴木町

谷森登子

豐子様、ごちやうぶでゐらつしやいますか、わたしは先頃から旅行致しまして、一昨日歸京致しました、承はりますれば、御姉上富子様には、御不幸にも御なくなり遊ばしましたさうで、さぞ〱御なげきの御事と深く御察し申上げます、先は延引ながら御悔み申上げます。

八月三十日

曾我清子

また手蹟の師の君たちより

大橋富子の君のみまかりたまへるをいたみまゐらせて

はるたまつはなのつほみをちらしゝは
　いかなるよはのあらしなりけむ

大口鯛二

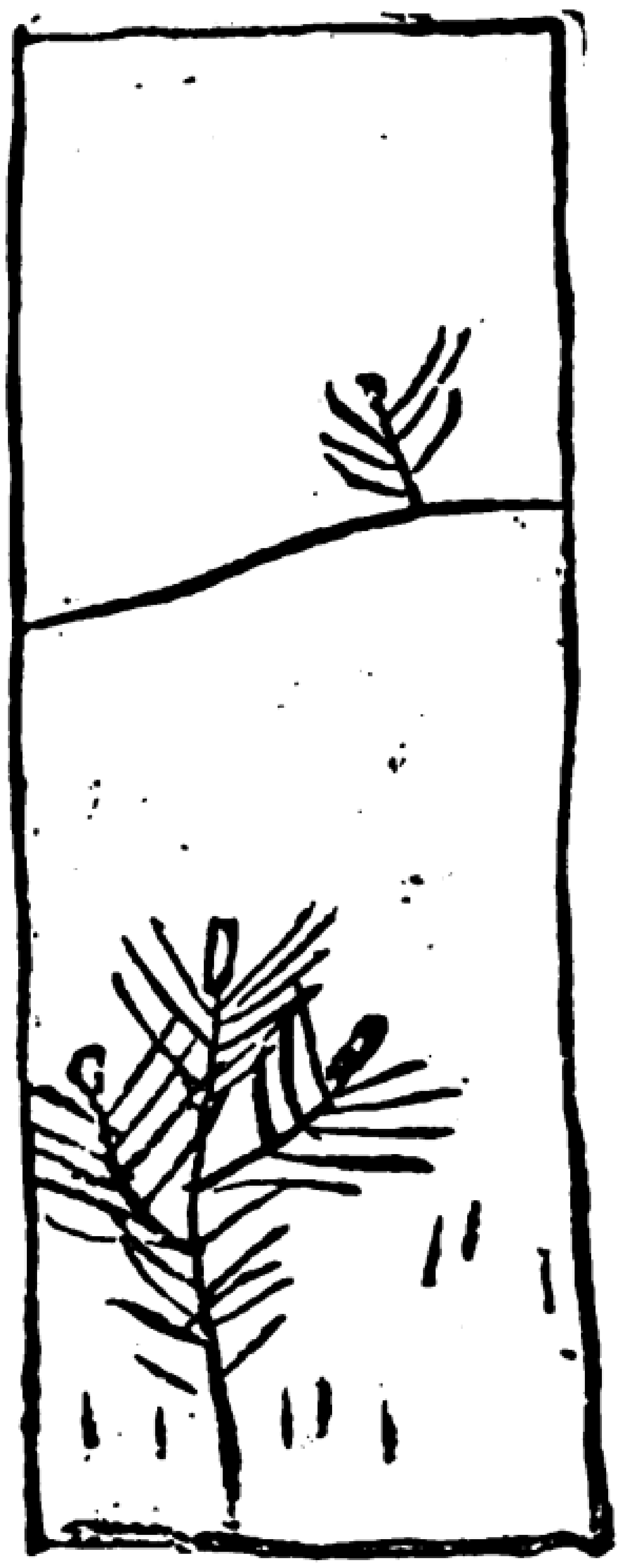
くたけつるつゆのしら玉かのくにの
　はすのうてなにやとうつしけむ

大口鯛二

大橋富子孃をいたみて

たくみなるをとりのてふりうつくしき
　すかたはいまもめにのこれとも

佐々木信綱




井戸端へ



隨筆教訓 壁の花

礫川翁

○樂翁公の教訓

夜ふけてことゝふとも、初ほとゝぎす、雁が音は、必ず疎くすべからず。

枕に通ふとも、とがなきものは、花の香、遠寺の鐘霜夜の蟲の音は殊にあはれむべし。

憎くともゆるすべきものは、花の風、月の雲。うちつけに爭ふ人はゆるすのみかわ。

野分の朝の庭の面ならで、亂るゝをゆるすはあらざるべし。落花の狼藉はゆるすのみかは。酒のみたれは其の類ひならず。

月はいつとても親むべし。されど過ぎし世を慕ふもくるしゝ。行末を思ふもうるさし。唯對ひてこそあらまほしけれ。腰のあたりにて雷鳴り出すは影かたしきて寢てもありなん。花の臥下も同じ。

有るも無きに劣るものは、誠なき人、をんなのさえ、稻妻のかげ、逢ふと見し夢。

うたてきものは水無月の鶯、落葉の風にさわぎたる。

多きをいむ物は、茶器、酒の肴、おそ櫻、りうたんの花、ほとゝぎす、鈴むし。

よきはよく、あしきはあしき物は、うたがひもの、病める女、風流も其の中なるべし。我ほどを知り、爲すべき事をなしてこそいはめ。しひて古を好み、月花をめづるとていかでいはん。夜すがら月をめづるより日を惜むにしかず。

埋もれてをかしきものはあらず、されど子の日の小松の、夏草にかれたるのみこそ。

思ふにたがひて憐れしきものは、さみだれの雲間の月、葉月十五夜の晴れたる。人の兒いとけなきと思ふが、いつか文作り、歌よみたる。

うとむべきものは、歎きいふ人、よそ見ぬ理窟、午祭の鼓の音、蛛のゐ、足駄の迹、すゞめ、猫、鼠なほにくむべし。打ちも殺しつべく思ふものは蠅、蚊、蚤聞出づるは殊にこそ。

貴ぶべきものは、人に異る人。貴むまじきものは人に異るさまの人。

きゆる時をゆるして雪を見、しづくの月を思ひて夕立にあふべし。

梅が香を、櫻の花、柳の枝になどゝは思ふまじきことなり。花のくれなゐ、柳の緑、心をわけて樂むべし。

たれりと思ふべきは我が身。足らずとして好きものはつとむべき道。

樂しきと思ふが樂しきの元なり。いかで外に求むべきと樂しむ翁いふとぞ。

○拂子の贊

遊ばんことをほつす。遊びて足らず。樂まんことをほつす。樂みて足らず。僞らんことをほつす。僞りて足らず。貪らんことをほつす。貪りて足らず。終に盗まんことをほつす。（皆川棋園）

○有り難きもの

舅に譽めらるゝ婿。又姑に思はるゝ嫁の君。物よく拔くる白銀の毛拔。主謗らぬ從者。つゆの癖かたはなくて、かたち心ざまも勝れて、世にあるほど聊の瑾瑕なき人。同じ處に住む人の、互に慚愧かはし、いささかの隙なく用意したりと思ふが、遂に見えぬこそかたけれ。物語、集など書きうつす本に墨つけぬ事。よき草紙などは、いみじく心して書けども、必ずこそきたなげになるめれ。男も女も法師も、ちぎり深くかたらふ人の、末まで中よき事かたし。（清少納言）

○退屈せぬ工風勤勉の箴

稻葉美濃守、或時澤庵和尚の許を訪ひ、勤めの長き日に退屈せぬ樣にするには如何すべきかと敎を請ひけるに、和尚はそれには答へで、左の箴を書き與たり。

無再此日、寸陰一尺璧、
淺ましや思へば日々の別れかなきのふのけふにまたもあはねば

○妻と家內の和合

鳩翁は、夫婦の和合を說くに糸と針のたとへを以てして下の如く言へり。婦人方はあの縫ひ物をする時は何うなさる。針に糸をつけて、針が先へ行き、糸は後から行きませう。左樣すれば何うでも縫へる。針はしつかりした良人、糸は柔かな妻ぢや。それが何うかして糸に節が出來ると、針は通らない。だから家內の和合は妻たるものゝ心がけ次第でござる。



松島名勝仁王島

○身代維持の法

人の身代は、譬へば鉢植の松の如し。鉢の大小に因つて松にも大小あり。綠を延し、次第に延すときは忽ち枯氣つくものなり。年々に綠を摘み、枝を透してこそ美しく榮ゆるなれ。これ心得べきことなり。此の理を知らずして、春は遊山に綠を延し、秋は月見に綠を延し、或は據所なき交際と言つては枝を出し、親類の交際と云つては枝を出し、分外に延び過ぎ、枝葉次第に延びゆくを伐り捨てざる時は、身代の松の根漸々に衰へて枯れ果つべし。されば其の鉢に應じた

る枝葉を愛し、不相應の枝葉をば年々に伐り透すべし、これ最も肝要なる事なり。（二宮尊德）

○萬事頼むべからず

萬の事は頼むべからず。愚かなる人はふかく物を頼むゆゑに、怨みいかる事あり。勢ひありとて頼むべからず、こはき物先づほろぶ。財多しとて頼むべからず、時のまに失ひやすし。才ありとて頼むべからず、孔子も時にあはず。德ありとて頼むべからず、顏回も不幸なりき。君の寵をもたのむべからず、誅をうくること速なり。奴したがへりとてたのむべからず、背きはしる事あり。人の志をもたのむべからず、心變ず。約をも頼むべからず、信ある事すくなし。身をも人をも頼まざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず。左右廣ければ障らず、前後遠ければ塞がらず。（徒然草）

○光圀卿の教訓

苦は樂の種、たのしみは苦しみの種と知るべし。主人と親は無理なるものと思へ。下人は足らぬものと知るべし。恩を忘るゝことなかれ。子程に親を思へ。子孝きものにおちよ。酒と色とは敵と知るべし。朝寢すべからず。分別は堪忍なり。小なる事は分別せよ。大なることは驚くべからず。九分に足らば十分にこぼると知るべし。

○談話の規則

相手が優れる者ならば、萬事を之れに聞き、注意深き聽手となるべし。相手が劣りたるものならば、彼れを益することを勉むべし。

他人と談話する時、話が中絶すれば、注意して廣く一般に渡りたる話題を出すべし。然る時は一座の中の誰かゞ之れに和して談話を接ぐべし。

人と談話中に得たる所は、學問の一として記錄簿に止むべし。之に反して無益の事は、記憶に入れざる樣にして、腦を疲らしめざる工夫をなすべし。

集會の席に出でゝは、多言なるは勿論惡しけれども無言なるも亦惡し。無言なれば人に惡まれ、無益の人と蔑まるゝことあれば、時に應じて適宜に語り出づべ

し。

他人の談話に加はるには、慌忙てるなかれ。面白さうな事を話すも、其の人が全く言ひ終らざる中に賛成すべからず。又善き事なりとも、同じ集會にて同じ事を二度と語るべからず。

人の言に過失ありと思ふときも輕々しく之れに反對すべからず。其の人は又一種の眼光を以て之を見る所ありて言へばなり。

仲間の人々が卑劣にして俗なる話を始むる時は、若し一言にして之を打ち破り得ると思はゞ、之を破ることを試みよ。若し能はずば沈默によりて破るべし。之れも能はずば其の場を去るべし。

我が能力或は我が上手なる處を



彦根公園八景亭

見せかくるが如き談話を避くべし。

己に關係もなきが如く見ゆる事も、忍びて聞く中には何か益する所あらん。

洒々落々として城郭を設けざれば、人も亦己れに對して隔てを爲さず。かくて互ひに善き考へを出し合ふべし。(メーソン)

○早分別は後悔す

かりそめに思ふと、篤と考へはかると相違あるべし。昔ある君、樓を構へ、これに登りて眺められしに、遠近の風景限なくおもしろかりけり。只一方に其の臣何某が家の森ふかく茂りて眼をさへぎりけり。よつて其の臣を召して、彼れは兼てさとき

者なれば推量すべしとて、此の樓より四方の風景を望むべしといへり。臣心づきて家にかへり、我があたりの樹の目に障ればこそ斯くは招きたまひつらめとて、已に伐らんとせしが、いやいや君の心をよく察する者と思はれては行末むづかしとて、知らぬ振りして打捨ておきけり。其の後君何やらん計の有りし時、心さとき臣等疑ひを受けゝるが、此の臣ばかり右の事思ひ出給ひ、何の疑ひもなかりしとかや。善となく惡となく、一旦の早分別に後悔する事多きものなり。（三浦梅園）

〇益軒の嫁入敎訓

夫の家に行きては、專ら舅姑を我が二親よりも猶重んじて厚く愛しみ敬ひ、孝行を盡すべし。

夫を誠に主君と思ひて、敬ひ愼みて事ふべし。輕しめ侮るべからず。和らぎ順ひて其の心に違ふべからず。

小舅小姑は夫の兄弟なれば、情深くすべし。又妯娌を親しみ睦しくすべし。ことさら夫の兄嫂はあつく敬ふべし。兄嫂をば我が姉と同じくすべし。

嫉妬の心ゆめゆめ起すべからず。夫淫行あらば諫むべし。怒り恨むべからず。

夫若し不義あり、過あらば、我が色を和らげ聲を悦ばしめ、氣をへり下りて諫むべし。諫をきかずして怒らば、先づ暫くやめて、後に夫の心和らぎたる時復諫むべし。

言を愼みて多くすべからず。假にも人をそしり、僞をいふべからず。人の謗を聞くことあらば、心にをさめて人に傳へ語るべからず。

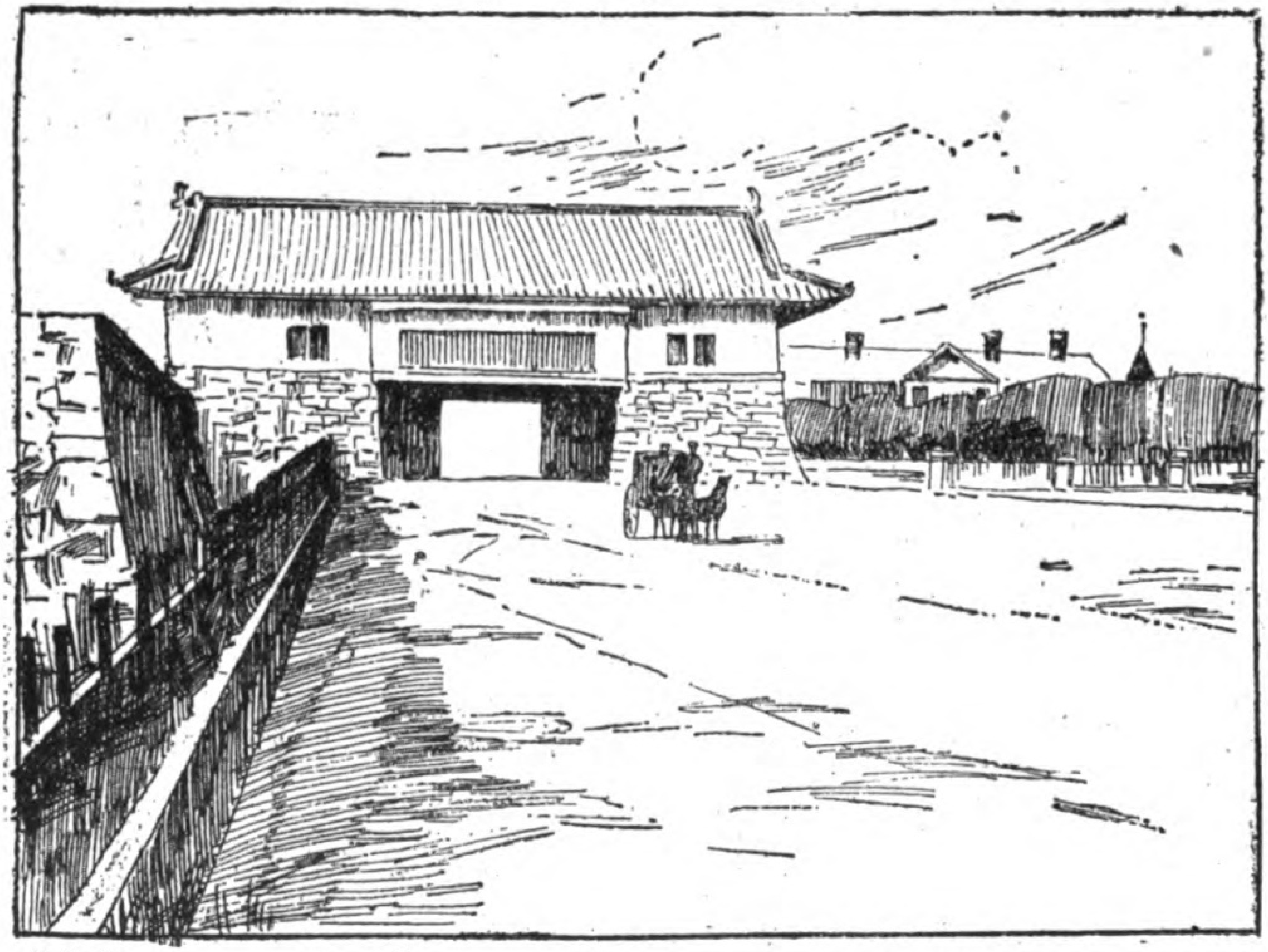
女は常に心遣ひして、其の身をかたく愼み守るべし。夙に起き夜にいね、晝はいねずして家事に心を用ゐ、怠りなく勤めて家を治め、織縫うみつむぎ怠るべからず。

巫覡などのわざに迷ひて、神佛を穢し近づき、猥りに祈り諂ふべからず。只人間の勤を專らになすべし。

人の妻となりては其の家を能く保つべし。財を用ふるに儉約にして、費を爲すべからず。おごりを戒むべし。

若き時は、夫の兄弟、親戚、朋友、或は下部などの

宮内省



若き男來らんに、なづさひ近づきて打とけ物語りすべからず。愼みて男女の隔てを固くすべし。

身の飾りも、衣服の染色模樣も、目にたゝざるをよしとす。身と衣服との穢れずして淸げなるはよし。衣服と身の飾りにすぐれて淸きを好み、人の目に立つ程なるはあしゝ。

我が里の親の方にわたくしゝ、舅姑夫の方を次にすべからず。

下女を使ふに心を用ふべし。又下女などの人を誹るを聞き用ふることなかれ。

○勤學の訓へ

小人の學や耳より入りて口より出づ。口と耳との間四寸のみ。曷ぞ以て五尺の體を美しくするに足らんや。（荀子）

○奇々妙々の世の中

杣が深山に入り木を伐るは、材木が好きにて伐るにあらず。炭燒が炭を燒くも炭が好きにて燒にあらず。夫れ杣も炭燒も、其の職業をさへ勉强すれば、白米も

自然と山に登り、海の魚も里の野菜も、酒も油も皆な自から山に登るなり。奇々妙々の世の中なり。(二宮尊徳)

○鬪雀は人を怕れず

怒るものは内むなし。河豚に腸すくなきが如し。寺に勝れたる太鼓は如何に、鳴りはためくのみ。これを腹なしとやいはん。夫れ鬪雀は人を怕れず、蟷螂は車を避けず。一朝の怒りに身を忘るゝは、是れ小丈夫の所爲にして、世に馬鹿ものといはれんのみ。盜跖孔子を罵れども、孔子の聖たるに害なし。臧倉孟軻を誚れども、誰か孟子を賢ならずとせん。己是にして人の非なるを知らば、爭ふ所なかるべく、彼が是にして我が非なるを悟らば、負けて過を改むるにしかず。柳の枝に雪折れなく、いと鋭き刄は缺くることなし。堪忍五両の廉なるは古人の算盤ちがひなるぞ。多く買はまく欲せずや。春宵一刻千金を貴しと思はぬ人、心を丹田に鎭むべし。(瀧澤馬琴)

○物學ぶ者に示す

學問は飯と心得べし。腹におくが爲なり。掛物などの樣に人に見せんずる爲にはあらず。

書物は金貸しの帳の樣なものなり。金なき人のもたらむは、澁紙なむほどの用にこそ。

學問は臭き物の樣なり。とく／＼臭みを去らざれば用ゐがたし。少し書を讀めば少し學者臭し。餘計書をよめば餘計學者くさし。こまりものなり。

學問を芥の樣におもふべからず。上に浮きたがる程に下地の水も今はのまれず。

學問は置所によりて善惡わかる。臍の下よし、鼻の先惡し。

學問は輕業のやうにするがあしゝ。輕業は人を目の下に見おろし、人の天窓をふむものなり。

衣裳うつくしくかざり、人にすかれんとするは賣女なり。人の見る時所體をなし、人に褒められんとする、は歌舞伎のものなり。今の學者はどうやら此の眞似する樣なり。

碁の打ち樣は何時にても、先を取れば負けぬものと我れも知れり。とかく道理はこみ／＼よし。態のでき

ぬが笑止なり。足の皮は厚きがよし。面の皮は薄きがよし。人諸共に小賢しく口はきけど、行ひは女童に見限らる。さる故面の皮あつくなり、足の皮うすくなり、株ふむ事多し。よく心得てつつしむべし。（三浦梅園）

○東寺の雨やどり

頼俊朝臣或る時雨やどりして、東寺の門に立ち寄りたるに、傍に足のぬけたるもの、手のまがりたるかたわの集ひゐたるを、初めの程は興あるものとして見てありしが、つひにはいまはしくなりて、かたわならぬ人こそ勝れるを覺えたる。家に歸りて盆栽鉢植などの手入れしたる植木は、これ植物のかたわなるものにして、自然のつくろはぬこそ却つて興ありとて、悉く其の鉢植を捨てたりとなむ。（徒然草）



秋風の吹と吹ぬる武蔵野はなへて草葉の色かはりゆく

○濃きはとくちる

人と契らば、うすく契りて末とげよ、もみぢ葉を見よ。うすきはおそく、濃きはとくちる。（棋園）

○病は氣から

幼き子をすかし、おどし、云ひ辱しめて興ずることあり。大人しき人は、まことならねば事にもあらず思へど、幼き心には身にしみて恐しく、はづかしく、あらまじき思ひ誠に切なるべし。これを惱まして興ずること慈悲の心にあらず。病を受くる事も多くは心よりうく。外より來る病は少し。藥をのみて汗を求むるには、しるし無き事あれども、一旦はぢ恐るゝ事あれば必ず汗を流すは、心の仕業なりといふ事を知るべし。凌雲の額を書きて白頭の人となりし例なきにあらず。（徒然草）

○昔の可からず敎訓

權貴の家と女おほき家とには屢ゝ出入すべからず。あるじ留守の家ながゐすべからず。主人欠伸せば早く立つべし。人來りて問ふ事ありとも、志他にあらば詳かに說くべからず。吾好事なりとも、人の好まざる事をば語るべからず。朋友にも親切の意見再三にして可ずんば止むべし。我が爲すべしと思ひ立ちたる事は、明日ありと思ふべからず。貧しき人は疎みやすく富貴の人は親みがたきものと知るべし。金銀にのぞみては爭心起るものと知るべし。（三浦梅園）

○惡ろき友と善き友

友とするにわろき者七あり。一には高くやんごとなき人。二にはわかき人。三には病なく身づよき人。四には酒を好む人。五にはたけく勇める兵。六には虛言する人。七には慾ふかき人。よき友三あり。一には物くるゝ友。二にはくすし。三には智慧ある友。（徒然草）

○にくきもの

急ぐ事ある折りに長言する客人、あなづらはしき人ならば、後になどいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯に髮の毛の入りてすてられたる、又墨の中に石こもりてきし〱ときしみたる、俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例ある處にはあらで外にある、尋ねあるく程に、待遠に久しきを、辛うじて待ちつけて、悅びながら加持せさするに、このごろ物怪に困じにけるにや、居るまゝに即てねふり聲になりたる、いとにくし。何でふ

こどなき人の、すゞろにえがちに物いたう言ひたる、火桶すびつなどに、手の裏打ちかへし、皺おしのべなどしてあぶり居るもの、いつかは若やかなる人などのさはしたりし。老ばみうたてあるものこそ、火桶のはたに足さへもたげて、物いふまゝに、おしすりなどもすらめ。さやうのものは、人のもとに來てゐんとする所を、まづ扇して塵拂ひすてゝ、居も定まらずひろめきて、狩衣の前下ざまに、まくり入れて居るかし。斯ることは、いひかひなきものゝ際にやと思へど、少しよろしき者の式部の太夫、駿河の前司などいひしが然せしなり。身ぶるひをし、頭ふり、口わきをさへひきたれて、わらわべのこうどのに參りて、など謡ふやうにする。それはしも、誠によき人のさし給ひしより、心づきなしと思ふなり。物うらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らぬをば怨じそしり、又わづかに聞きわたる事をば、我もとより知りたる事のやうに他人にも語りしらべいふも、いとにくし。(清少納言)

○毀譽は察すべし

毀譽は人の大節なり。然りといへども、世擧りて譽るも必ず察すべし。人こぞりて毀るも必ず察すべし。況や一人はほめ、一人はそしるをや。たとへば訟事あらんに、兩方理なりと思へばこそ、互に言ひつのりて止まざるなり。之を奉行のさばかんに、兎角一人はかち一人はまくべし。勝ちたる人は奉行をほめ、負けたる人はそしることとなり。又惡しき人なりとも、それにともなふ人は、之をよしと思へばこそ交るなれ。我れよしと思ふをばほめ、我あしと思ふをばそしる習ひなれば、其の毀譽によりて其の人の善惡も分ちがたし。同じ一杯の酒ながら、上戸は醉ひて面白きものなりといひ、下戸はゑひて苦しきものなりといふ。況して人傳などに聞かん事は覺束なき事なり。昔人ありて其の子を或る寺につかはし置けるに、暫ありてにげ歸り、住持の事を誹りけるは、我に月代それと言ひければ、例の如く剃りけるに、剃り様の惡しきと散々にしかられ、或る時我が厠にゆきけるを見て、何とて厠へ行き

し不屆なり、以後行くべからずといひ、其後朝飯たくとて味噌をすりけるに、これも味噌をするがきこゑぬとて、理不盡の次第、殆ど困窮におよぶとて語りけるを、親きゝて、さりとて出家にも似合はざる事なりとて、急ぎ山に登り、右の事ども語りけるに、住持きゝて、いや／＼左樣の事にてはなし、常に髮よくそる故この頃剃らせけるに、いたく眠りて、これを見たまへ此の如く切りこみ候とて、之を見せ、其の上、厠も常の厠へ行かで、奧なる隱所へ行くをとがめ、味噌も常のみそをさしおき、客へ遣ふべきをつかふ、是等の指南をこそ返す／＼もいたしつれと申しけるにぞ。親もことはりに伏しける。信濃の國その原といへる所に木あり。遠くより見れば、帚の形の如し。よつて之を帚木といふ。されど近づき見れば帚に似たる所もなく、打繁れりとかや。誠に遠くより見聞くと、親しくみきくは多く此の帚木の類なるべし。([illegible])

○至近切要の學

飲食もなるべき丈は薄くすべし。房室もなるべき丈は少くすべし。是れ身を全うするの法なり。衣食はなるべき丈は質素なるべし。器用もなるべき丈は儉朴なるべし。居室もなるべき丈は卑陋なるべし。是れ家を守るの法なり。奢侈の念を抑へ制すると放縱の念を抑へ制すると、天下國家を治むる人も、一身を守る人も抑の一字、至近切要の學なり。(太田錦城)

○人を使ふ心得

人の長所は始めより知らんことを求むべからず。之を用ふれば長所始めて顯はる。人は唯其の長所のみを取れば可なり。其の短所の如きは知るを要せず。能く用ふれば其の時代の必要に應ずる程の人才は必ず之れあり。己が嗜好に合するもの而已を採用すべからず。人才は必ず瑕疵あり。瑕疵なきは以て人材となすに足らず。人を用ふるに當りては、小過を咎むるを須ゐず、唯大功あれば可なり。用ふる以上は十分に其の事を其の人に委ぬべし。上たる人、下と才智を爭ふべからず。人才は必ず一癖あるものなり。是れ器なるが故也、器ならざれば用ふるに足らず。(佐久間象山)



東海名勝歌まくら

秋の寝覺

むかしの東海道は京の三條大橋を出發點として江戸日本橋まで、山越し、川越し、海を渡り、關を越えて道のり百三十里、長亭、短驛五十三、國を取次いで十ヶ國、山川風俗の相違、名勝古蹟の連續、蟬丸の歌に名高い逢阪山の古關を越えて近江路に出ると、琵琶湖畔の勝景、大津、三井寺、辛崎、膳所の城、瀬田の唐橋、石山寺と名所、舊蹟が四疊半の小座敷に合宿してゐる樣なところだ、嫗が餅に聞こえた草津から鈴鹿山の暗い道に入つて、伊勢路に出ると、名物は燒蛤、これからが眞實の東海道だ、桑名の渡しを七里が間船で渡る、鳴海、池鯉鮒、赤阪、御油の長短驛路を經て白須賀から濱名の湖水となる、音に響いた天龍川、囚はれ人に懸想して、はかなき戀の物語を殘せし長者の娘の池田の宿、姙婦非業の死に因つて靈驗あつた佐夜の中山夜鳴石、天人降臨の傳説ある三保の松原、是等傳奇的、古典的の名所舊蹟は却々澤山あつて數へ切ない

けれども、東海道を巡つて實際名勝のすぐれてパノラマ式なのは駿河灣の景勝であらう、若し東海道から駿河灣の景勝を拔き去つたらば、五十三次の長亭短驛は、唯無味乾燥で長たらしい寂寥の道中たるに終るであらう、こゝに富士ありこゝに田子の浦あり、以て東海道の舞臺を縱まゝに活躍せしめるのである。

即ち神秀玲瓏の芙蓉峯天半の聳立を景の主題として三保の松原の夢に見た樣に景色、淸見潟の長汀曲浦、薩埵嶺の眺望、富士の裾野の雄大豪宕なる景圖、浮島が原の物寂びたる田子の浦の、のどかに晴れ渡りたる景色、愛鷹山より南、箱根連山の蜿蜒として長蛇の橫るがごとき、全く天造のパノラマである。山と海との

調和をほどよくとゝのへて飽かず眺めさするは實に駿河灣の勝景の特色で、日本國中どこにも此樣な、勝れた自然のパノラマを備へたところはないのである。彼の奥州路には北上川の沿岸、中國には瀨戸內海、中仙道には木曾路の勝景があつて、それ〲をもしろ味は加はるとはいへ、とても駿河灣の天造には及ばない、蓋し東海道がむかしから、人口に膾炙して、何人にも生れぬ先の我が故郷の樣に感ぜられつゝあるのは、畢竟この秀麗なる芙蓉峯の天女が引きつける表情の眼、彼女の持前の魅力である。こゝに駿河灣を中心として古の歌書や、道の記や、名所圖繪に顯はれた、東海道の名所古蹟、別して古歌に名高い由緒の地名を遡つて聊か風騷のこゝろを養はんと企てたのである。

順序は五十三次を追ふのであるが、平凡な景が前に出ては興味がないから、まづ尤も古典的で風光明媚な三保の松原から始めて駿河灣一帶に及び、それからあとへ逆戻して東海道を上て行く今ならば下るのである。

△三保の松原△羽衣松　清水港より入江二十丁程にて三保の松原へ着す、又陸行なれば海濱を步し折戸村を經て三保へ至る、道程は一里半、三保又は三穗ともいふ、西より東へ指し出したる洲崎なり。折戸より三保の洲崎といふまで四十二丁四十間、此間に小宇多し、貝島、羽衣濱、洲崎、入ツ頭、宇津久呂、渡瀨の濱等なり。

風早の三穗の浦廻を漕ぐ舟の　萬葉
船人さわぐ浪立らしも

忘れずよ清見が關の波間より　中務卿親王
霞と見えし三保の浦松

清見潟磯山寺は暮初て　藤原冬隆
入日殘れるみほの松原

清見潟波路の霧は晴にけり　平宗宣
夕日にのこる三保の浦松

△羽衣松の古事　三保松原の中に御穗神社といふあり、祭神は大巳貴命と其妃三保津姫なり、二神出雲國三穗ヶ崎よりこゝに遷座したまふ故に三穗の神と名つく、羽衣松はその社より東南五丁餘を過て海濱にあり、こゝを有度濱といふ、古松一株あり、これを羽衣掛といふ、その松の下に石造の祠あり、風土記に三穗の離宮、羽衣、磯田社と稱す、土人今辨才天と崇む、抑も羽衣松といふは、むかし天人降りて此松枝に羽衣を脫かけしを漁夫ひろひ

取りて返さす、漁夫の好によりて羽衣の曲まひてとりかへし上天せし由、世の知るところなり、神代語に大巳貴命天の羽車に乗りて妻求めたまひ、その羽車を羽衣といひあやかりて天人の事に附會せしにや。

能因　法師

有度濱に天の羽衣
むかしきて
ふりけん袖や
けふのはふり子

家　　隆

うと濱のあまの羽衣
春はきて
今も霞の袖やふるらん

抑もこの三保の松原は吾嬬路において名たゝる勝地にして古人の秀詠多し久能宇度濱より更に連りたる出島なり、其間一里餘にして洲濱の長きあ



り、短きあり、廣きあり、狹きあり、中に數百千の松の緑こまやかに枝葉汐風に吹たはめられ、高きあり、低きあり、直なるあり曲れるあり、其氣色窈窕として、三千の美人紅粉を粧ふて一度に笑るがごとし、遙かに東北の方を見渡せば名におふ富士の高根、愛鷹の翠巒前には浮島の原、吉原、蒲原の驛、薩埵山、興津川の流れ清見が關、清見寺の鐘の聲は悠揚として月に清、霜に冴えたり、田子の浦廻を漕舟は松の梢を走るかと疑はる、北には清水の湊賑しく入船あり、出船あり、漁の家軒をならべて魚賣る聲の囂し、南は滄海洋として、大鵬三千里の羽をうつ俤あり、荒磯浪に靑藻刈わらは鮑とる

海士潮くむ磯女みな世をわたる業くれのさま〴〵、いづれ仇ならざるはなし、洲濱の中に字あり、其中央に三穂の神社立たまふ、羽衣濱には羽衣の松、磯田の祠あり、物閑かなる海邊なり、神社の什寳に天羽衣とて羅の長絹なるものあり、天人より傳りしとかや、漁夫より天人に羽衣をとり、かはりに霓裳羽衣の曲を舞して七寳充滿の寳を降らしたるよし謠曲にもありて世の知るところなり云々と秋島籬島の名所圖繪に記せり。

△清水關△清水潟　三保の松原より興津までの海邊一帶な入江清水潟といふ、清見ヶ崎、清見川、清見寺、興津川、古奴美濱袖崎、袖師の浦、薩陲嶺など眺望佳絶の名所極めて多し、清見關は箱根以西の關所にして、一方は直ちに海、一方は山、海道一の要害也、關の古關は今の清見寺の門前なりといふ。

清見潟關にとまりて行舟は
　嵐のさそふ木葉なりけり　大納言實房

忘れずな清見關の波間より
　霞て見えし三保の浦松　中務卿親王

きよみ潟磯山つたひ行暮て
　心と關にとまりぬるかな　前中納言有房

あけぬれど波はゆるさし清見潟
　關路は鳥の音まてとおもふに　從三位保季

清水潟關こえすぐる旅人の
　こゝろをとめて三保の松原　頓阿法師

清見潟波をかたしくたひ衣
　またやはかゝる月をきて見ん　俊成卿

きよみ潟磯うつ波も音さえて
　はるかにおくる入相のかね　爲尹

光行紀行に曰、清見が關も過うくてしばしやすらへば沖の石むら〳〵しほにあらはれて波にむせぶ磯の鹽屋所々に風にさそはれて、けふりなびきにけり、あつま路のおもひともなりぬべきわたりなり、むかし朱雀天皇の御時將門といふものあづまにて逆謀起しけるこれを平らげんためにうぢの民部卿忠文つかはしける此關に至りてとゞまりけるが、漁舟の火の影は寒して浪を燒驛路の鈴の聲は夜山を過といふ唐の歌をながめけり。

清見潟關とはしらで行人も
　こゝろばかりはとゞめおくらん　光行

△薩埵嶺　一名岩城山と云ふ、海邊第一の景勝なり、まづ東北に方つて白妙の富士の高根を仰ぎ、少し隔つて愛鷹山、伊豆の岬、西南に三保の松原鮮やかに見え渡り、前には紅濤渺茫として長閑けき春の波間に釣とる海士、夏は磯邊の鷗飛かふ景色、初雁の渡る影は雲と水との中に消えて浦の苫屋の秋の夕ぐれにこゝろを傷まし、いさゝ小波にむれゐる小夜ちどりの聲すごく氷と見ゆる冬の月かげいと寒し、元是れ嵯峨たる嶺にしてむかし清見關の要害なれば、武人爭ひの巷となりしこと數々にして歌書にも軍書にも名高きところなり。

つれなさは岩城の濱のしき波の
　何とこゝろをかけはしめけん　衣笠内大臣

岩城山こえてぞ見つる磯崎の
　こぬみの濱の秋の夜の月　法性寺關白

△富士山　海内一の高嶺にして八朶芙蓉の面影、これを仰げばいよいよ崇く玲瓏として塵界を絶す、山邊赤人の萬葉に遺せし名歌都良香の富士山記を始めとして、古來歌人騷客の吟詠頗る多く、竹取物語にも赤山の事を書けり、抑も富士は本朝の高嶺にして絶頂まで九里餘直立の高さをつもれば都て一千二百丈にして北斗に近し、峯の絶妙にして業平も鹽尻に似たりといひ夏天に雪を戴いて萬葉に詠すと古人もいへり。

日くらしに山路のきのふ時雨しは
　ふしの高根の雪にてありけり　大江嘉言

めにかけて幾日になりぬ東路や
　三國をさかふゝしのしはやま　大僧正隆辨

ふしの嶺は晴行空にあらはれて
　すそ野にくたる白雨の雲　惟宗光吉

浪あれば富士のみ雪の消る日も
　もゆる氷室の山の下柴　順德院

富士の嶺はとはても空にしられけり
　雲より上に見ゆる白雪　守覺法親王

草ふかみまたきつけたる蚊やり火と
　みゆるはふしの煙なりけり　大中臣能宣

光行紀行にいふ田子の浦にうち出て富士の高根を見れはときはかぬ雪なれどもなへていまだ白妙にはあらずあをうして天によれり、すがたゑの山よりもこよなう見ゆ貞觀十七年の冬の頃、白衣の美女あつて二人山の峯にならび舞ふと都の良香が富士の記に書たるはいかなるゆゑかと覺束なし

富士の根の風にたゞよふ白雲を　　光　行
　あまつをとめの袖かとぞ見る

△田子の浦　清見興津より東、浮島原との海邊の總稱なり

田子の浦にかすみのふかく見る哉　大中臣能宣
　もしほの煙立やそふらん

するかなる田子の浦波たゝぬ日は　詠人　不知
　あれども君をこひぬ日はなし

沖津風夜さむになれや田子の浦の　　前
　あまのともしひ燒まさるらん

△浮島ヶ原　一名富士沼といふ、富士八湖の一にして吉原の北にあり、治承の戰場の遺蹟なりといふ、むかしは此沼東西三里餘もありて富士川のほとりまでも續き平氏の軍勢水鳥の羽音に驚き敗走せしも此沼ならんといひ傳ふ、東海道の盛んなる頃はこゝにて漁したる鰻を四層柏原の茶店に出して商ひ居たれど今はこの事なしと。

春草はかりかふばかり成にけり　源　仲　遠
　ふし野の沼に駒やとめまし

水ちかきふもとの沼のよそながら　前中納言爲相
　いまゐる鳥のさたかには見す

光行の紀行に曰ふ浮島ヶ原はいつくよりもまさりて見ゆれば、ふしの麓にてみどりかけをひたして空も水もひとつなり、蘆刈小舟所々に棹さしてむれたる鳥多くさりきたり、南は海の面遠く見わたされて雲の波煙の浪いとふかき眺めなり、すべて孤島の目に遮るなし、終に遠帆の空につらなれるを臨む、こなた、かなたの眺望いづれもとり〳〵に心ぼそし、はらにはしほ屋の煙たえ〳〵立わたりて浦風松の梢にむせぶ、此原むかしは海の上にうかひて蓬萊の三つの島の如くにありけるによつて浮島となん名づけたると聞にもおのづから神佛のすみかにやあらんといとゞゆかしく見ゆ。

影うつす波の入江のふしの根の　　光　行
　煙も空に浮島ヶ原

△箱根　驛は箱根山の嶺に在り今箱根町と稱す小田原まで四里八丁、昔し驛中に關門ありて往來の人馬を檢め當驛の旅舍つれに霧深くして蚋蚊なし又曇天多くして雨氣繁し、北の方に駒ヶ嶽、東北に二子山南に日金山、伊豆の海あざやかに見ゆと名所圖繪にも記されたり。

足柄の御坂につかん玉匣
箱根の山のあけんあしだに　　柿本　人丸

箱根路を我越え來れば伊豆の海や
沖の小島に波のよる見ゆ　　鎌倉右大臣

旅の空雲ふむみねを越行ん、
しぐれは袖の下よりぞする　　寂蓮　法師



寂蓮法師の家集に、十月ばかりに東の方にまかりけるに箱根といふ山をなん越ける、所の有さまあやしくよのつねにかはりけり、遥に峯に登りては海をわたり谷に下りては雲を踏むさるほどに風に木の葉をまくりあげしぐれの麓より登りければ云々とあり

△箱根湖水　一名蘆の湖といふ富士八湖の其一なり。箱根の山嶺

にあり、長さ三里許巾一里餘、其中に左尾崎、右尾崎、三つ石、塔ヶ島等の字あり、魚物は鮒、赤腹なり、鯇魚は山中溪水に生ず小兒五疳の妙藥に用ゆとあり

玉くしげはこねの山の峯ふかく　慶融
水海はれてすめる月かげ

光行紀行に曰く、猶行過るほどに宮ばかりかる山の中に至りて水うみひろくたゝへたり、箱根の湖水となづく、又あしの海といふもあり、權現垂跡のもとひけたかくたうとし朱樓、紫殿の雲にかさなれる粧ひ、唐家の驪山宮かとおどろかれ、巖室石龕の浪にのそめる所ろ錢塘の水仙寺ともいひつべし嬉しきたよりなれば浮身のゆくへしるべをさせたまへなど、いのりて法施奉るついでに

今よりはおもひみたれしあしの海の　光行
ふかきめぐみを神にまかせて

目もゆかし白雲動く不二の形　闌更

△宇津谷峠　駿州岡部の宿より十石坂を經て湯谷口より坂路となる、これを宇津の山といふ、嶺まで凡一里、こゝに伊勢物語に名高き蔦の細道あり。

名所圖繪の記するところによれば、それ宇津山蔦の細道は勢語に出て、いにしへより其名高く、古詠多し岡部の宿より海道一里許行きて湯谷口坂の下といふ所あり、こゝの鼻取地藏堂の向ふなる熊野權現のやしろの側より右の方へ入るなり、これより道細く、いさゝめなる溪川あり、此流を右に添ひ左につれて飛越の橋五つをわたる、坂路にかゝればいよ／＼道細く山深ふして幽寂たり、茅、すゝき、萩、荻、篠竹、生茂りて藤蔓、蘿つら足をまとひ、薔薇、荊棘袂を閉て歩しかたく二人手引の者鎌をもて叢を薙刈て次第に登るに路嶮しく杖をちからに行に少したいらなる所ありこゝを神社平といふ、むかし社のありし古蹟也云々

おとにきくうつの社のうつゝにも　前大納言爲家
夢にも見えぬ人の戀しさ

それより又登るに漸く頂嶺とおぼしき所に出たり、山郭依々として伐木の音さへかすかにだも聞えず實に陶潜が桃花源に至るの俤あり、これより東に降る坂路いよ／＼嵯し且眞砂路にして踏止がたく。すべりなや

みて靜かに下る、又溪川ありこゝにも飛越の橋あり、路も鮮やかにして段々下るに遂に宇津谷嶺の東なる、十團子の名物の、茶店の傍に出でたり、これを蔦の細道といふ。

業平朝臣
するがなるうつの
山邊のうつゝにも
夢にも人に
あはぬなりけり

家隆朝臣
旅寢する夢路は
ゆるせうつの山
關とはきかず
もる人もなし

袖にしも月かくれとは契をかす　鴨長明
涙はしるやうつの山こへ

夢路にも馴しやと見るうつゝには　俊成
うつの山邊の蔦ふける庵



十六夜日記にいふ、うつの山こゆるほどにしもあせりの見しりたる山伏に行あひたり、夢にも人をなどむかしをいさとまれひたら

ん心地していとめつらかになかしくもあはれにも。やさしくもおぼゆ。急ぐ道なりといへば文もあまたはえかゝず、たゞやむことなきと心ひとつにぞおとづれきこゆ

我こゝろうつゝともなし宇津の山　阿　佛
　夢にも知き昔こふとて

ひと夜ねしかやの松屋の跡もなし　兼好　法師
　夢かうつゝか宇津の山こえ

十團子も小粒になりぬ秋の風　許　六

細道や蔦の葉うらのかんことり　離　島

△佐夜の中山　東海道日坂の東北にあり光行紀行に佐夜の中山は古今集の歌によこたりふせるとよまれたれば名高き名所とは聞きたれども見るにいよ〳〵心ぼそし、北は深山にて松杉あらしはげしく南は野山にて秋の花つゆしげし谷より峯にうつる白雲に分入こゝちして鹿の泪をもよほし蟲の音あはれ深し。

ふみまよふ峯のかけはしと絕して　光　行
　雲に跡とふ佐夜の中山

又貞嚴海道記に、佐夜の中山にかゝるこの山口をしばらく登れば左に深谷右も深谷、一峰ながき道はつゝみの上に似たり、兩谷の梢を脚下に見て群鳥の囀を足の下に聞く、山の間を過ぐれば中山とは見えたり、山はむかしの九折の道ふかきがごとし。

わけのぼるさよの中山なか〳〵に
　こえてなごりそくるしかりける

東路のさよの中山なか〳〵に　紀　友　則
　いつしか人をおもひ初けん

古さとのけふの俤さそひこと　藤原　雅經
　月にそちきるさよの中山

岩かねの床にあらしを片しきて　有　家
　獨やねなんさよの中山

旅衣夕霜さむきさゝのはの　衣笠內大臣
　さやの中山あらし吹也

峯の雲うらはの波をそめにかけて　大納言爲廉
　嵐を分るさよの中山

こゝに名高き夜泣石、夜哭松、姙婦塚の由緣あり、今この三つ由來を按ずるに、むかし日坂の宿に姙身せし女ありて山一つ向ふなる金谷の宿の夫に通へり、或夜、この山中に山賊出でゝこの女に戀慕し、從はざるにより斬殺し衣裳を剝ぎとり、行衛をくらましける

亡婦偶々臨月にあたり、赤子胎を出でゝ、泣き叫ぶこと限りなし、偶々道行く旅僧あり不憫におもひ抱とりてあたりの賤の女にあづけ飴をもつて養育させけり、其子成人の後命なりけり佐夜の中山と常に口づさみつつ諸國をめぐり終に池田の宿にてかの盗賊に出合ひ、親の敵を討ちしとぞ。

△天龍川△池田の宿

光行紀行にいふ天龍川と名づけたるわたりあり、川深く流おそろしきと見ゆる秋の水みなぎり來て船の去ること速なれば往還の旅人たやすく向の岸に着かたし、此川のみくづとなるたぐひ多かりと聞こそ彼の巫峡の水の流思ひよせられていとあやうき心地すれ、しかはあれどもおもふにも譬ふべき方なきは世にふる道のけはしきならひなり。

此川のはやきながれも世の中の　　光行
人のこゝろのたぐひとぞみる

建武のむかし新田義貞東國の戰に利を失ひて歸り登られし事は太平記に記されたり天龍川の東の岸に着き俄かに在家を壞ちて浮橋を渡し、あはや義貞渡らんとする時反間の者ありて浮橋を切落し危ふく水に落ちんとせしを舟田入道抱き起して難を免かれけるよし。

池田宿は天龍川の西岸にあり、源平の昔平重衡西海の戰に打まけて、捕はれ人となりて鎌倉へ下りける時、この宿に泊る、宿の長者熊野が娘、侍従出でゝ、琴を彈じ楚囚のこゝろを慰めたる風流韻事によりて名高し。

そのかみの里は河瀬と成にけり　　參議　雅資
こゝに池田のおなし名なれど

ゆたかなる池田の里の氏までも　　堯孝法師
すみよき御世にあふやうれしき

丙辰紀行に曰く、美濃の青墓、遠江の池田、駿河の手越いづれも長者遊君ありてむかしは往還の武士輕薄の少年鞍馬を門につなぎ千金に笑を買ふところなればかの江口の津にも爭でかおとらん、矢島大臣(宗盛)のめされし湯谷(熊野)も此池田の宿のむすめにてはべる事世にかくれなし、宿は天龍の河の東の溜に形ばかり殘りてわづかなる小民どもわたりを守りて居侍りける

又盛衰記重衡海道下りに云、濱名の橋を渡りたまへば松の梢に風さへて入江に噪ぐ波の音、さらでも旅は憂

に心を盡すゆふ間ぐれ、池田の宿にもつきたまひぬ、かの宿の長者、熊野が娘侍從の許に其夜は三位宿せられたり、侍從三位中將殿を見奉りて日來は傳にだに思召寄りたまはぬ人のけふはかゝる所へ入らせたまふ事の不思議さよとて一首の歌を奉る。

旅の空はにふの小屋のいぶせきに　故鄕いかに戀しかるらん　熊野　侍從

ふるさとは戀しくもなし旅の空　都も終のすみかならねば　三位　中將

やゝありて中將梶原を召て扨も只今の歌のぬしはいかなる者ぞ艶しくも仕たるものの哉と宣へば、景時畏つて申けるは君はまだしろしめされ候はずや、あれこそ八島の大臣殿のいまだ當國の守にて渡らせ玉ひし時めされまゐらせて、御最愛候ひしに老母故鄕にて痛はりあれば都より御暇を申上しかども給はらざれば

いかにせん都の春もをしけれど　なれし吾妻の花やちるらん

といふ名歌仕り暇を給てまかり下り候ひし海道一の美人とぞ申ける、都を出で丶日數經ぬれば、彌生の半過て春も暮なんとす、遠山の花は殘の雪かとぞ見る、浦々島々霞渡り〻越方行末の事どもを思ひつゞけたまふにもつきせぬものは淚なり。

△濱名湖　一名猪鼻湖又は遠湖ともいふ、和名抄に近江を近つ淡海といふ故に遠江を遠つ淡海と對するなりとあり、凡そ湖の廣さは海より北に入ること五里餘、東西四里に過ぐ、振袖記にこの水うみ後土御門院明應八年六月十日洪水の變ありて水海と汐海とのあいだきれて潮入て水海はなくなる故に今切といふなりとあり。

はやく見し濱名の海に立ちかへり　むすばぬ波も契りありけり　飛鳥井雅經

丙辰紀行に曰ふ、遠州荒井の濱より奥の山五里ばかり海となりて大船も出入すむかしは山につゞきたる陸なりしが中頃山より蟹の貝おびたゞしくぬけ出て海に入りける其跡かくの如く海になりて今切と名づくるよし云々。湖中に引佐、細江とて風景佳絶の勝地あり。

△引馬野　濱松のほとり三方原などの舊名なり城を引馬城といふ城の東南に引駒坂と云あり。萬葉集に、引馬野ににほふ榛原、入みたれ、衣にほはせ旅のしるしにとあり、秋の名所として歌書に名高し

はま松のかわらぬかけを尋ねきて
みし人なみにむかしをぞとふ　阿佛

匡房

春霞たちかくせども姫小松
ひくまの野邊に我は來にけり

爲家

引馬野に匂ふ秋萩入みだれ
なくやをしかの秋のしら露

俊頼

ひくまのにかやが下なる思ひ草
またふたこゝろなしと知らすや

あかなくにわけこそきつれ蟲の音の　足利義敎

袖を引馬の野邊の朝露



△八橋の古蹟

池鯉鮒より八町許り東南の方牛田村の松原に石標あり、是より左へ入ること七町許り、こゝに一堆の丘山ありて、古松六七株、其側に凹たる池の形の芝生あり、是むかし杜若のありし址なりといふ、北の方に逢妻川の流あり、こゝに土橋をわたす、これは八ッ橋をわたせし流といふ、すべて此邊田畑にして、八ッ橋燕子花の俤もなし、むかしは此所官道にして、今も鎌倉道の名ありて、道幅も廣し、かの丘山に業平塚といふ石塔婆あり、後人準へ立るものならん、又業平の碑銘ありしも今は八橋村無量寺へ移されたり。

八橋にみどりのいとをくりかけて　俊成
くもでにまがふ玉柳かな

駒とめてしばしはゆかし八橋の　順徳院
くもでにしろきけさの淡雪

杜若にほふ河邊の旅衣　家隆
この下かけもたちぞやられぬ

旅衣はる〳〵來ぬる八橋の　為家
むかしの跡に袖もぬれつゝ

光行道の記に、行々て參河の國八橋のわたりを見れば、在原の業平杜若の歌よみたりけるに、皆人かれ飯の上に涙おとしける跡よとおもひ出られて其わたりを見れとも、かの草とおぼしきものはなく稻のみぞおほく見ゆる。

花ゆゑにおちしなみだの形見とや
稻葉の露をのこしおくらん

亦貞應海道記にいふ、かくて三河國にいたりぬ、池鯉鮒が馬場を過て、數里の野原を過一兩の橋を名づけて八橋といふ、砂子に眠る鴛鴦は夏を辭し去り、水にたてる杜若は時を迎て開けたり、花はむかしの色かはらず咲ぬらん、橋もおなじ橋なれども幾度つくりかへつらん、相如が世をうらみしは肥馬に乘つて昇僊にかへり、幽子身を捨て窮鳥に類ひて、當橋をわたる、八橋よ、八橋よ、くもてに物おもふ人はむかしも過きや橋柱よ、橋柱よ、おのれ朽ぬるかむなしく朽ぬるものは今も又すぐ

侘てすぐる三河のやつはしを
心うきても立かへらはや

△鳴海潟　浦の名所也、熱田より池鯉鮒までの間三里の濱むかしは鳴浦潟を見渡し濱つたひに宮より鳴海まで行きけるなり。汐滿つるときは左の方鳴海の上野といふを行くなり、古詠多し、

さよちとり聲こそちかくなるみ潟　三位　秀政
かたふく月に汐やうつらん

浦人の日も夕くれになるみかた　通　光
歸る袖より千鳥なくなり

なるみ潟汐せの波に礒くらし　大江　忠成
浦の濱路にかゝる旅人

鳴海かた汐干に浦や成ぬらん　景　綱
上野の道を行人もなし

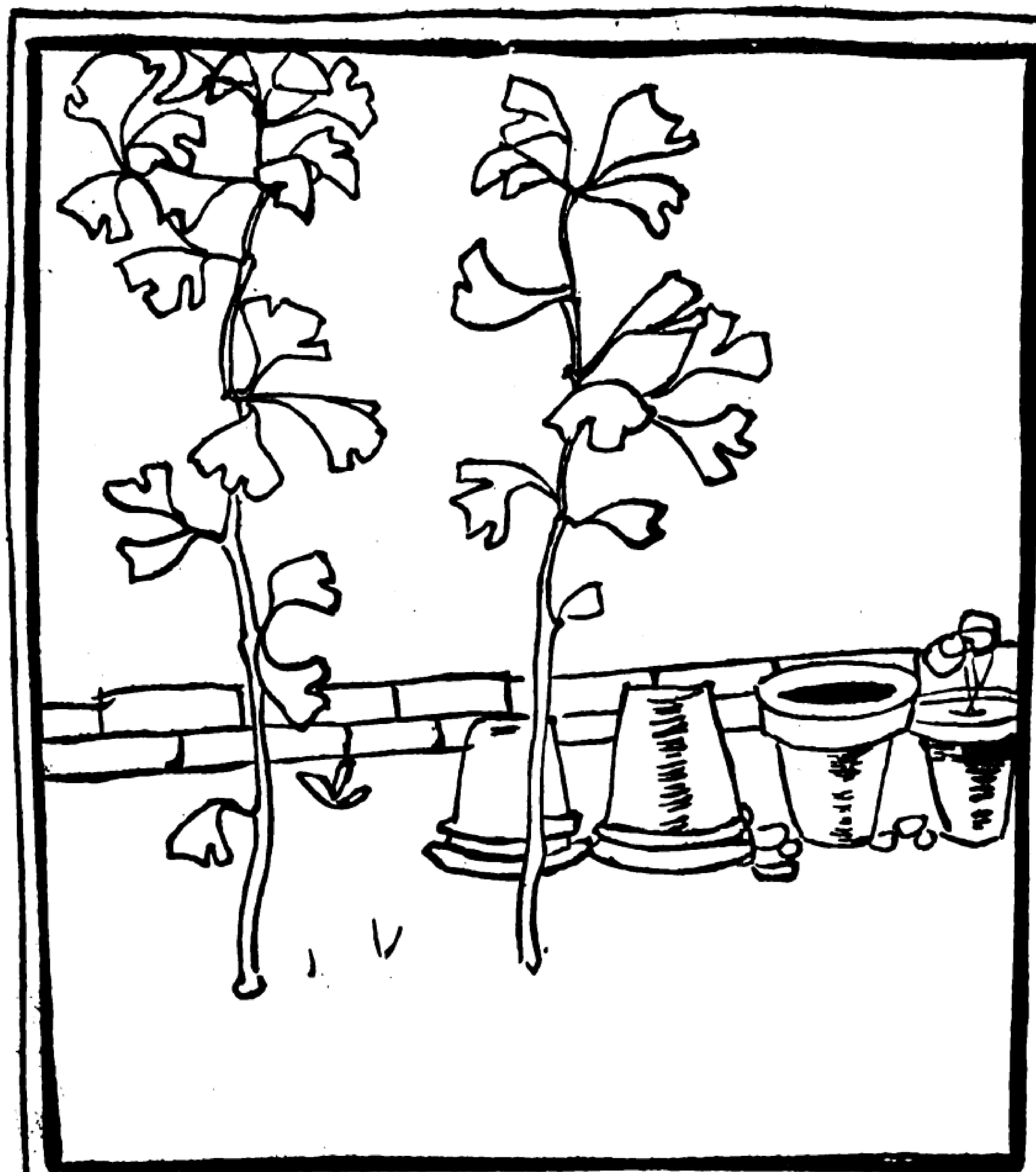
打よする沖津白波音さへて
雪になるみの　浦風ぞ吹
祝部　成沆

△鈴鹿山　鈴鹿郡、伊勢近江の境の峰にして阪路嶮岐廿七曲ありと称す、むかは山賊など住みて、往来旅人を悩ませしこと物の本に見えたり、鈴鹿の関は不破の関と共に東海、東山両道の関門にして、大化のむかしより据ゑられ、壬申の乱の時より名高くなりし古蹟なり。

富宮　女御

世にふれば又も
越けり鈴鹿山
むかしの今に
成にやあらん

すゝか山浮世をよそにふり捨て
いかに成行我身なるらん
西行　法師



能宜　朝臣

下紅葉いろいろ
になる鈴鹿山
時雨のいたく
ふればなるべし

荒木田氏忠

ふりすてゝ誰かは
越んすゝか山
関やはよはの
月も守けり

△湖水　湖水一名鳰の海或は淡海、大宮に近き江とて近江ともいひ、又琵琶湖ともいふ、これは形によりて名づくるなり、和歌の名所湖辺七十余所あり、いづれも古跡多し。

風渡るにほの水海空晴て
前関白太政大臣

月影消し沖津島山

さゝなみやにほ照あまのぬれ衣　爲氏
浦かせさむくうたぬ夜もなし

月影に鳰照る浦の秋なれば　爲家
汐やくあまの煙たになし

鳰の海や月の光のうつろへば　家隆
波の花にも秋はみえけり

△石山寺　湖畔勝景の隨一なり、寺の創建尤も久しくして一千年以前のものなりと、紫式部湖月を賞して物語は著し、こゝに獨特の古硯をとゞむ、本堂は巖上に建て其めぐりは巍嵬たる巖石層々として群宇寶塔所々に見えたり、後は連峯峨々として岩間、醍醐につゞきて呼應たり、前には湖水を打開きて漣波森茫尤も仲秋の月を賞するに堪たり、此所は又名にしあふ宇治川にそひて螢の名所なればむかしより河の面に船遊せし風流今も猶その面影をとゞむとなん。

みるめこそあふみのうみはかたからめ　伊勢大輔
ふきたにかよへ志賀の浦風

和歌の浦にまたもひろはゝ玉津島　惟宗忠景
おなし光の數にもらすな

いし山やにほてる月のさやけさは　關白政家公
もろこしまてもくまなかるらん

△堅田浦　湖畔勝景の一なり、大津より三里、湖水の船著なり。

春のくるかたゝの浦の朝なきに　圓光院入道
みるめもしらす立霞かな

あふ事はかたゝの浦の沖津浪　道曉法師
立名ばかりや契なるらん

終に又浮名や立たん逢事に　宗成
さても堅田の浦のあた浪

むかしは近江の産に源五郎鮒といふあり、これは元佐々木家一國を領せし時家來に錦織源五郎といふ者漁者を司どり、其漁する鮒の至つて善きものを撰んで官家へ奉りし其支配司を魚の名に呼ふならはしとはなりしなり。

堅田の落雁は近江八景の一に數へたり、近衞關白時熈公の歌に

峯あまた越てこしちに先ちかき
堅田になひき落るかりかね

名に高き浮見堂も亦こゝにあり、むかし一條天皇の御代横川の源信僧都湖上に御堂を創造す、其傳に曰く一日僧都横川の山岳より湖上を眺めたまふに夜々光明

赫々として波上に輝き渡るものあり、僧都は不思議のおもひをなし、此浦に下り、漁者をして網を下さしむるに黄金一寸八分の彌陀の尊像を得たり、おもふに此の浦古人より漁人多く、毎年殺生の鱗數を知らず、佛現じて諸人に供養せしめたまふなりと、堂を湖上につくりて安置し奉るなりと。

△打出濱　湖畔名所の一つなり、京都より、逢坂山を越て初て湖水へ打出る濱をいふ。

さゞらなみひまなく岸を洗ふなり
　渚きよくはきてもみよとや　大伴黒主

にほの海は氷とくらし白波の
　打出の濱に春風そ吹く　源兼氏

駒なへて打出の濱を見渡せば
　朝日にさはくしかのうら波　後鳥羽院

白浪のうちての濱の秋霧に
　たえす物おもふ鳰鳥そ啼　高遠

暗室に茶碗飛ぶ

ある日、カーライルの妻の親友で同家へ遠慮なく出入して居たヂクソン孃が、カーライルの家を訪れると、カーライルは太い癇癪筋を額に現はして、俯目になつて入口の閾の上に立つて居た。そして孃を見ると、いつもの懇親なのにも似ず、ちよつと會釋した儘奥へ飛び出して、細い小路へ影を隱して了つた。孃は、何か家庭に波瀾があつたなと思ひながら、案内も待たず奥へ進んで行くと、薄暗く陰氣な中に、茶香茶碗が床の上に飛び散つて居て、安樂椅子の上にはカーライルの妻が所在なさゝうに俯向て居た。果して只事でないと思ふ間もなく、妻が『貴孃はトーマスにお逢ひでしたか』といふから、『ハイ只今門口でお目にかゝりましたが、何だか甚くお鬱ぎのやうでした、一體何うなさつたのですか』といふと、妻は安樂椅子の上から兩眼をキラ〳〵させ乍ら、さも悔しさうに『何うつて、私は頭痛がして苦しくつて、此の安樂椅子の上に二日臥し通しに臥して居ました、それだのにトーマスは先程やつと此所へ入つて來て、如何したのかと言ふぢやありませんか。あまり腹がたつたから今茶香茶碗を抛りつけてやつたのですと言つてプン〳〵して居たとか。文士の家庭にありさうな話である。

△街はづれの記　一等金五拾圓　松平鏡子

△華族系　二等金參拾圓　内藤千代子

△良夜　三等金貳拾圓　玉露

△意地の人　四等金拾圓　磯千鳥

△移民地の婦人　四等金拾圓　田駒不二子

△矛盾した生命　四等金拾圓　野路の雨

△其日々々　四等金拾圓　みをつくし

△千どり　四等金拾圓　紅梅

△皮肉な批評(しのぶ)△今様心學道話、稲姫)△戀しい日本(白菊)△自慢話し 胡蝶)△人格小主觀(今關登志子)△怪氣焔(空蟬)　以上六篇五等

右の外未掲載四種は次號發表

順境の人と逆境の人

〆切拾月二十日

右題の下に考案したる文を募る

賞金

一等　金五拾圓　（一名）
二等　金參拾圓　（一名）
三等　金貳拾圓　（一名）
四等　金拾圓　（五名）
五等　金五圓　（十名）

△文はなるべく日記體小説體を希望す
△紙數は十五枚以上の事
△賞金は發表の當日現金にて送る
△原稿には「順境と逆境」と朱書ありたし
△名宛は「女學世界編輯部」の事
△原稿の文字は亂筆ならぬ樣に願ひます

募集（十月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

▲端書文（一人一種）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
内（定刊數	十二册
增刊四回	一、五、九、十一月價格同一
郵税	一册 二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十四年九月十二日印刷納本　第拾壹卷第拾貳號

編輯發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

電話特番　三千百三十八

通信販賣

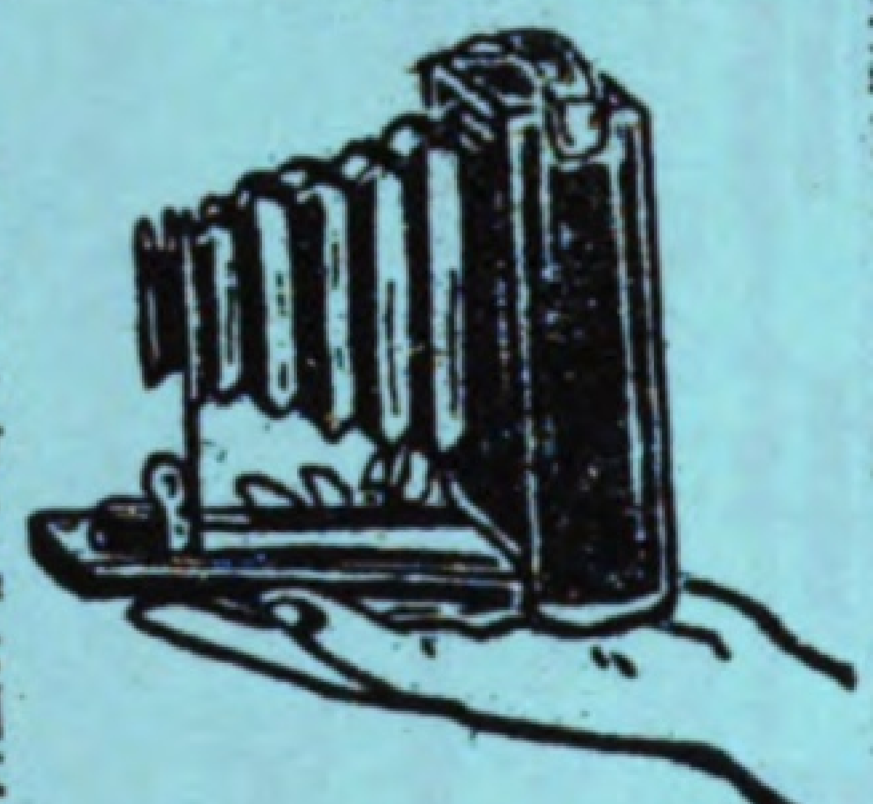
博通社 ⑭ 特賣品

●安心の出來る買物は博通社に限る!!!

珍寫眞器

誰でも寫せる
最新式 最小型 寫眞器!!!

新式ポケット用カメラにして瞬間定時影に適し如何なる素人でも必ず寫し損じなく携帯に頗便なり



◎アイヴィーカメラ片面取枠六個革鞄質紐付頗美、手提携帯兼用 特價 八圓六拾錢

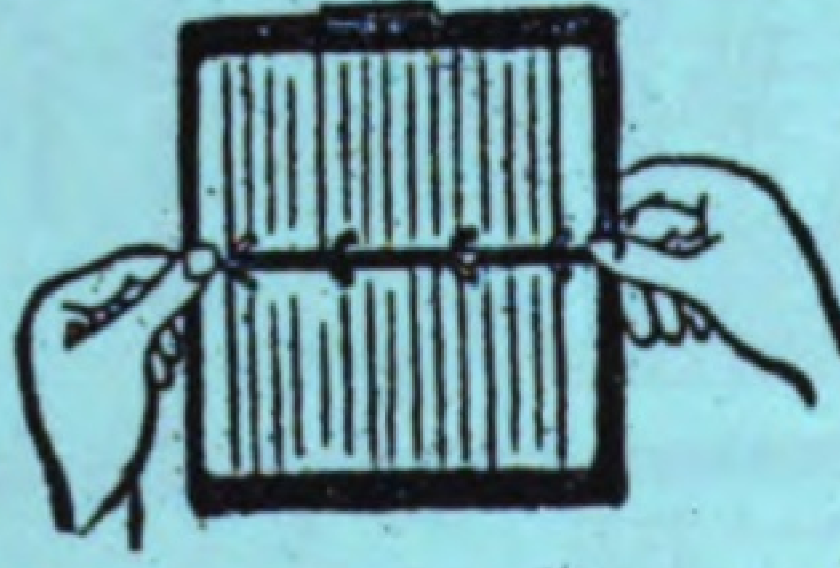
◎寫眞撮影用具材料一式及藥品一式並寫眞撮影法壹部 特價 壹圓四拾錢

◎有用金屬製優等疊込三脚 特價 貳圓拾錢

但し三脚は手提のみに御使用になれば必要ありません

▲送料 市内無料 内地十六錢 臺、樺、朝、滿 卅五錢

●ハンデーブック



如斯重寶なるノートを未だ持たざる人ありや 優美にして堅牢 經濟にして徳用なる拔挿自由にして傳票ともなり手帳ともなる眞に二十世紀式模範的ノートとして敢て誇言に非らず

◎横二寸五分竪四寸優等革表装索引付 特價 八拾錢

替紙百枚に付 特價 八錢

▲送料 市内四錢 内地八錢 海外卅錢

●純銀製寫眞挾



優美―高尚 机上の美觀!!

技術の優秀、銀質の確實なる當社の保證する處實用的装飾品として尤も超絶す

◎純銀寫眞挾 巾弍寸竪四寸厚三分 特價 七圓九拾五錢

▲送料 市内無料 内地十二錢 海外卅錢

●御手紙一本で何んでも御求めに應じます!!!

女(後付の一)

大橋メール、オーダー、ビジネス

東京日本橋區本町一丁目 **博通社** 電話本局六百四十番 振替口座東京五十番

産科婦人科楠田病院長　楠田謙藏先生校閲
産科婦人科專門醫　稻生鑑次郎君纂著

實習産婆學

全二册

洋裝菊判美本
上卷　通常産　紙數三五〇頁
下卷　異常産　紙數約三〇〇頁

◉上卷正價金七十錢　◉下卷正價金八拾錢……▲郵稅各一册十錢

上卷は通常産を講じ下卷は異常産を述ぶ通常産の異常産に於ける産科の兩輪双翼にして助産婦たるものは共に精修練磨せざるべからず然るに其一を修めて其一を習はざれば到底開業者たる資格なく又産科實習の効用を得ざるべし上下完全して其全科を實修し得べし殊に行文の平易なる挿畫の精密なる世上未だ如此親切懇到のものあるなし開業者は素より本科の生徒諸孃は早く此要書を得て研修の便を得らるべし

今井柏浦君選
榊原蕉園女史口繪

古今女流俳句集

全壹册
菊半截美本
貳百五十頁
正價卅五錢
郵稅四錢

女流の俳句は、男子の俳句に較べて放膽豪宕の氣に乏しいが、纖細、優婉、溫情自然に溢る、天眞流露の趣は、到底男子の遠く及ばぬ處がある、畢竟女子は男子に比べて、思想の緻密なると共に、感情の溫柔なる處が多いから、俳句なり歌なり、女性的と男性的とは、歴然とした區劃があつて、其觀察點も抒情の徑路も違つてゐる、即ち女性的俳句の特色は、男性的よりも多く同情に富める點にある。この書に蒐めた俳句は、古今を通じて女流の佳吟名什約三千其秀逸なるものに至つては優に男子を凌駕するものがある、俳句を學ばんとする婦女諸君は固より女性の俳句を究めんとする人は是非一本を備へねばならぬ。

振替貯金口座　東京二四〇番
東京　博文館　本町
販賣用電話　本局二六二〇番

光輝ある歷史と最新の學說

東京帝國大學文科大學教授
東京高等師範學校教授
文學博士 萩野由之君編著
尾竹國觀畫

少年日本歷史讀本

洋裝頗美本
挿畫十數個
石版彩色口繪挿入
紙數百三十餘頁
正價一册拾八錢
郵稅一册四錢

第一編 天の浮橋 全一册

（目次）發端●國生み●神々降誕●黃泉の國●三貴子●須佐之男命●天の安河●岩戸隱れ●足名推と手名推●八俣の越呂智●須賀の宮居

第二編 大國主神 全一册

（目次）國引●因幡の白兎●八十神●八十神の詐謀●第二の危難●蛇の室●矢ひ●琴のひゞき●天日槍●小名毘古那神●大物主神●豐葦原の中つ國●皇子の使●喪屋の騷ぎ●建御雷之男神●大國主と會見

第三編 天孫降臨 全一册

（目次）●國主の恭順●天孫降臨●御一行の神々●高千穗の宮●猿田毘古大神●木花佐久夜毘賣命●猛火の產屋●海幸山幸●鹽椎神の敎へ●玉の井●釣鉤の行方●滿珠乾珠●鵜羽の產殿●玉依毘賣●鏡速日命●神代の風俗（上）●神代の風俗（下）

第四編 橿原の宮 全一册

（目次）（上）●神武天皇●遷都の議決●宇豆毘古●五瀨命の御陣歿●霹靂降る●八咫烏●宇陀の兄賊●八十建●饒速日命●金鵄の靈光●長髓彦の使●橿原宮の即位式●秋津洲●皇后の選定●七少女●畝傍山陵●（下）崇神天皇●疫病の流行●大田田根子●麻絲の行方●四道將軍●武埴安彦の叛●任那

（續刊）

三種の神器
新羅征伐
厩戸皇子
弓削道鏡
藤原基經
屋島の合戰
後宇多天皇

發兌元 東京日本橋本町

を述べたる二大少年叢書

少年百科叢書

洋裝細長形頗美本
紙數毎編二百八十餘頁
美麗口繪數葉挿入
定價一册金廿八錢
郵税一册金四錢

第一編 先哲至言 勉學訓 竹貫佳水君編

第二編 世界名君傳 前田越嶺君編

第三編 讀書法 竹貫佳水君編

第四編 世界名臣傳 前田越嶺君編

第五編 天界之觀察 澤田順次郎君編

第六編 地界之觀察 澤田順次郎君編

第七編 冒險英雄傳 河岡潮風君編

第八編 發明と偉人 前田越嶺君編

第九編 昆蟲植物採集及整理 木村小舟君編

第十編 最近飛空術 黒田湖山君著

第十一編 少年立志篇 堀内新泉君編

●德川光圀●製鐵王アンドリユ、カーネギー●伊藤仁齋●本多忠勝●新聞記者ウイード●伊能忠敬●新井白石●蓄音機の發明者エヂソン●高田屋嘉兵衞●一億五千萬圓の富豪バンダービルト●岩崎彌太郎●森蘭丸●渡邊華山●大著述家サミエル　ヂユー●塙保己一●鹽原多助●汽車の發明者ジヨージ、スティーヴ●河村瑞賢●豪膽少年マチアス●錢屋五兵衞●時計師ジエローム●近江聖人●倫敦市長ウオーターロー●松崎觀海●機關監督シツチエル、レイノルド●光村彌兵衞●大敎育家ホレース、マン●二宮尊德

博文館　振替東京二四〇番

醫學博士井上通泰先生監修

全部完成

第一篇以下數版

家庭衛生叢書

全部十二册洋裝菊判美本〇正價一册貳拾錢郵稅六錢宛

第壹編

口繪 北里、長與、金杉、土肥の四博士(肖像)

▲傳染病の話…北里博士

▲胃の攝生法…長與博士

▲眼科衛生談(第一)…井上博士

▲血族結婚と聾啞との關係…金杉博士

▲淋疾と家庭…土肥博士

雜錄 患者を生じたる時の注意(第一)

第貳編

口繪 宮本學士 木下博士(肖像)

▲腸窒扶斯に就て…宮本學士

▲婦人の衛生一般…木下博士

▲婦人及小兒の眼の衛生…桐淵博士

▲眼科衛生談…井上博士

雜錄…七項

第參編

口繪 三輪、井上、緒方、宮川四博士(肖像)

▲室內空氣に就て…緒方博士

▲眼科衛生談…井上博士

▲小兒科一般…三輪博士

▲小兒の衛生に就て…弘田博士

▲遺尿症に就て…朝倉博士

雜錄…六項

第四編

口繪 朝倉博士 井上博士(肖像)

▲腸胃の話…井上博士

▲山の攝生…岡田博士

▲乳兒の衛生に就て…緒方博士

▲狐憑とヒステリーとの關係…吳博士

▲眼鏡の話…井上博士

雜錄…六項

第五編

口繪 三輪博士 岡村博士(肖像)

▲創傷の話…三輪博士

▲神經の攝生に就て…吳博士

▲ヂフテリアの話…宮本學士

▲皮膚の衛生に就て…岡村博士

雜錄 肺結核豫防法…二件

第六編

口繪 大澤博士 三島博士(肖像)

▲ペストの話…宮本學士

▲身心の養生…大澤博士

▲家庭に於て注意すべき二三の學校衛生…三島博士

▲產時の創傷傳染…木下博士

雜錄 肺結核雜話…十五件

第七編

口繪 遠山博士 筒井博士(肖像)

▲黴毒に關する家庭の注意…筒井學士

▲家庭と黴菌…遠山博士

▲姙娠中の攝生 緒方博士

▲便秘の話…井上博士

雜錄 花柳病の雜話…十八件

第八編

口繪 木村博士 緒方博士(肖像)

▲婦人姙孕力の話…伊庭博士

▲肝臟の話…木村博士

▲分娩時の攝生 緒方博士

▲色盲の話 井上博士

▲小兒の身體上の監視並に感冒の話…瀨川博士

雜錄 人工滋養品の話

第九編

口繪 瀨川博士 伊庭博士(肖像)

▲肺癆の話…井上博士

▲婦人姙孕力の話(第二)…伊庭學士

▲小兒の蟲及癇の話…瀨川博士

▲產後の攝生…緒方博士

雜錄…五項

第十編

口繪 林博士(肖像)

▲飲酒血族の退化…林博士

▲不姙症の話…伊庭博士

▲生殖の話…大澤博士

▲消毒法の大意 遠山博士

雜錄…三項

第十一編

口繪 吳博士、楠田謙藏先生(肖像)

▲癲狂村の話(上)吳博士

▲最適當なる日本婦人の結婚年齡…楠田先生

▲消毒法…遠山博士

▲衛生酒の話…林博士

雜錄…八項

第十二編

口繪 陸軍々醫監 賀古醫學士(肖像)

▲聾啞の話…賀古學士

▲癲狂院村の話(下)…吳博士

▲慢性銅中毒の話…林學士

▲口內衛生に就て二三の注意…石原學士

雜錄 食鹽の話

終刊の辭

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

(後付の六)

女（後付の七）

女（後付の八）

五千部限り

特價提供

◎文學博士 芳賀矢一
◎文學博士 關根正直
◎文學士 鹽井正男
◎松浦政泰
◎弘田由己子
◎長谷川濱子
共著

婦人美譚

上下二冊 定價各金壹圓五拾錢 郵稅各金拾貳錢

上下三千載、東西一萬里、本邦は神代より現代及朝鮮に及び、支那は勿論西洋各國の古今を通じて婦人と云ふ婦人の逸話美譚を一切網羅し而も極めて平易に叉極めて趣味ある現代風の言文一致體に書碎きたるもの。佳人才媛の美、貞女烈婦の壯、良妻賢母の實、俠女勇婦の奇、紙面は燦爛として花薫じ月輝く、各家庭叉は各學校に備へて子女の教養に資せずや。總目索引あり修身教材の檢出に便也。更に叉各小學校各女學校に一本を備へて教授上の敏活を計るに最も好適なり。

上卷出來
特價
金壹圓貳拾錢

好評の婦人必讀書

實踐女學校長 下田歌子先生著
■三體 **女子消息文** 全一冊
特製壹圓廿錢 上製壹圓 稅金拾貳錢

鳩山春子夫人著
■ **婦人の修養** 全一冊
價壹圓貳拾錢、稅金拾貳錢

女子大學教授 手塚かね子著
■家庭の友 **西洋料理法** 全一冊
價壹圓 稅拾貳錢

女子大學教授 笹木幸子著
■年中行事 **家庭儀式料理** 全一冊
價壹圓 稅拾貳錢

東京 ● 博文館 ● 本町
振替口座東京二四〇番

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界第拾壹卷（增刊 姿かゞみ）第拾貳號（毎月一回廿三日印刷納本）
明治四十四年九月十二日印刷納本

小野小町は……美人ぢやない！

▲現今の婦女子に遠く及ばざるべし▼

小野小町が今に絶世の美人と言はれ、小町娘といへば美人の代名詞となつてゐるが、果して小野小町は絶世の美人であつたかドウか。今に傳ふる小町傳に……十六歳までは蝶よ花よと育てられ、十七歳に母を失ひ十九歳にて父に後れ二十一にて兄に別れ、二十三にて弟に先だゝれあはれ單獨無類の人となり、方々の縁談も謝り宮仕へをした、されば此う言ふ寂しひ境涯に日を送つたものだから、縁付かうとしても最う時期が後れ、流石無双の國色も

花の色はうつりにけりな徒らに
我身世にふるながめせしまに

と自分の容貌の衰へた事を歎いた、その後は誰に頼る人もなく乞食のやうになつて了つたのである、文屋秀康が三河大掾にて下つた時小町は

わびぬれば身を浮草のねを絶えて
さそふ水あらばいなんとぞ思ふ

と詠んで、次第に零落して諸處を漂浪した……と大體斯う言ふので小町は非常に美人であるやうに傳へられてゐる、然し『花の色はうつりにけりな徒らに我身世にふるながめせしまに』と詠んだ歌を推量して、美人であつたとも想像の出來ない事はないが、女が自分の容貌の衰へた事を歎くのは寧ろ女の癖で、化粧するといふ事が已に女の持前である、故に斷じて深く意味はないので、決して國色などゝいふ事はない、要するに今に傳ふる小町傳は昔の文學者の空想に依つて作られたものであらう。然しながら宮仕へした程であるから滿更でもあるまいと思はれるが、所詮今日の新聞紙に見ゆる美人といふ女のやうに、書く程に言ふ程に美人ではないと言ふ事は明かである。然り小野小町程の女は幾程もある。況して明治の今日、善良な化粧品の現るゝに及んで所謂絶世の美人は心掛次第で幾人も出來るのである。昔の人は不幸であつた不良な白粉を平然と使用しつゝ軈て白粉焼となり大切なる顔へ處斑にシミが出來眞に見苦しき容貌となり三十路を越えざるに『花の色はうつりにけりな……』と小町の如き結果に陥つたのである。今の人は實に幸福である、無鉛乳白レート白粉の如き世界に誇るべき最新發明の白粉あり、煉製水製粉製打粉は勿論自然色ありて夜化粧には、此のレート自然色白粉最も相應しく、尚ほ皮膚の土臺を保護すべき乳白化粧水レート及びクレームレート等内容に伴ふ表装見るから麗しく、宛ら諸子の御使用を待つものゝ如しこれ實に明治聖代の賜にして、若しも小野小町をして今日あらしめば、『花の色はうつりにけりな』云々と嘆聲を洩らさしめなかつたであらう。諸子よ！速かにレート化粧料を召せ實に化粧品の善不善は美人たり不美人たるの分岐點である。

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版㊱
明治44年9月（第11巻第11号、第11巻第12号）

2010年12月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社マイトベーシックサービス
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3909-5